

添付資料 6.

ニューズレター（第 1 号～第 4 号）



# モンゴル国障害児のための教育改善プロジェクト

2016年4月

第1号

すべての障害児がニーズに合った発達支援・教育サービスを受けられるように…



目次：

プロジェクトの紹介	1
プロジェクト対象地域	1
「障害の早期発見・早期介入」セミナー	2
就学に困難を抱える子どもと第26学校との交流	2
「障害児のための教育フォーラム」での発表	2
個別教育計画フォーマット作成	3
特別学校から通常学校への助言活動	3
本邦研修の実施	4

## プロジェクト事務所：

- 教育文化科学省：  
Government Building III  
212号室
  - 人口開発社会保障省：  
国立リハビリテーションセンター209号室
- 電話：976-9424-0702  
976-8634-0702  
メール：jica15start@gmail.com

## プロジェクトの紹介

2015年8月、モンゴル教育文化科学省と人口開発社会保障省の要請に基づき、JICAは「障害児のための教育改善プロジェクト」を開始しました。このプロジェクトは、パイロット地域、パイロット校での取り組みを通じ、障害の早期発見、子どもたちに対する発達支援や教育のモデルを構築することを目指しています。

現在、モンゴルにおいて障害のある子どもたちは以下の課題に直面しています。

### 教育のアクセスに関する課題

- ・ 障害の把握が困難であること
- ・ 医療、教育、福祉面からの包括的な発達支援が不足していること
- ・ 就学先が不十分であること
- ・ 保護者・地域社会の障害に対する理解が不足していること
- ・ 保護者の就労が困難となり貧困に陥り易いこと
- ・ 道路、公共交通機関が未整備なため通学が困難なこと

### 教育の質に関する課題

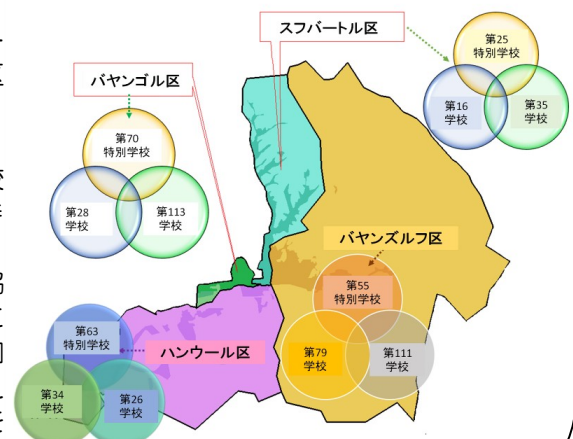
- ・ 教育内容が各自のニーズに合致していないこと
- ・ 教員の指導力が不足していること
- ・ 1クラスあたりの子どもの人数が多いこと
- ・ 障害児を指導する教員の、モチベーションを向上させる仕組みがないこと
- ・ 教材、機材、施設が不足していること

本プロジェクトでは、これらの課題と向き合い、ひとりでも多くの子どもが質の高い教育を受け、社会の中で生活していくことができるようモンゴル側関係者とともに取り組めます。

## プロジェクト対象地域

ウランバートル市及び地方部からパイロット区/県を選定します。ウランバートル市からはバヤンゴル区が選定されました。

ウランバートル市の4つの知的障害対象の特別学校（第25、55、63、70特別学校）は、各2校の通常学校（パイロット校）と協働して活動していくことになりました。特別学校の知見を近隣の通常学校に伝えるために、助言活動を実施しています。



## 「障害の早期発見・早期介入」セミナー



「障害の早期発見・早期介入」について日本の事例を紹介

「障害児のための保健・教育・社会保障委員会」は、障害の早期発見とその後の発達支援を目的とする委員会です。2014年6月には、人口開発社会保障省管轄下の国立リハビリテーションセンターに中央委員会が、ウランバートル市の全9区及び地方部全21県に支部委員会が設置されました。

2015年9月9日、プロジェクトは中央委員会と協力し、ウランバートル市9区の支部委員会を対象にセミナーを開催いたしました。

セミナーでは、本プロジェクトの専門家が日本における障害の早期発見・

早期介入について、写真や動画などを用いて紹介しました。また、障害や発達の遅れのある子どもに対して療育を行うこと、子育て支援等を通じて保護者へ丁寧な説明や対応を行うことの重要性、それらを支えるシステムの確立等についても解説を行いました。その後、各支部委員会から活動状況や課題などの報告を受けました。

プロジェクトでは、今後、用語の整理、障害理解、必要な知識や技能の向上に取り組むことはもちろん、活動に対する支部委員会のモチベーションを高めるために働きかけを行ってまいります。

## 就学に困難を抱える子どもと第26学校との交流



障害のある子もいない子も一緒にゲームをする様子

ウランバートル市第26学校は、市の中心から35キロほどのところに位置し、ウランバートルでは規模の小さい学校です。

2015年12月20日、就学に困難を抱える障害のある子ども4名とその家族が同校に集まり、交流活動を実施しました。5年生の児童10名が自己紹介やたて笛演奏をした後、グループに分かれて皆でゲームをしました。その後、おやつを食べて解散するという1時間ほどの活動でしたが、参加した子どもたちはもちろん、保護者もその時間をとても楽しんだ様子でした。教員からは、「今日参加した子どもたちで

あれば、通常の学級に入って一緒に活動できるのではないか」「正式に特別学級が開設されるのを待たず、教員たちで可能な活動から始めたい」という声も聞かれました。

翌21日、同校が開催したクリスマス会には障害のある子どもたち8名と保護者が参加しました。前日の活動の様子を見て、参加したいという気持ちが芽生えたようです。これらの子どもたちに、就学の機会をどのように開いて行くことができるか、学校や保護者と協力しながら取り組んでいきます。

## 「障害児のための教育フォーラム」での発表



日本におけるインクルーシブ教育について紹介

2015年12月21・22日、NGO Open Society Forum主催「障害児のための教育フォーラム」が開催され、教育文化科学省、国立教育大学、特別学校や幼稚園等の教育関係者、障害児の保健・教育・社会保障中央委員会、当事者団体、保護者によるNGO関係者等、多数が集まりました。フォーラム初日には、合計11本の発表と協議が行われました。

本プロジェクトの専門家による発表では、モンゴルにおける障害児のための教育を国際的な潮流とともに振り

返った後、日本におけるインクルーシブ教育システム構築について紹介しました。さらに、大阪にて30年以上にわたり実践されてきた、障害のある子どもとない子どもが通常学級にて共に学ぶ取り組みについても紹介しました。

プロジェクトでは、多様な子どもを受け入れ、適切な教育を提供することを追求するプロセスを大切にしながら、モンゴルにおけるインクルーシブ教育の在り方について検討を続けていきます。

## 個別教育計画フォーマット作成

「個別の指導計画」とは、児童生徒一人一人の教育的ニーズに対応して、指導目標や指導内容・方法を盛り込んだきめ細かい指導計画です。

日本の特別支援学校や通常学校では、特別な教育的ニーズのある子どもに対して、同計画が立てられています。同計画を作成することで、教職員の当該児童生徒に対する共通理解が高まり、実践、指導や支援の客観的な評価と改善につながります。

モンゴルでは、これまで個別指導が必要な子どもに対して、「個別教育計画」が立てられてきました。しかしながら、同計画のフォーマットは教員それぞれに任されており、教職員間で共有されることは一般的ではありませんでした。

そこで、プロジェクトチームと特別学校の教員で行っている勉強会にて、日本の「個別の指導計画」とモンゴルの「個別教育計画」を比較し、それぞれの長所や短所について考えました。そして、モンゴルの教育に即した「個別教育計画フォーマット」を作成することになりました。

2015年12月からフォーマット案作りを開始し、モンゴルの教員たちと一緒に特別学校での試行を重ねています。（右図：架空の人物の個別教育計画記載の例。図内の波線は省略を表している。）

2015年12月より、知的障害対象の特別学校4校からパイロット校として選定された通常学校8校に対して助言活動を開始しました。これは、通常学校に在籍している障害のある子どもたちを支援することを目的とした活動です。

この活動は、日本の「特別支援学校のセンター的機能」を参考にしています。日本では、特別支援学校は蓄積してきた知見に基づき、いわば

個別教育計画・実態調査表

クラス	2年 A組	担任名	オドゲレル	作成日	2016年 9月 9日
氏名	バータル	性別	1(男) 2(女)	生年月日(年齢)	2008年12月24日(7歳)
学校でのアセスメントの有無	(有) (時期 2015年5月) (障害名 軽度知的障害) 無				
合併症の有無(てんかん、心臓疾患、皮膚疾患など)	てんかん	発達検査の結果	軽度知的障害	医療機関との連携状況	家庭医
本人の様子(好きなもの・こと、苦手なもの・こと等)	1. 出産後/0-12カ月/(母子手帳等を参考に) ・低体重2,015gで出産。首が据わることやハイハイを始めるのが遅かった。 2. 就学前の様子/2-5歳 幼稚園に通っていたが(低い・いいえ)(幼稚園名:第●幼稚園)通わなかった理由( ) ・5歳になっても単語でしか会話ができなかった。食欲旺盛で肉が好き。排泄は自立してはいない。 3. 就学時～現在の様子(車椅子の利用の有無、一人で通学できそうか等を含む) ・人のコミュニケーションをとることが好きだが発語は少ない。自分をうまく表現できず泣くことがある。				
本人の願い	自分の気持ちを他者に上手に伝えることができるようになりたい。				
保護者の願い	手洗いと着替えを自分でできるようになってほしい。自分に自信を持ってほしい。				
教員の願い	2語文以上の言葉を話せるようになってほしい。友だちと楽しくコミュニケーションをとってほしい。				

個別教育計画(1学期・2学期・3学期・4学期) ※指導経過と評価・修正(今後の注意点は1学期終了時に記載)

長期目標 *必要な項目だけ目標を立てる	身辺自立	基本的な生活習慣を身につけ、自分のことは自分で進んですることができるようになる。	指導する場面	学校生活全般・社会と生活の方法		
	言語・認知・数	表出単語を増やし、生活に関連した二語文を生成できるようになる。		言語指導・モンゴル語		
指導場面 *必要な項目だけ記入	今学期の目標(短期目標)	指導内容	指導法・手立て	指導経過と評価・修正(今後の注意点)		
	学校生活全般/教科は除く	排泄後、食事前、外出後は手を洗うことができる。	手洗い 1. 手の洗い方を示した絵カードを作り、それを基に指導する。家にも同じものを置き指導してもらう。 2. がんばりカードを使って、学校と家庭で手洗いができているか確認する。できた場合は褒める。	がんばりカードの結果を基に褒めることで、手洗いを意識させることができた。今後、仮にがんばりカードの利用をやめたとしても、手洗いを習慣化させるよう引き続き、指導を行っていく。	学校内	家庭内
個別指導の時間	生活に関連した二語文を生成できるようになる。	生活に関する表現	「手を洗う」、「私は着替えます」、「先生、こんにちは、さようなら」など生活領域に関連する表現をしようとする。	絵カードを手指かりに音声で要求、やることを伝えられるようになった。	これまで「ごはん」や「トイレ」と単語で欲求を伝えていたが、「ごはん食べたい」や「トイレに行きたい」と二語文で伝えるようになった。	ハッチメグ
教科の指導	モンゴル語	内容に関連した単語を表出したり、書いたりできるようになる。	挨拶 1. 授業での活動内容を授業の最初に知らせる。 2. 活動内容の中心となる言葉を図やイラストで示す。 3. 歌を使って学習する言葉を練習させ、書き方の指導を行う。	授業の活動で与えられた単語を書けるようになった。文字の書き間違いが時々みられるので、引き続き正しい文字について指導していく。	授業で習った文字をノートに書くという宿題を毎日するようになった。	オドゲレル
	社会と生活の方法	コートが脱ぎ着ができるようになる。	服の着脱 1. コートを脱いだり着たりする一連の過程を写真にとり指導する。 2. 一連の過程を示した写真につき、本児ができることには印をつけ、できないことを明示的に示す。できることを増やしていくように言葉かけをする。	できないことをできるようにするために本児なりに真剣に練習をしていた。ボタンを留めるのが難しいので、引き続き次学期でも指導していく。	親が手伝おうとすると嫌がり、自分でコートを着ようとするようになった。	オドゲレル

## 特別学校から通常学校への助言活動

専門センターとして、障害のある児童生徒の通常学校での学びや地域社会における生活を支える活動を行っています。

各特別支援学校では、「支援部」等を校務分掌に位置付けて、活動を行っています。視覚障害及び聴覚障害特別支援学校は、当該地域において視覚障害、聴覚障害に関する唯一の専門機関であることも少なくありません。そのため学齢期の児童生徒だけではなく、乳幼児から成人まで

を対象に支援を行っています。障害に応じた発達支援を行うことはもちろん、保護者を支えることも重要な役割の一つです。

知的障害、肢体不自由特別支援学校は、子どもたちの抱える一見、見えにくい困難さを通常学校教員にも分かるように説明し、当該児童生徒の学習面・生活面での課題解決のための手立てを検討するといった支援を行っています。



## 本邦研修の実施（2015年11月16日～12月11日）

2015年11月16日から12月11日の4週間、本邦研修「障がいのある子どものための授業づくり」を実施しました。モンゴル教育文化科学省、教育研究所、特別学校、人口開発社会保障省、障害児のための保健・教育・社会保障中央委員会及びバヤンゴル区の支部委員会から10名が参加しました。

研修では、講義を通じて障害の早期発見・発達支援、障害のある子どもたちのための教育について紹介したほか、国立特別支援教育総合研究所、筑波大学及び附属特別支援学校や文京区立小学校、横須賀市や那須塩原市の関係機関を視察しました。

ここでは、モンゴルにおいて障害のある子どもたちへの保健・教育・社会保障サービスを考える際に参考になると思われることを2つ取り上げて紹介いたします。

### 障害の早期発見・介入の取り組み

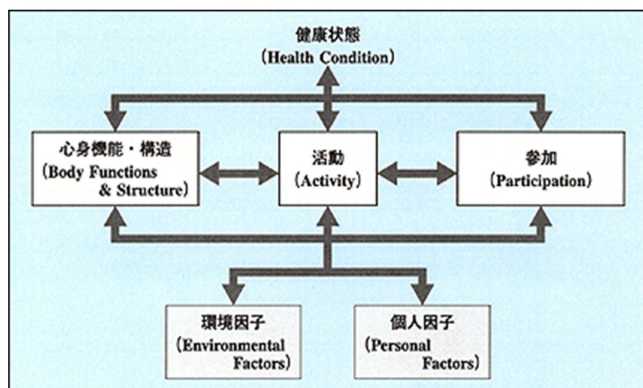
障害を早期に発見し、早期に介入を行うことは大変重要です。それにより、二次障害を防いだり、障害を持ちながら生活していくすべを効果的に学習したり、社会参加に向けた準備をすることができます。また、保護者への支援を行い、家族の孤独を防ぐこともできます。

日本では障害児への支援には、障害のある子ども個人に対する医療（リハビリ）と教育の両方が大切と考えられてきました。しかし近年、個人に対する医療面、教育面からの支援だけでは不十分であり、家族や地域社会を巻き込んだ包括的なアプローチが重要だと考えられるようになりました。各発達段階における分野横断的な連携（横の連携）と発達段階を移行する際の支援者間の連携（縦の連携）が必要です。

日本では母子手帳、定期健診を活用してスクリーニングを行い、発達の遅れが気になりな子どもや家族に対して支援を行っています。

### 国際生活機能分類（ICF）

発達の遅れが気になりな子どもをどのように支援していけばよいのでしょうか？まず、その子どもの実態を的確に把握することが重要です。実態把握のツールとして発達検査、知能検査等を思い浮かべる人が多いと思います。しかしながら、これらの検査だけでは、子どもの発達を全体的に捉えることはできません。この際、有効なのが「国際生活機能分類（ICF）」の考え方です。ICFの活用例を紹介します。



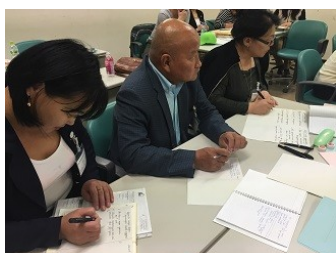
Aくん : 内気な少年, 12歳, 小学6年生 : 脳性まひ (CP) : 両下肢の麻痺 : 屋内は杖移動、屋外は車椅子	: 伝統的で保守的な地域で生活 : 保守的な祖父母 : 最寄りのスーパーは坂の上 : 自分で買い物に行ってみたいが、行ってみようとしたことがない
--	---

健康状態 : 脳性まひ (CP)		
心身機能・構造 : 両下肢の麻痺	活動 : 屋内は杖移動、屋外は車椅子	参加 : 買い物の難しさ
環境因子 : 伝統的で保守的な地域 : 保守的な祖父母 : スーパーは坂の上	個人因子 : 小学6年生 : 少年 : 内気 : 12歳	

（出所：河野真（杏林大学保健学部）2015年度本邦研修資料より）

文部科学省HP [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/032/siryo/06091306/002.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/032/siryo/06091306/002.htm) を参考に作成）

ICFを用いてA君の実態を分析すると、短所だけではなく長所にも気付くことができ、子どもの全体像を理解することができます。また心身機能・構造のみに焦点を当てずに、環境因子等を含めて分析でき、「社会への参加」というゴールに向けて方策を検討することができます。A君のケースでは、「買い物への参加」をゴールとし、地域住民への啓発やA君家族への教育という方策が見えてきます。



本邦研修にて講義を受ける様子



本邦研修の共有セミナー

# モンゴル国障害児のための教育改善プロジェクト

2017年2月

第2号

すべての子どもたちがニーズに合った発達支援・教育サービスを受けられるように…



## 目次：

プロジェクトの紹介	1
プロジェクト対象地域	1
プロジェクト事務所	1
障害の早期発見・理解向上のための映像制作	2
新版ポータル早期教育プログラムによるパイロット活動	2
学習障害（LD）児が学びやすくなるための工夫	2
少しでも多くの障害のある子どもたちが教育にアクセスできるように	3
教育省・保障省としての取り組み	3
絵画コンクール	4

## プロジェクト事務所

- 教育・文化・科学・スポーツ省（教育省）：  
政府庁舎 3号館 212号室  
電話：976-9424-0702
- 労働・社会保障省（社会保障省）：  
リハビリテーション・研修・職業センター 209号室  
電話：976-8634-0702
- メール：jica15start@gmail.com
- プロジェクトウェブサイト：  
<http://www.jica.go.jp/project/mongolia/013/index.html>

## プロジェクトの紹介

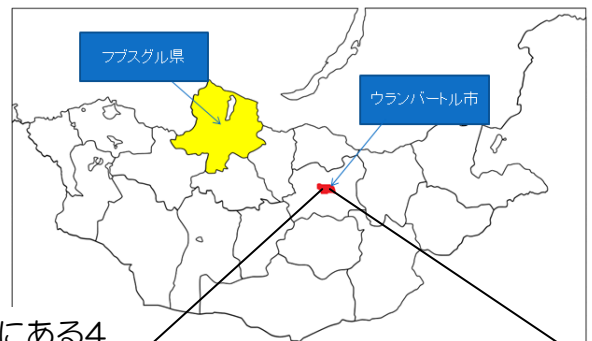
2015年8月、モンゴル教育文化科学省（現：教育・文化・科学・スポーツ省、以下、教育省）と人口開発社会保障省（現：労働・社会保障省、以下、社会保障省）の要請に基づき、JICAは「障害児のための教育改善プロジェクト」を開始しました。

このプロジェクトは、2019年7月までの予定で、「障害の早期発見、子どもたちに対する発達支援や教育のモデルを構築すること」を目標に活動をしています。

## プロジェクト対象地域

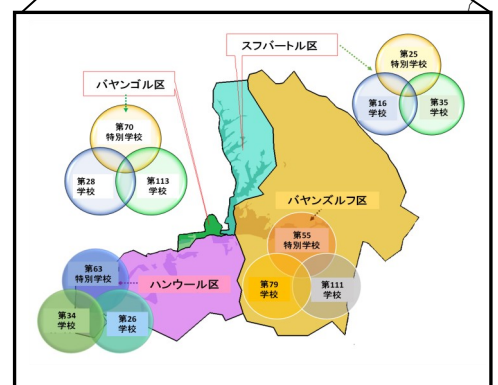
パイロット地域として、ウランバートル市からはバヤンゴル区を、地方からはフスグル県を選定しました。

パイロット地域にて、「障害児の保健・教育・社会保障委員会」<sup>(注)</sup>等を対象に、障害の早期発見や発達支援に関する研修会等を実施しています。



ウランバートル市にある4つの知的障害・肢体不自由特別学校とそれらの周辺にある通常学校をパイロット校としました。

パイロット校では、勉強会や研究授業等の取り組みを通して、障害のある子どもに質の高い教育が提供できるように、教員の能力向上を図っています。



<sup>(注)</sup> 医師、教育関係者、社会福祉関係者、リハビリテーションの専門家などで構成され、発達の遅れや障害を確認し、医療、教育、福祉の面から発達支援計画を提案することを主な役割とする委員会。ウランバートル市の各区、各県に設置されている。0～16歳を対象とし、保護者と相談の上、就学先を決定する役割などがある。



## 障害の早期発見・理解向上のための映像制作

障害の早期発見・理解向上のため、3本の映像教材を制作しました。

1本目は、『自閉症スペクトラム障害の早期発見と理解』についての映像教材です（協力：モンゴル自閉症協会）。2本目は、『ダウン症の早期発見と理解』についての映像教材です（協力：モンゴルダウン症協会）。これらの映像教材は、それぞれの障害を持つ子どもへの適切な対応の促進、早期発見・発達支援体制構築の一助とすることを目的に制作されました。支援に携わる専門家を対象に、各々の定義や診断基準、行動や発達の特性、合併症などについて解説しています。

3本目は、『乳幼児の発達』についての映像教

材です。専門家のみならず養育者を対象に、4歳までの発達に関する理解・知識の向上を目的としています。6領域（①姿勢・運動、②聴覚・視覚、③探索・操作、④記憶、⑤言語、⑥社会性）ごとに、月齢・年齢順に発達特性について解説しています。

3本の映像教材は関係者に配布した他、より多くの方々に活用いただくべく上映会を開催しました。



## 新版ポーターページ早期教育プログラムによるパイロット活動

モンゴル版ポーターページ早期教育プログラムの開発に取り組んでいます。「ポーターページ早期教育プログラム」は、発達に遅れや偏りのある子どもを対象に、家庭において発達支援が行えるようアメリカのプログラムを基に認定NPO法人日本ポーターページ協会が開発したものです。応用行動分析の

原理を用い、一人ひとりの子どもの発達に応じた支援ができることが特徴です。

2016年9月からパイロット相談会活動を開始しました。現在、9家族を対象にプログラムを実施しています。

## 学習障害（LD）児が学びやすくなるための工夫

文部科学省は、学習障害（Learning Disabilities: LD）を「基本的には全般的な知的発達に遅れはないが、聞く、話す、読む、書く、計算する又は推論する能力のうち特定のものの習得と使用に著しい困難を示す様々な状態を指すもの」と定義しています。学習障害の原因は、中枢神経系に何らかの機能障害があることと推定されていますが、視覚障害、聴覚障害、知的障害、情緒障害などや環境的な要因が直接の原因となるものではありません。学習障害の背景には「認知のアンバランスさ」があると考えられています。認知とは、

- ・注意を向ける力
- ・見たこと・言われたことを覚える力（記憶）
- ・形や位置を判断する力（視覚認知）
- ・音を聞き分ける力（聴覚認知）

などがあり、すべて学習の土台となるものです。これらがバランスよく育っていれば、効果的に学習することができます。しかし高い視覚認知能力を持っていても、記憶が苦手であれば教員の言ったことを覚えていられないために学習につまずくこととなります。これが学習障害です。

学習障害のある子どもは、授業の中で「認知のアンバランスさ」に起因する様々な課題を抱えて

います。例えば、以下のようなものが挙げられます。

- ・教員の話に注意を向けることが不得意（注意）
- ・教員の言ったことを一時的に記憶しノートに書くことが不得意（視覚的短期記憶）
- ・単語など文字のかたまりを読みながら一字一字の形を見分けることが不得意（視空間認知）
- ・黒板に書かれた文字を目に留めて書き写すことが不得意（視覚的短期記憶）

このような課題を抱えている子どもには、次のような手立てが有効な場合があります。

・大切な箇所に色ペンでマークしたり、線を引いたりする

・教科書を拡大コピーして文章を見やすくする

・一行ずつ定規をあてたり、指で

たどったりしながら読む

・黒板を写すのが難しい子どもには、教師が黒板に書く内容を前もって紙に書いておき、渡す

学校生活の中で個々の状況に応じたちょっとした配慮を行うことで、学習障害のある子どもたちが学びやすくなります。

たくさんの子どものが、きれいなざりのついたぼうしをかぶり、大きな声で歌いながら、町の中心に向かって足なみをそろえて歩いていきました。



## 少しでも多くの障害のある子どもたちが教育にアクセスできるように

プロジェクトでは、子どもたちの特別な教育ニーズに合った様々な教育形態の効果を検証し、全国に普及し得るモデルを開発することを目的に、小規模なパイロット活動（ミニ・プロジェクト）を実施しています。

2016年4月に募集を開始し、モンゴル全国から35件の応募がありました。書類と面接選考の結果、3件が採択され、2016年6月に各プロジェクトが開始しました。

モンゴルダウン症協会による「知的障害のある子どもたちのインクルーシブ教育プロジェクト」では、第130学校と協力してダウン症の子どもたちのための学級を同校内に設置しました。子どもたちが通常学級の子どものとともに体育や音楽の授けられる体制を整えたほか、第130学校の教員及び保護者向けの研修も行っています。

オルホン県生涯学習センターによる「私たちは学べる」プロジェクトは、学校に通えていない障害のある子どもたちに、ノンフォーマル教育を行っています。センターでの指導の他、重度の障害を持つ子どもには訪問教育も実施しています。

子ども発達情報ウチラル（UCHRAL）センターによる「障害児のための児童預かりサービス強化

プロジェクト」では、政府の認可を受けて家庭で預かり保育を行っている人々に障害のある子どもたちに対する接し方や指導法を身につけてもらうための研修モジュールを開発し、そのモジュールを使った研修を実施しています。

これら3件のミニ・プロジェクトは2017年5月までの予定で実施されています。プロジェクトでは、各団体と連絡をとりながらミニ・プロジェクトの進捗状況などを確認し、必要に応じて助言を行っています。終了時にはミニ・プロジェクトの評価を行い、モンゴルの他団体も取り入れられるような手法やツールを導き出したいと考えています。

2017年3月には、2017年6月から開始する新たなミニ・プロジェクトを募集する予定です。

オルホン県生涯学習センターで学ぶ子どもたち



## 教育省・社会保障省としての取り組み

### 教育省 B.バヤルサイハン事務次官

すべての障害児には、それぞれのニーズに合った発達支援、教育サービスを受ける権利があります。近年、教育省では、障害児のインクルーシブ教育プログラムを実施し、学習環境や設備の整備、教材の改善等に取り組んできました。

しかし、障害児の評価制度や、質の高い教育を提供するための教員の力量等に課題があります。こうした課題を解決するために、社会保障省やJICAプロジェクトと協力して障害児に対する診断・発達の支援・教育のモデルを構築する予定です。本プロジェクトの成果は、国の制度、政策、教員養成や現職教員の研修プログラムにも反映されることを期待しています。



### 社会保障省 S. トンガラックタミル局長

政府は、障害のある子どもたちの能力と可能性を理解し、障害の早期発見・診断、特別なニーズに対する支援を改善し、自立や社会参加を積極的に促すよう取り組んでいます。

2016年2月に制定された「障害者の権利の保護に関する法律」には、障害児の教育、社会福祉支援、健康に関する権利が明記されています。また、現在「障害者権利の確保と彼らの社会参加及び発達支援国家プログラム」を作成中であり、障害児者の、教育、保健、リハビリテーション及び社会保障のサービスの質とアクセスを改善するという目標を設定しています。

こうした目標を達成するために、社会保障省、教育省、JICAは「障害児のための教育改善プロジェクト」を実施中です。障害児のための協力の輪がますます広がるよう尽力いたします。



## ウランバートル市 特別なニーズのある子どもたちのための絵画コンクール

### コンクールの概要・目的



特別賞：E.Davaasan さん（9歳）  
の作品

12月3日は、国連が定めた国際障害者デーです。障害のある子どもたちが社会の中で自分らしく成長し心豊かに生活することをお手伝いしたい、子どもたちが素晴らしい才能を発揮する機会を作りたい、そんな思いから、教育省、社会保障省、プロジェクトは、ウランバートル市において「特別なニーズのある子どもたちのための絵画コンクール」を開催しました。

テーマは、「わたし/ぼくの世界」とし、子どもたちの世界を自由に表現してもらいました。

143作品がウランバートル市の各区に設置されている障害児の保健・教育・社会保障委員会や特別学校での一次審査を通過しました。教育省、社会保障省、美術の専門家、プロジェクトメンバーによる厳正なる審査の結果、12点の優秀作品が選ばれました。

### 表彰式

2016年11月26日、教育省にて表彰式を開催、受賞者、受賞者の家族、支部委員会、特別学校教員等、約50名が参列しました。受賞者には、社会保障省人口開発局局長、教育省中等教育課長、在モンゴル日本大使館書記官、JICAモンゴル事務所職員、プロジェクト総括から楯や賞状、賞品が贈られました。

式では、第116特別学校（視覚障害対象）5年生の児童が、素晴らしい歌声も披露してくれました。



表彰式参列者との記念撮影

### 展覧会・作品集

同年11月29日～12月13日、教育省、社会保障省、シャングリラモールにて作品を展示しました。シャングリラモールでの展覧会には、市民の方々が多数訪れました。会場の感想ノートには、「障害のある子どもたちが表現した世界をみて、心が洗われました」や「子どもたちの絵はどこか懐かしく、自分の子どもの頃を思い出しました」等の感想が書かれていました。

また、一次審査を通過した応募作品を載せた作品集も制作しました。応募者、特別学校、各県・各区の支部委員会、中央図書館等に配布しました。



展覧会の様子



作品集

### 最優秀作品賞受賞者へインタビュー

この絵は、「障害のある人もない人も同じように、自分らしく生活できる社会になってほしい」という思いを込めて描きました。

絵の右側の車イスの人は、窓から外を眺めています。左側の外にいる人と同じ様に、自分も外で四季の変化を感じたいと思っています。

絵の中の本が分厚いのは、1ページ1ページにそうした思いを描きたいと思ったからです。

この作品をたくさんの人に見てもらいたいです。



E.Enkhkhaliunさん（15歳）の作品



# モンゴル国障害児のための教育改善プロジェクト

2017年12月

第3号

すべての子どもたちがニーズに合った発達支援や教育を受けられるように…



## 目次：

プロジェクトの紹介	1
プロジェクト対象地域	1
プロジェクト事務所	1
子どもの健やかな成長を支えるために	2
1歳6か月児健康診査の試行～早期からの支援につなげるために～	2
親子教室の試行～親子に寄りそう支援を目指して～	2
一人でも多くの子どもに教育の機会を～フブスグル県での就学促進の試み～	3
ミニ・プロジェクト（第1回）の取り組み	4
みんなが一緒に学ぶことの大切さ	4

## プロジェクト事務所

○教育・文化・科学・スポーツ省（教育省）：  
政府庁舎 3号館 212号室  
電話：976-9424-0702

○労働・社会保障省（社会保障省）：  
リハビリテーション・研修・職業センター 209号室  
電話：976-8634-0702

○メール：jica15start@gmail.com

○プロジェクトウェブサイト：  
<http://www.jica.go.jp/project/mongolia/O13/index.html>

○Facebook：https://www.facebook.com/jicastart/

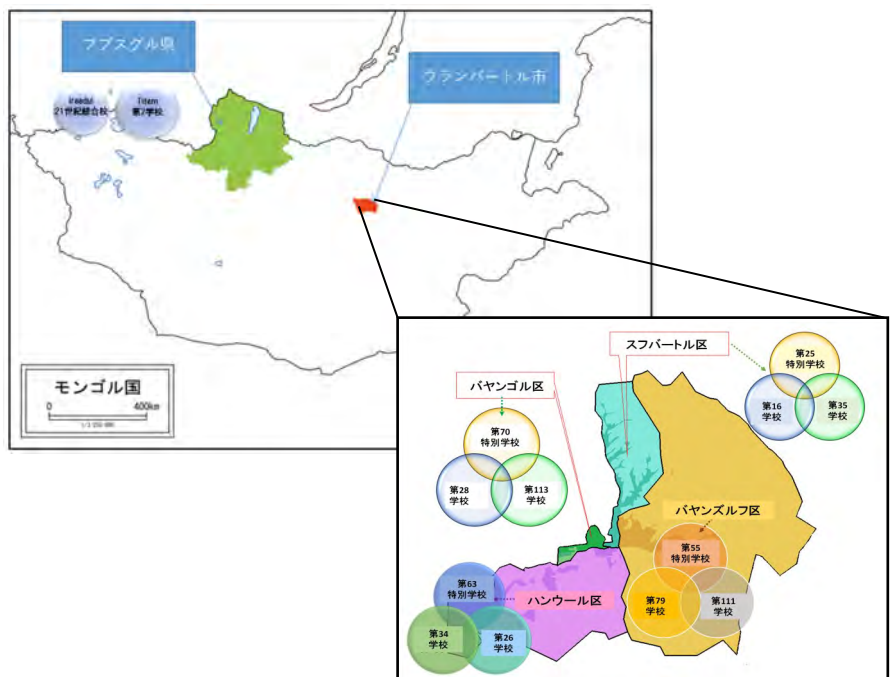
## プロジェクトの紹介

教育・文化・科学・スポーツ省（以下、教育省）と労働・社会保障省（以下、社会保障省）及びJICAは、2015年8月から「障害児のための教育改善プロジェクト」を実施しています。障害の早期発見、子どもたちに対する発達支援や教育のモデルを構築すること（プロジェクト目標）を通して、障害のあるすべての子どもが、ニーズに合った発達支援・教育サービスを受けられるようにすること（上位目標）を目指しています。

4年間のプロジェクトも、いよいよ折り返し地点に来ました。後半戦では、障害のある子どもの発達支援体制づくり、インクルーシブ教育推進に重点を置きます。具体的には、母子健康手帳の活用促進と1歳6か月児健康診査の試行、親子教室やポーターズ早期教育プログラムを通じた子ども・家族支援、田中ビネー知能検査Vのモンゴル版開発支援、そして、通常学校における合理的配慮や障害のある子どもたちの就学の促進、学力評価のあり方の検討に取り組んでいきます。

## プロジェクト対象地域

パイロット地域として、ウランバートル市からはバヤンゴル区を、地方からはフブスグル県を選定し活動しています。また、ウランバートル市にある知的障害・肢体不自由特別学校4校とそれらの周辺にある通常学校8校及びフブスグル県の通常学校2校をパイロット校としました。



## 子どもの健やかな成長を支えるために

プロジェクトでは、障害や発達の違いのある子どもの健やかな成長を支えるために、関係者・関係機関の能力強化に取り組んでいます。パイロット地域であるバヤンゴル区とフブスグル県における「母子健康手帳の活用促進」、「1歳6か月児健康診査とそのフォローアップ活動としての親子教室の試行」、「アセスメントツールの改善」、「ケース・ワークショップの実施」を通じて、障害のある子どもの発達支援体制のモデルづくりを行っています。そしてその実践結果を「オペレーション・マニュアル」にまとめていきます。今回はバヤンゴル区における1歳6か月児健康診査と親子教室について紹介します。

### 1歳6か月児健康診査の試行～早期からの支援につなげるために～

モンゴルでは、家庭病院で母子健康手帳を用いた健康診断や予防接種は行われていますが、定期健康診査は導入されていません。乳幼児期における定期健康診査を、発達の遅れや障害のある子どもの発達支援につなげている日本の実践事例を参考に、バヤンゴル区にて1歳6か月児健康診査の試行を始めました。早期からの発達支援は、2次障害を防いだり、生活に必要な能力を育んだりするために大変重要です。1歳6か月児健康診査は、保護者や関係者が、子どもの発達の遅れに早期に気づくことにより、その子どもにとって必要な支援につなげることを目指しています。

試行を始めるにあたり、バヤンゴル区保健センターと協議を重ね、健康診査で使用する問診票案を作成しました。その後、健康診査を実施する同区の家医109名を対象に研修を行うとともに、問診票案を見直しました。

2017年5月8日～12日、モンゴルで初の1歳6か月児健康診査が実施されました。5日間で、対象児の86.3%にあたる377人が受診しました。6月以降も、毎月第4週に継続して健康診査が実施されています。

今後、試行を通じて実施方法や内容の充実を図っていきます。健康診査をきっかけとして、子どもの健康や子育てに関し不安を抱える保護者が、安心して育児ができるような取り組みを行っていきます。



### 親子教室の試行～親子に寄りそう支援を目指して～

健康診査の試行を通じて、支援が必要な子どもに対し、医療機関への照会だけではなく、就学前教育（幼稚園など）、そして小学校就学までの「つなぎの支援」の必要性が見えてきました。

日本の自治体では「つなぎの支援」として、我が子の発達に不安を抱える保護者の相談に応じ、子どもの発達に必要な関わり方を学んでもらうことを目的に「親子教室」を実施しています。

その実践例に倣い、2017年10月からバヤンゴル区にて「親子教室」の試行を始めました。5月から8月の健康診査で相談や支援が必要と判断した親子を対象に、月に1回（半日）、5回セットで実施します。会場は第8ホロー役所の会議室を使用し、指導者として区役所に所属する心理士とソーシャルワーカーの2名が任命されました。また、第10、第186特別幼稚園教員にも支援いただくことになりました。

10月の親子教室には、計10組の親子が参加しました。プログラムの内容は、親子遊びが中心で、乳幼児期に大切と言われる「人とふれあい関わること」「いろいろな感覚を感じることを経

験できるよう工夫しています。一番人気だったのは、新聞バルーンです。指導者たちが、新聞紙をつなぎ合わせた大きなバルーン（写真）を子どもたちに近づいたり離したりすると、子どもは風を感じます。かさかさ、びりびりという音を聞きます。子どもたちはいきいきとバルーンの動き見つめていました。

親子に寄りそう支援を提供し、子どもの健やかな発達を支え、次のステップへとつないでいく。そんな重要な役割を親子教室は担っています。11月以降も毎月実施していきます。





障害のある子どもたちの教育の改善を目指す活動

一人でも多くの子どもに教育の機会を〜フブスグル県での就学促進の試み〜

一人ひとりの発達段階に応じた目標や指導方法を考えることをパイロット校教員と一緒に試行し、個別教育計画を活用した指導の有効性の検証と普及に取り組んできました。

一方で、様々な理由により学校に通えていない子どもがいます。特に障害の重い子どもにとって、学校に通うことは登下校の送迎、学校での過ごし方、トイレや食事の介助など、解決しなければならない課題が多く、結局は家庭で過ごしたり、就学年齢を過ぎてもNGOが運営するデイケアセンターに通ったりしている子どもも少なくありません。また、特別学校がなく、特別学級もほとんどない地方部では、通常学校での障害児の受け入れ体制を整える必要があります。すべての子どもが地域の学校に通うようにする第一歩として、パイロット県であるフブスグル県において学校に通えていない子どもの就学支援活動を開始しました。

フブスグル県の2つのパイロット校と教育文化芸術局の担当者と協力し、学齢期にも関わらず就学できていない子どものリストを作成し、家庭を訪問し、学校に通えていない理由を尋ねました。理由は家庭によって様々で「一人でトイレに行くことができない」や「寝たきりで動かすことができない」等の回答がありました。

各パイロット校で1名ずつを対象に、就学につなげるための会議を開くことにしました。会議には、対象児とその保護者、学校で障害のある子どもをサポートする教員、「障害児の保健・教育・社会保障支部委員会」の教育担当者、障害児の親の会職員などが集まりました。そして、対象児や保護者の願いを聞き取り、その子どもの就学に必要な通学の支援や学校での学習形態、学習内容などを一緒に考えました。

各校には、特別な教育ニーズのある子どもが授業の前後に補習を受けたり、障害特性に応じた支援を受けられる「子ども発達支援センター」と呼ばれる場所があります。今回対象となった2人は、最初のステップとしてまず、このセンターに通うことになりました。少しずつ、音楽の授業などで、通常学級の子どもたちと一緒に授業を受ける機会も増やしていきます。今後は、継続して通学できるよう、保護者と学校が連携していく必要があります。また、計画した支援が実施できているかどうか、モニタリングをしていくことも重要です。



就学促進のための記入シート(例)

記入日	2017年9月6日		
子どもの名前	B. Ganbaatar		
年齢	14		
性別	☐男	☐女	
就学支援委員会参加者名	対象児父親、対象児、教育局生涯教育担当、保護者会XXセンター教員、XX ソム生涯学習センター教員、XX 学校教員、XX 学校子ども発達支援センター教員、XX 学校校医、XX 学校SW、プロジェクトチーム		
現在の在籍園・センター・校	なし(在宅)	希望する学校	XX 学校の子ども発達支援センター
診断名 (診断時期/診断機関)	ダウン症 (2008年12月18日 / ウランバートルの神経科の医師)		
本人の願い	感情を上手に表すことができないのでわからない。		
保護者の願い	XX 学校の子ども発達支援センターに通ってほしい。 自分の気持ちを表すことができるようにしてほしい。		
その場で観察された特徴	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 社会性が乏しい。</li> <li>・ 人と接するのがいいのではないか。</li> <li>・ 目があまり見えていないかもしれない。</li> <li>・ 筋肉が弱いのではないか。</li> <li>・ 保護者がいつも支援しているので、筋力が弱い。</li> <li>・ いつも口を開いている。</li> </ul>		
学校生活以外で必要な支援	領域	支援内容	担当者
	医療	月1回ほど、針治療などの治療を受ける。	学校医
	福祉	社会福祉の手当てを申請する。	教育局
	リハビリ・療育	歩行訓練、バランスの取り方の練習をさせる。 筋肉をつかう練習をする。(体を鍛える)	体育の教員 学校医
特記事項・出席者からの助言等	特になし		

就学のために必要な支援	領域	望ましい支援(学校)	望ましい支援(家庭)	担当者
		通学	通学する度に、本児に分かりやすい形で褒める。	
生活全般	学習	センターを着る計画を立てる。 ポスターを活用する。	着替えは、絵カードを用いて手伝える。 教員から出されたポスターの課題に取り組む。	センターの教員 親
		丸三角四角の型はめをする。(型から出す、はめる)	家で同じ課題をずる。	センターの教員 親

学びの場	決定事項		
	第1	第2	第3
場所 (学校名・クラス名)	XX 発達支援センター	XX 学校 1a 音楽	音楽の個別指導 XX 発達支援センターに同校の音楽教員が指導に来る。
頻度	週2回	月1回 センターの先生と一緒に参加する。	月1回
時間	2時間	1時間	30分

次のアクション	学校	個別教育計画(IEP)を作成する。
	教育局	実態把握と発達のアセスメントをしたい。
家庭	子どもを褒める(認める)。宿題を手伝う。	

保護者氏名 D. Batchimeg	教育局担当者氏名 D. Nyamsuren
サイン	サイン

会議で使用した記入シートの例

## ミニ・プロジェクト（第1回）の取り組み

プロジェクトでは、子どもたちの特別な教育ニーズに合った様々な教育形態の効果を検証し、全国に普及し得るモデルを開発することを目的に、小規模なパイロット活動（ミニ・プロジェクト）を実施しています。

2016年6月から2017年5月まで、3件のミニ・プロジェクトを実施しました。

「障害児のための児童預かりサービス強化プロジェクト」	
実施団体	子ども発達情報UCHRALセンター
プロジェクト概要	児童預かりサービスは、2～5歳の子どもたちのための日中の預かり保育制度である。所定の研修を受けた個人やNGOが、家庭や団体の施設で近隣の子どもたちを預かることができる。このサービスでは障害児も受け入れ可能となっているものの、現在の研修内容には障害児に対する接し方や指導法などが十分に含まれていない。そこで子ども発達情報UCHRALセンターはミニプロジェクトを通じ、障害児を預かる際に必要な知識や技術に関する研修モジュールを開発し、プロジェクト対象地域で研修を実施した。

「私たちは学べる」（生涯学習センターでの障害児受け入れプロジェクト）	
実施団体	オルホン県生涯学習センター
プロジェクト概要	学校をドロップアウトした子どもや成人を受け入れている公立の生涯学習センターにおいて、学校に通えていない障害児を対象にノンフォーマル教育を行った。センターに通えない子どもには訪問教育も実施した。

「知的障害のある子どもたちのインクルーシブ教育プロジェクト」	
実施団体	モンゴルダウン症協会
プロジェクト概要	ウランバートル市ハンウール区にある公立小学校、第130学校に学齢期のダウン症の子どもたちが通えるようパイロット学級を開設した。同校の教員の協力を得て、パイロット学級の子どもたちが通常学級の子どもたちと一緒に体育、音楽、美術などの授業を受けられる体制を整えた。

## みんなと一緒に学ぶことの大切さ

モンゴルダウン症協会の「知的障害のある子どもたちのインクルーシブ教育プロジェクト」は、ハンウール区第130学校と協力してダウン症の子どもたちを対象としたパイロット学級を開設しました。現在、10人の子どもたちがその学級を利用しています。これらの子どもたちは身辺自立のための活動、算数や国語の授業はパイロット学級で受けていますが、体育や音楽は第130学校の3・4・5年生のクラスに参加しています。授業だけでなく、文化祭やスポーツ大会にも通常学級の子どもたちと一緒に参加しました。

当初、通常学級の子どもたちは、外見に特徴のあるダウン症の子どもたちを好奇の目で見ることもありましたが、けれど一緒に活動するなかで、次第に、パイロット学級の子どもたちが授業中わからないところを教えたり、手をつないで学級と学級の間を送り迎えしたりするようになりました。

ミニ・プロジェクトでは、第130学校の教員向けにダウン症の理解を促進するための研修会を開催しました。教員たちの理解が深まるにつれ、授業や課外活動でもより協力してくれるようになりました。

プロジェクトの後半では、保護者向けの研修も実施しました。保護者の中には、「なぜ私の子どもがダウン症の子どもと一緒に学ばなければならないのですか」と発言する人もいましたが、研修会への参加を通して、ダウン症の子どもたちのこと、インクルーシブ教育の重要性について理解が深まり、保護者の態度も協力的なものに変わってきました。

2017年9月の新学期には、パイロット学級が第63特別学校の分教室として、正式にハンウール区に登録されました。



# モンゴル国障害児のための教育改善プロジェクト ニュースレター

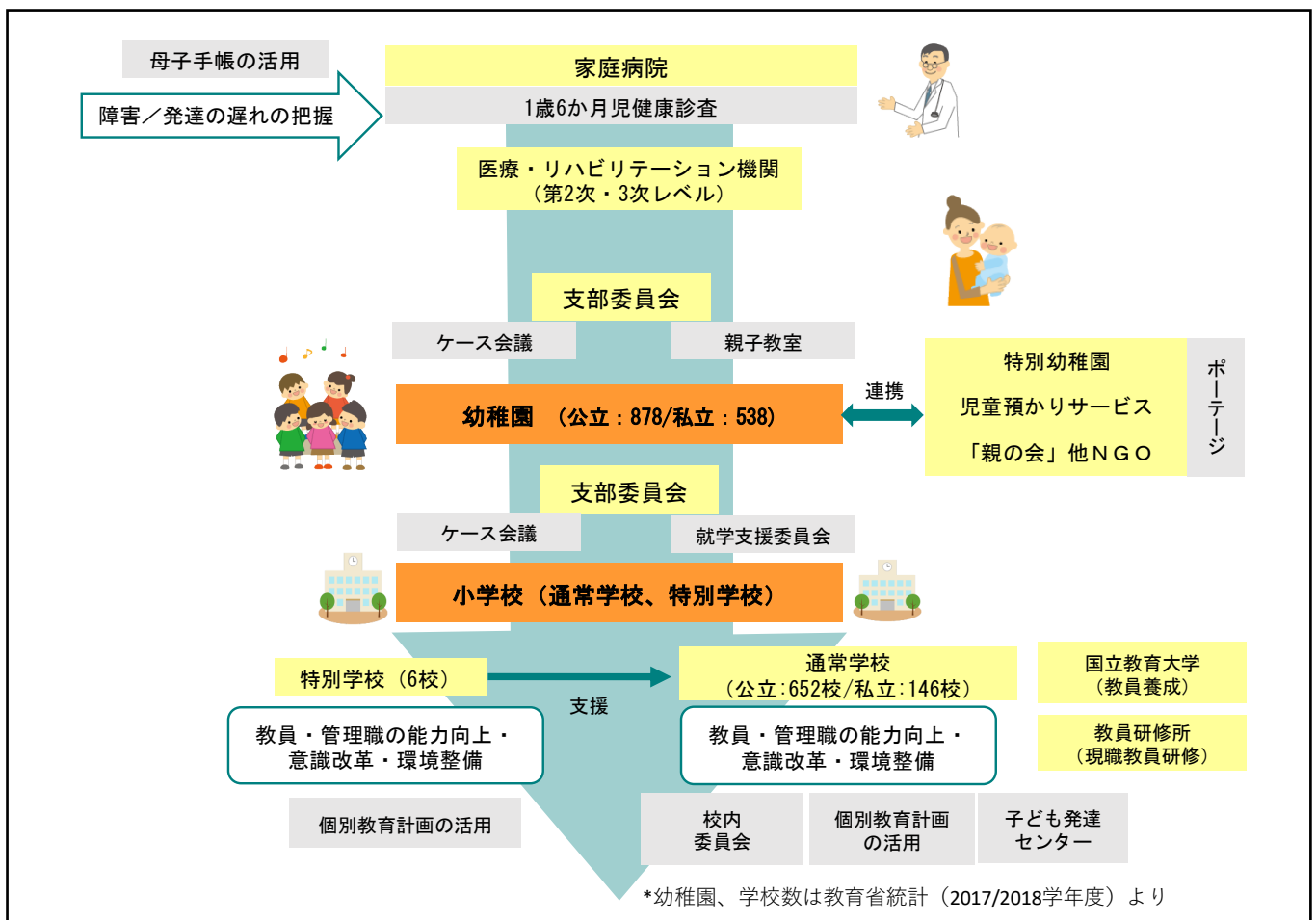
2019年3月

第4号

## 子どもへの総合的な支援

「障害児のための教育改善プロジェクト」は、2015年8月に開始されました。当プロジェクトは障害の早期発見、子どもたちに対する発達支援や教育のモデルを構築することを目的としています。プロジェクトではこのようなモデルを構築するための様々なパイロット活動をウランバートルのバヤンゴル区、フブスグル県、そしてパイロット校にて行ってきました。

この間、モンゴルでは、2016年2月に「障害者の権利に関する法律」が制定されました。同法律にて示された諸課題を解決するため、2017年12月には「障害者の権利・参加・発達支援に関する国家プログラム(モンゴル政府令第321号)」が国会にて承認され、障害者の権利に対する市民の意識を高めること、政策に障害者の視点を反映させること、障害者を対象としたサービスを改善することなどの政府の方針が打ち出されました。プロジェクトでは、下の図にあるような子どもへの支援体制が構築できるよう、約3年半にわたり取り組んできました。



これらの試行活動の結果は、早期発見・発達支援・教育の支援体制および関係する機関の役割を示した「障害児のための包括的な発達支援ガイドライン」としてとりまとめられ、労働・社会保障大臣、教育・文化・科学・スポーツ大臣、保健大臣合同令第A/304・A/699・A/460号により2018年11月15日に承認されました。プロジェクト終了まで残りわずかですが、**すべての子どもたちがニーズに合った発達支援や教育を受けられるようになる**ことを目指して、活動を続けていきます。



## 障害のある子どもの就園・就学の実現に向けて —支部委員会での事例検討会議—

プロジェクトでは、パイロット地域の支部委員会とともに、支援が困難な障害のある子どもの支援方針や計画を立てる事例検討会議を定期的に行っています。ここではWHO国際生活機能分類(ICF)の概念を踏まえ、アセスメントと支援計画作成に取り組んでいます。

事例検討会議で重視していることは主に3つです。1点目は、その子どもが社会の中で他の子どもとともに学び、育つことを支援の目標とします。例えば、「幼稚園に通えるようになる」、「家族と買い物に行く」等を目標として設定し、そのために必要な取り組みを検討していきます。2点目は、子どもの生活全体を理解し、支援を考えることです。障害にのみ着目するのではなく、子どもの長所や家庭環境、住んでいる地域の状況等、子どもを取り巻く環境全体を捉えることに努めます。その上で、障害への対応(治療やリハビリテーション)だけではなく、家族や社会への働きかけも支援のひとつとして検討します。3点目は、支部委員会を中心に関係機関の連

携を図ることです。すでにパイロット地域では、検討した支援計画を実行するため地域の関係行政機関、学校関係者との連携実績が生まれています。

支部委員会での事例検討会議を通じて、一人でも多くの障害のある子どもの就園や就学が実現することを願っています。



事例検討会議で作成した支援計画の例

作成日：2018年8月

名前	M	本人の願い	家族と買い物に出かけたい		
年齢	5歳1か月	保護者の願い	他の子どもと同じように成長させたい、自己表現ができるようになってほしい		
性別	男				
1年後の目標		小学校に楽しく通っている			
	1年後の目標に到達するための課題／ニーズ	支援目標	達成時期	支援の内容(頻度、時間)	担当機関／担当者
1	自分の考えや要求を伝えることが難しい	日常生活に必要なことを手話で伝えることができるようになる	2019年6月	週1回、手話の指導を受ける	支部委員会教育担当 特別学校
2	体に合った車いすがない	体に合った車いすで移動できるようになる	2018年10月	リハビリテーションセンターを通じて車いすを支給する	支部委員会福祉担当 リハビリテーションセンター
3	アパートにスロープがなく外出が困難	アパートにスロープがつけられる	2018年11月	地元自治会の協力でスロープを設置する	支部委員会 自治会
4	学校側が障害児受け入れに関し躊躇している	就学先の学校の校長、学習マネージャーがM君のことについて理解する	2019年7月	<ul style="list-style-type: none"> <li>M君の就学について、支部委員会、幼稚園の教員が学校関係者に情報共有する</li> <li>M君と保護者が学校を見学する</li> </ul>	支部委員会教育担当 幼稚園 小学校

## 自閉症児を持つ保護者向けのハンドブックの作成

保護者や支援機関、医療職のみなさんに、自閉スペクトラム症について理解を深めていただくために、このハンドブックを作成しました。

「第1部：自閉スペクトラム症理解のために」では、自閉症の診断基準、症状、長所や強み、支援機関等を紹介しています。「第2部：モンゴル自閉症協会会員からの質問への回答」では、就学前のお子さんを持つ保護者からの29の質問に対する回答と、就学期のお子さんを持つ保護者からの30の質問に対する回答をまとめています。

本冊子はプロジェクトのウェブサイトとFacebookページからダウンロードできます。ぜひご利用ください。





## 支援が必要な子どもを学校全体で支援する取り組みー校内委員会ー

プロジェクトのパイロット校に行くと、障害のある子どもの担任が一人で悩みながら指導法を考えていたり、保護者や子ども本人が困っていることを学校に伝えられなかったりする状況を目にすることがありました。就学できても、十分な支援が受けられずに学習する意欲を失くしてしまったり、周囲の子どもたちから、からかわれたりするケースもあります。

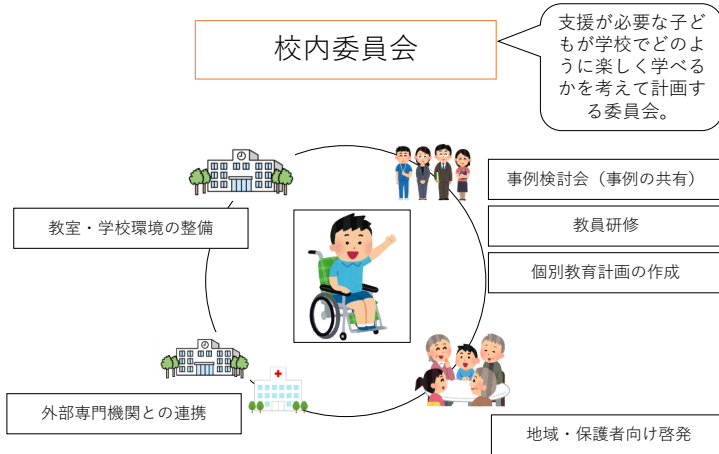
学校に求められる支援は子ども一人ひとり違ってきます。この指導法を使えば全員が勉強できるようになる、というような特効薬はなく、個々のニーズに応じた支援を考えていくことが必要となります。学校全体で関係者が協力して支援が必要な子どもへの対応策を考えていくために、プロジェクトではパイロット通常学校において校内委員会を試行しています。校内委員会は、支援が必要な子どものリスト作成、支援内容に関する協議、インクルーシブ教育に必要な教員研修や地域住民向けの研修会の開催などの役割を担います。校内委員会のメンバーは、学校管理職のみならず、必要に応じて保護者会の代表やホロー/ソムのソーシャルワーカーなども含めるとよいでしょう。メンバーの中で調整役となる人を1名任命し、会議の手配やメンバーへの連絡などをするようにします。会議で決定した内容は必ず他の教員たちに伝えるようにしましょう。

### 校内委員会の役割

- 支援が必要な子どもを特定する。
- その子どもたちの実態を把握する。
- 一人ひとりに必要な支援内容を協議し、計画する。
- 計画した内容が実施されているかどうかをモニタリングする。
- 必要であれば、外部専門機関との連携をとる。
- 教員研修や保護者・地域住民向け研修会を開催する。
- 校内で事例検討会を開催し、教員たちの共通理解を図る。

### 校内委員会のメンバー(例)

- 校長
- 学習マネージャー
- ソーシャルワーカー
- 小学部指導法研究会のリーダー
- 中学部の教員
- 学校医
- バグ/ホローの担当者
- 管轄している教育課/教育局の担当者



フブスグル県にある2つのパイロット校では、2018年4月に校内委員会を組織しました。校長令により、メンバー・役割・年間計画を決め、活動をしています。2018年5月には第1回目の会議を開催(右上の写真)。調整役となったソーシャルワーカーがメンバーへの会議の呼びかけや会場の準備を行いました。第1回目の会議は、支援が必要な子どもを特定し、その子どもへの支援方針を決定することが目的でした。会議の前に、ソーシャルワーカーが各担任から支援が必要な子どもについて情報収集をし、リストを作成しました。会議当日はそのリストをもとに、どんなことが課題になっているのか、どんな支援が必要なのか、個別教育計画を作成するかどうかについて協議をしました。会議で話し合った内容は、その子どもの担任にも知らせます。

校内委員会を組織したことにより、支援が必要な子どもたちを担任以外の教員たちも気にかけるようになるとともに、保護者との連携が強化されました。また、見た目ではわかりにくい発達の遅れや学習上の課題などを抱えている子どもについて、家庭環境や教室での様子などを複数の教員で話し合うことができるのも、校内委員会のメリットです。

## ミニ・プロジェクト(第2回)の取り組み

プロジェクトでは、子どもたちの特別な教育ニーズに合った様々な教育形態の効果を検証し、全国に普及し得るモデルを開発することを目的に、小規模なパイロット活動(ミニ・プロジェクト)を実施しました。2017年10月から2018年6月まで、3件のミニ・プロジェクトを実施しましたのでそれぞれの内容を簡単に紹介します。

「障害は成長の妨げではない」 (障害のある子どもたちのための課外活動)	
実施団体	ホブド県ジャルガントソム第7学校
プロジェクト概要	校内の1教室を子ども発達センターとして整備し、第7学校に通っている障害のある子どもたちが音楽やダンス、手工芸の課外活動に参加できるようにした。課外活動は保護者の協力も得ながら実施した。 文化祭やスポーツ大会、校外学習などに障害のある子どもも平等に参加できるように配慮し、児童生徒間の相互理解を深めた。

「就学前年齢の子どものインクルーシブ教育プロジェクト」	
実施団体	モンゴル国立教育大学附属第249幼稚園
プロジェクト概要	幼稚園に通うことができていない障害のある子どもを対象に、週1回のグループ教室を実施した。また、通常学級でも障害のある子どもを受け入れ、国立教育大学の教員などによる研修を通じて指導法を改善した。

「障害児のための早期介入プログラムの教材作り」	
実施団体	NGO「聴覚障害の教育」
プロジェクト概要	聴覚障害のある子ども及び知的障害のある子ども向けに、単語や文章を手話・イラスト・キリル文字で示した学習カードを作成し、協力校で試行した。 1) 聴覚障害児向け手話の単語カード 2) 聴覚障害児向け手話の文章カード 3) 知的障害児向けジェスチャーの単語カード

## インクルーシブ教育についてのビデオ教材

インクルーシブ教育について少しでも多くの教育関係者に学んでほしい、興味を持ってほしい、という願いから、インクルーシブ教育についてのビデオ教材を制作しました。このビデオ教材は教員研修所が実施している基本研修の事前オンライン学習として活用されており、オンライン研修のIDとパスワードを持っている方は全員視聴することができます。また、IDを持っていない方でも、JICAモンゴル事務所のYoutubeからビデオを観ていただけます。全9回の講義ビデオに加え、ビデオの内容を紹介した「はじめに」と振り返りのための「まとめ」のビデオがあります。講義ビデオは3つのモジュールに分かれており、各モジュールの最後の確認テストで理解度を確認できるようになっています。

教員研修所ウェブサイト <http://esurgalt.itpd.mn/>

JICAモンゴル事務所ウェブサイト <https://www.youtube.com/user/JICAmongolia/videos>

	講義名	講師		講義名	講師
	はじめに (内容の紹介)	教員研修所専門官 Ch. Jargal	第5回	個別教育計画の理解 -個別教育計画とは何か -個別教育計画の作成方法	第25特別学校 専門教員 M. Batmunkh
<b>1. 障害のある子どもの教育を取り巻く環境</b>					
第1回	障害とは何か?	モンゴルDETフォーラム B. Enkhnyam	第6回	基礎となる環境の整備と合理的配慮	教員研修所専門官 Ch. Jargal
第2回	国際的な潮流(サラマンカ声明、障害者権利条約、インクルーシブ教育)	モンゴル国立教育大学 E. Munkhbat	<b>3. 障害特性の理解</b>		
第3回	モンゴルの法律・国家プログラム・関連する組織	教育省一般教育政策局専門官 B. Gereltuya	第7回	障害特性の理解 -子どもの発達・知的障害・ダウン症・脳性まひ-	第70特別学校 専門教員 B. Enkhtuya
<b>2. インクルーシブな学校づくりに向けた体制づくり</b>					
第4回	校内支援体制 -校内でできる支援内容 -校内支援委員会 -事例紹介(フスグル県)	フスグル県教育文化局 D. Baasansuren	第8回	8-1 視覚障害の子どもの特性 8-2 聴覚障害の子どもの特性	第29特別学校教員 N. Burmaa、 M. Ariunzul 第116特別学校 元教員 D. Khorloo
			第9回	学習の遅れや行動に課題のある子どもの理解と対応について	モンゴル国立教育大学 D. Battengel
				まとめ	教員研修所専門官 Ch. Jargal

プロジェクトは2019年6月末で終了します。モンゴルにおいて全ての子どもに適切な発達支援と質の高い教育が提供されるよう、関係者のみなさんが協力していくことを期待しています。

添付資料 7.

エンドライン調査報告書





モンゴル国  
障害児のための教育改善プロジェクト

エンドライン調査報告書

2019年5月

株式会社コーエイリサーチ&コンサルティング

## 目次

第1章 プロジェクト概要.....	1
第2章 エンドライン調査概要.....	3
1. 調査目的.....	3
2. 主な調査内容と方法.....	3
第3章 PDM 指標にかかるエンドライン調査の結果.....	10
1. 上位目標.....	10
2. 成果1.....	14
3. 成果2.....	20
第4章 まとめ.....	30

### 別添 調査対象ごとのエンドライン調査結果詳細

I. 障害児の保健・教育・社会保障支部委員会.....	1
1. 基本情報.....	1
2. 業務経験.....	7
3. 能力.....	12
4. 質問票.....	19
II. 医療関係者.....	25
1. 基本情報.....	25
2. 業務経験.....	26
3. 能力.....	32
4. (トレーナーのみ) アクション・プランの進捗状況.....	35
5. 質問票.....	39
III. パイロット特別学校・通常学校及びパイロット地域の非パイロット校.....	45
1. 基本情報.....	45
2. 合理的配慮.....	50
3. 質問票.....	63
IV. パイロット校教員.....	67
1. 基本情報.....	67
2. 業務経験.....	69
3. 能力.....	76
4. 質問票.....	95

## 第1章 プロジェクト概要

本エンドライン調査が対象とするプロジェクトの概要は以下のとおりである。

1. プロジェクト名：モンゴル国障害児のための教育改善プロジェクト
2. プロジェクト期間：2015年8月～2019年7月
3. 実施機関：
  - 教育・文化・科学・スポーツ省（以下、教育省）
  - 労働・社会保障省（以下、社会保障省）
4. 対象地域（パイロット地域）・対象校
  - 対象地域：ウランバートル市バヤンゴル区  
フブスグル県
  - 対象校：第25、55、63、70 特別学校  
ウランバートル市 第16、26、28、34、35、79、111、113 学校  
フブスグル県 Ireedui21世紀統合学校、Titem 第2学校

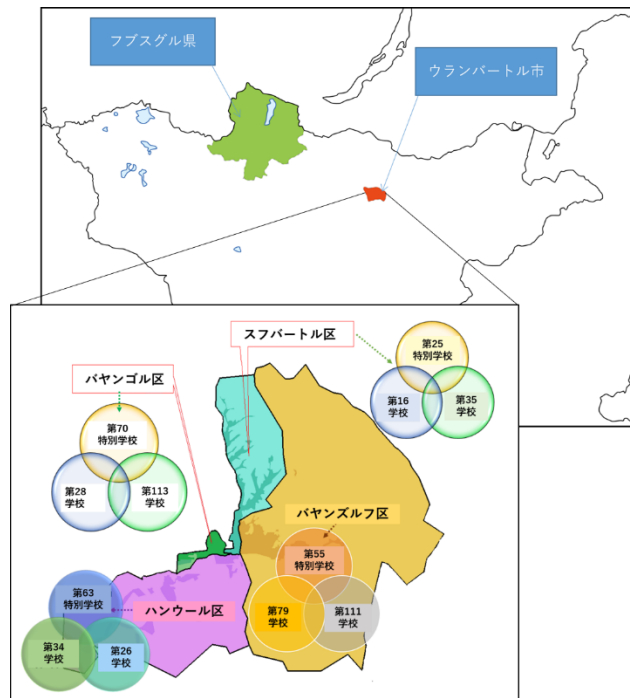


図1-1 対象地域・対象校

## 5. プロジェクトの効果等にかかる指標

プロジェクト・デザイン・マトリックス（Project Design Matrix: PDM）に定められたプロジェクトの効果等にかかる指標は表 1-1 のとおりである。

表 1-1 プロジェクトの効果等にかかる指標

上位目標	指標
すべての障害児がニーズに合った発達支援・教育サービスを受けられる。	障害児の就学数が増加する。
プロジェクト目標	指標
障害児に対する診断・発達支援・教育のモデルが構築される。	プロジェクトで開発されたツールが教育・文化・科学・スポーツ省及び労働・社会保障省に承認される。
成果 1	指標
パイロット地域において、関係機関の障害児に対するアセスメント・発達支援を実施する能力が強化される。	(1) アセスメントツールが改善される。 (2) 「障害児の保健・教育・社会保障委員会」の委員会 <sup>1</sup> 及び支部委員会の能力が強化される。
成果 2	指標
パイロット校の障害児（知的障害を伴う）へ質の高い教育を提供する能力が強化される。	(1) 個別教育計画のマニュアルが改善される。 (2) 障害児のための個別教育計画が改善される。 (3) 発達アセスメントツールが改善される。 (4) 障害児のための教育実践事例集が作成される。
成果 3	指標
ミニ・プロジェクトにより、障害児のニーズに合った様々な教育形態の効果が検証される。	ミニ・プロジェクトの評価
成果 4	指標
成果 1～3 の関係者間での経験共有、及び国レベルの制度、政策への反映が行われる。	(1) 現職教員研修が改善される。 (2) 教員養成課程のカリキュラムが改善される。 (3) 特別学校の特別なニーズ教育に関するカリキュラムが改善される。 (4) 障害児のためのキャンペーンが実施される。

<sup>1</sup> 「障害児の保健・教育・社会保障中央委員会」は、2016年12月21日付モンゴル国政府令第200号により、「中央」という言葉が外れ、「障害児の保健・教育・社会保障委員会」（以下、委員会）と呼ばれるようになった。



## 第2章 エンドライン調査概要

本エンドライン調査は、2015年8月から4年間にわたり実施されている「モンゴル国障害児のための教育改善プロジェクト」の成果を測定するとともに、今後、プロジェクトの成果の定着を図る際に活用できる教訓等を抽出するために実施された。エンドライン調査は、以下に述べる2つの主な目的を持ち、2018年10月から12月にかけて断続的に行われた4つの調査によって構成されている。調査概要を以下に記載する。

### 1. 調査目的

本エンドライン調査の主な目的は以下のとおりである。

- 1) PDMに記載された上位目標にかかるデータを収集するとともに、プロジェクト目標、成果を測るための指標を用いて、プロジェクト実施期間中に、それぞれの指標が目標に到達した程度を測定すること。(但し、エンドライン調査で把握することが適さないPDMのいくつかの指標については、事業完了報告書にて記載する。)
- 2) プロジェクト活動の主に定性的な効果、貢献要因や残された課題、抽出された教訓等を分析し、今後、本プロジェクトの成果の定着を図る際の参考とすること。

### 2. 主な調査内容与方法

上述の調査目的を果たすために、以下の4つの対象者層への調査を実施した。調査の概要は以下のとおりである。各調査の結果は、別添のとおりに。

表 2-1 エンドライン調査を構成する各種調査の一覧

調査対象	実施期間	大項目	小項目	方法
バヤンゴル区及びフブスグル県の「障害児の保健・教育・社会保障支部委員会」	2018年10月	基本情報	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 支部委員会の役割への認識</li> <li>• 業務に関連する事項の学習経験</li> </ul>	プロジェクト・チームが質問紙を配布して実施
		業務経験	<ul style="list-style-type: none"> <li>• ケース数</li> <li>• 関係機関との連携</li> <li>• 委員会に対する認知度・連携度</li> <li>• 視察者数</li> </ul>	
	2018年10月・12月	能力	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 「障害」の捉え方</li> <li>• 知識・理解</li> <li>• 発達アセスメント</li> <li>• 発達支援計画策定</li> <li>• 発達支援実施</li> </ul>	
2018年10月		基本情報	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 業務に関連する事項の学習経験</li> </ul>	プロジェクト・チームが質問紙を配布して実施
	業務経験	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 母子健康手帳の活用方法</li> <li>• 健康診査への従事</li> <li>• 関係機関との連携</li> <li>• 委員会・支部委員会に対する認知度・連携度</li> <li>• 視察者数</li> </ul>		

			<ul style="list-style-type: none"> <li>「障害」の捉え方</li> <li>知識・理解（テスト）</li> </ul>	
	2018年11月	能力	<ul style="list-style-type: none"> <li>(トレーナーのみ<sup>2</sup>)</li> <li>アクション・プランの進捗状況</li> </ul>	プロジェクト・チームがフォーカス・グループ・インタビューを実施
パイロット特別学校・通常学校及びパイロット地域の非パイロット校	2018年10～11月	基本情報	<ul style="list-style-type: none"> <li>児童生徒数・教員数・シフト数</li> <li>在籍する障害のある児童生徒数</li> <li>他校へ転出・退学した障害のある児童生徒数</li> </ul>	プロジェクト・チームが質問紙を配布して実施
		合理的配慮 <sup>3</sup> の提供	<ul style="list-style-type: none"> <li>個別教育計画作成</li> <li>評価方法</li> <li>教員への追加手当</li> <li>学校環境</li> <li>受け入れ姿勢</li> <li>関係機関との連携</li> <li>委員会・支部委員会に対する認知度・連携度</li> <li>視察者数</li> </ul>	
パイロット校教員	2018年10～11月	基本情報	業務に関連する事項の学習経験	プロジェクト・チームが質問紙を配布して実施
		業務経験	<ul style="list-style-type: none"> <li>指導経験</li> <li>受け入れ姿勢</li> <li>指導意欲・自信</li> </ul>	
	2018年8月・9月	能力	<ul style="list-style-type: none"> <li>「障害」の捉え方</li> <li>知識・理解（テスト）</li> </ul>	プロジェクト・チームがフォーカス・グループ・インタビューを実施
			(パイロット特別学校ワーキングチーム <sup>4</sup> のみ)	
2018年10～12月		(パイロット通常学校ワーキングチーム <sup>5</sup> のみ)	合理的配慮の提供	

表 2-2 は、これらの調査が PDM 指標とどのような関係にあるかを示したものである。

本調査では、2016年3～4月及び2017年1月に実施したベースライン調査結果とエンドライン調査結果を比較することでプロジェクトの介入前と介入後の比較、障害児の就学者数、個別教育計画の作成されている障害児数等はパイロット校（介入群）とパイロット地域の非パイロット校（統制群）の比較を行い、プロジェクトの効果について検証を行った。しかしながら、異動等の理由によりベースライン調査対象とエンドライン調査対象は完全に

<sup>2</sup> プロジェクトでは、母子健康手帳の活用を促進するために医療関係者を対象とした研修を実施し、バヤンゴル区6名とフブスグル県8名をトレーナーとして養成した。

<sup>3</sup> 障害者が他の者と平等にすべての人権及び基本的自由を享有し、又は行使することを確保するための必要かつ適当な変更及び調整であって、特別の場合において必要とされるものであり、かつ均衡を失した又は過度の負担を課さないもの（障害者の権利に関する条約第2条）

<sup>4</sup> パイロット特別学校には、それぞれの学校において中核として障害のある児童生徒の支援にあたる教員10名程度のワーキングチームを結成した。

<sup>5</sup> パイロット通常学校についても同じ。

は同じではないこと、「障害者の権利、参加、発達支援に関する国家プログラム」の策定など、プロジェクト実施期間に起きたその他の事象が結果に影響している可能性もあることを断っておく。

次章では、上位目標、成果 1、成果 2 にかかるエンドライン調査結果をまとめる。

表 2-2 PDM 指標と収集したデータの関係

上位目標	指標	収集したデータ	調査対象及び人数	本報告書内の記載箇所
すべての障害児がニーズに合った発達支援・教育サービスを受けられる。	障害児の就学数が増加する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>パイロット校に在籍する障害のある児童生徒数</li> <li>バヤンゴル区、フブスグル県の非パイロット校に在籍する障害のある児童生徒数</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>パイロット校 14 校管理職：14 人</li> <li>バヤンゴル区非パイロット校<sup>6</sup>13 校管理職：13 人</li> <li>フブスグル県非パイロット校<sup>7</sup>30 校管理職：30 人</li> </ul>	第 3 章 1-1
	(追加) 障害児の保健・教育・社会保障支部委員会の定例相談会 <sup>8</sup> に出席する障害児数が増加する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>バヤンゴル区、フブスグル県支部委員会が扱ったケース数</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>バヤンゴル区支部委員会事務局長 1 人</li> <li>フブスグル県支部委員会事務局長 1 人</li> </ul>	第 3 章 1-2
	(追加) 個別教育計画の作成されている障害児数が増加する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>パイロット校で作成されている個別教育計画数</li> <li>バヤンゴル区、フブスグル県の非パイロット校で作成されている個別教育計画数</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>パイロット校 14 校管理職：14 人</li> <li>バヤンゴル区非パイロット校 13 校管理職：13 人</li> <li>フブスグル県非パイロット校 30 校管理職：30 人</li> </ul>	第 3 章 1-3
プロジェクト目標	指標	収集したデータ	調査対象及び人数	本報告書内の記載箇所
障害児に対する診断・発達支援・教育のモデルが構築される。	プロジェクトで開発されたツールが教育・文化・科学・スポーツ省及び労働・社会保障省に承認される。	エンドライン調査では確認しない。	—	—

<sup>6</sup> バヤンゴル区に立地する公立学校のうち、質問紙への回答が得られた 13 校（第 13、20、38、40、47、51、73、93 学校、Erdmiinn Undraa 統合学校、Erdemiin Urguu 統合学校、Oyunii Undraa 統合学校、Mongeni 統合学校、Setgemj 統合学校）

<sup>7</sup> フブスグル県に立地する公立学校のうち、質問紙への回答が得られた 30 校（Avarguud、Aviyas YIII、Alag-Erdene、Arbulag、Bayanzurkh、Burentogtokh、Burenkhaan、Galt、Sod-Erdem、Delger Murun、Jargalant、Zurkh、Ikh-Uul、Gurvan-Erdene、Mogoi、Rashaant、Renchinlkhumbе、Tarianlan、Tosontengel、Tumurbulag、Tunel、Ulaan-Uul、Khankh、Tsagaannuur、Tsagaan-Uul、Tsagaan-Uur、Chandmani-Undur、Shine-Ider、Erdmiin Dalai、Erdenebulgan）。うち、Avarguud、Aviyas、Sod-Erdem、Delger Murun、Gurvan-Erdene、Erdmiin Dalai、Bayanzurkh、Ulaan-Uul、Renchinlkhumbе の一部の教員は、プロジェクトの研修に参加している。

<sup>8</sup> 16 歳までの子どもの障害を認定し、保健・教育・社会保障に係る支援計画の策定、助言を行うとともに、手当の支給を決定する会議。

成果 1	指標	収集したデータ	調査対象及び人数	本報告書内の記載箇所
パイロット地域において、関係機関の障害児に対するアセスメント・発達支援を実施する能力が強化される。	(1) アセスメントツールが改善される	エンドライン調査では確認しない。	—	—
	(2) 「障害児の保健・教育・社会保障委員会」の委員会及び支部委員会の能力が強化される。	<ul style="list-style-type: none"> <li>支部委員会の役割に対する認識</li> <li>関係機関との連携</li> <li>「障害」の捉え方</li> <li>知識・理解</li> <li>バヤンゴル区、フブスグル県支部委員会の発達アセスメントを行う能力・発達支援計画を策定する能力・発達支援を実施する能力</li> <li>バヤンゴル区、フブスグル県の医療関係者の支部委員会との連携</li> <li>パイロット校、バヤンゴル区、フブスグル県の非パイロット校管理職の支部委員会に対する認知度・連携度</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>バヤンゴル区支部委員会：ベースライン調査 7 人、エンドライン調査 7 人</li> <li>フブスグル県支部委員会：ベースライン調査 6 人、エンドライン調査 7 人</li> </ul>	第 3 章 2-1
	(追加) バヤンゴル区、フブスグル県医療関係者の障害の早期発見にかかる能力が強化される。	<ul style="list-style-type: none"> <li>母子健康手帳の活用方法</li> <li>健康診査への従事</li> <li>関係機関との連携</li> <li>「障害」の捉え方</li> <li>知識・理解</li> <li>アクション・プランの進捗状況</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>バヤンゴル区医療関係者：ベースライン調査 26 人、エンドライン調査 26 人</li> <li>フブスグル県医療関係者：ベースライン調査 28 人、エンドライン調査 23 人</li> </ul>	第 3 章 2-2
	(追加) 心理士・医師・専門家・教員及びポータージプログラム相談員の発達アセスメントを行う能力が強化される。	エンドライン調査では確認しない。	—	—
	(追加) バヤンゴル区、フブスグル県親子教室指導者及びポータージプログラム相	エンドライン調査では確認しない。	—	—



成果 2	指標	収集したデータ	調査対象及び人数	本報告書内の記載箇所
パイロット校の障害児（知的障害を伴う）へ質の高い教育を提供する能力が強化される。	(1) 個別教育計画のマニュアルが改善される。 (2) 障害児のための個別教育計画が改善される。 (3) 発達アセスメントツールが改善される。 (4) 障害児のための教育実践事例集が作成される。	エンドライン調査では確認しない。	—	—
	（追加）パイロット特別学校教員の能力が強化される。	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 受け入れ姿勢</li> <li>• 指導意欲・自信</li> <li>• 「障害」の捉え方</li> <li>• 知識・理解</li> <li>• 個別教育計画の比較</li> <li>• 授業の比較</li> <li>• 通常学校への支援</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• パイロット特別学校教員：ベースライン調査 176 人、エンドライン調査 197 人</li> </ul>	第 3 章 3-1
	（追加）パイロット通常学校教員の能力が強化される。	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 受け入れ姿勢</li> <li>• 指導意欲・自信</li> <li>• 「障害」の捉え方</li> <li>• 知識・理解</li> <li>• 合理的配慮の提供</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• バヤンゴル区パイロット通常学校教員：ベースライン調査 552 人、エンドライン調査 532 人</li> <li>• フブスグル県パイロット通常学校教員：ベースライン調査 51 人、エンドライン調査 106 人</li> </ul>	第 3 章 3-2
成果 3	指標	収集したデータ	調査対象及び人数	本報告書内の記載箇所
ミニ・プロジェクトにより、障害児のニーズに合った様々な教育形態の効果が検証される。	ミニ・プロジェクトの評価	エンドライン調査では確認しない。	—	—

成果 4	指標	収集したデータ	調査対象及び人数	本報告書内の記載箇所
成果 1～3 の関係者間での経験共有、及び国レベルの制度、政策への反映が行われる。	(1) 現職教員研修が改善される。 (2) 教員養成課程のカリキュラムが改善される。 (3) 特別学校の特別なニーズ教育に関するカリキュラムが改善される。 (4) 障害児のためのキャンペーンが実施される。	エンドライン調査では確認しない。	—	—

### 第3章 PDM 指標にかかるエンドライン調査の結果

#### 1. 上位目標

上位目標：すべての障害児がニーズに合った発達支援・教育サービスを受けられる。

上位目標の指標は「障害児の就学数が増加する」である。エンドライン調査では、パイロット校（特別学校・通常学校）及び非パイロット校（パイロット地域の公立通常学校のうち回答が得られたバヤンゴル区 13 校、フブスグル県 30 校）における障害のある児童生徒数を確認した。

併せて、「ニーズに合った発達支援・教育サービスを受けられるようになったか」という観点から、「障害児の保健・教育・社会保障支部委員会の定例相談会に出席する障害児数が増加する」と「個別教育計画の作成されている障害児数が増加する」についても状況把握を行った。

本調査を通じ、パイロット校及びパイロット地域においては、障害児の就学数、支部委員会が扱うケース数、個別教育計画の作成されている障害児数が増加していることが明らかになった。一方、非パイロット校においては、障害児の就学数、個別教育計画の作成されている障害児数の増加はほとんどみられなかった。上位目標である「すべての障害児がニーズに合った発達支援・教育サービスを受けられる」を達成するためには、さらなる介入が必要である。

表 3-1 上位目標の指標と収集したデータ

指標	収集したデータ
障害児の就学数が増加する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>パイロット校に在籍する障害のある児童生徒数</li> <li>バヤンゴル区、フブスグル県の非パイロット校に在籍する障害のある児童生徒数</li> </ul>
（追加）障害児の保健・教育・社会保障支部委員会の定例相談会 <sup>9</sup> に出席する障害児数が増加する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>バヤンゴル区、フブスグル県の障害児の保健・教育・社会保障支部委員会が扱ったケース数</li> </ul>
（追加）個別教育計画の作成されている障害児数が増加する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>パイロット校で作成されている個別教育計画数</li> <li>バヤンゴル区、フブスグル県の非パイロット校で作成されている個別教育計画数</li> </ul>

#### 1-1 指標：障害児の就学数が増加する

上記指標の達成状況を確認するため、パイロット校（特別学校 4 校、通常学校 10 校）及

<sup>9</sup> 16 歳までの子どもの障害を認定し、保健・教育・社会福祉に係る支援計画の策定、助言を行うとともに、手当の支給を決定する会。

び非パイロット校（33校）合計57校の管理職各1人への質問紙調査を通じて、各校に在籍する障害のある児童生徒数を把握した。プロジェクトによる介入後、障害のある児童生徒のパイロット校への就学が促進されている一方で、非パイロット校においては、障害のある児童生徒の就学状況は依然として改善されていないことが明らかとなった。

パイロット校に在籍する障害のある児童生徒数を、プロジェクトによる介入前（ベースライン調査時）と介入後（エンドライン調査時）で比較したのが図3-1である。パイロット特別学校、パイロット通常学校いずれでも増加がみられ、パイロット特別学校では、1,136人から1,283人（約1.13倍）、ウランバートル市パイロット通常学校で76人から100人（約1.32倍）、フブスグル県パイロット通常学校で53人から62人（約1.17倍）となっている。

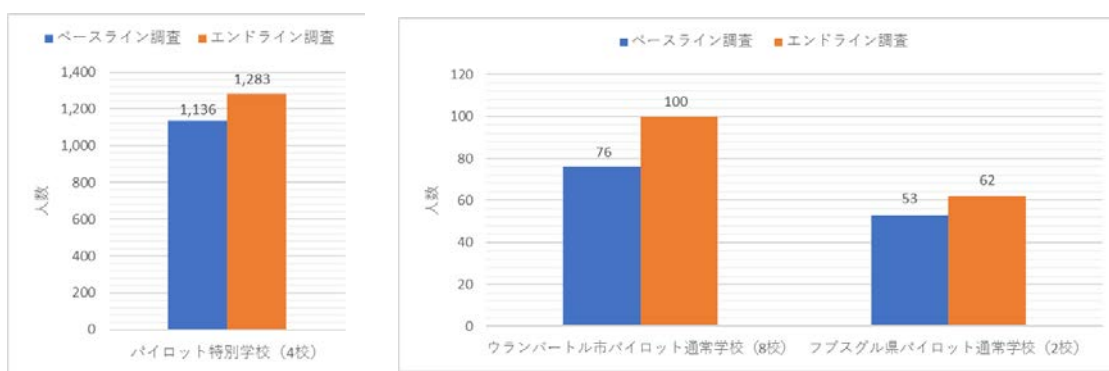


図 3-1 パイロット校に在籍する障害のある児童生徒数

プロジェクトによる介入のあった学校（パイロット校）と介入がなかった学校（非パイロット校）に在籍する障害のある児童生徒数を比較したのが図3-2である。介入のあった学校では障害のある児童生徒が増加（1,265人から1,445人）している一方、介入のなかった学校では、減少（583人から477人）がみられる。

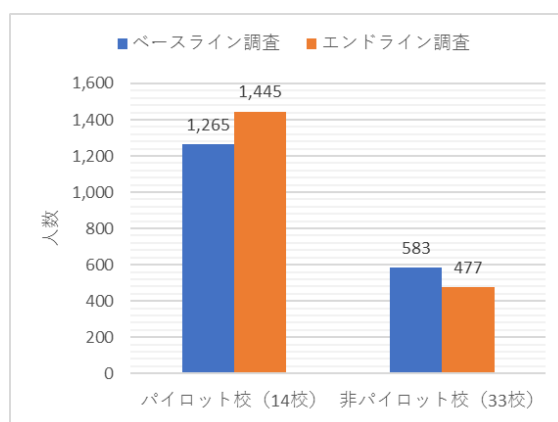


図 3-2 パイロット校及び非パイロット校に在籍する障害のある児童生徒数

## 1-2 （追加）障害児の保健・教育・社会保障支部委員会の定例相談会に出席する障害児数が増加する

障害児の保健・教育・社会保障委員会の定例相談会に出席する障害児数が増加したかどうかを確認するため、バヤンゴル区、フブスグル県支部委員会の事務局長各1人にそれぞれの委員会が扱った障害のある子どものケース数を把握した。プロジェクトによる介入後、扱ったケース数が増加したことが明らかになった。

プロジェクトによる介入前（2015年）と介入後（2018年）で、バヤンゴル区、フブスグル県支部委員会が扱った障害のある子どものケース数を比較したのが図3-3である。いずれもプロジェクトによる介入後の方が大幅に増加している。

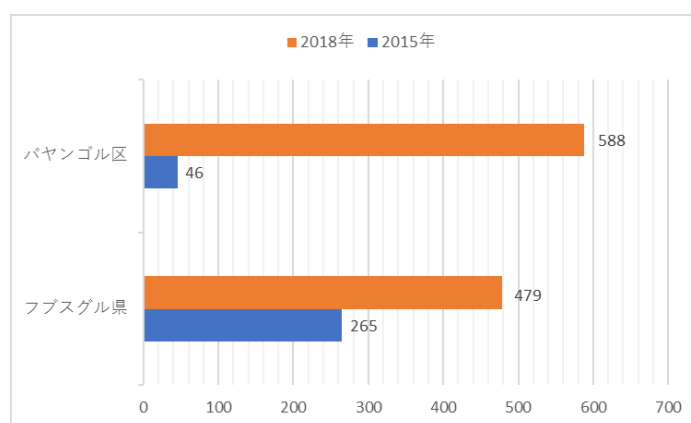


図3-3 バヤンゴル区及びフブスグル県支部委員会が扱ったケース数

増加した背景には、2015年当時よりも支部委員会の活動が安定・継続的に実施されるようになったこともあると推測されるが、プロジェクト活動を通じて支部委員会の能力強化を行ったことも大きく影響していると考えられる。

## 1-3 （追加）個別教育計画の作成されている障害児数が増加する

個別教育計画の作成されている障害児数が増加したかどうかを確認するため、パイロット校及び非パイロット校で作成されている個別教育計画数を把握した。プロジェクトによる介入後、パイロット校においては作成されている個別教育計画数が大幅に増加している一方、非パイロット校においては微増に留まった。

パイロット校で作成されている個別教育計画数を、プロジェクトによる介入前（ベースライン調査時）と介入後（エンドライン調査時）で比較したのが図3-4である。パイロット特別学校、パイロット通常学校いずれでも顕著な増加がみられる。パイロット特別学校では76



人から 321 人（約 4.2 倍）、パイロット通常学校についても、ウランバートル市で 1 人から 27 人、フブスグル県で 1 人から 31 人に増加している。

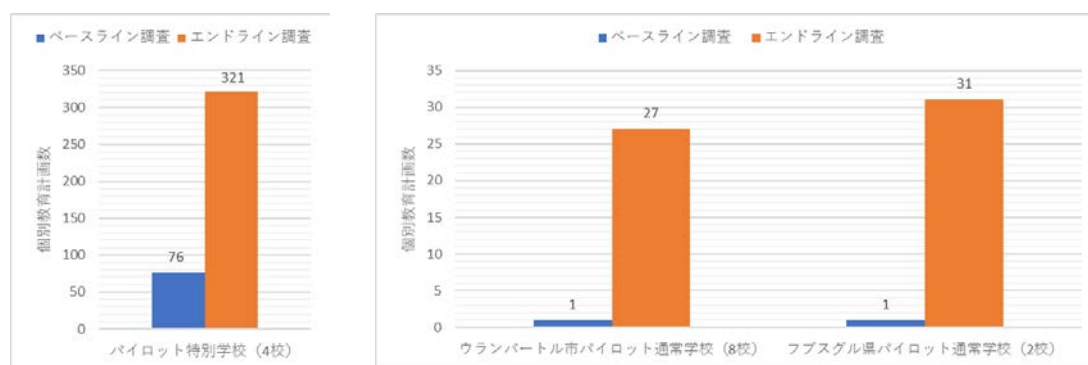


図 3-4 パイロット校で作成されている個別教育計画数

パイロット校と非パイロット校で作成されている個別教育計画数を比較したのが図 3-5 である。エンドライン調査時に非パイロット校で個別教育計画が作成されているのは、バヤンゴル区では 13 校中 0 校、フブスグル県では 30 校中 10 校に留まった。なお、個別教育計画が作成されていたフブスグル県の 10 校のうち 4 校は、プロジェクトが実施した研修に参加した学校である。

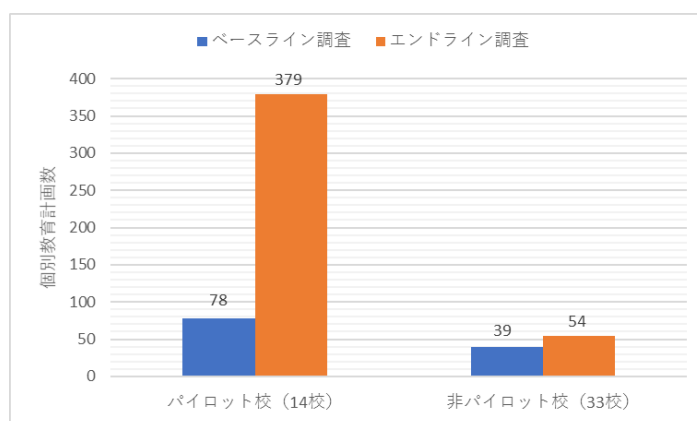


図 3-5 パイロット校及び非パイロット校で作成されている個別教育計画数

プロジェクトは、パイロット特別学校と個別教育計画フォーマット及びマニュアルの開発を行うとともに、同計画の作成にかかる大臣令が発出されるよう教育研究所を通じて教育省に働きかけを行った。結果、2018 年 3 月 29 日付教育大臣令第 A/155 号の発出により、すべての学校に個別教育計画が適用されるようになった。パイロット特別学校では重度の障害のある児童生徒に対しての個別教育計画作成が決定されたことが、同計画の作成数増加に貢献したと考えられる。パイロット通常学校については、パイロット特別学校による助

言活動やプロジェクト活動を通じた個別教育計画の作成、研究授業の実施が貢献要因であったと言える。一方、非パイロット校では、個別教育計画の作成が浸透していないことが明らかになった。今後、パイロット校以外でも活用が促進されるよう、大臣令の周知と研修の実施が求められる。

## 2. 成果 1

成果 1：パイロット地域において、関係機関の障害児に対するアセスメント・発達支援を実施する能力が強化される。

成果 1 の指標は「アセスメントツールが改善される」及び「『障害児の保健・教育・社会保障委員会』の委員会及び支部委員会の能力が強化される」である。成果として「関係者の能力強化」を掲げているものの、PDM 上の指標では委員会及び支部委員会の能力強化のみが対象となっている。そこで、委員会及び支部委員会を含む関係機関の強化すべき能力を「障害の早期発見にかかる能力」「発達アセスメントを行う能力」「発達支援計画を策定する能力」「発達支援を行う能力」の 4 つに区分し、エンドライン調査では支部委員会の「発達支援計画を策定する能力」及び医療関係者の「障害の早期発見にかかる能力」の強化状況について把握した。なお、委員会については、エンドライン調査時に実質上 1 名<sup>10</sup>であり、個人の回答が特定できるため、質問紙調査及びインタビュー調査は実施していない。

表 3-2 成果 1 の指標と収集したデータ

指標	収集したデータ
「障害児の保健・教育・社会保障委員会」の委員会及び支部委員会の能力が強化される。	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 支部委員会の役割に対する認識</li> <li>• 関係機関との連携</li> <li>• 「障害」の捉え方</li> <li>• 知識・理解</li> <li>• 発達アセスメント・発達支援計画策定・発達支援実施</li> <li>• バヤンゴル区、フブスグル県の医療関係者の支部委員会との連携</li> <li>• パイロット特別学校・通常学校、バヤンゴル区、フブスグル県の非パイロット校管理職の支部委員会に対する認知度・連携度</li> </ul>
(提案) バヤンゴル区、フブスグル県医療関係者の障害の早期発見にかかる能力が強化される。	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 母子健康手帳の活用方法</li> <li>• 健康診査への従事</li> <li>• 関係機関との連携</li> <li>• 「障害」の捉え方</li> <li>• 知識・理解</li> <li>• アクション・プランの進捗状況</li> </ul>

<sup>10</sup> 2019 年 5 月現在、3 名。

## 2-1 指標：「障害児の保健・教育・社会保障委員会」の委員会及び支部委員会の能力が強化される

エンドライン調査の結果、支部委員会に関しては、支部委員会の役割に対する認識、「障害」に対する基礎的な知識・理解、発達支援計画を策定する能力が強化されたことが明らかになった。また、医療関係者や学校管理職と支部委員会の連携が強化されたことにより、支部委員会に対する認知度も向上したことが確認された。

### (1) 支部委員会の役割に対する認識

バヤンゴル区支部委員会委員（ベースライン調査、エンドライン調査ともに7人）及びフブスグル県支部委員会委員（ベースライン調査6人、エンドライン調査7人）がベースライン調査時には2014年1月15日付人口開発社会保障大臣・教育省大臣・保健省大臣合同令に示された支部委員会の役割を、エンドライン調査時には2016年12月21日付内閣令第200号「障害児の保健・教育・社会保障委員会の規則」に示された支部委員会の役割を選択肢の中から正しく選択できるかを確認した。

プロジェクトによる介入前（ベースライン調査時）と介入後（エンドライン調査時）で比較したのが図3-6である。バヤンゴル区、フブスグル県支部委員会ともに正答率は上昇しており、支部委員会の役割に対する認識が高まったことが分かる。但し、フブスグル県支部委員会に関しては、委員会と支部委員会の役割を混同している委員がおり、正答率は80%に留まっている。

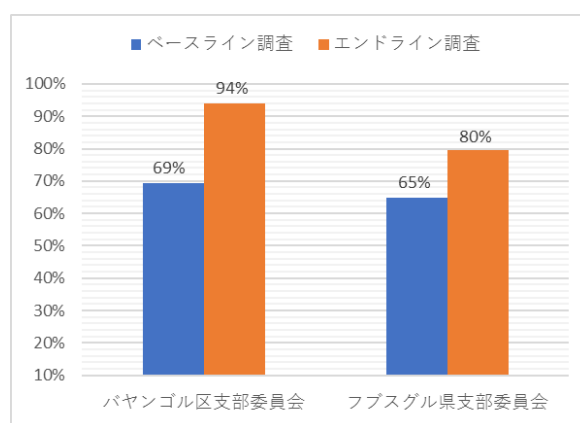


図3-6 支部委員会の役割に対する認識

(バヤンゴル区：ベースライン調査、エンドライン調査N=7、フブスグル県：ベースライン調査n=6、エンドライン調査N=7)

また、各委員が支部委員会の役割について自由記述を行った内容を見ると、関係機関との連携についての言及が多い。これは、支部委員会の役割として、障害のある子どもに対し包括的な発達支援を提供することについての理解が深まっていることを示唆している。

## (2) 関係機関との連携

バヤンゴル区、フブスグル県の支部委員会が、プロジェクトによる介入前（ベースライン調査時）と介入後（エンドライン調査時）に、それぞれ連携した機関とその内容について比較した。バヤンゴル区支部委員会に関しては、以下の変化が確認できた。

- 区教育課、幼稚園、特別学校、通常学校との連携内容に、就学支援が含まれるようになった。
- 保護者の就労支援に関して、区の労働課と連携するようになった。
- 子どもの実態把握やアセスメント、ニーズに合った支援計画の作成において、ホロー<sup>11</sup>のソーシャルワーカーと連携するようになった。
- 障害の早期発見や定例相談会の開催に関して、家庭医と連携するようになった。

フブスグル県でも、「県教育局と連携している」という回答が増加し、障害のある子どもの就学先の決定とその後の支援が取り組むべき課題として認識されるようになってきていることが分かった。

上記のような変化がみられた背景には、以下のようなプロジェクトの介入が考えられる。プロジェクトでは、支援が困難な子どもの事例を取り上げ、WHO 国際生活機能分類 (ICF) に基づいたアセスメント及び発達支援計画策定を実施する「事例検討会議」の開催を通じ、支部委員会が包括的な発達支援計画を策定できるよう能力強化に取り組んだ。事例検討会議の開催及びその後のモニタリング活動では、様々な関係者と連携を図る必要が生じる。その結果が、関係機関との連携促進につながったものと考えられる。

表 3-3 他機関との連携を通じ支援につながった事例

事例検討会議で扱った事例のうち、バヤンゴル区のゲル地区に住んでいた 7 歳の男児については、家族が近隣のチンゲルテイ区に転居したため、バヤンゴル区から支援が得られなくなっていたが、チンゲルテイ区の支部委員会に連絡し、支援が得られるよう調整した。その結果、男児はチンゲルテイ区内の学校に就学、男児の妹も幼稚園に就園できるようになった。モニタリング活動を通じ、母親の就業が可能になったことも確認している。
--

## (3) 知識・理解

バヤンゴル区、フブスグル県支部委員会の「障害」に対する知識・理解を確認するため、委員（バヤンゴル区：ベースライン調査、エンドライン調査 7 人、フブスグル県：ベースライン調査 6 人、エンドライン調査 7 人）に対して「障害理解」「早期発見・介入」「子どもの発達」「障害分類」「個別教育計画」「指導法」の 6 項目合計 22 問のテスト（それぞれ 4 つの選択肢から回答を選択する形式）を実施した。平均正答率（無効回答は不正解として正答率を割り出した）をプロジェクトによる介入前（ベースライン調査時）と介入後（エンドライ

<sup>11</sup> 区の下にある行政区分。



ン調査時) で比較したのが、図 3-7 である。

バヤンゴル区では「障害理解」「早期発見・介入」「障害分類」「個別教育計画」、フスグル県では「早期発見・介入」「子どもの発達」「障害分類」「個別教育計画」のエンドライン調査時正答率がベースライン調査時より高くなっている。一連のプロジェクト活動を通じ、支部委員会の基礎知識が深まったことが明らかになった。

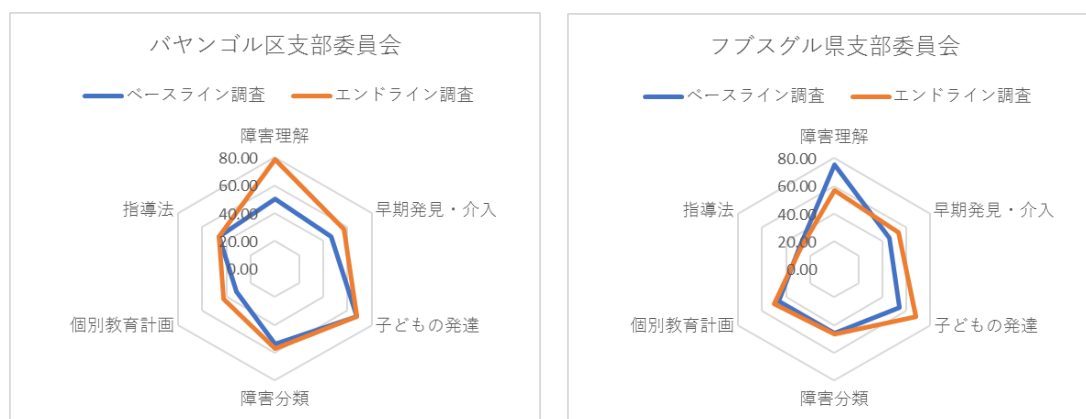


図 3-7 知識・理解 (バヤンゴル区：ベースライン調査、エンドライン調査 N=7、フスグル県：ベースライン調査 n=6、エンドライン調査 N=7)

#### (4) 支部委員会に対する認知度・連携度

医療関係者 (ベースライン調査 54 人、エンドライン調査 49 人)、パイロット校及び非パイロット校の管理職 (ベースライン調査、エンドライン調査ともに 57 人) が支部委員会をどのように捉えているかを確認するため、支部委員会に対する認知度・連携度を把握した。医療関係者及び学校管理職の支部委員会に対する認知度・連携度を、プロジェクトによる介入前 (ベースライン調査時) と介入後 (エンドライン調査時) で比較したのが図 3-8 である。

ベースライン調査において「支部委員会について知らない」と回答した医療関係者は 28 人であったが、エンドライン調査では 12 人に減少した。同様に「知らない」と回答した学校管理職は、31 人から 18 人に減少した。

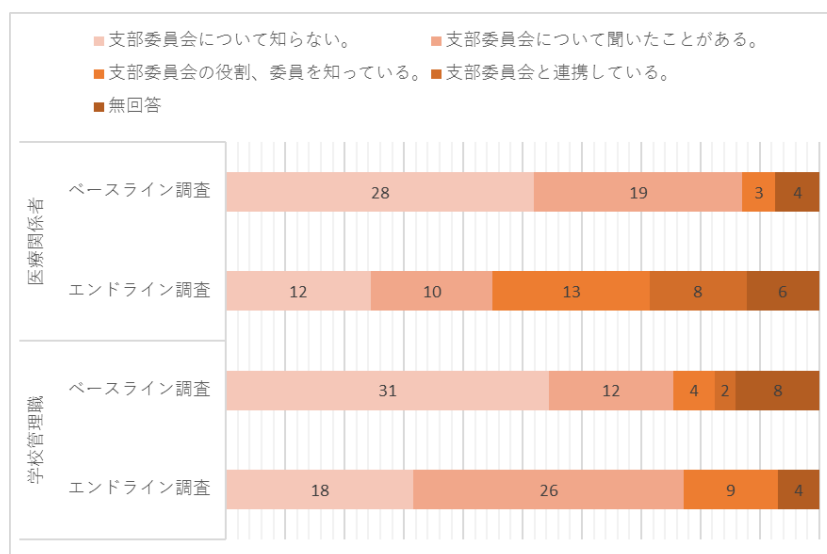


図 3-8 支部委員会に対する認知度・連携度（医療関係者：ベースライン調査 n=54、エンドライン調査 n=49、学校管理職：ベースライン調査、エンドライン調査 n=57）

## 2-2 （追加）バヤンゴル区、フブスグル県医療関係者の障害の早期発見にかかる能力が強化される

各区のホロー、各県のソム<sup>12</sup>には、家庭保健センターが設置されており、それぞれ区保健センター、県保健局が管轄している。バヤンゴル区保健センター及び各ホローの家庭保健センター、県保健局及びソム保健センター医療関係者等を対象に調査を実施した。結果、業務に関連する事項についての学習経験が増加し、母子健康手帳の活用促進、1歳6カ月児健康診査の実施に積極的に取り組んでいることが明らかになった。また、多職種連携が促進され、発達の遅れや障害が確認された後、具体的な発達支援につながっていることも確認された。

### (1) 業務に関連する事項の学習経験

バヤンゴル区、フブスグル県の医療関係者の業務に関連する事項の学習経験が、プロジェクトの介入前（ベースライン調査時）と介入後（エンドライン調査時）でどのように変化したかを比較したのが図 3-9 である。プロジェクト介入後の方が、学習経験が増加したと回答している医療関係者が増加している。回答者の一部は、プロジェクトによる母子健康手帳や1歳6カ月児健康診査に関する研修に参加しているため、これらの研修が医療関係者にとって学習機会になったことが考えられる。

<sup>12</sup> 県の下にある行政区分。

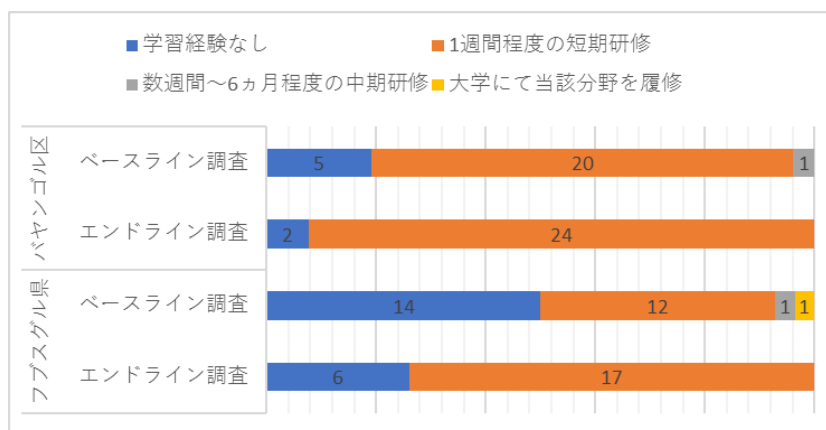


図 3-9 学習経験（バヤンゴル区：ベースライン調査 n=26、エンドライン調査 n=26、フブスグル県：ベースライン調査 n=28、エンドライン調査 n=23）

## (2) 関係機関との連携

バヤンゴル区、フブスグル県の医療関係者が、プロジェクトによる介入前（ベースライン調査時）と介入後（エンドライン調査時）に、それぞれ連携した機関・内容について比較した。バヤンゴル区の医療関係者に関しては、以下の変化が確認できた（詳細は別添 2 参照）。

- ベースライン調査時に「幼稚園と連携している」と回答した医療関係者は 1 人であったが、エンドライン調査時には 10 人にまで増加した。
- ベースライン調査時に通常学校と連携している医療関係者はいなかったが、エンドライン調査時には 8 人が「通常学校と連携している」と回答した。
- 主な連携内容についても「1 歳 6 カ月児健康診査」や「支部委員会の定例相談会開催」「親子教室の開催」など、プロジェクト活動で導入した活動内容が挙げられた。

フブスグル県の医療関係者の回答からは、ベースライン調査時と比較してエンドライン調査時には、県社会政策局と協力活動の計画策定や県教育文化芸術局と研修実施に取り組むようになったことが明らかになった。また、幼稚園との連携により発達支援・就園支援が、通常学校との連携により就学支援・学習環境の整備が促進されるようになった。

これらの背景には、プロジェクトが支部委員会による定例相談会を支援したことや、事例検討会議及び親子教室を導入し、多職種連携の促進を図ったことがあると考えられる。その結果、発達の遅れや障害が確認された後、具体的な発達支援につながっていることも確認された。

## (3) アクション・プランの進捗状況

エンドライン調査では、母子健康手帳の活用促進の中核となることが期待されているトレーナー養成研修受講者（バヤンゴル区 3 名、フブスグル県 5 名）を対象にフォーカス・グループ・インタビュー及び質問紙調査を実施した。研修受講者は研修時に今後の活動計画をアクション・プランとしてまとめており、インタビューではその進捗状況を以下のとおり確

認した。

- バヤンゴル区のトレーナーの回答から、アクション・プランで計画された7つの活動（母子健康手帳の活用促進、1歳6カ月児健康診査の実施を含む）すべてが実行された、もしくは実行の予定であることが確認された。また、研修受講後の自分自身の変化について、「同僚に助言できるようになった」と感じている。
- フブスグル県のトレーナーの回答から、アクション・プランで計画された7つの活動（母子健康手帳の活用促進、1歳6カ月児健康診査の実施を含む）すべてが実行された、もしくは実行の予定であることが確認された。また、研修受講後の自分自身の変化について、発達の遅れや障害の早期発見についての知識も深まり、トレーナー同士がチームとして機能するようになったと認識している。

### 3. 成果 2

成果 2: パイロット校の障害児（知的障害を伴う）への質の高い教育を提供する能力が強化される。

成果 2 の指標は「個別教育計画のマニュアルが改善される」「障害児のための個別教育計画が改善される」「発達アセスメントツールが改善される」「障害児のための教育実践事例集が作成される」である。成果として「パイロット校の能力強化」を掲げているものの、プロジェクト関係者の能力強化はツール開発を通じて実施するという設定から PDM 上の指標はツールの開発となっている。今回のエンドライン調査では、パイロット特別学校において強化すべき能力を「児童生徒の実態を把握する能力」「個別教育計画を策定する能力」「個々のニーズに応じた指導を行う能力」「（特別学校が）通常学校を支援する能力」、パイロット通常学校において強化すべき能力を「児童生徒の実態を把握する能力」「個別教育計画を策定する能力」「個々のニーズに応じた指導を行う能力」「（通常学校において）合理的配慮を提供する能力」に区分し、能力強化の状況を把握するよう努めた。

表 3-4 成果 2 の指標と収集したデータ

指標	収集したデータ
（追加）パイロット特別学校教員の能力が強化される。	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 受け入れ姿勢</li> <li>• 指導意欲・自信</li> <li>• 個別教育計画作成数</li> <li>• 「障害」の捉え方</li> <li>• 知識・理解</li> <li>• 個別教育計画の比較</li> <li>• 授業の比較</li> <li>• 通常学校への支援</li> </ul>
（追加）パイロット通常学校教員の能力が強化される。	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 受け入れ姿勢</li> <li>• 指導意欲・自信</li> </ul>



る。	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 個別教育計画作成数</li> <li>• 「障害」の捉え方</li> <li>• 知識・理解</li> <li>• 合理的配慮の提供</li> </ul>
----	--

### 3-1 (追加) パイロット特別学校教員の能力が強化される。

パイロット特別学校教員の「児童生徒の実態を把握する能力」「個別教育計画を作成する能力」「個々のニーズに応じた指導を行う能力」「特別学校が通常学校を指導する能力」のいずれも、強化されたことが確認できた。

#### (1) 児童生徒の実態を把握する能力

パイロット特別学校教員を対象に「障害理解」「早期発見・介入」「子どもの発達」「障害分類」「個別教育計画」「指導法」の6項目合計22問のテスト（それぞれ4つの選択肢から回答を選択する形式）を実施した。平均正答率（無効回答は不正解として正答率を割り出した）をプロジェクトによる介入前（ベースライン調査時）と介入後（エンドライン調査時）で比較したのが図3-10である。エンドライン調査時は、全回答者の回答に加え、ワーキングチームメンバーのみの回答についても分析を行った。

6項目のうち、全回答者（195人）の回答は「障害理解」「早期発見・介入」「子どもの発達」の3項目の正答率が、ワーキングチーム（36人）の回答は「個別教育計画」を除く5項目の正答率がベースライン調査時より高くなっており、特別学校教員の児童生徒の実態を把握する能力が向上したことがうかがえる。

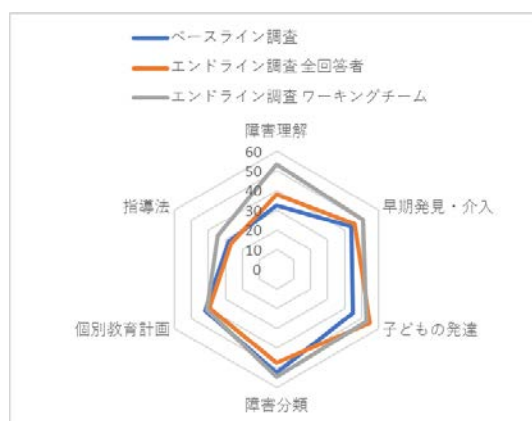


図3-10 パイロット特別学校教員の知識・理解（ベースライン調査 n=176、エンドライン調査：全回答者 n=195、ワーキングチーム n=36）

特別学校ワーキングチームにプロジェクト介入前に作成されていた個別教育計画とプロジェクトの介入を受けて改善された個別教育計画を比較しながら、児童生徒の実態を把握する自らの能力がどのように変化したのかを振り返ってもらった。ワーキングチームの回

答からは、「児童生徒の実態把握を行えるようになった」「家庭との話し合いが行えるようになった」など、児童生徒の実態を把握する能力について肯定的な変化が生じていることが明らかになった。

表 3-5 ワーキングチームを対象としたフォーカス・グループ・インタビューでの意見

- |   |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"><li>• 障害のある児童生徒の実態を把握して、発達段階のどのあたりなのか、次のステップに進むにはどのような指導をしたら良いかということを考えるようになってきた。（第 63 特別学校）</li><li>• 個別教育計画は、実態把握やアセスメントをしたうえで各領域に分けて目標を設定する。そのため、子どもの発達を促せるツールになったと思う。家庭と学校の話し合いのツールとしても活用できるようになった。保護者から児童生徒の実態を聞き取ることができて、以前は知らなかった家庭での様子も知ることができた。（第 70 特別学校）</li></ul> |
|---|

プロジェクトによる介入を通じ、個別教育計画のフォーマットが開発され、児童生徒の実態を詳細に記載する欄が設けられたことが、児童生徒の実態を把握する能力の強化に貢献していると考えられる。

## (2) 個別教育計画を策定する能力

前述のとおり、パイロット特別学校において個別教育計画の作成されている児童生徒数は、プロジェクトによる介入前（ベースライン調査時）と比較し、介入後（エンドライン調査時）には 76 人から 321 人（約 4.2 倍）に増加した。パイロット特別学校教員に、個別教育計画を作成するようになった時期について尋ねたところ、回答は図 3-11 のとおりであった。プロジェクトによる介入前（2014/2015 年度以前）から約半数の教員が個別教育計画を作成していた第 25 特別学校を除き、他の 3 校においては「プロジェクトによる介入後（2015/2016 年度以降）に個別教育計画を作成するようになった」と回答した教員が、「作成したことがない」「2014 年/2015 年度以前から作成していた」と回答した教員を上回っている。

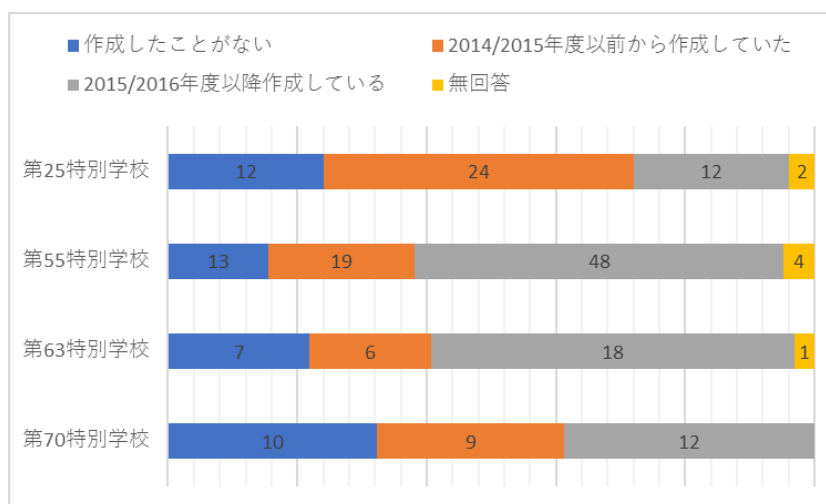


図 3-11 個別教育計画を作成するようになった時期 (n=197)

特別学校ワーキングチームにプロジェクト介入前に作成されていた個別教育計画とプロジェクトの介入を受けて改善された個別教育計画を比較しながら、個別教育計画を策定する自らの能力がどのように変化したのかを振り返ってもらった。ワーキングチームの回答からは、「具体的な長期目標、短期目標、指導の内容が計画できるようになった」「教員間の情報共有が促進された」など、個別教育計画を策定する能力について肯定的な変化が生じていることが明らかになった。

表 3-6 ワーキングチームを対象としたフォーカス・グループ・インタビューでの意見

- 他の教科の教員たちも互いに何を教えてどのような目標を設定しているか、共有できる形になったので、良くなったと思う。個別教育計画を作成するために、複数の教員がチームで取り組むことで、児童生徒の成果につながるようになった。（第 25 特別学校）
- 新しい個別教育計画フォーマットは、目標や支援内容が教科ごとに記入できるようになっている。指導案の内容も具体的になって、クラスの全児童生徒が平等に教育を受けられる機会を得られるようになってきた。以前は重度の障害のある児童生徒は他の児童生徒から離れて他の活動をしていたが、個別教育計画と指導案を作るようになってからは、授業の中で一緒に活動ができるようになった。（第 55 特別学校）

プロジェクトによる介入を通じ、個別教育計画のフォーマットが開発されたこと、個別教育計画作成実習が実施されたことが、パイロット特別学校教員の個別教育計画を策定する能力を強化したと考えられる。

### (3) 個々のニーズに応じた指導を行う能力

特別学校ワーキングチームにプロジェクトによる介入前の授業（2016年）と介入後の授業（2018年）のビデオを20分程度視聴し、比較しながら、個々のニーズに応じた指導を行う能力がどのように変化したのかを振り返ってもらった（詳細は別添4参照）。ワーキングチームの回答からは、児童生徒のニーズに応じた指導を行うことができるようになったと感じていることが明らかになった。

表 3-7 ワーキングチームを対象としたフォーカス・グループ・インタビューでの意見

- 2016年の授業では教員は教えることだけに集中しており、教えられている児童の反応については気にしなかったようだ。褒めることも少なく、多面的な指導がみられなかった。2018年の授業では全児童が授業に参加できるように心がけており、補助教員の役割や子どもへのかかわり方も変わってきている。以前は座席配置にも配慮していなかったが、2018年の授業のビデオでは教員が児童の反応や回答を引き出すために待つようになっていた。だんだんとニーズに応じた支援ができるようになってきている。（第63特別学校）
- 2018年には指導案を書くことにより、具体的で分かりやすい展開となっている。（第70特別学校）

プロジェクトでは、個別教育計画を実際の指導に落とし込んでいくために、各学校3回、研究授業に取り組んだ。具体的には、パイロット特別学校にテーマ（例：肢体不自由で自発的なコミュニケーションが少ない児童に対する指導）を選定してもらい、プロジェクト専門家が実態把握の方法や指導の際の工夫について指導した後、ワーキングチームで指導案、研究授業を行った。第55特別学校、第63特別学校、第70特別学校のフォーカス・グループ・インタビューでは、これらの活動で作成した指導案について言及されており、指導案を作成するなど研究授業にかかる活動を通じて、パイロット特別学校教員の個々のニーズに応じた指導を行う能力が強化されたと考えられる。

### (4) 通常学校を支援する能力

特別学校と通常学校の連携を深めることで、障害のある児童生徒の学びの場を通常学校に広げていくため、プロジェクトではパイロット特別学校1校当たり2校のパイロット通常学校をパートナーとして、特別学校教員から通常学校教員への助言活動を実施した。助言活動に従事したワーキングチームメンバーに助言活動について振り返ってもらったところ、通常学校の教員に変化を促したり、正しい理解を促進したりできたと感じていることが明らかになった。



表 3-8 ワーキングチームを対象としたフォーカス・グループ・インタビューでの意見

パイロット通常学校において保護者向けの研修を実施した際には、保護者が教材に興味を示してくれた。自分の専門の話をできたので良かった。教員たちも変わってきた。助言活動に行くと、自分の経験を振り返ることにもなり、それは自分の勉強にもなった。（第 55 特別学校）

### 3-2 （追加）パイロット通常学校教員の能力が強化される

パイロット通常学校教員の「児童生徒の実態を把握する能力」「個別教育計画を作成する能力」「個々のニーズに応じた指導を行う能力」「合理的配慮を提供する能力」のいずれも、強化されたことが確認できた。一方で、知識・理解、指導への積極性や自信については学校間及び教員間でばらつきがあるのが現状である。今後、より多くの教員を巻き込んでいくことにより能力強化を図る必要がある。

#### (1) 児童生徒の実態を把握する能力

パイロット通常学校教員（ベースライン調査 603 人、エンドライン調査 632 人）を対象に「障害理解」「早期発見・介入」「子どもの発達」「障害分類」「個別教育計画」「指導法」の 6 項目合計 22 問のテスト（それぞれ 4 つの選択肢から回答を選択する形式）を実施した。平均正答率（無効回答は不正解として正答率を割り出した）をプロジェクトによる介入前（ベースライン調査時）と介入後（エンドライン調査時）で比較したのが図 3-12 である。

「指導法」を除く 5 項目、とりわけ「障害理解」「子どもの発達」「障害分類」の正答率がベースライン調査時より高くなっており、通常学校教員の児童生徒の実態を把握する能力が向上したことがうかがえる。

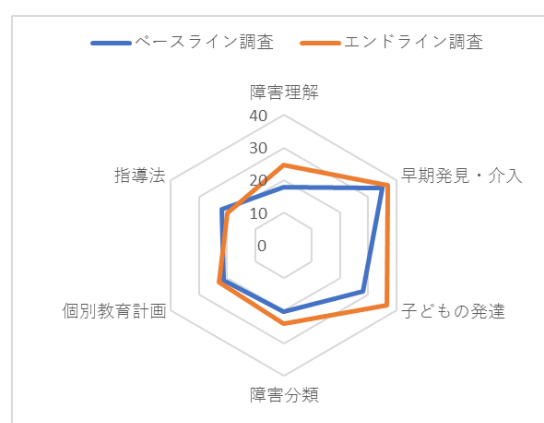


図 3-12 パイロット通常学校教員の知識・理解  
 (ベースライン調査 n=603、エンドライン調査 n=632)

## (2) 個別教育計画を策定する能力

図 3-4 のとおり、パイロット通常学校において個別教育計画の作成されている児童生徒数は、プロジェクトによる介入前（ベースライン調査時）と比較し、介入後（エンドライン調査時）には、ウランバートル市で 1 人から 27 人、フブスグル県で 1 人から 31 人に増加した。パイロット通常学校教員に、個別教育計画を作成するようになった時期について尋ねたところ、回答は図 3-13 のとおり、「プロジェクトによる介入後（2015/2016 年度以降）作成している」と回答した教員が 73 人に上った。

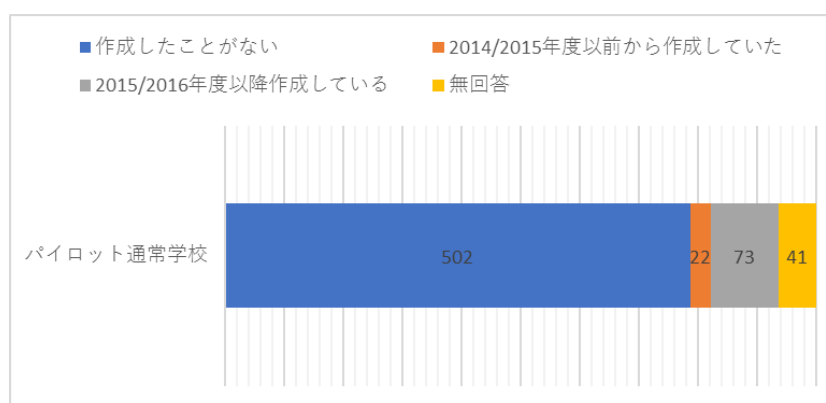


図 3-13 個別教育計画を作成するようになった時期 (n=638)

通常学校では各クラスに必ずしも障害のある児童生徒が在籍しているとは限らない。プロジェクトでは、各校で障害のある児童生徒に向き合っている教員を対象に個別教育計画策定のための研修や障害を理解するための研修などを実施しており、このような介入が、これらの教員の個別教育計画を策定する能力の強化につながったと考えられる。

一方、回答者の 70%以上が「個別教育計画を作成したことがない」と回答している。今後、学校全体でインクルーシブ教育<sup>13</sup>に取り組む体制を整えていくためには、これらの教員に対して研修を実施するとともに、障害のある児童生徒と関わる機会を設けることを通じて能力強化を図っていくことが求められる。

## (3) 個々のニーズに応じた指導を行う能力

プロジェクトの介入により個々のニーズに応じた指導を行う能力がどのように変化したかを確認する目的で、パイロット通常学校教員 638 人にプロジェクトによる介入前（2014/2015 年度以前）と介入後（エンドライン調査時）で、「障害のある児童生徒を指導したいか」「障害のある児童生徒を指導する自信があるか」について比較してもらった。回答

<sup>13</sup> 2017 年 11 月 29 日付モンゴル国政府令第 321 号「障害者の権利の保護、社会参加促進、発達支援に関する国家プログラム」の目標 2 には、あらゆる段階の教育においてインクルーシブ教育を目指すことが示されている。

は図 3-14、3-15 のとおりである。プロジェクトによる介入前よりエンドライン調査時の方が、「少し指導してみたい」「指導したい」「大変指導したい」、「少し自信がある」「自信がある」「大変自信がある」と回答した教員が増加している。反対に、「指導したくない」「自信がない」と回答した教員は、介入後には半数以下に減っており、プロジェクトの介入の効果が顕著である。

プロジェクトによる研修などの介入を受けて、パイロット通常学校教員の障害のある児童生徒に対する指導への積極性・自信が高まったことが明らかになった。

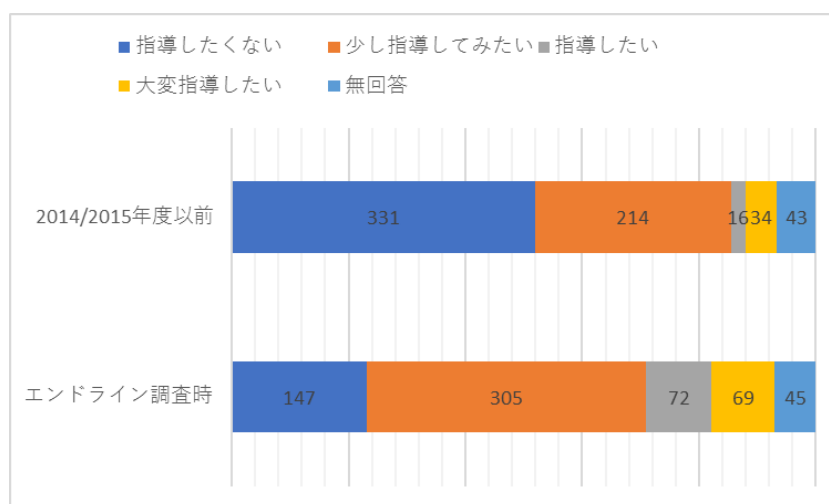


図 3-14 障害のある児童生徒を指導したいか (n=638)

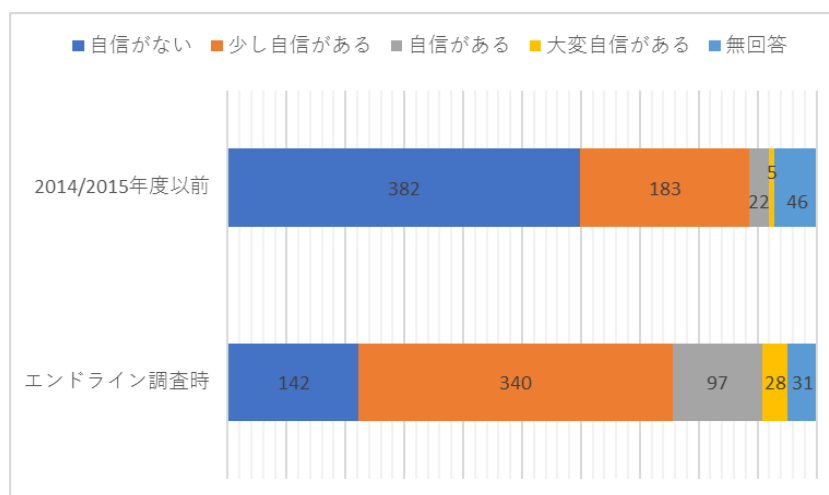


図 3-15 障害のある児童生徒を指導する自信があるか (n=638)

#### (4) 合理的配慮を提供する能力

プロジェクトの介入により、パイロット通常学校の合理的配慮を提供する能力がどのように変化したかを確認する目的で、パイロット通常学校教員 638 人にプロジェクトによる介入前（2014/2015 年度以前）と介入後（エンドライン調査時）で、学校の障害のある子どもを受け入れ準備について比較してもらった。回答は図 3-16 のとおりである。

プロジェクトによる介入前よりエンドライン調査時の方が、「少し整っている」「整っている」「大変整っている」と回答した教員が増加している。

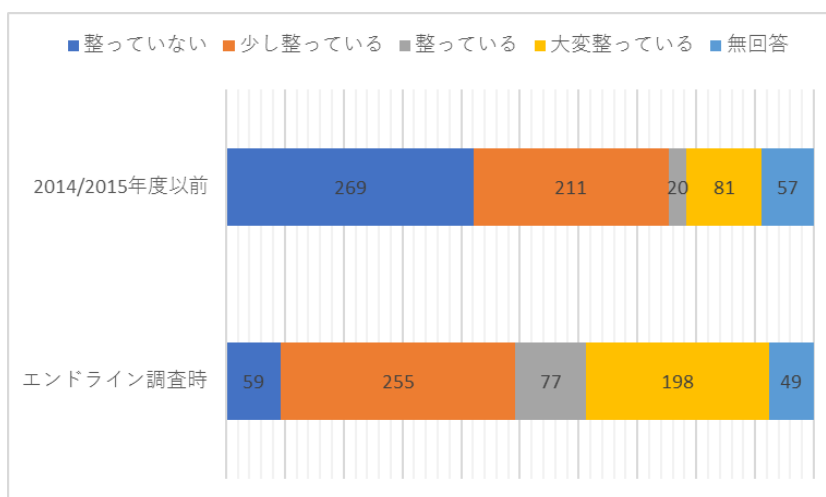


図 3-16 学校の障害のある子どもの受け入れ準備 (n=638)

同様の目的で、パイロット通常学校ワーキングチームに、合理的配慮を提供する能力についてプロジェクトによる介入前と介入後で比較してもらった。どの学校においても、プロジェクトの研修や本邦研修を通じて合理的配慮という概念を知った教員がほとんどであり、その効果を感じており、今後も続ける予定との回答を得た。

表 3-9 ワーキングチームを対象としたフォーカス・グループ・インタビューでの意見

- すべての教員が、児童生徒の理解度に応じた学習内容の変更を行っている。絵カードや実物の活用もされている。1 日の時間割を分かりやすく掲示するため、特別なニーズのある児童生徒に対しては図などを活用している。「指示は分かりやすく」というのはすべての教員が意識していることである。（第 28 学校）
- 個別教育計画を作成している児童生徒に対しては学習内容の調整をしている。個別教育計画を作成していない児童生徒にも、特に低学年の児童には時間割の表示に写真を使うなどの工夫をしている。担任教員に対し写真を配布している。（第 79 学校）
- 毎月開催される保護者との会議で、担任が障害のある子どもについて説明している。児童に対する説明も担任教員の責任である。（第 79 学校）

- 合理的配慮を提供することの効果を感じているので続けている。児童生徒だけではなく、教員も楽になった。（第 111 学校）

プロジェクトでは、2017/2018 学校年度より、パイロット通常学校で合理的配慮の計画を立てており、このような活動が合理的配慮を提供する能力の強化につながったと考えられる。



## 第4章 まとめ

本エンドライン調査は、2015年8月から4年間にわたり実施されている「モンゴル国障害児のための教育改善プロジェクト」の成果を測定するとともに、今後、プロジェクトの成果の定着を図る際に活用できる教訓等を抽出するために実施されたものである。以下、エンドライン調査で把握を行った上位目標、成果1、成果2の達成度をまとめるとともに、今後の課題について述べる。

### 4-1 上位目標

「すべての障害児がニーズに合った発達支援・教育サービスを受けられる」という上位目標の指標「障害児の就学数が増加する」について、パイロット特別学校及び通常学校では、増加がみられた一方、パイロット地域の非パイロット校においては若干の減少がみられた。

「ニーズに合った発達支援・教育サービスを受けられるようになったか」という観点から状況把握を行った「障害児の保健・教育・社会保障支部委員会の定例相談会に出席する障害児数が増加する」については、パイロット地域であるバヤンゴル区及びフブスグル県支部委員会の状況のみを確認したところ、どちらも大幅な増加がみられた。

「個別教育計画の作成されている障害児数が増加する」については、パイロット特別学校・通常学校では顕著な増加が確認されたが、パイロット地域の非パイロット校においては微増に留まった。

以上のことから、障害のある児童生徒のパイロット校における就学や教育サービスは改善している一方で、非パイロット校における就学や教育サービスについては教員研修所や専門家からの助言など、さらなる技術指導が必要であることが明らかになった。個別教育計画のフォーマット及び作成マニュアルを承認した2018年3月29日付教育大臣令第A/155号や通常学校においてインクルーシブ教育を促進する規則を定めた2019年5月14日付教育大臣令第A/292号などを通じ、プロジェクトの成果は制度に反映されているものの、これら大臣令の各教員への周知や非パイロット校での実施は十分でないため、今後、本プロジェクトにおいて有効性が確認された活動をモンゴル全国に普及していく必要がある。

### 4-2 成果1

#### (1) 障害児の保健・教育・社会保障支部委員会

「パイロット地域において関係機関の障害児に対するアセスメント・発達支援を実施する能力が強化される」という成果1の指標「『障害児の保健・教育・社会保障委員会』の委員会及び支部委員会の能力が強化される」について、バヤンゴル区、フブスグル県支部委員会がどのような役割を果たすべきかを認識し、基礎的な知識・理解を深め、とりわけ「発達支援計画を策定する能力」が強化されたことを確認した。なお、委員会については、エンドライン調査時に委員が実質1名であり個人の回答が特定できるため、質問紙調査及びイン

タビュー調査は実施していない。

プロジェクトがパイロット地域において試行した事例検討会議が、支部委員会の能力強化に大きく貢献したと考えられる。今後も事例検討会議は、持続可能な形で実施されることが望まれる。しかしながら、現在のところ、同会議は支部委員会の所掌には含まれておらず、委員の手当の支給対象となっていない。今後、プロジェクトの成果の定着を図るためには、同会議の開催が支部委員会の役割として位置づけられる必要がある。

## (2) 医療関係者

前述の指標と併せて確認を行った「バヤンゴル区、フブスグル県医療関係者の障害の早期発見に係る能力が強化される」について、医療関係者の業務に関連する事項に関する学習経験が増加し、母子健康手帳の活用促進、1歳6カ月児健康診査に積極的に取り組んでいることが明らかとなった。医療関係者の障害の早期発見に係る能力は強化され、さらに他機関との連携の下、発達支援につなげていることが確認された。

家庭保健センターの医師は2、3年で異動になるケースが多いことから、保健省の指導により、母子健康手帳の活用及び1歳6カ月児健康診査の実施、保護者への助言などに関する定期的な研修機会の提供が求められる。母子健康手帳の活用、1歳6カ月児健康診査の実施は、2017年12月のモンゴル国政府令第321号「障害者の権利の保護、社会参加促進、発達支援に関する国家プログラム」でも規定されている。プロジェクトで作成した「母子健康手帳活用ハンドブック及び母子健康手帳活用のための指導者養成研修モジュール」及び「1歳6カ月児健康診査実施ハンドブック（乳幼児健康診査問診票含む）」は保健省の確認も受けており、活用が期待できる。

## 4-3 成果2

「パイロット校の障害児（知的障害を伴う）への質の高い教育を提供する能力が強化される」という成果2の達成状況を確認するため、パイロット校において強化すべき能力を「児童生徒の実態を把握する能力」「個別教育計画を策定する能力」「個々のニーズに応じた指導を行う能力」「(特別学校が)通常学校を支援する能力」「(通常学校において)合理的配慮を提供する能力」の5つに区分し確認を行った。

### (1) パイロット特別学校

パイロット特別学校では、プロジェクト介入前からある程度、障害のある児童生徒を受け入れる体制が整っており、教員も指導に対して積極的であった。プロジェクトの介入により、教材、指導技術が改善され、指導に対する自信が高まったことが確認できた。ワーキングチームに関しては「障害」に対する知識・理解が深まっている。児童生徒の実態を把握する能力、個別教育計画を作成する能力、個々のニーズに応じた指導を行う能力、通常学校を支援する能力のいずれも強化されている。また、個別教育計画作成や個々のニーズに応じた指導、

通常学校を支援することの有効性を認識している。

今後、プロジェクトの成果の定着を図るためには、パイロット特別学校の全教員がリソースパーソンとなり、通常学校での研修講師などの役割を担っていくこと、主にウランバートル市の通常学校や各県の中核となる学校に専門的な助言を行う体制を整えることが期待される。

## (2) パイロット通常学校

パイロット通常学校についても、プロジェクトの介入により、障害のある児童生徒を受け入れる体制が整いつつある。合理的配慮を提供する能力も強化されていることが確認できた。教員自身も合理的配慮を提供することの有効性を感じている。

一方で、「障害」に対する知識・理解、指導への積極性や自信については、学校間でばらつきがあるとともに、学校内でも教員間でばらつきがみられた。指導に自信がないと回答した教員は、自信が持てない理由として「研修を受けられておらず、指導法や関わり方が分からないこと」「実際に指導した経験がないこと」を挙げている。

今後、プロジェクトの成果の定着を図るにあたり、通常学校に対して指導・助言を行う人的リソースの存在が必要となる。ウランバートル市においては、前述のとおり、パイロット特別学校がその役割を果たすことが期待される。一方、地方部に関しては、教育省が現在、各県3校を「リソース校」とし、県内の他の学校に対して、障害のある児童生徒の指導に関する専門的な助言を提供できる体制を整えることを計画している。計画の実現が求められる。

また、学校全体でインクルーシブ教育に取り組む体制の充実も重要である。プロジェクトでは、教職員が当該校の障害のある児童生徒への支援を計画する「校内委員会」という制度をパイロット通常学校に導入した。この制度は、2019年5月14日付教育省大臣令第A/292号によりモンゴル全国の学校で採用されることとなったことから、その実施と継続が望まれる。

以上、エンドライン調査全体の主要目的に照らし合わせて、4つの対象者層への調査結果に基づく主要課題を記載して、本エンドライン調査報告書のまとめとする。なお、本調査を通じて整理した情報を活用したプロジェクトの評価は、別途『事業完了報告書』に記載されるため、本書はあくまでも情報収集と分析の結果までを掲載したものである。

別添

調査対象ごとのエンドライン調査結果詳細





## I. 障害児の保健・教育・社会保障支部委員会

本章では、バヤンゴル区及びフブスグル県の支部委員会について、2016年3～4月（バヤンゴル区）、2017年1月（フブスグル県）に実施したベースライン調査結果と2018年10月に実施したエンドライン調査結果を比較する。比較した項目は以下のとおりである。

表 1-1 比較項目

大項目	小項目	方法
基本情報	<ul style="list-style-type: none"> <li>支部委員会の役割への認識</li> <li>業務に関連する事項の学習経験</li> </ul>	質問紙
業務経験	<ul style="list-style-type: none"> <li>ケース数</li> <li>関係機関との連携</li> <li>委員会に対する認知度・連携度</li> <li>視察者数</li> </ul>	質問紙
能力	<ul style="list-style-type: none"> <li>「障害」の捉え方</li> <li>知識・理解</li> </ul>	質問紙
	<ul style="list-style-type: none"> <li>発達アセスメント</li> <li>発達支援計画策定</li> <li>発達支援実施</li> </ul>	フォーカス・グループ・インタビュー

### 1. 基本情報

#### 1-1 対象

対象とした支部委員会委員は下表のとおりである。バヤンゴル区では、プロジェクト実施期間中に3名が交代したことが分かる。一方、フブスグル県では、プロジェクト実施期間中に1名がメンバーを外れ、1名が新たに任命された。

表 1-2 バヤンゴル区支部委員会

所属 ( )内は委員会内での役割	ベースライン 調査時の回答 の有無	エンドライン 調査時の回答 の有無
区社会開発課 課長（委員長）	✓	✓
区社会福祉サービス課 専門官（事務局長）	✓	✓
第70特別学校 障害児教育専門教員・言語聴覚士	✓	✓
区社会開発課 専門官	✓	
区社会開発課 専門官		✓
区保健センター 心理士	✓	
区保健センター 神経科医		✓
第113学校 教員	✓	
区社会開発課 高等専門官		✓
区保健センター 小児科医	✓	✓

表 1-3 フブスグル県支部委員会

所属 ( ) 内は委員会内役割	ベースライン 調査時の回答の 有無	エンドライン 調査時の回答の 有無
県社会政策局 局長 (委員長)	✓	✓
県労働福祉サービス局 専門官 (事務局長)	✓	✓
県教育文化芸術局 生涯教育専門官	✓	✓
県社会政策局 保健政策担当専門官	✓	
児童・家族発達課 子ども保護専門家		✓
県立病院情報課 情報担当専門官 課長 (医師)	✓	✓
県立病院 子ども専門官 (医師)	✓	✓
NGO Uvgud センター 教員	*	✓

\* ベースライン調査時に不在であったため、データを取得できなかった。

### 1-2 支部委員会の役割に対する認識

初めに、支部委員会の役割に対する認識を確認した。ベースライン調査時には、2014年1月15日付人口開発社会保障大臣・教育大臣・保健大臣合同令に示された支部委員会の役割を、エンドライン調査時には、2016年12月21日付内閣令第200号「障害児の保健・教育・社会保障委員会の規則」に示された支部委員会の役割を選択肢の中から正しく選択できるか確認した。それぞれの正答率は以下のとおりである。

表 1-4 支部委員会の役割に関する正答率

(バヤンゴル区：ベースライン調査、エンドライン調査 N=7、フブスグル県：ベースライン調査 n=6、エンドライン調査 N=7)

	ベースライン調査	エンドライン調査
バヤンゴル区支部委員会	69.4%	93.9%
フブスグル県支部委員会	64.8%	79.6%

各委員が支部委員会の役割について自由記述を行った内容を表 1-5、1-6 に示す。特にバヤンゴル区については、ベースライン調査時よりも具体的な役割が記載されている。また、他機関との連携について言及した委員が増えている。以上のことから、ベースライン調査時と比較して、エンドライン調査時には、両委員会の委員は子どもたちを包括的に支援するという支部委員会の役割に対する認識を高めていることが分かる。

### 1-3 業務に関連する事項の学習経験

各委員の業務に関連する事項の学習経験についても、表 1-5、1-6 に記載のとおりである。フブスグル県支部委員会に関しては、ベースライン調査時には「1週間程度の短期研修」を受講したと回答する者が多かったが、エンドライン調査時には「数週間～6カ月程度の中長期研修」を受講したという回答が増加している。プロジェクトによる介入を通じて、業務に関連する学習経験を積むことができたと考えられる。

表 1-5 支部委員会の役割への認識・業務に関連する事項に関する学習経験（バヤンゴル区）

役職（担当）	ベースライン調査		エンドライン調査	
	どのような役割を担っていると認識しているか	当該分野に関する学習経験	どのような役割を担っていると認識しているか	当該分野に関する学習経験
区社会開発課 課長（委員長）	すべての面の役割を担っている。	数週間～6 カ月程度 の中期研修	支部委員会の委員の専門的な能力の向上や監理に努める。バヤンゴル区内で障害のある子どものための保健・教育・社会保障サービス提供の施策を実施する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>1 週間程度の短期研修</li> <li>数週間～6 カ月程度 の中期研修</li> </ul>
区社会福祉サービス課 専門官（事務局長）	社会福祉に関する法律に沿って、社会福祉サービスを提供している。	1 週間程度の短期 研修	登録・情報管理、報告書作成、支部委員会の決定の実行を評価、総合的な活動やイベントを開催している。	当該分野にかかる大学のコースを修了
第 70 特別学校 障害児教育専門 教員・言語聴覚士	指導法について調査・研究し、教育サービスを提供する。	1 週間程度の短期 研修	教育的なアセスメント、障害のある子どもの能力開発を実施している。教育の権利保障に関して、関連機関との連携を図る。指導法改善のための助言活動を行う。	<ul style="list-style-type: none"> <li>1 週間程度の短期 研修</li> <li>数週間～6 カ月程 度の中期研修</li> </ul>
区社会開発課 専門官	必要なすべての面から活動している。	数週間～6 カ月の 中期研修		
区社会開発課 専門官			障害のある子どもとその保護者が直面している喫緊の課題を解決するための活動、障害のある子どもが他の子どもと等しく生活・学習できるよう、彼らの権利保護のための活動を行う。	数週間～6 カ月程度 の中期研修
区保健センター 心理士	障害のある子どもの両親、保護者に精神面の助言を与える。また、彼らの積極的な参加を促進し、支援グループを組織する。	数週間～6 カ月の 中期研修		
区保健センター 神経科医			保健教育の提供、連携、助言、指導法改善のための支援を行う。	1 週間程度の短期研 修
第 113 学校 教員	障害のある子どもの発達、その他の能力をアセスメントする。個別教育計画（IEP）の策定を支援する。障害のあ	<ul style="list-style-type: none"> <li>数週間～6 カ月 程度の中期研修</li> <li>1 週間程度の短</li> </ul>		

	る子どもの両親向け研修を実施する、 両親の参加を促進する目的で研修を 実施する。	期研修		
区社会開発課 高等専門官			障害のある子どもを教育に等しく参加さ せる。障害のある子どもの発達支援のため の関連機関との連携、コーディネーター業 務を実施している。	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 1 週間程度の短期 研修</li> <li>• 数週間～6 カ月程 度の中期研修</li> </ul>
区保健センター 小児科医	研修を実施する。保健面からの助言を 提供する。障害のある子どもの数を把握し 情報を提供する。公的機関の協働を促進 する。	1 週間程度の短期 研修	障害のある子どもに正確なアセスメント を実施、福祉サービスを提供、家庭医及び 他の医師へ助言、障害や発達の遅れの程度 を認定、改善のための計画を策定してい る。委員会及び支部委員会の会議に参加し たり、研修を実施したり研修に参加したり している。	学習していない。

表 1-6 支部委員会の役割への認識・業務に関連する事項の学習経験（フスグル県）

役職（担当）	ベースライン調査		エンドライン調査	
	どのような役割を担っていると認識しているか	当該分野に関する学習経験	どのような役割を担っていると認識しているか	当該分野に関する学習経験
県社会政策局 局長（委員長）	支部委員会の活動を監督、指導する。	1 週間程度の短期研修	障害のある子どもへの支援・援助のための関連機関／分野との連携、保護者への助言・説明を行っている。	<ul style="list-style-type: none"> <li>1 週間程度の短期研修</li> <li>数週間～6 カ月程度の中期研修</li> </ul>
県労働福祉サービス局専門官 （事務局長）	障害のある子どもに関し、定例相談会で法律に則り公正に決定するよう尽力する。委員会の決定を、福祉、保健、教育サービスにおいて政策に基づき履行させる。	1 週間程度の短期研修	親、保護者、障害のある子どもを対象とした法律規定や関連情報などを含めた情報を共有、研修を実施、社会福祉サービスを提供している。	数週間～6 カ月程度の中期研修
県教育文化芸術局 生涯教育専門官	障害のある子どもに平等に教育を提供する方法論を指導し、学校や幼稚園を支援する。	1 週間程度の短期研修	障害のある子どもの教育支援のために連携をしている。支部委員会の教育関連の決定が実行されているか評価・監督を行っている。	数週間～6 カ月程度の中期研修
県社会政策局 保健政策担当専門官	障害のある子どもに対し保健的、教育的、社会的側面から法に沿って支援を行う。障害のある子どもの能力向上を支援する。障害のある子どもが直面している問題を解決する。	学習していない。		
児童・家族発達課 子ども保護専門官			ソーシャルワーカーとして子ども一人ひとりにアセスメントを実施する。保護者への助言・アドバイスも担当している。	1 週間程度の短期研修
県立病院情報課 情報担当専門官 課長（医師）	障害の診断をまとめる。治療や看護をして管理する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>1 週間程度の短期研修</li> <li>数週間～6 カ月程度の中期研修</li> </ul>	障害のある子どもの知的能力検査・アセスメントを実施している。	<ul style="list-style-type: none"> <li>1 週間程度の短期研修</li> <li>数週間～6 カ月程度の中期研修</li> </ul>
県立病院 子ども 専門官（医師）	障害のある子どもの障害を診断し、能力を評価、確定する。保護者に助言、	1 週間程度の短期研修	子どもの診断や障壁を克服するための支援・指導を行っている。	1 週間程度の短期研修



	支援する、保健機関及び教育機関とつ なぐ。			
NGO Uvgud センター 教員			教育の提供、遅れを取り除く。社会参加の 促進、障害のある子どもの権利保障に努め ている。	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 1 週間程度の短期 研修</li> <li>• 数週間～6 カ月程 度の中期研修</li> </ul>

## 2. 業務経験

### 2-1 ケース数

バヤンゴル区、フブスグル県の支部委員会がそれぞれ扱った障害のある子どものケース数は以下のとおりである。バヤンゴル区では2015年には46件であったのが、2018年には12.8倍の588件に増加している。フブスグル県においても、2018年のケース数は、2015年時点の1.8倍となっている。

表 1-7 支部委員会が扱ったケース数

	2015年	2018年	増加の割合
バヤンゴル区	46件	588件	12.8倍
フブスグル県	265件	479件	1.8倍

### 2-2 関係機関との連携

バヤンゴル区、フブスグル県の支部委員会がそれぞれ連携した機関・内容についての回答結果は、下表に示すとおりである。

バヤンゴル区では、ベースライン調査時には定例相談会が開催されていなかったため、各委員の日常業務に関する連携が多く記載されており、支部委員会としての活動は調査や情報提供、助言に留まっていたことがうかがわれる。一方、エンドライン調査時には、支部委員会の業務に直接関連する連携内容（就学支援、定例相談会の日程調整など）が記載されるようになった。特に以下の点は特筆に値する。

- 区教育課、幼稚園、特別学校、通常学校との連携内容に、就学支援が含まれるようになった。
- 保護者の就労支援に関して、労働課と連携するようになった。
- 子どもの実態把握やアセスメント、ニーズに合った支援計画の作成において、ホローのソーシャルワーカーと連携するようになった。
- 障害の早期発見や定例相談会の開催に関して、家庭医と連携するようになった。

表 1-8 支部委員会が連携した機関・主な連携内容（バヤンゴル区）

連携した組織	ベースライン調査		エンドライン調査	
	主な連携内容	回答数	主な連携内容	回答数
区社会開発課	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 調査を実施・情報を共有</li> <li>• 障害のある子どもの両親と作品を制作</li> </ul>	5/7	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 管理職として勤務</li> <li>• 教育・保健サービスの改善</li> <li>• 支部委員会の書類作成</li> </ul>	4/7
区社会福祉サービス課	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 福祉手当の給付</li> <li>• 調査、福祉、研修に関して協働</li> </ul>	4/7	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 専門官として勤務</li> <li>• 障害者の正確なデータの把握</li> <li>• 社会福祉サービスの提供</li> <li>• 福祉手当の給付</li> </ul>	5/7
区教育課	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 障害のある子どもの就学に関し協働</li> <li>• 子どもの送迎で待機している保護者の作品制作コンテスト開催、研修を実施</li> </ul>	4/7	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 就学支援</li> <li>• 通常学校、幼稚園の教員を対象とした研修開催、情報共有</li> </ul>	4/7

幼稚園	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 障害のある子どもの教育に関し協働</li> <li>• 障害のある子どもを幼稚園に就園</li> <li>• 援助、調査、紹介</li> <li>• 子どもの送迎で待機している保護者の作品制作コンテスト開催、研修を実施</li> </ul>	4/7	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 障害のある子どもの幼稚園就園支援</li> <li>• インクルーシブ教育の提供</li> <li>• 幼稚園園長対象に研修を実施</li> </ul>	6/7
特別学校	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 研修に関して協働</li> <li>• 両親、教員に対し、社会福祉法について情報を提供</li> <li>• 文化祭や美術展の開催、交流、調査の実施、情報提供</li> <li>• 子どもの送迎で待機している保護者の作品制作コンテスト開催、研修を実施</li> </ul>	6/7	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 障害のある子どもの通常学校就学支援</li> <li>• 保護者対象の説明会開催</li> <li>• スポーツ大会開催</li> <li>• 研修実施</li> </ul>	6/7
通常学校	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 障害のある児童生徒のアセスメント</li> <li>• 研修を実施</li> <li>• 文化祭や美術展の開催、交流、調査の実施、情報提供</li> <li>• 子どもの送迎で待機している保護者の作品制作コンテスト開催、研修を実施</li> <li>• 第 113 学校の 2 人の生徒の両親と協働</li> </ul>	6/7	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 障害のある子どもの通常学校就学支援</li> <li>• 障害のある児童生徒との関わり方について研修</li> </ul>	6/7
区労働課	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 障害のある子どもの就労機会について連携</li> <li>• 予算を支援</li> <li>• 子どもの送迎で待機している保護者の作品制作コンテスト開催、研修を実施</li> </ul>	3/7	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 家族への就労支援</li> </ul>	2/7
区保健センター	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 障害のある子どものアセスメント、発達支援を実施</li> <li>• 診察</li> <li>• 情報交換、研修の実施</li> <li>• 家庭保健センターの医師を対象に研修を実施</li> <li>• 障害のある子どもの両親、保護者を対象に研修を実施</li> </ul>	6/7	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 健康診査の実施</li> <li>• 検診</li> <li>• 診断</li> <li>• PT</li> </ul>	4/7
ホローのソーシャルワーカー	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 障害のある子どものスクリーニングに関する調査を実施</li> <li>• 社会福祉支援を提供</li> <li>• 調査、研修、情報提供、意見交換を実施</li> <li>• 家庭保健センターの医師を対象に研修を実施</li> <li>• 障害のある子どもの両親、保護者を対象に研修を実施</li> </ul>	5/7	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 実態把握・アセスメント</li> <li>• ニーズに合ったサービスを計画</li> <li>• 社会参加の促進</li> <li>• 訪問助言活動</li> <li>• 研修</li> </ul>	6/7

家庭保健センター	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 障害のある子どもの情報をカルテ化</li> <li>• 調査を実施</li> <li>• 研修を実施</li> <li>• 家庭保健センターの医師を対象に研修を実施</li> <li>• 障害のある子どもの両親、保護者を対象に研修を実施</li> </ul>	5/7	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 障害の早期発見</li> <li>• 治療</li> <li>• 認定書の作成</li> <li>• 定例相談会の日程調整・情報共有・参加する子どもの選定</li> </ul>	7/7
その他	<ul style="list-style-type: none"> <li>• NGO に対して助言、意見交換</li> </ul>	2/7	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 国立精神病院と子どもの治療について協働</li> <li>• 私立学校や NGO と連携</li> </ul>	2/7

フブスグル県に関しては、ベースライン調査時にも既に定例相談会を開催しており、主に福祉サービス支給の決定及び医療機関へのアクセスに関する課題解決に取り組んでいた。一方、エンドライン調査時には、委員全員が「県教育局と連携している」と回答しており、障害のある子どもの就学先の決定とその支援が取り組むべき課題として認識されるようになった。

表 1-9 支部委員会が連携した機関・主な連携内容（フブスグル県）

連携した組織	ベースライン調査		エンドライン調査	
	主な連携内容	回答数	主な連携内容	回答数
県社会政策局	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 活動報告実施</li> </ul>	3/6	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 研修実施</li> <li>• スポーツ大会開催</li> <li>• 様々な活動開催</li> </ul>	5/7
県社会福祉サービス局	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 200名の「発達の遅れ」に関する問題解決</li> <li>• 200～350名に金銭的支援</li> <li>• 約200名に社会福祉サービス支給決定</li> </ul>	6/6	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 研修実施</li> <li>• 保護者対象研修実施</li> <li>• 障害の認定などの決定</li> <li>• 支援</li> <li>• 意見交換</li> </ul>	7/7
県教育文化芸術局	—	3/6	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 就学先の決定</li> <li>• 研修実施</li> <li>• 保護者対象の研修実施</li> </ul>	7/7
幼稚園	—	1/6	—	2/7
特別学校	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 4名の第29特別学校（聴覚障害対象）編入支援</li> </ul>	3/6	—	2/7
通常学校	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 通常学校に通っている障害のある児童生徒に社会福祉サービス及び教育を提供する決定</li> <li>• 障害のある子どもに交通費及びその他支援を提供</li> <li>• 障害のある子どものための教室設置</li> </ul>	6/6	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 障害のある児童生徒が在籍する通常学校との連携</li> <li>• 保護者対象の研修実施</li> <li>• 新年、子どもの日、障害者の権利の日などのイベント開催</li> <li>• スポーツ大会開催</li> </ul>	6/7
県労働局	—	1/6	—	0/7
県立病院	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 約280名に専門的診察を行う決定</li> <li>• 約200名を専門医が診察</li> </ul>	4/6	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 治療</li> <li>• リハビリテーション</li> <li>• スポーツ大会開催</li> </ul>	5/7
バグ(ソム)のソーシャルワーカー	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 委員会の出した決定に沿って、社会福祉サービス提供</li> </ul>	3/6	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 保護者対象の研修実施</li> <li>• スポーツ大会開催</li> </ul>	2/7

			<ul style="list-style-type: none"> <li>・ イベント開催</li> </ul>	
家庭保健センター	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 障害のある子どもの情報管理</li> <li>・ 約 80 名にリハビリテーション医療を提供</li> <li>・ 情報管理や助言</li> </ul>	4/6	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 障害のある子どもの医療関連情報共有</li> <li>・ スポーツ大会開催</li> </ul>	4/7
その他	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ソムや地方の病院の医師や職員と協力し、障害のある子どもの情報を管理</li> </ul>	2/6	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 赤十字との連携</li> <li>・ World Vision との連携</li> <li>・ Uvgud センターとの連携</li> <li>・ 保護者の会との連携</li> </ul>	3/7

### 2-3 委員会に対する認知度・連携度

委員会に対する認知度・連携度について確認するために、支部委員会に対して、「委員会について知っているか」及び「委員会の活動や役割に関して、あなたが期待することは何か」という質問を行った。回答結果は、図 1-1 及び表 1-10 のとおりである。

ベースライン調査時には、「委員会の活動を活発にして欲しい」「委員会の活動に明確な方向性を持たせて欲しい」という意見や、支部委員会の活動計画、診断基準や支援の基準を示して欲しいという要望が寄せられていた。エンドライン調査時には、これらの要望はみられないことから、委員会及び支部委員会の活動が明確になり、軌道に乗っていることがうかがえる。一方で、啓発活動や保護者を対象とした研修の必要性が認識されるようになっている。

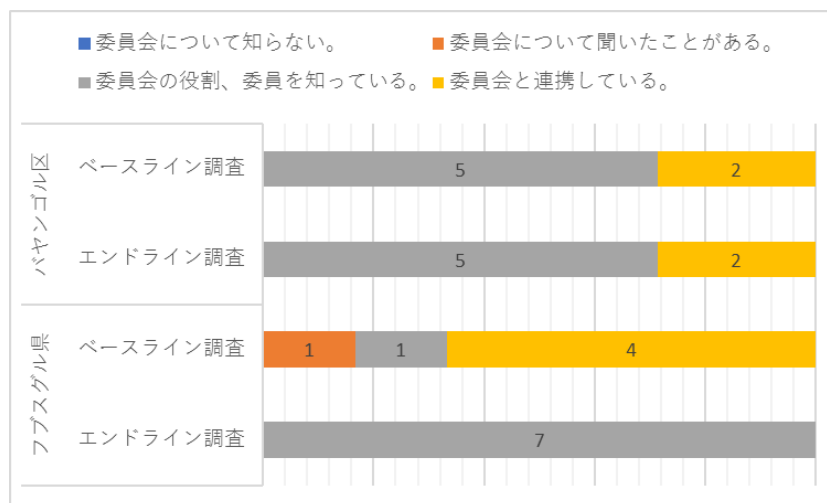


図 1-1 「委員会について知っているか」への回答  
 (バヤンゴル区：ベースライン調査、エンドライン調査 N=7、フブスグル県：ベースライン調査 n=6、エンドライン調査 N=7)



表 1-10 「委員会の活動や役割に関して、あなたが期待することは何か」への回答  
 (バヤンゴル区：ベースライン調査、エンドライン調査 N=7、フブスグル県：ベースライン調査  
 N=6、エンドライン調査 N=7)

ベースライン調査	エンドライン調査
委員会の活動に対する期待	
<ul style="list-style-type: none"> <li>保健・教育・社会保障サービスを提供するシステムを確立して欲しい。</li> <li>委員会の活動を活発にして欲しい。</li> <li>委員会の活動に明確な方向性を持たせて欲しい。</li> <li>調査活動を正確に実施して欲しい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>保健・教育・社会保障サービスの支援体制を確立して欲しい。</li> <li>教育担当の専門官を配置して欲しい。</li> <li>障害の軽減、インクルーシブ教育に留意して欲しい。</li> <li>啓発活動、保護者向けの研修や助言活動を実施して欲しい。</li> </ul>
支部委員会の活動に対する期待	
<ul style="list-style-type: none"> <li>運営方法を継続的に示して欲しい。</li> <li>年間計画を示して欲しい。四半期ごとに計画を紹介して欲しい。</li> <li>業務を調整して欲しい。</li> <li>診断基準を示した規定を明確にして欲しい。</li> <li>福祉や金銭的支援を行う決定基準を明確にして欲しい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>専門医と支部委員会委員の面談会を開催して欲しい。</li> <li>保護者の能力強化や意識向上のために、他機関の参加が必要。</li> </ul>
委員会からの支援への期待	
<ul style="list-style-type: none"> <li>専門的な支援を行って欲しい。</li> <li>委員会の制度を再度、紹介して欲しい。</li> <li>支部委員会の委員と意見交換や助言を行って欲しい。</li> <li>支部委員会の実施する活動について、情報を提供して欲しい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>支部委員会に対して研修や助言を行って欲しい。</li> <li>支部委員会が提出している報告に対してフィードバックが欲しい。</li> <li>支部委員会が開催する啓発活動や研修を支援して欲しい。</li> </ul>
待遇への期待	
<ul style="list-style-type: none"> <li>支部委員会の委員に給与や謝金を支給して欲しい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>追加手当を支給して欲しい。</li> <li>委員を他業務との兼任ではなく専任として欲しい。</li> </ul>

#### 2-4 視察者数

プロジェクト介入前と介入後の支部委員会視察者数を比較した。バヤンゴル区支部委員会の視察者数は 78 人から 21 人に減少している。これは、支部委員会制度が導入された当初、既に活動していたバヤンゴル区支部委員会への視察者が多数いたためである。しかし、それから 3 年経過したエンドライン調査時には、各地の支部委員会の活動が開始したので、視察者は減少している。一方、フブスグル県支部委員会については、2014/2015 年度には視察者は 0 であったが、2017/2018 年度には県外から 38 人、県内のソムから 24 人が視察している。

表 1-11 支部委員会の視察者数

	2014/2015 年度	2017/2018 年度
バヤンゴル区支部委員会	9 区 3 県から 78 人	2 県から 21 人
フブスグル県支部委員会	なし	1 区 1 県から 38 人 各ソムの生涯教育センターから 24 人

### 3. 能力

#### 3-1 「障害」の捉え方

「障害」の捉え方を確認するために、障害について説明してもらった。回答は下表のとおりである。

バヤンゴル区支部委員会については、ベースライン調査、エンドライン調査ともに心身機能や支援の必要性、活動や参加の制限について言及する回答がほとんどであった。ベースライン調査時に「身体や内部機能、その他の障害があることにより、他者と比較し社会生活に参加する機会に制限を受けている」のが障害であると回答した1人だけが、エンドライン調査時に環境上の障壁について言及した。

表 1-12 支部委員会による「障害」の捉え方（バヤンゴル区）(N=7)

ベースライン調査	エンドライン調査
<b>【心身機能に言及：2】</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>他者と比較し、社会的コミュニケーション能力が一定の割合で喪失している。</li> <li>他者とのコミュニケーションにおいて常に困難が生じる。</li> </ul>	<b>【心身機能に言及：2】</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>健康的及び社会的要因により発達機能が異常である。</li> <li>心身機能・構成上の発達の遅れ。</li> </ul>
<b>【支援の必要性に言及：2】</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>他者と比較し社会的コミュニケーションを図る際に常に困難が生じ、特別な学習方法や手段・教材や教具が必要とされる。</li> <li>自立した社会生活を営む上での能力に欠け、他者の支援を受けることで通常的生活や活動に参加することができる。</li> </ul>	/
<b>【活動や参加の制限に言及：3】</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>活動に制限を受けている。</li> <li>活動に制限を受けている状態。</li> <li>身体や内部機能、その他の障害があることにより、他者と比較し社会生活に参加する機会に制限を受けている。</li> </ul>	<b>【活動や参加の制限に言及：3】</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>心身機能・構造が異常であるため、社会参加が制限されている。(2人)</li> <li>社会生活が制限されている。</li> </ul>
/	<b>【環境上の障壁に言及：1】</b> 心身機能・構造が異常であり、それが環境上の他の障壁・困難と重複されたため、他者と等しく社会参加できない、つまり社会参加が制限されている人のこと。
/	<b>【無回答：1】</b>

フブスグル県支部委員会についても、ベースライン調査、エンドライン調査ともに、心身機能や支援の必要性、活動や参加の制限に言及する回答が大半であった。ベースライン調査において環境上の障壁について言及していた1人は、エンドライン調査でも環境上の障壁について言及している。もう1人はベースライン調査時に「先天的及び後天的な病気により、知的、精神的、身体的機能に欠陥がある」ことが障害であると回答しており、プロジェクトの介入期間中に、社会モデルの障害観を持つようになったことがうかがえる。

表 1-13 支部委員会による「障害」の捉え方（フブスグル県）  
 （ベースライン調査 n=6、エンドライン調査 N=7）

ベースライン調査	エンドライン調査
<b>【心身機能に言及：2】</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>先天的及び後天的な病気により、知的、精神的、身体的機能に欠陥がある。</li> <li>健康面が原因で、社会において自分の意思や立場を表現することができない。</li> </ul>	<b>【心身機能に言及：3】</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>発達について特徴のある人々</li> <li>その子の発達上の変更である。障害や遅れとは言いたくない。</li> <li>先天性及び後天性の要因により、心身機能・構成が異常となる。</li> </ul>
<b>【支援の必要性に言及：2】</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>他人の支援を必然的に必要とする。</li> <li>何かしら特別な支援、ニーズを必要とする（特別ニーズ）。</li> </ul>	/
<b>【活動や参加の制限に言及：1】</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>学び、生活し、社会的コミュニケーションに参加する際、限定的状況が発生する。</li> </ul>	<b>【活動や参加の制限に言及：2】</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>身体構造が異常であるため行動が制限されている。</li> <li>心身機能・構造が異常であるため、社会参加や日常生活の中での行動が多少制限されているか困難である。</li> </ul>
<b>【環境上の障壁に言及：1】</b> ある環境において障害に直面している、また身体の一部の発達が遅れているということ。	<b>【環境上の障壁に言及：2】</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>環境上の障壁・困難による行動制限である。</li> <li>障害とは身体構造の異常と、それに加えて環境要因による障壁・困難のことである。</li> </ul>

以上のことから、支部委員会の障害の捉え方は、依然として医療モデルに基づくものであり、社会モデルに転換しているとは言い難い。

### 3-2 知識・理解

バヤンゴル区、フブスグル県の支部委員会の当該分野に関する知識・理解を確認するため、6項目合計 22 問のテスト（それぞれ 4 つの選択肢から回答を選択する形式）を実施した。各項目の正答率（無効回答は不正解として正答率を割り出した）及び各設問の正答数は、表 1-14 及び 1-15 のとおりである。

表 1-14 「障害」に対する知識・理解を問う問題（バヤンゴル区）

No.	質問	ベースライン	エンドライン
<b>1</b>	<b>障害理解</b>	<b>50%</b>	<b>78.57%</b>
1.1	モンゴルにおいて「国連障害者の権利に関する条約」はいつ批准されたか。	2/7	6/7
1.2	国際生活機能分類（ICF）において、障害は、「機能障害」「活動の制限」と何を含む包括的な用語として用いられているか。	5/7	5/7
<b>2</b>	<b>早期発見・介入</b>	<b>46.43%</b>	<b>57.14%</b>
2.1	乳幼児健診の目的は何か。	6/7	5/7
2.2	障害の早期発見の時期はいつか。	2/7	2/7
2.3	障害のある子どもの早期発見・早期支援において最も重要なのは何か。	3/7	3/7
2.4	二次障害とは何か。	2/7	6/7

<b>3</b>	<b>子どもの発達に関する知識</b>	<b>67.86%</b>	<b>67.86%</b>
3.1	新生児の発達評価の指標となり、中枢神経系の成熟と共に数か月で消失していくものは何か。	6/7	6/7
3.2	生後9カ月頃の社会性の発達指標となるのは何か。	5/7	4/7
3.3	乳幼児の運動発達を正しく説明するのはどれか。	3/7	3/7
3.4	乳幼児期の感覚の発達を正しく説明するのはどれか。	5/7	6/7
<b>4</b>	<b>障害分類の理解</b>	<b>53.57%</b>	<b>57.14%</b>
4.1	知的障害を正しく説明するのはどれか。	3/7	2/7
4.2	自閉症スペクトラム障害の診断基準には何が含まれるべきか。	7/7	7/7
4.3	小児脳性まひについて正しく説明するのはどれか。	3/7	3/7
4.4	学習障害について正しく説明するのはどれか。	2/7	4/7
<b>5</b>	<b>個別教育計画（IEP）についての理解</b>	<b>32.14%</b>	<b>42.86%</b>
5.1	個別教育計画（IEP）策定にあたり、障害のある子どもをアセスメントする際、最も重要なものは何か。	3/7	5/7
5.2	個別教育計画（IEP）の目的を正しく説明するのはどれか。	1/7	2/7
5.3	個別教育計画（IEP）を立案するにあたり、適切なものはどれか。	4/7	4/7
5.4	個別教育計画（IEP）を立案するにあたり、Vygotsky（Выготский）の「発達の最近接領域（Zone of Proximal Development）に最も関連のあるものは何か。	1/7	1/7
<b>6</b>	<b>指導法についての理解</b>	<b>46.43%</b>	<b>46.43%</b>
6.1	声を出して表現することが難しい、重度の知的障害のある子どもに対する指導において、最も適切なものはどれか。	5/7	3/7
6.2	自閉症の子どもへの環境の「構造化」に当てはまるものは何か。	1/7	4/7
6.3	文字の読み書きの学習に影響を与える「視覚認知」に最も関連のあるものは何か。	4/7	3/7
6.4	数が分からない子どもへの指導で最も注意すべき点は何か。	3/7	3/7

バヤンゴル区支部委員会に関しては、「障害理解」「早期発見・介入」「障害分類の理解」「個別教育計画（IEP）についての理解」において、ベースライン調査時よりエンドライン調査時の正答率が高くなっている。但し、支部委員会が直接、関与しない教育に関する項目「個別教育計画（IEP）についての理解」及び「指導法についての理解」については、エンドライン調査時においても正答率が50%を切っている。

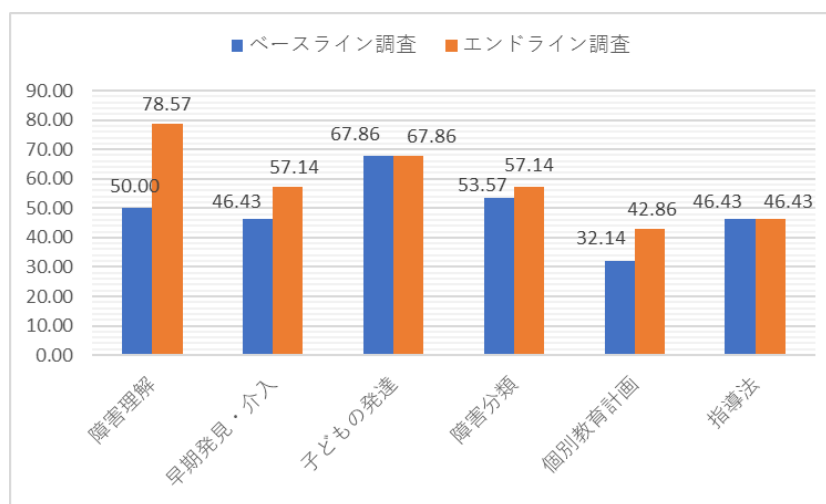


図 1-2 障害に対する知識・理解テスト結果各領域の平均（バヤンゴル区）(N=7)

表 1-15 「障害」に対する知識・理解を問う問題（フブスグル県）

No.	質問	ベースライン	エンドライン
<b>1</b>	<b>障害理解</b>	<b>75.00%</b>	<b>57.14%</b>
1.1	モンゴルにおいて「国連障害者の権利に関する条約」はいつ批准されたか。	4/6	4/7
1.2	国際生活機能分類（ICF）において、障害は、「機能障害」「活動の制限」と何を含む包括的な用語として用いられているか。	5/6	4/7
<b>2</b>	<b>早期発見・介入</b>	<b>45.83%</b>	<b>53.57%</b>
2.1	乳幼児健診の目的は何か。	1/6	7/7
2.2	障害の早期発見の時期はいつか。	4/6	1/7
2.3	障害のある子どもの早期発見・早期支援において最も重要なのは何か。	1/6	5/7
2.4	二次障害とは何か。	5/6	2/7
<b>3</b>	<b>子どもの発達に関する知識</b>	<b>54.17%</b>	<b>67.86%</b>
3.1	新生児の発達評価の指標となり、中枢神経系の成熟と共に数か月で消失していくものは何か。	5/6	6/7
3.2	生後9カ月頃の社会性の発達指標となるのは何か。	1/6	4/7
3.3	乳幼児の運動発達を正しく説明するのはどれか。	5/6	6/7
3.4	乳幼児期の感覚の発達を正しく説明するのはどれか。	2/6	3/7
<b>4</b>	<b>障害分類の理解</b>	<b>45.83%</b>	<b>46.43%</b>
4.1	知的障害を正しく説明するものはどれか。	5/6	2/7
4.2	自閉症スペクトラム障害の診断基準には何が含まれるべきか。	6/6	6/7
4.3	小児脳性まひについて正しく説明するものはどれか。	0/6	2/7
4.4	学習障害について正しく説明するものはどれか。	0/6	3/7
<b>5</b>	<b>個別教育計画（IEP）についての理解</b>	<b>45.83%</b>	<b>50.00%</b>
5.1	個別教育計画（IEP）策定にあたり、障害のある子どもをアセスメントする際、最も重要なのは何か。	5/6	5/7
5.2	個別教育計画（IEP）の目的を正しく説明するものはどれか。	1/6	3/7
5.3	個別教育計画（IEP）を立案するにあたり、適切なものはどれか。	3/6	3/7
5.4	個別教育計画（IEP）を立案するにあたり、Vygotsky（Выготский）の「発達の最近接領域（Zone of Proximal Development）に最も関連のあるものは何か。	2/6	3/7
<b>6</b>	<b>指導法についての理解</b>	<b>29.17%</b>	<b>28.57%</b>
6.1	声を出して表現することが難しい、重度の知的障害のある子どもに対する指導において、最も適切なものはどれか。	2/6	1/7
6.2	自閉症の子どもへの環境の「構造化」に当てはまるものは何か。	0/6	0/7
6.3	文字の読み書きの学習に影響を与える「視覚認知」に最も関連のあるものは何か。	3/6	3/7
6.4	数が分からない子どもへの指導で最も注意すべき点は何か。	2/6	4/7

フブスグル県支部委員会に関しては、「早期発見・介入」「子どもの発達に関する知識」「障害分類の理解」「個別教育計画（IEP）についての理解」で、ベースライン調査時よりもエンドライン調査時の正答率が高くなっている。

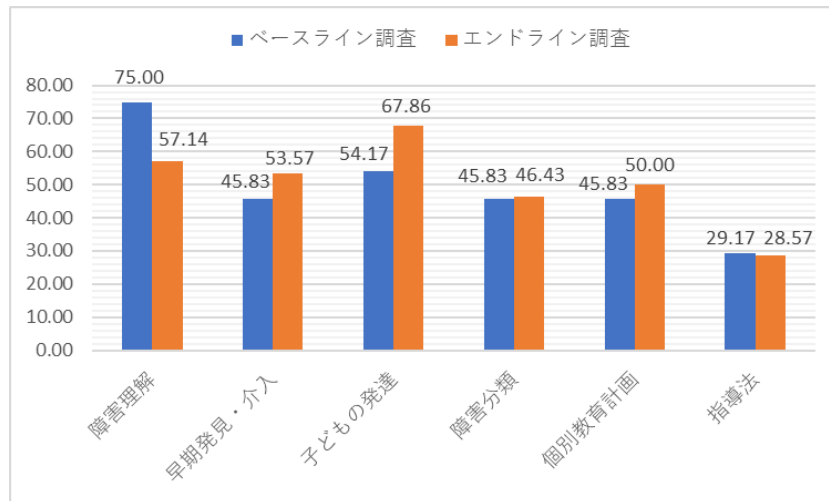


図 1-3 障害に対する知識・理解テスト結果各領域の平均（フブスグル県）

（ベースライン調査 n=6、エンドライン調査 N=7）

### 3-3 発達アセスメント・発達支援計画策定・発達支援実施

支部委員会委員が、発達アセスメント実施・発達支援計画策定・発達支援実施にかかる能力について、どのような経験を積み、どのような認識を持つようになったかをインタビューした。尋ねた事項は、1) 発達アセスメントを行う能力、2) 発達支援計画を策定する能力、3) 発達支援を実施する能力の3つである。

#### バヤンゴル区支部委員会委員 7 名にインタビュー（2018 年 12 月 24 日）

##### (1) 発達アセスメント

プロジェクトでは、モンゴル国立教育大学及び名古屋大学の取り組んでいる田中ビネー知能検査 V のモンゴル版開発のための共同研究に、一部協力している。標準化のための調査に、2 名の委員が 2 回にわたって検査者として参加した。異なる年齢の子どもの検査を担当したので、検査者として自信をつけた。

同様にプロジェクトでは、新版ポーターゲージ早期教育プログラムのモンゴル版の開発も行った。同プログラムの相談員養成研修には、3 名の委員が参加した。3 名のうち 1 名は、研修は受講したものの、相談業務には従事しなかった。2 名は支部委員会による定例相談会で発達の遅れがあると認定された子どもに対し、実際に相談を行っている。

これらのことから、バヤンゴル区支部委員会の発達アセスメントを行う能力が強化されたと考えられる。

##### (2) 発達支援計画策定

発達の遅れや障害のある子どもと保護者に対する定例相談会を月に 2 回開催している。プロジェクトからの助言もあり、以前より保護者の待ち時間が減るなど、効率的な会の運営ができるようになった。

また、支援が困難な子どもの事例を取り上げ、国際生活機能分類（ICF）の概念に基づいたアセスメントを実施し、発達支援計画策定する事例検討会議を実施している。2018 年 12 月現在で 5



回、実施されている。ICF の考え方も理解し、2018 年 10 月にはプロジェクト専門家の支援なしで実施できるようになった。

扱った事例のうち、バヤンゴル区のゲル地区に住んでいた 7 歳の男児については、家族が近隣のチンゲルテイ区に転居したため、バヤンゴル区から支援が得られなくなっていたが、チンゲルテイ区の支部委員会に連絡し、支援が得られるよう調整した。その結果、男児はチンゲルテイ区内の学校に就学、男児の妹も幼稚園に就園できるようになった。モニタリング活動を通し、母親の就業が可能になったことも確認している。

これらのことから、バヤンゴル区支部委員会の発達支援計画を策定する能力が強化されたと考えられる。

### (3) 発達支援実施

発達の遅れや障害のある子どもに対し、高次医療機関への紹介だけではなく、幼稚園就園へ向けた子どもと家族への支援が必要だと判断し、プロジェクトではパイロット地域において支部委員会と共に「親子教室」を開催している。バヤンゴル区では委員会の 2 名が指導者として親子教室の運営に関わった。今後は区保健センターより 1 歳 6 カ月児の健康診査結果の提供を受け、支部委員会が親子教室に参加を促す子どもの選定を行うことになった。

このことから、バヤンゴル区支部委員会の発達支援を実施する能力が強化されたと考えられる。

## フブスグル県支部委員会委員 6 名にインタビュー（2018 年 10 月 31 日）

### (1) 発達アセスメント

田中ビネー知能検査の調査には、3 名の委員が検査者として参加した。同知能検査について理解を深め、検査技術も習得したと認識している。

ポーター早期教育プログラムについては、3 名が相談員養成研修を受講した。相談業務には従事していないものの、フブスグル県において同プログラムを利用した相談業務を行っている 3 カ所の相談員への支援を行っている。委員の 1 名が所属する児童家族発達課が同プログラムによる相談の会場を提供している。

これらのことから、フブスグル県支部委員会の発達アセスメントを行う能力が強化されたと考えられる。

### (2) 発達支援計画策定

発達の遅れや障害のある子どもと保護者に対する定例相談会を月に 2 回開催している。保護者からの相談を受け付ける、県の関係部署への照会などを行っている。

事例検討会議についても、2018 年 10 月現在で 3 回、実施した。同会議では、転校の支援、ウランバートルで診察を受けるための支援にかかる計画を策定した。各事例について担当を決めてフォローアップをすることにしている。

このことから、フブスグル県支部委員会の発達支援計画を策定する能力が強化されたと考えられる。

### (3) 発達支援実施

フブスグル県においても、支部委員会が指導して親子教室を実施している。フブスグル県保健局が1歳6カ月児の健康診査結果をもとに、同プログラムに参加する子どもの選定を実施している。

このことから、フブスグル県支部委員会の発達支援を実施する能力が強化されたと考えられる。

4. 質問票

**Questionnaires for Endline Survey**

**QUESTIONNAIRE: COMMISSION**

JICA Project for Strengthening Teachers' Ability and Reasonable Treatments for Children with Disabilities (START) has been implemented since August 2015. This survey is conducted prior to the termination of the Project (July 2019) to understand the effect of the project in Bayangol district and in Khuvsgul Aimag. Please write your name The information submitted shall not be used for any purpose other than this project. This survey result shall not be released in any way that allows the identification of individuals.  
 \*Person with Disabilities is defined by the Law of Rights of Persons with Disabilities.

Date: .....

Name of respondents: .....

Data collector : .....

**1. General information**

№	Questions	Answer	
1.1	Name of organization		
1.2	Your position?		
1.3	Choose your commission's duty (multiple choice)	<input type="checkbox"/> Professional support concerning the tasks of the local commissions	<input type="checkbox"/> Coordinate with other related organizations
		<input type="checkbox"/> Assessment and support for children with disabilities	<input type="checkbox"/> Monitor the work and morals of the local commission members
		<input type="checkbox"/> Listen to the voice of parents' of children with disabilities	<input type="checkbox"/> Monitor the other organization's activities
		<input type="checkbox"/> Collaboration with National and other Statistics Office concerning registration of children with disabilities	<input type="checkbox"/> Seek support from specialized doctors and teachers for evaluating and making decisions
		<input type="checkbox"/> Investigate whether the decision made by local commissions are implemented, and to solve the problems	<input type="checkbox"/> Ask professional organizations for a detailed assessment of children with disabilities
		<input type="checkbox"/> Report to the government and public about the issues	<input type="checkbox"/> Development of regulation and manual, problem

		related to children with disabilities	solution on issues related to children with disabilities
		<input type="checkbox"/> Go to rural areas when required	<input type="checkbox"/> Send report quarterly to the central commission
1.4	Concerning children with disabilities (CWDs), please describe your roles?		

## 2. Knowledge and skill

No.	Questions	Answer
2.1	Have you received any training to deal with CWDs? (Multiple answers allowed.)	<input type="checkbox"/> No, not at all. <input type="checkbox"/> Yes, I have attended a short course (less than one week). <input type="checkbox"/> Yes, I have attended a mid-term course (a few weeks or less than a half year). <input type="checkbox"/> Yes, I finished a college course related with CWDs.
2.2	<i>(To Secretary of the Local Commission only)</i> How many cases did you deal with CWDs in 2015 and in 2018?	.....cases (2015) .....cases(2018)
2.3	Please explain what " <b>Disability</b> " is by one or two sentences.	

## 3. Relation with other organizations

No.	Questions	Answer	
		Organization	How did you work with
3.1	Concerning with CWDs, have you worked with other organizations since March 2018? (Multiple answers allowed.)	<input type="checkbox"/> Social Development Department of <i>Aimag</i>	
		<input type="checkbox"/> Social Welfare Department of <i>Aimag</i>	
		<input type="checkbox"/> Education and Culture Department of <i>Aimag</i>	
		<input type="checkbox"/> Kindergarten	
		<input type="checkbox"/> Special school	
		<input type="checkbox"/> Regular school	
		<input type="checkbox"/> Labor Department of <i>Aimag</i>	
		<input type="checkbox"/> <i>Aimag</i> Medical Center	
		<input type="checkbox"/> Social worker of bag or khoroo	
		<input type="checkbox"/> Family doctor of bag or khoroo	

		<input type="checkbox"/> Others	
3.2	<i>(If you are a local commission member)</i> Do you know the <b>Commission</b> on Health, Education, and Social Protection for CWDs?	<input type="checkbox"/> No, I do not know about the Commission <input type="checkbox"/> Yes, I have heard about the Commission <input type="checkbox"/> Yes, I know their role and members <input type="checkbox"/> Yes, I have contacted Central Commission	
3.3	<b>(If you answer "yes" to 3.2)</b> What do you expect <b>the Commission</b> ?		
3.4	<i>(To Secretary of the Local Commission only)</i> The number of visitors (e.g., local commission, schools, education department) concerning your school teaching practices for CWDs as a reference	2014/2015	2017/2018

**QUIZ**

I	<b>Understanding of Disability</b>
1	When did Mongolia ratify ‘UN convention of the rights of people with disabilities’? <input type="checkbox"/> In 1985. <input type="checkbox"/> In 2009. <input type="checkbox"/> Did not approve
2	What other terminology used in comprehensively in the International Classification of Functioning Disability and Health (ICF), except ‘impairment’ and ‘activity limitation’? <input type="checkbox"/> Activity limitation <input type="checkbox"/> Economic limitation <input type="checkbox"/> Physical limitation

II	<b>Early identification and intervention</b>
1	Which one relates to the goal of the infant’s identification and intervention? <input type="checkbox"/> To make clear what type of disability <input type="checkbox"/> To recognize whether an infant with a disability and without disability <input type="checkbox"/> To make early identification then to connect other assistance
2	When does early identification and intervention suitable for an infant with a disability? <input type="checkbox"/> 1.5 years old <input type="checkbox"/> 5 years old <input type="checkbox"/> It is different depends on the classification of disability
3	Which one is the most important to early identification and intervention suitable for an infant with a disability? <input type="checkbox"/> Diagnosis in occupational clinic <input type="checkbox"/> Collaboration among health, welfare, education, and public institution <input type="checkbox"/> Activity for providing welfare allowances immediately.
4	What is deuteropathy? <input type="checkbox"/> Inadequate characters of performance and emotion caused by inconvenient nearby communication <input type="checkbox"/> Parents’ are being exerted violence to their CWD child, because of their child is not the same the other regular child. <input type="checkbox"/> Parents’ are put more attention to CWD child, because of they thought that their CWD child could not do anything.



III	<b>Knowledge of child development</b>
1	<p>Which one included in to the new born baby's development index and disappeared naturally at the same time while central nervous system has developed?</p> <p><input type="checkbox"/> New born baby's reflex</p> <p><input type="checkbox"/> Gagging and whimpering</p> <p><input type="checkbox"/> Smiling</p>
2	<p>Which statement to be included in to the socialization indexes of baby who is 9 months?</p> <p><input type="checkbox"/> Understanding the person's talk and feels together who communicate with him/her</p> <p><input type="checkbox"/> Imitating the movement of the person who communicate with him/her</p> <p><input type="checkbox"/> Focusing on the same objects through to eye contact and gestures by the person who communicate with him/her</p>
3	<p>Which statement is right explanation on infant's mobility development?</p> <p><input type="checkbox"/> Development of the small muscle movement related to cognitive development and tight the objects by hand</p> <p><input type="checkbox"/> Development of the big muscle movement is not different for each infant, where as small muscles movement is different for each infant.</p> <p><input type="checkbox"/> If there is an intellectual disability, development of the big muscles will be left behind nor small muscles.</p>
4	<p>Which skill is the right explanation of infant's sensory development?</p> <p><input type="checkbox"/> Could watch everything the same as adult after one month of the birth.</p> <p><input type="checkbox"/> Infant will study to follow to see something, after infant can withstand his head</p> <p><input type="checkbox"/> Since fetus has received sounds while he/she in womb, thus hearing had developed before the birth.</p>

IV	<b>Understanding about classification of Disabilities</b>
1	<p>Which statement is the right explanation of intellectual disability?</p> <p><input type="checkbox"/> It means that intellectual activity which has been developing in an ordinary way declines due to the lack of social interaction.</p> <p><input type="checkbox"/> Intellectual ability is much lower compared to the peers and every day physical movement becomes limited.</p> <p><input type="checkbox"/> Intellectual disability can happen during child development stage and even during adolescence.</p>
2	<p>Which standard includes diagnosing autism spectrum disorder?</p> <p><input type="checkbox"/> Difficulty in communicating with others</p> <p><input type="checkbox"/> Speech limitation</p> <p><input type="checkbox"/> Intellectual limitation</p>
3	<p>Which one is the right explanation on child with Cerebral palsy?</p> <p><input type="checkbox"/> Child with a cerebral palsy has no problem with the eye sight, but one can have a problem with sight cognition</p> <p><input type="checkbox"/> Among children with a cerebral palsy, some children with phonetic difficulty are intellectual disabled</p> <p><input type="checkbox"/> If children with a cerebral palsy go under rehabilitation therapy it is possible that one can have no disorder in the development of movement.</p>
4	<p>Which statement is the right explanation of learning disability?</p> <p><input type="checkbox"/> It can be subordinated with an intellectual disability</p> <p><input type="checkbox"/> It can be a hearing problem</p> <p><input type="checkbox"/> It happens due to the loss of cognitive balance</p>

V	<b>Understanding about Individual Education Plan “IEP”</b>
1	Which one is the most important thing that assessing CWDs in order to develop IEP <input type="checkbox"/> Take development and intellectual tests using professional facilities <input type="checkbox"/> Have a disability assessment and diagnosis in professional hospitals <input type="checkbox"/> Study children from many ways such as making an observation using father/mother’s information and children’s mood
2	Which one contains the goal of IEP? <input type="checkbox"/> Improve the quality of IEP adapted to every child’s necessity <input type="checkbox"/> Improve the quality of group training adapted to every child’s necessity <input type="checkbox"/> Improve the quality of home training adapted to every child’s necessity
3	Which task is more suitable for developing IEP? <input type="checkbox"/> Set a long term goal as an ability to catch up with class content <input type="checkbox"/> Plan to achieve a long term goal ensuring short term goal <input type="checkbox"/> Make the item that a father/mother most wanted long term goal
4	Which concept is related to ‘Zone of Proximal Development’ by L.C.Vigotsky, which should be considered when we develop IEP? <input type="checkbox"/> Define a long term goal <input type="checkbox"/> Define a short term goal <input type="checkbox"/> Decide a teaching method

VI	<b>Understanding about teaching methodology</b>
1	Which concept is more suitable for teaching to children with severe intellectual disability who are hardly expressing him or herself by voice? <input type="checkbox"/> Teach phonology <input type="checkbox"/> Teach names using flashcards <input type="checkbox"/> Use expressive methods other than speech
2	Which concept relates to providing suitable environment for children with autism? <input type="checkbox"/> Demonstrate with photos which the program and activity order can be understood easily <input type="checkbox"/> Teach self-service habit, action and gesture among the peers <input type="checkbox"/> To create a free environment where making children do their favorite things
3	Which one relates to reading and writing skill for visual sensation? <input type="checkbox"/> Recognize upper and lower case letters <input type="checkbox"/> Recognize colors <input type="checkbox"/> Recognize shapes
4	When you teach children who do not know numbers, what do you need to consider mostly? <input type="checkbox"/> Let children count loudly after showing authentic items <input type="checkbox"/> Let children copy after writing the numbers on the notebook <input type="checkbox"/> Observe whether children have a general knowledge about the numbers

## II. 医療関係者

本章では、バヤンゴル区及びフブスグル県の医療関係者について、2016年3～4月（バヤンゴル区）、2017年1月（フブスグル県）に実施したベースライン調査結果と2018年10月に実施したエンドライン調査結果を比較する。比較した項目は以下のとおりである。

表 2-1 比較項目

大項目	小項目	方法
基本情報	• 業務に関連する事項の学習経験	質問紙
業務経験	• 母子健康手帳の活用方法 • 健康診査への従事 • 関係機関との連携 • 委員会・支部委員会に対する認知度・連携度 • 視察者数	質問紙
能力	• 「障害」の捉え方 • 知識・理解（テスト）	質問紙
	• （トレーナーのみ*）アクション・プランの進捗状況	フォーカス・グループ・インタビュー 質問紙

\*プロジェクトでは母子健康手帳の活用を促進するために医療関係者を対象とした研修を実施し、バヤンゴル区6名とフブスグル県8名をトレーナーとして養成した。

### 1. 基本情報

#### 1-1 対象

対象とした医療関係者の内訳は以下のとおりである。

表 2-2 バヤンゴル区の医療関係者

ベースライン調査		エンドライン調査	
		区保健センター 子ども青少年管理総括マネージャー	1
区保健センター 医師	1	区保健センター 医師	1
家庭保健センター センター長	6	家庭保健センター センター長	16
家庭保健センター 医師	17	家庭保健センター 医師	8
家庭保健センター 看護師	1		
無回答	1		
合計	26	合計	26

表 2-3 フブスグル県の医療関係者

ベースライン調査		エンドライン調査	
県保健局 障害児担当	1	県保健局 部長	1
家庭保健センター 医師	3	県保健局 リプロダクティブ・ヘルス担当	1
家庭保健センター 公衆衛生担当	2	県保健局 子ども担当	1
ソム域病院 院長	5	県総合病院 医師	1
ソム保健センター センター長	11	ソム域病院 院長	3

ソム保健センター 医師	3	ソム保健センター センター長	13
ソム保健センター 看護師	3	ソム保健センター 医師	3
合計	28	合計	23

## 1-2 業務に関連する事項の学習経験

バヤンゴル区、フブスグル県の医療関係者である回答者の業務に関連する事項の学習経験は、図 2-1 に示すとおりである。ベースライン調査時よりもエンドライン調査時の方が、学習経験があるという回答が多い。

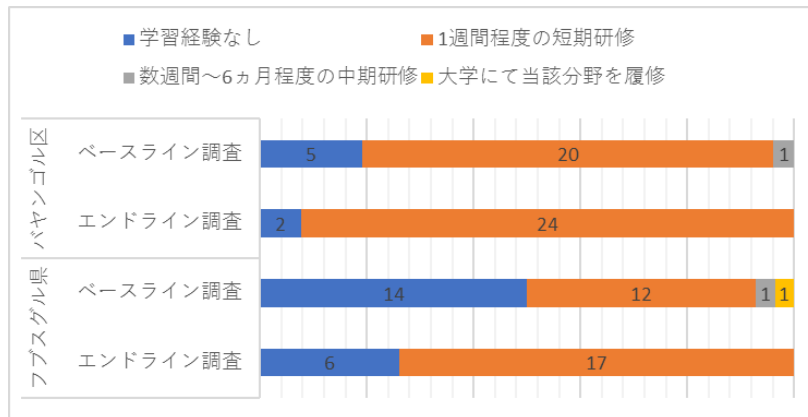


図 2-1 学習経験 (バヤンゴル区：ベースライン調査 n=26、エンドライン調査 n=26、フブスグル県：ベースライン調査：n=28、エンドライン調査 n=23)

## 2. 業務経験

### 2-1 母子健康手帳の活用方法・知識

モンゴルでは、乳幼児期の発達や健康について管理するために、母子健康手帳が導入されている。母子健康手帳が適切に活用されれば、発達の遅れや障害の早期発見につながることから、プロジェクトでは母子健康手帳の活用促進を行ってきた。母子健康手帳をどのような場面で活用しているか尋ねた。結果は表 2-4、2-5 のとおりである。

バヤンゴル区、フブスグル県ともに、様々な場面で母子健康手帳は活用されており、発達の遅れや障害の早期発見につながれると考えられる。

表 2-4 母子健康手帳活用状況 (バヤンゴル区) (n=26)

活用場面	ベースライン調査*		エンドライン調査	
	「活用している」の回答数	%	「活用している」の回答数	%
保護者への助言	26	100%	26	100%
母親の知識を確認する	26	100%	26	100%
予防接種の有無を確認する	26	100%	26	100%
子どもの発達が年齢の成長過程に沿って順調かどうか確認する	26	100%	26	100%
子どもの発育状況(身長・体重)、発達状況を調べる	26	100%	26	100%

保護者が青いページ（発達の状況を記載するページ）を記入しているかどうか確認する			26	100%
その他			6	23%

\* ベースライン調査時には母子健康手帳への介入を予定していなかったため、調査項目に含まれていない。

表 2-5 母子健康手帳活用状況（フブスグル県）

（ベースライン調査 n=28、エンドライン調査 n=23）

活用場面	ベースライン調査		エンドライン調査	
	「活用している」の回答数	%	「活用している」の回答数	%
保護者への助言	25	89.29%	22	96.65%
母親の知識を確認する	26	92.86%	19	82.61%
予防接種の有無を確認する	28	100%	22	96.65%
子どもの発達が年齢の成長過程に沿って順調かどうか確認する	28	100%	21	91.3%
子どもの発育状況（身長・体重）、発達状況を調べる	27	96.43%	21	91.3%
保護者が青いページ（発達の状況を記載するページ）を記入しているかどうか確認する	27	96.43%	19	82.65%
その他	8	28.57%	5	21.74%

## 2-2 健康診査への従事

プロジェクトの働きかけにより、バヤンゴル区では、2017年5月に1歳6か月児健康診査を開始した。発達の遅れや障害を早期に発見し、適切な支援につなげていくことが目的の一つである。その後、エンドライン調査（2018年10月）までに、毎月1回、合計17回実施している。フブスグル県では2017年10月に開始し、エンドライン調査までに合計12回実施している。エンドライン調査では、同健康診査へ従事したことがあるか、また従事したことがある場合、その回数について質問した。回答は下表のとおりである。

バヤンゴル区では回答者の90%以上、フブスグル県では70%以上が1歳6か月児健康診査に従事していることが分かる。

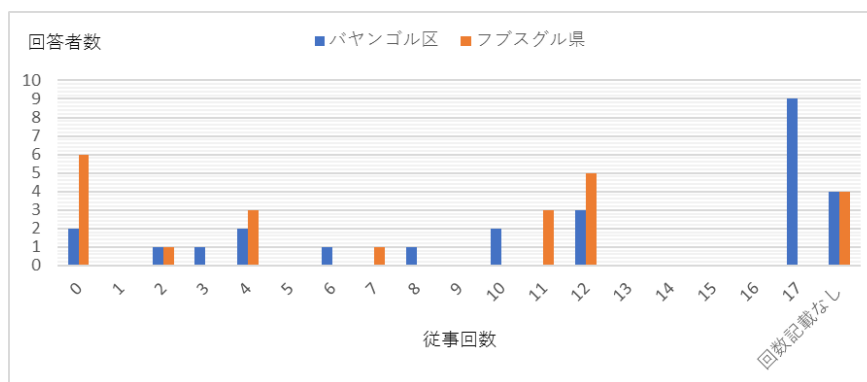


図 2-2 健康診査への従事 (n=49)

## 2-3 関係機関との連携

連携した機関・内容についての回答結果は、下表に示すとおりである。

バヤンゴル区に関しては、ベースライン調査時には「幼稚園と連携している」と回答したのは1人であったが、エンドライン調査時には10人にまで増加した。通常学校と連携している医療関係者はベースライン調査時にはいなかったが、エンドライン調査時には8人が「通常学校と連携している」と回答している。主な連携内容についても「1歳6カ月児健康診査」や「支部委員会の定例相談会開催」「親子教室の開催」など、プロジェクトで導入した活動内容が挙げられた。

表 2-6 連携した機関・内容（バヤンゴル区）

連携した組織	ベースライン調査		エンドライン調査	
	主な連携内容	回答数	主な連携内容	回答数
区社会開発課	<ul style="list-style-type: none"> <li>調査の実施・障害児統計の作成</li> <li>研修・情報共有</li> <li>登録</li> <li>介護サービスの提供</li> </ul>	6/26	<ul style="list-style-type: none"> <li>1歳6カ月児健康診査</li> <li>研修・情報共有</li> <li>問題解決</li> </ul>	13/26
区社会福祉サービス課	<ul style="list-style-type: none"> <li>障害のある子どもに関する調査</li> <li>保護者向けの研修</li> <li>課題解決</li> <li>社会福祉サービスの提供</li> </ul>	6/26	<ul style="list-style-type: none"> <li>支部委員会の定例相談会開催</li> <li>親子教室の開催</li> <li>研修・情報共有</li> <li>社会福祉サービス提供</li> <li>生活支援</li> </ul>	20/26
区教育課	<ul style="list-style-type: none"> <li>研修・情報共有</li> <li>サービスへのアクセス改善</li> </ul>	1/26	<ul style="list-style-type: none"> <li>就学支援</li> </ul>	2/26
幼稚園	<ul style="list-style-type: none"> <li>就園支援</li> </ul>	1/26	<ul style="list-style-type: none"> <li>健康診断の実施</li> </ul>	10/26
特別学校	<ul style="list-style-type: none"> <li>健康診断の実施</li> </ul>	4/26	—	4/26
通常学校	—	0/26	<ul style="list-style-type: none"> <li>健康診断の実施</li> </ul>	8/26
区労働課	—	0/26	—	3/26
ホローのソーシャルワーカー	<ul style="list-style-type: none"> <li>障害の早期発見</li> <li>家庭訪問・診察</li> <li>登録</li> <li>研修・情報共有</li> <li>調査</li> </ul>	13/26	<ul style="list-style-type: none"> <li>社会福祉サービス提供</li> <li>介護施設の利用</li> <li>問題解決</li> </ul>	19/26
その他	<ul style="list-style-type: none"> <li>NGOと連携してビタミン剤を提供</li> <li>私立病院と協力して診察</li> </ul>	6/26	<ul style="list-style-type: none"> <li>NGOと連携</li> </ul>	1/26

一方、フブスグル県の医療関係者の回答からは、ベースライン調査時と比較してエンドライン調査時には、県社会政策局と協力活動の計画策定や県教育文化芸術局と研修実施に取り組むようになったことがうかがえる。また、幼稚園との連携により発達支援・就園支援が、通常学校との連携により就学支援・学習環境の整備が促進されるようになった。



表 2-7 連携した機関・内容（フブスグル県）

連携した組織	ベースライン調査		エンドライン調査	
	主な連携内容	回答数	主な連携内容	回答数
県社会政策局	<ul style="list-style-type: none"> <li>障害のある子どもに関する調査実施</li> <li>情報共有</li> </ul>	9/28	<ul style="list-style-type: none"> <li>協力活動の計画策定</li> <li>研修・情報共有</li> <li>社会福祉サービス提供</li> </ul>	8/23
県社会福祉サービス局	<ul style="list-style-type: none"> <li>社会福祉サービス提供</li> <li>キャンペーン実施</li> </ul>	16/28	<ul style="list-style-type: none"> <li>社会福祉サービス提供</li> <li>助言</li> </ul>	10/23
県教育文化芸術局	<ul style="list-style-type: none"> <li>教育的リハビリテーションサービス提供</li> <li>障害のある子どもに関する調査実施</li> <li>ソム文化センターと協力し、チャリティーコンサート実施</li> </ul>	5/28	<ul style="list-style-type: none"> <li>発達支援</li> <li>研修（国際生活機能分類（ICF）に関する研修を含む）実施</li> </ul>	4/23
幼稚園	<ul style="list-style-type: none"> <li>就園支援</li> <li>チャリティーコンサート開催</li> </ul>	9/28	<ul style="list-style-type: none"> <li>健康診断</li> <li>発達支援・就園支援</li> <li>保護者への助言</li> <li>研修実施・情報共有</li> </ul>	13/23
特別学校	—	2/28	<ul style="list-style-type: none"> <li>研修</li> </ul>	1/23
通常学校	<ul style="list-style-type: none"> <li>健康診断</li> <li>事故や性病の予防に関するゲーム実施</li> <li>体力増強のための機材・機器提供</li> </ul>	20/28	<ul style="list-style-type: none"> <li>健康診断</li> <li>障害の早期発見</li> <li>就学支援・学習環境整備</li> <li>研修実施</li> </ul>	6/23
県労働局	<ul style="list-style-type: none"> <li>助言</li> </ul>	3/28	—	2/23
バグ、(ソム) のソーシャルワーカー	<ul style="list-style-type: none"> <li>証明書発行</li> <li>セミナー開催</li> <li>広報</li> <li>調査を行い「看護師 1 名 障害児 1 名」運動実施</li> </ul>	13/28	<ul style="list-style-type: none"> <li>社会福祉サービス提供</li> <li>世帯の生活状況調査</li> <li>障害のある子どもの発見</li> <li>問題解決</li> </ul>	7/23
その他	<ul style="list-style-type: none"> <li>保健局との連携</li> <li>World Vision との連携</li> </ul>	3/28	<ul style="list-style-type: none"> <li>保健局との連携</li> </ul>	1/23

#### 2-4 委員会・支部委員会に対する認知度・連携度

委員会・支部委員会に対する認知度・連携度について確認するために、「委員会について知っているか」「支部委員会について知っているか」という質問を行った。回答結果は、図 2-3 及び図 2-4 のとおりである。ベースライン調査時と比較し、エンドライン調査時にはバヤンゴル区、フブスグル県ともに、委員会や支部委員会のことを知っている、連携しているという回答が増加している。

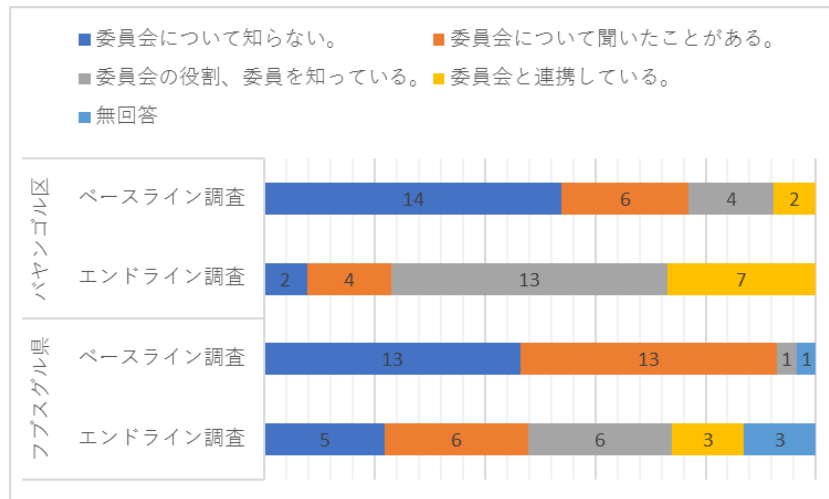


図 2-3 「委員会について知っているか」への回答（バヤンゴル区：ベースライン調査 n=26、エンドライン調査 n=26、フブスグル県：ベースライン調査 n=28、エンドライン調査 n=23）

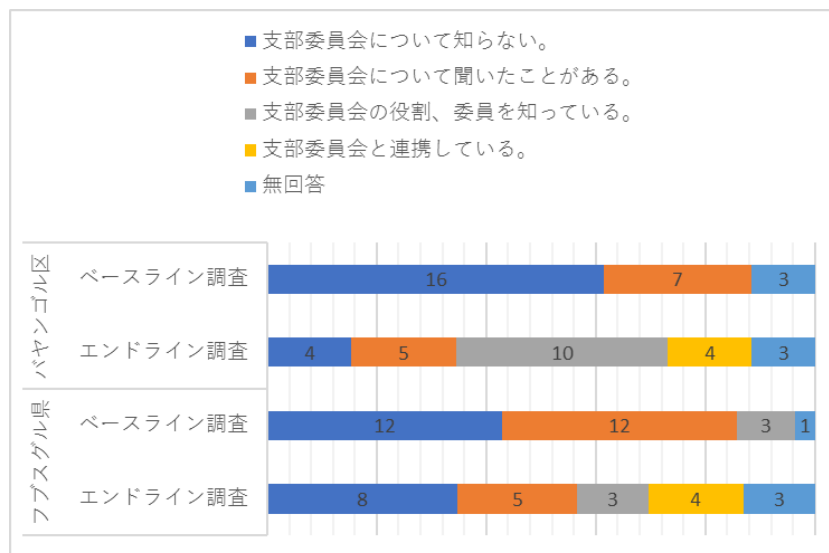


図 2-4 「支部委員会について知っているか」への回答（バヤンゴル区：ベースライン調査 n=26、エンドライン調査 n=26、フブスグル県：ベースライン調査 n=28、エンドライン調査 n=23）

「委員会の活動や役割に関して、あなたが期待することは何か」「支部委員会の活動や役割に対して、あなたが期待することは何か」という質問に対する回答は下表のとおりである。

表 2-8 「委員会の活動や役割に関して、あなたが期待することは何か」への回答  
 (ベースライン調査 n=54、エンドライン調査 n=49)

ベースライン調査	エンドライン調査
委員会の活動方針に対する期待	
<ul style="list-style-type: none"> <li>• すべての子どもの生活レベル・治療に注意を払い、健康な状態に戻すことに注意すべきである。</li> <li>• 障害のある子どもの集団への参加を支援する必要がある。</li> <li>• 障害のある子どもの社会性に着目すべきである。</li> <li>• 障害のある子どもの学習力や自立性を高める必要がある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 社会福祉サービスを提供して欲しい。(3)</li> <li>• 障害のある子どもへの支援・援助活動を活性化させて欲しい。</li> <li>• 障害のある子どもの能力開発を目指して欲しい。</li> <li>• 社会的な問題の解決に努めて欲しい。</li> </ul>
委員会の現在の活動に対する期待	
<ul style="list-style-type: none"> <li>• 活動についての情報を提供して欲しい。(4)</li> <li>• 障害のある子どもの健康診断について、情報を提供して欲しい。(2)</li> <li>• 障害のある子どもの保護者を支援する必要がある。(2)</li> <li>• 県保健局との連携を強化する必要がある。</li> <li>• 研修を実施して欲しい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 定例相談会を効率的かつ適切に行うことに留意して欲しい(準備、当事者や保護者への配慮、タイムマネジメント、問題解決)。(6)</li> <li>• 保護者への助言・アドバイスを行って欲しい。保護者の参加を促して欲しい。(3)</li> <li>• 支部委員会に対して指導・助言を提供して欲しい。(2)</li> <li>• 必要となる専門家養成に努めて欲しい。</li> <li>• 関連する規定を示して欲しい。</li> </ul>
新たな活動への要望・その他	
<ul style="list-style-type: none"> <li>• 遠隔地でも活動を実施して欲しい。</li> <li>• 障害のある子ども、特に中枢性麻痺の子どものリハビリテーションを地方で実施して欲しい。</li> <li>• ソムにおいて心理士が助言を行い、センターを設置して欲しい。</li> <li>• 社会福祉手当の金額を増額して欲しい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 特別幼稚園を設置して欲しい。</li> </ul>

\*カッコ内は回答者数

表 2-9 「支部委員会の活動や役割に関して、あなたが期待することは何か」への回答  
 (ベースライン調査 n=54、エンドライン調査 n=49)

ベースライン調査	エンドライン調査
支部委員会の活動方針に対する期待	
<ul style="list-style-type: none"> <li>• 障害のある子どもに保健・教育・社会福祉を提供する。</li> <li>• すべての障害のある子どもを支援して欲しい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 社会福祉サービスを提供して欲しい。</li> <li>• 社会的な問題の解決に努めて欲しい。</li> <li>• 障害のある子どもに対する医療サービスの改善に努めて欲しい。</li> </ul>
支部委員会の現在の活動に対する期待	

<ul style="list-style-type: none"> <li>• 良く分からないので情報を提供して欲しい。(3)</li> <li>• 障害のある子どもの保健・教育・社会福祉の総合的問題を解決する職員を県庁職員として雇用して欲しい。</li> <li>• ソムの子どもに対し、助言・支援を行い、問題を解決して欲しい。</li> <li>• 連携を強化して欲しい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 定例相談会の適切な開催（時間のマネジメント、保護者への助言、問題の解決）に努めて欲しい。</li> <li>• 子どもの発達支援計画を策定し、実施状況をモニタリングして欲しい。</li> <li>• 保護者への助言・アドバイス、情報共有を行って欲しい。</li> <li>• 地域で活動報告を行って欲しい。</li> <li>• 支部委員会の委員として長期間、一貫して努めて欲しい。</li> <li>• 障害のある子どもに関する十分な知識を持って欲しい。</li> <li>• 家庭保健センターとの連携を強化して欲しい。</li> </ul>
新たな活動への要望・その他	
	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 障害のある子どもの介護に携わる人材、専門医の人数を増やして欲しい。</li> </ul>

\*カッコ内は回答者数

## 2-6 視察者数

プロジェクト介入前と介入後の視察者数を比較した。バヤンゴル区、フブスグル県ともに、プロジェクト介入後の方が視察者数は増加している。

表 2-10 視察者数

	2014/2015 年度	2017/2018 年度	増加の割合
バヤンゴル区医療関係者	18 人	35 人	1.94 倍
フブスグル県医療関係者	60 人	185 人	3.08 倍

## 3. 能力

### 3-1 「障害」の捉え方

「障害」の捉え方を確認するために、障害について説明してもらった。回答は「心身機能に言及」「支援の必要性に言及」「活動や参加の制限に言及」「環境上の障壁に言及」に分類した。

バヤンゴル区については、ベースライン調査時には回答者の 77% が心身機能にのみ言及しているのに対し、エンドライン調査時には 50% まで減少し、活動や参加の制限に言及する人が増えている。また、1 人が環境上の障壁について言及している。

表 2-11 医療関係者の「障害」の捉え方（バヤンゴル区）(n=26)

ベースライン調査		エンドライン調査	
心身機能に言及	20	心身機能に言及	13
支援の必要性に言及	2	支援の必要性に言及	2
活動や参加の制限に言及	2	活動や参加の制限に言及	6
環境上の障壁に言及	0	環境上の障壁に言及	1
その他*	2	無回答	4

\*「その他」の回答は、「分からない」「普通の人とは別のグループに当てはまる」などであった。

一方、フブスグル県の回答者の障害観は、ベースライン調査時から一貫して医療モデルに基づいていることが分かる。

表 2-12 医療関係者の「障害」の捉え方（フブスグル県）  
 （ベースライン調査 n=28、エンドライン調査 n=23）

ベースライン調査		エンドライン調査	
機能に言及	16	機能に言及	17
支援に言及	0	支援に言及	0
活動や参加の制限に言及	6	活動や参加の制限に言及	0
環境上の障壁に言及	0	環境上の障壁に言及	0
無回答	6	無回答	6

### 3-2 知識・理解

バヤンゴル区、フブスグル県の医療関係者の「障害」に対する知識・理解を確認するため、6項目合計 22 問のテスト（それぞれ 4 つの選択肢から回答を選択する形式）を実施した。各設問の正答数（無効回答は不正解として扱った）は、表 2-13、2-14 のとおりである。

表 2-13 「障害」に対する知識・理解を問う問題（バヤンゴル区）

No.	質問	ベースライン	エンドライン
<b>1</b>	<b>障害理解</b>	<b>30.77%</b>	<b>28.85%</b>
1.1	モンゴルにおいて「国連障害者の権利に関する条約」はいつ批准されたか。	4/26	9/26
1.2	国際生活機能分類（ICF）において、障害は、「機能障害」「活動の制限」と何を含む包括的な用語として用いられているか。	12/26	6/26
<b>2</b>	<b>早期発見・介入</b>	<b>53.85%</b>	<b>46.15%</b>
2.1	乳幼児健診の目的は何か。	17/26	20/26
2.2	障害の早期発見の時期はいつか。	13/26	3/26
2.3	障害のある子どもの早期発見・早期支援において最も重要なのは何か。	12/26	17/26
2.4	二次障害とは何か。	14/26	8/26
<b>3</b>	<b>子どもの発達に関する知識</b>	<b>48.08%</b>	<b>51.92%</b>
3.1	新生児の発達評価の指標となり、中枢神経系の成熟と共に数か月で消失していくものは何か。	21/26	19/26
3.2	生後 9 カ月頃の社会性の発達指標となるのは何か。	6/26	6/26
3.3	乳幼児の運動発達を正しく説明するのはどれか。	12/26	12/26
3.4	乳幼児期の感覚の発達を正しく説明するのはどれか。	11/26	17/26
<b>4</b>	<b>障害分類の理解</b>	<b>42.31%</b>	<b>28.85%</b>
4.1	知的障害を正しく説明するのはどれか。	17/26	7/26
4.2	自閉症スペクトラム障害の診断基準には何が含まれるべきか。	12/26	16/26
4.3	小児脳性まひについて正しく説明するのはどれか。	8/26	5/26
4.4	学習障害について正しく説明するのはどれか。	7/26	2/26
<b>5</b>	<b>個別教育計画（IEP）についての理解</b>	<b>29.81%</b>	<b>25.96%</b>
5.1	個別教育計画（IEP）策定にあたり、障害のある子どもをアセスメントする際、最も重要なのは何か。	7/26	5/26
5.2	個別教育計画（IEP）の目的を正しく説明するのはどれか。	7/26	7/26
5.3	個別教育計画（IEP）を立案するにあたり、適切なものはどれか。	12/26	11/26

5.4	個別教育計画（IEP）を立案するにあたり、Vygotsky（Выготский）の「発達の最近接領域（Zone of Proximal Development）に最も関連のあるものは何か。	5/26	4/26
<b>6</b>	<b>指導法についての理解</b>	<b>27.88%</b>	<b>27.88%</b>
6.1	声を出して表現することが難しい、重度の知的障害のある子どもに対する指導において、最も適切なものはどれか。	10/26	5/26
6.2	自閉症の子どもへの環境の「構造化」に当てはまるものは何か。	5/26	1/26
6.3	文字の読み書きの学習に影響を与える「視覚認知」に最も関連のあるものは何か。	11/26	14/26
6.4	数が分からない子どもへの指導で最も注意すべき点は何か。	3/26	9/26

バヤンゴル区に関しては「子どもの発達に関する知識」の平均正答率がベースライン調査時よりわずかに上昇したが、他の項目についてはほぼ変わらない、もしくは低下した。

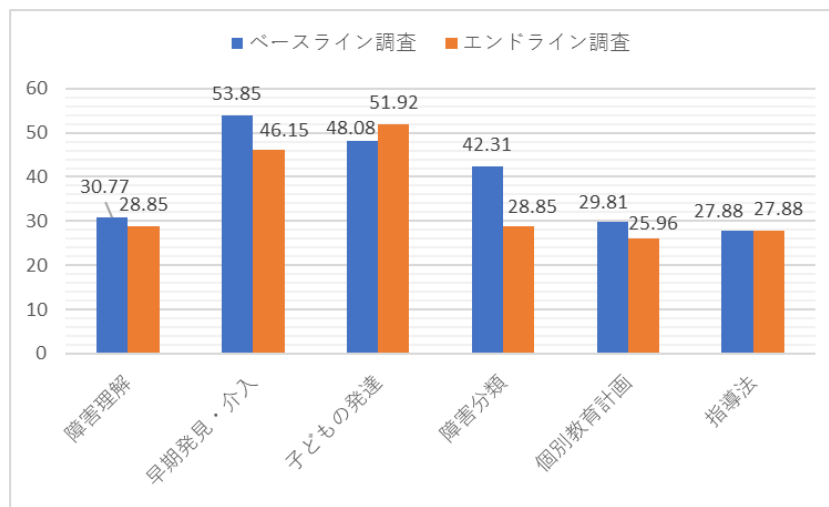


図 2-5 障害に対する知識・理解テスト結果各領域の平均 (バヤンゴル区) (n=26)

表 2-14 「障害」に対する知識・理解を問う問題 (フブスグル県)

No.	質問	ベースライン	エンドライン
<b>1</b>	<b>障害理解</b>	<b>39.29%</b>	<b>21.74%</b>
1.1	モンゴルにおいて「国連障害者の権利に関する条約」はいつ批准されたか。	10/28	4/23
1.2	国際生活機能分類（ICF）において、障害は、「機能障害」「活動の制限」と何を含む包括的な用語として用いられているか。	12/28	6/23
<b>2</b>	<b>早期発見・介入</b>	<b>50.00%</b>	<b>41.30%</b>
2.1	乳幼児健診の目的は何か。	19/28	14/23
2.2	障害の早期発見の時期はいつか。	14/28	0/23
2.3	障害のある子どもの早期発見・早期支援において最も重要なものは何か。	12/28	14/23
2.4	二次障害とは何か。	11/28	10/23
<b>3</b>	<b>子どもの発達に関する知識</b>	<b>49.11%</b>	<b>57.61%</b>
3.1	新生児の発達評価の指標となり、中枢神経系の成熟と共に数か月で消失していくものは何か。	18/28	18/23
3.2	生後9か月頃の社会性の発達指標となるのは何か。	8/28	6/23
3.3	乳幼児の運動発達を正しく説明するのはどれか。	16/28	16/23



3.4	乳幼児期の感覚の発達を正しく説明するのはどれか。	13/28	13/23
4	<b>障害分類の理解</b>	<b>19.64%</b>	<b>30.43%</b>
4.1	知的障害を正しく説明するものはどれか。	5/28	7/23
4.2	自閉症スペクトラム障害の診断基準には何が含まれるべきか。	8/28	16/23
4.3	小児脳性まひについて正しく説明するものはどれか。	6/28	1/23
4.4	学習障害について正しく説明するものはどれか。	3/28	4/23
5	<b>個別教育計画（IEP）についての理解</b>	<b>26.79%</b>	<b>28.26%</b>
5.1	個別教育計画（IEP）策定にあたり、障害のある子どもをアセスメントする際、最も重要なものは何か。	11/28	8/23
5.2	個別教育計画（IEP）の目的を正しく説明するものはどれか。	5/28	4/23
5.3	個別教育計画（IEP）を立案するにあたり、適切なものはどれか。	9/28	12/23
5.4	個別教育計画（IEP）を立案するにあたり、Vygotsky（Выготский）の「発達の最近接領域（Zone of Proximal Development）に最も関連のあるものは何か。	5/28	2/23
6	<b>指導法についての理解</b>	<b>25.89%</b>	<b>21.74%</b>
6.1	声を出して表現することが難しい、重度の知的障害のある子どもに対する指導において、最も適切なものはどれか。	12/28	6/23
6.2	自閉症の子どもへの環境の「構造化」に当てはまるものは何か。	5/28	3/23
6.3	文字の読み書きの学習に影響を与える「視覚認知」に最も関連のあるものは何か。	5/28	7/23
6.4	数が分からない子どもへの指導で最も注意すべき点は何か。	7/28	4/23

フブスグル県に関しては「子どもの発達に関する知識」及び「障害分類の理解」の正答率が約10%、増加した。

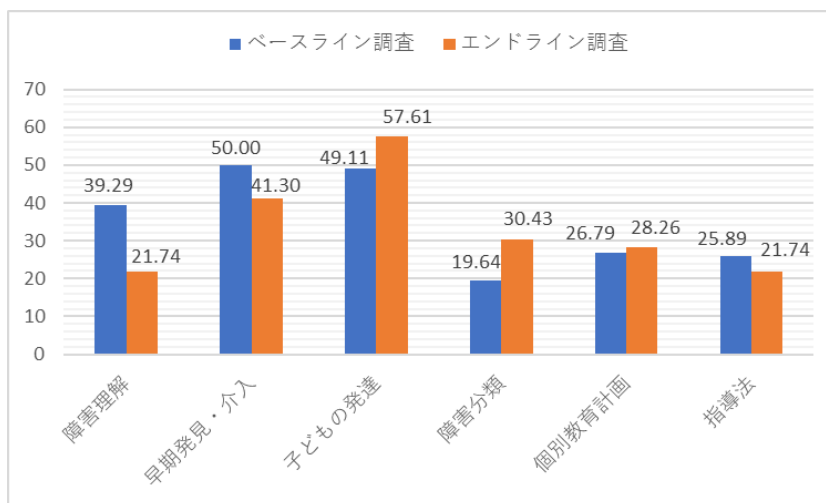


図 2-6 障害に対する知識・理解テスト結果各領域の平均（フブスグル県）  
 （ベースライン調査 n=28、エンドライン調査 n=23）

#### 4.（トレーナーのみ）アクション・プランの進捗状況

プロジェクトでは、障害の早期発見を促すよう、母子健康手帳の活用促進に努めてきた。パイロット地域でその中核となるトレーナーを養成するため、2018年2月、3日間の研修を実施した。研修受講者はバヤンゴル区とフブスグル県で指導的な役割を担う医療関係者、計14名である。エ

ンドライン調査に際して、トレーナー養成研修の最終日に作成したアクション・プランの進捗状況を尋ねた。

#### 4-1 バヤンゴル区医療関係者3名へのインタビュー（2018年11月2日）

研修受講者が作成したアクション・プランとその進捗状況は下記のとおり。

表 2-15 アクション・プランとその進捗状況（バヤンゴル区）(n=3)

アクション・プラン	進捗状況
1. バヤンゴル区で行われている1歳6カ月児健康診査を質的に向上	回答者1と2：計画を策定し、スケジュール通りに研修を行った。 回答者3：2018年9月までの平均健診受診率は84%である。
2. トレーナーらが家庭保健センターを対象に地域ごとの研修を開催（すべての医療機関を14地域に分ける）	回答者1と2：自分が勤務するセンターで研修を1回実施した。 回答者3：5月に勤務を開始した医師22名を対象に健康診査についての研修を実施した。
3. 母子健康手帳の活用、記入の仕方について家庭保健センターを対象に調査を実施し、助言活動を実施	回答者1と2：4月及び8月に行ったモニタリングに基づいて、発生した課題への助言を行った。 回答者3：入院中の子ども50名について、手帳の活用、記入状況を確認した。
4. 母子健康手帳記入を改善（家庭保健センター間で母子健康手帳記入の改善をテーマにコンテストを行う、研修案策定、医療機関内の研修を行うなど）	回答者1と2：四半期ごとにセンター内で研修を実施している。 回答者3：2018年12月に母子健康手帳活用についてモニタリングを行ったうえで研修を実施する予定。
5. 母子健康手帳の両親が記入する部分の活用の仕方について、毎週、各自の担当部署で研修を実施、更に統合研修や広告などを実施（研修トレーナーらがファシリテーターを務める）	回答者1：11月に研修を実施し、12月に報告書をまとめる。 回答者2：11月に研修を実施し、12月上旬に報告書をまとめる。 回答者3：N/A
6. 1歳6カ月児健康診査の進捗検討、審議会や共有会を開催	回答者1と2：11月に健康診査の進捗を確認し、院内での検討会及び共有会を開催する。 回答者3：健康診査の進捗状況を毎月モニターし、区保健センターに報告している。
7. 健康診査で発見された発達の遅れのある子どもをどのように親子教室の対象とするかについて紹介するイベントを開催	回答者1と2：健康診査で発見された子ども1人が第8ホローで実施されている親子教室に参加している。 回答者3：N/A

研修受講者に研修受講後、どのような変化があったと認識しているか尋ねた。「同僚に助言できるようになった」など、回答者3名の回答からは、研修で学んだことを職場で実践しようとする様子がうかがえる。

表 2-16 母子健康手帳トレーナー養成研修を受講しての変化（バヤンゴル区）(n=3)

質問	回答
1. 研修を受講して、あなた自身が仕事をする上で、どんな変化があったか。	回答者 1 と 2 : 知識や能力が向上し、評価及び検討できるようになった。 回答者 3 : 同じセンターに勤務する同僚に助言できるようになった。
2. あなたご自身、同僚は今後、どのような知識・技術を伸ばす必要があると考えるか。	<b>回答者自身について</b> 回答者 1 と 2 : 自分自身について更なる能力向上を目指すと共に、他者にとって良い手本となるため努力する。 回答者 3 : N/A
	<b>同僚について</b> 回答者 1 : 母子健康手帳について定期的にレビューできるようになって欲しい。 回答者 2 : 母子健康手帳を正確に理解して欲しい。 回答者 3 : 同僚に対して総合的な内容の研修を実施したい。

4-2 フブスグル県医療関係者 5 名へのインタビュー・質問紙調査（2018 年 11 月 1～2 日）

インタビュー及び質問紙調査の対象者の回答から、積極的に母子健康手帳の活用促進に取り組んでいることが明らかとなった。ローカルテレビ、新聞などのマスメディアを利用し、保護者に対する啓発活動も積極的に実施している。

表 2-17 アクション・プランとその進捗状況（フブスグル県）(n=5)

アクション・プラン		進捗
1. 研修事後計画を作成	2018 年 3 月 15 日	<ul style="list-style-type: none"> <li>研修計画が 2018 年 3 月 29 日付保健局長令で承認された。研修の内容は 1 歳 6 カ月児健康診査の実施方法、評価の仕方、保護者の母子健康手帳への記入方法である。</li> <li>8 人に加え、県立総合病院、家庭保健センターの職員がトレーナーとなって、医療関係者への研修を 3～7 月に実施した。</li> <li>年末に報告会を開催する。</li> </ul>
2. 上記計画を年間予定表に記載	2018 年 3 月 15 日	記載済。
3. 母子健康手帳活用に関する調査実施 <ul style="list-style-type: none"> <li>Enkh Uils 家庭保健センター</li> <li>Ikh-Uul ソム統合病院</li> <li>Renchinlkhumbe ソム医療センター</li> <li>Murun 市統合病院</li> </ul>	2018 年 3 月 に開始 季節ごとに 実施	計画された 4 カ所に留まらず、すべてのソムで調査を実施した。
4. 母子健康手帳活用のための医療機関や保護者対象の研修を実施	1 年間	23 ソムで保健関係者職員 350 人、保護者 400 人を対象に研修を実施した。
5. マスメディアを通じての啓発 <ul style="list-style-type: none"> <li>毎週 1 回、テレビで連続放送</li> <li>月 1 回、新聞掲載</li> </ul>	2018 年 3 月 に開始 1 年間	<ul style="list-style-type: none"> <li>毎月 1 回、ローカルテレビ局 (Murun Lkha, Dalai-eej) の 2 局で放映した。</li> <li>保健局のニューズレターを月末に無料で配布している。</li> <li>Dalai-eej 新聞に記事を掲載した。</li> </ul>

6. 各自の医療機関内で研修を実施（例：各課において毎週金曜日、保護者を対象に1時間の情報提供）	定期的に実施	<ul style="list-style-type: none"> <li>県立総合病院では小児科医と産科医に対して研修を実施した。</li> <li>毎週火曜日、妊婦を対象に、母子健康手帳の正確な記入方法を指導した（合計105人）。</li> <li>乳幼児科では、毎週金曜日に情報提供を実施した（合計28回、250人）。</li> <li>毎月1回、栄養指導を行った。</li> <li>第5幼稚園を巡回指導し、診断した。</li> <li>合計9ソムで450人を対象に研修を実施した。</li> </ul>
7. 発達段階を示したポスターの掲示	—	11月30日に作成するポスターについて協議する。

研修受講者に研修受講後、どのような変化があったと認識しているか尋ねた。上記アクション・プランの進捗状況と重複する回答は省いて記載する。発達の遅れの早期発見についての知識も深まっている様子である。8名がチームとして機能しようとしていることが分かる。

表 2-18 母子健康手帳トレーナー養成研修を受講しての変化（フブスグル県）(n=5)

質問	回答
1. 研修を受講して、あなた自身が仕事をする上で、どんな変化があったか。	<ul style="list-style-type: none"> <li>養成研修を受ける以前は、母子健康手帳の活用の仕方が分からなかった。研修を受けてよく分かった。家庭医に対して指導している。</li> <li>トレーナー同士、チームとなった。</li> <li>毎月の支部委員会定例相談会に出て、保護者が待っている時間を活用して研修を実施した。</li> <li>8人のトレーナーが様々な機会に発表するようにしている。</li> <li>保護者や医師をほめるようにしている。</li> <li>早期発見、障害の予防についての知識が深まった。</li> </ul>
2. あなたご自身、同僚は今後、どのような知識・技術を伸ばす必要があると考えるか。	<p><u>回答者自身について</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>保護者から様々な助言を求められるので、障害児とのかかわり方を学びたいと考えている。</li> <li>調査結果をまとめる方法や健康診査の監督方法について知識や技能を伸ばしたい。</li> </ul> <p><u>同僚について</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>ソムの医療従事者はよく異動してしまうので、新人に対して、健康診査のやり方を教える必要がある。</li> <li>保護者に対しては、子育てに対する認識を高めてもらいたい。</li> </ul>

5. 質問票

**Questionnaires for Endline Survey**

**QUESTIONNAIRE: MEDICAL INSTITUTIONS**

JICA Project for Strengthening Teachers' Ability and Reasonable Treatments for Children with Disabilities (START) has been implemented since August 2015. This survey is conducted prior to the termination of the Project (July 2019) to understand the effect of the project in Bayangol district and in Khuvsgul Aimag. Please write your name. The information submitted shall not be used for any purpose other than this project. This survey result shall not be released in any way that allows the identification of individuals.  
 \*Person with Disabilities is defined by the Law of Rights of Persons with Disabilities.

Date: .....

Name of respondents: .....

Data collector: .....

**1. General information**

No	Questions	Answer
1.1	Name of organization	
1.2	Your position?	
1.3	Concerning with children with disabilities (CWDs), please describe your roles?	

**2. Knowledge and skill**

No.	Questions	Answer
2.1	Have you received any training to deal with CWDs? (Multiple answers allowed.)	<input type="checkbox"/> No, not at all. <input type="checkbox"/> Yes, I have attended a short course (less than one week). <input type="checkbox"/> Yes, I have attended a mid-term course (a few weeks or less than a half year). <input type="checkbox"/> Yes, I finished a college course related with CWDs.
2.2	How many cases did you deal with CWDs last month?	.....cases
2.3	Please explain what " <b>Disability</b> " is by one or two sentences.	
2.4	How do you use Mother Child Health Handbook? (Multiple answers allowed.)	<input type="checkbox"/> Give advice to parents by using Mother Child Health Handbook <input type="checkbox"/> Check mothers' knowledge <input type="checkbox"/> Know the child had some vaccinations or not <input type="checkbox"/> Check whether the process of child's growth is well or not <input type="checkbox"/> Check the child's growth (height and weight) and development <input type="checkbox"/> Check whether parents fill in the blue page

		<input type="checkbox"/> Others
2.5	Have you conducted a 18-month child health check-up?	<input type="checkbox"/> Yes If yes, how many times? _____ times <input type="checkbox"/> No

### 3. Relation with other organizations

No.	Questions	Answer	
		Organization	How did you work with
3.1	Concerning with CWDs, have you worked with other organizations since March 2018? (Multiple answers allowed.)	<input type="checkbox"/> Social Development Department of <i>Aimag</i>	
		<input type="checkbox"/> Social Welfare Department of <i>Aimag</i>	
		<input type="checkbox"/> Education and Culture Department of <i>Aimag</i>	
		<input type="checkbox"/> Kindergarten	
		<input type="checkbox"/> Special school	
		<input type="checkbox"/> Regular school	
		<input type="checkbox"/> Labor Department of <i>Aimag</i>	
		<input type="checkbox"/> <i>Aimag</i> Medical Center	
		<input type="checkbox"/> Social worker of bag or khoroo	
		<input type="checkbox"/> Family doctor of bag or khoroo	
		<input type="checkbox"/> Others	
3.2	Do you know <b>the Commission</b> on Health, Education, and Social Protection for CWDs?	<input type="checkbox"/> No, I don't know about Central Commission <input type="checkbox"/> Yes, I have heard about Central Commission <input type="checkbox"/> Yes, I know their role and members <input type="checkbox"/> Yes, I have contacted Central Commission	
3.3	(If you answer "yes" to 3.2) What do you expect <b>the Commission</b> ?		
3.4	Do you know <b>Local Commission</b> on Health, Education, and Social Protection for CWDs?	<input type="checkbox"/> No, I don't know about Local Commission <input type="checkbox"/> Yes, I have heard about Local Commission <input type="checkbox"/> Yes, I know their role and members <input type="checkbox"/> Yes, I have contacted Local Commission	



3.5	(If you answer "yes" to 3.4.) What do you expect <b>Local commission</b> ?		
3.6	The number of visitors (e.g. schools and education department) concerning your school teaching practices for CWDs as a reference	2014/2015	2017/2018

### QUIZ

I	Understanding of Disability
1	When did Mongolia ratify 'UN convention of the rights of people with disabilities'? <input type="checkbox"/> In 1985. <input type="checkbox"/> In 2009. <input type="checkbox"/> Did not approve <input type="checkbox"/> Don't know
2	What other terminology used in comprehensively in the International Classification of Functioning Disability and Health (ICF), except 'impairment' and 'activity limitation'? <input type="checkbox"/> Activity limitation <input type="checkbox"/> Economic limitation <input type="checkbox"/> Physical limitation <input type="checkbox"/> Don't know

II	Early identification and intervention
1	Which one relates to the goal of infant's identification and intervention? <input type="checkbox"/> To make clear what type of disability <input type="checkbox"/> To recognize whether infant with disability and without disability <input type="checkbox"/> To make early identification then to connect other assistance <input type="checkbox"/> Don't know
2	When does early identification and intervention suitable for infant with disability? <input type="checkbox"/> 1.5 years old <input type="checkbox"/> 5 years old <input type="checkbox"/> It is different depends on classification of disability <input type="checkbox"/> Don't know
3	Which one is the most important to early identification and intervention suitable for infant with disability? <input type="checkbox"/> Diagnosis in occupational clinic <input type="checkbox"/> Collaboration among health, welfare, education and public institution <input type="checkbox"/> Activity for providing welfare allowances immediately. <input type="checkbox"/> Don't know
4	What is the deuteropathy? <input type="checkbox"/> Inadequate characters of performance and emotion caused by inconvenient nearby communication <input type="checkbox"/> Parents' are being exerted violence to their CWD child, because of their child is not the same the

	<p>other regular child.</p> <p><input type="checkbox"/> Parents' are put more attention to CWD child, because of they thought that their CWD child couldn't do anything.</p> <p><input type="checkbox"/> Don't know</p>
--	---

III	Knowledge of child development
1	<p>Which one included in to the new born baby's development index and disappeared naturally at the same time while central nervous system has developed?</p> <p><input type="checkbox"/> New born baby's reflex</p> <p><input type="checkbox"/> Gaggling and whimpering</p> <p><input type="checkbox"/> Smiling</p> <p><input type="checkbox"/> Don't know</p>
2	<p>Which statement to be included in to the socialization indexes of baby who is 9 months?</p> <p><input type="checkbox"/> Understanding the person's talk and feels together who communicate with him/her</p> <p><input type="checkbox"/> Imitating the movement of the person who communicate with him/her</p> <p><input type="checkbox"/> Focusing on the same objects through to eye contact and gestures by the person who communicate with him/her</p> <p><input type="checkbox"/> Don't know</p>
3	<p>Which statement is right explanation on infant's mobility development?</p> <p><input type="checkbox"/> Development of the small muscles movement related to cognitive development and tight the objects by hand</p> <p><input type="checkbox"/> Development of the big muscles movement is not different for each infant, where as small muscles movement is different for each infant.</p> <p><input type="checkbox"/> If there is an intellectual disability, development of the big muscles will be left behind nor small muscles.</p> <p><input type="checkbox"/> Don't know</p>
4	<p>Which skill is the right explanation of infant's sensory development?</p> <p><input type="checkbox"/> Could watch everything the same as adult after one month of the birth.</p> <p><input type="checkbox"/> Infant will study to follow to see something, after infant can withstand his head</p> <p><input type="checkbox"/> Since fetus has received sounds while he/she in womb, thus hearing had developed before the birth.</p> <p><input type="checkbox"/> Don't know</p>

IV	Understanding about classification of Disabilities
1	<p>Which statement is the right explanation of intellectual disability?</p> <p><input type="checkbox"/> It means that intellectual activity which has been developing in an ordinary way declines due to the lack of social interaction.</p> <p><input type="checkbox"/> Intellectual ability is much lower compared to the peers and every day physical movement becomes limited.</p> <p><input type="checkbox"/> Intellectual disability can happen during child development stage and even during adolescence.</p> <p><input type="checkbox"/> Don't know</p>
2	<p>Which standard includes diagnosing autism spectrum disorder?</p> <p><input type="checkbox"/> Difficulty in communicating with others</p> <p><input type="checkbox"/> Speech limitation</p> <p><input type="checkbox"/> Intellectual limitation</p>

	<input type="checkbox"/> Don't know
3	Which one is the right explanation on child with Cerebral palsy? <input type="checkbox"/> Child with a cerebral palsy has no problem with the eye sight, but one can have a problem with sight cognition <input type="checkbox"/> Among children with a cerebral palsy, some children with phonetic difficulty are intellectual disabled <input type="checkbox"/> If children with a cerebral palsy go under rehabilitation therapy it's possible that one can have no disorder in the development of movement. <input type="checkbox"/> Don't know
4	Which statement is the right explanation of learning disability? <input type="checkbox"/> It can be subordinated with an intellectual disability <input type="checkbox"/> It can be a hearing problem <input type="checkbox"/> It happens due to the loss of cognitive balance <input type="checkbox"/> Don't know

V	Understanding about Individual Education Plan "IEP"
1	Which one is the most important thing that assessing CWDs in order to develop IEP <input type="checkbox"/> Take development and intellectual tests using professional facilities <input type="checkbox"/> Have a disability assessment and diagnosis in a professional hospitals <input type="checkbox"/> Study children from many ways such as making an observation using father/mother's information and children's mood <input type="checkbox"/> Don't know
2	Which one contains the goal of IEP? <input type="checkbox"/> Improve the quality of IEP adapted to every child's necessity <input type="checkbox"/> Improve the quality of group training adapted to every child's necessity <input type="checkbox"/> Improve the quality of home training adapted to every child's necessity <input type="checkbox"/> Do not know
3	Which task is more suitable for developing IEP? <input type="checkbox"/> Set a long term goal as an ability to catch up with class content <input type="checkbox"/> Plan to achieve a long term goal ensuring short term goal <input type="checkbox"/> Make the item that a father/mother most wanted long term goal <input type="checkbox"/> Do not know
4	Which concept is related to 'Zone of Proximal Development' by L.C.Vigotsky, which should be considered when we develop IEP? <input type="checkbox"/> Define a long term goal <input type="checkbox"/> Define a short term goal <input type="checkbox"/> Decide a teaching method <input type="checkbox"/> Do not know

VI	Understanding about teaching methodology
1	Which concept is more suitable for teaching to children with severe intellectual disability who are hardly expressing him or herself by voice? <input type="checkbox"/> Teach phonology <input type="checkbox"/> Teach names using flashcards <input type="checkbox"/> Use expressive methods other than speech

	<input type="checkbox"/> Do not know
2	Which concept relates to providing a suitable environment for children with autism? <input type="checkbox"/> Demonstrate with photos which the program and activity order can be understood easily <input type="checkbox"/> Teach self-service habit, action, and gesture among the peers <input type="checkbox"/> To create a free environment where making children do their favorite things <input type="checkbox"/> Do not know
3	Which one relates to reading and writing skill for visual sensation? <input type="checkbox"/> Recognize upper and lower case letters <input type="checkbox"/> Recognize colors <input type="checkbox"/> Recognize shapes <input type="checkbox"/> Do not know
4	When you teach children who do not know numbers, what do you need to consider mostly? <input type="checkbox"/> Let children count loudly after showing authentic items <input type="checkbox"/> Let children copy after writing the numbers on the notebook <input type="checkbox"/> Observe whether children have a general knowledge about the numbers <input type="checkbox"/> Do not know

### Ⅲ.パイロット特別学校・通常学校及びパイロット地域の非パイロット校

本章では、パイロット特別学校、パイロット通常学校及びパイロット地域の非パイロット校（通常学校）の管理職に対して2016年3～4月（ウランバートル市、バヤンゴル区）、2017年1月（フブスグル県）に実施したベースライン調査結果と、2018年10～11月に実施したエンドライン調査結果を比較する。比較した項目は以下のとおりである。

表 3-1 比較項目

大項目	小項目	方法
基本情報	<ul style="list-style-type: none"> <li>児童生徒数・教員数・シフト数</li> <li>在籍する障害のある児童生徒数</li> <li>他校へ転出・退学した障害のある児童生徒数</li> </ul>	質問紙
合理的配慮の提供	<ul style="list-style-type: none"> <li>個別教育計画作成</li> <li>評価方法</li> <li>教員への追加手当</li> <li>学校環境</li> <li>受け入れ姿勢</li> <li>関係機関との連携</li> <li>委員会・支部委員会に対する認知度・連携度</li> <li>視察者数</li> </ul>	質問紙

#### 1. 基本情報

##### 1-1 対象校の児童生徒数・教員数・シフト数

対象校の児童生徒数・教員数・シフト数は下表のとおりである。

ベースライン調査時とエンドライン調査時を比較し、児童生徒数は、パイロット特別学校で約1.13倍（1,136人から1,283人）、パイロット通常学校で約1.16倍（13,700人から15,855人）になっている。バヤンゴル区の非パイロット校でも約1.22倍（26,832人から32,642人）に増加している。一方、フブスグル県の非パイロット校の児童生徒数の増加率は約1.03倍（22,129人から22,924人）であり、ベースライン調査時とエンドライン調査時ではほぼ変わらない。

表 3-2 対象校の基本情報（パイロット特別学校・通常学校）

学校名	ベースライン調査				エンドライン調査				
	児童生徒数		教員数	シフト数	児童生徒数		教員数	シフト数	
	男子	女子			男子	女子			
特別学校	第25特別学校	131	92	50	2	136	84	56	2
	第55特別学校	188	268	81	2	306	203	94	2
	第63特別学校	115	99	37	1	132	118	47	1
	第70特別学校	130	113	32	1	186	118	44	2
ウランバートル	第16学校	678	634	66	2	805	783	70	2
	第26学校	315	255	34	1	311	299	30	2
	第28学校	1,090	1,150	108	2	1,266	1,290	117	2
	第34学校	418	427	51	1	489	486	52	2
	第35学校	782	773	75	2	1,597	758	50	2
	第79学校	1,109	1,196	127	1	1,126	1,183	114	2
	第111学校	640	584	46	3	745	714	51	3

	第 113 学校	736	781	70	2	834	886	69	2
フ ブ ス	Titem 第 2 学校	693	746	71	2	687	917	74	2
	Ireedui21 世紀統 合学校	348	345	53	1	366	313	48	2
	合計	7,373	7,463	901		8,986	8,152	916	

表 3-3 対象校の基本情報（バヤンゴル区の非パイロット校）

	学校名	ベースライン調査				エンドライン調査			
		児童生徒数		教員数	シフト 数	児童生徒数		教員数	シフト 数
		男子	女子			男子	女子		
1	第 13 学校	1,066	1,088	101	3	1,238	1,244	109	2
2	第 20 学校	1,120	1,264	86	2	1,564	1,432	108	2
3	第 38 学校	478	580	56	2	1,256	1,185	86	2
4	第 40 学校	1,020	1,053	91	1	1,178	1,225	104	2
5	第 47 学校	818	786	74	2	814	840	78	2
6	第 51 学校	817	868	75	3	858	887	79	2
7	第 73 学校	410	400	46	3	671	654	61	2
8	第 93 学校	501	589	38	2	703	701	48	2
9	Erdmiin Undraa 統 合学校	1,954	2,087	183	2	2,392	2,250	203	不明
10	Erdemiin Urguu 統 合学校	1,661	1,693	133	2	2,118	2,193	196	3
11	Oyunii Undraa 統 合学校	1,480	1,720	126	2	2,149	2,118	152	2
12	Mongeni 統 合学校	759	800	88	2	680	713	85	2
13	Setgemj 統 合学校	986	834	76	2	786	793	64	3
	合計	13,070	13,762	1,173		16,407	16,235	1,373	

表 3-4 対象校の基本情報（フブスグル県の非パイロット校）

	学校名	ベースライン調査				エンドライン調査			
		児童生徒数		教員数	シフト 数	児童生徒数		教員数	シフト 数
		男子	女子			男子	女子		
1	Avarguud	189	135	31	2	237	140	36	2
2	AviyasYIII	267	280	41	2	312	308	44	2
3	Alag-Erdene	220	197	31	2	236	207	31	2
4	Arbulag	261	231	31	2	241	241	31	2
5	Bayanzurkh	399	367	48	2	443	385	45	1
6	Burentogtokh	270	233	39	2	262	247	40	不明
7	Burenkhaan	178	178	14	2	20	20	3	2
8	Galt	457	487	48	不明	452	482	62	2
9	Sod-Erdem	272	308	38	1	421	402	52	1.5
10	Delger Murun	1,055	1,228	108	2	1,144	1,366	109	1.5
11	Jargalant		1,026	59	2	630	570	58	不明
12	Zurkh	不明	不明	5	1	60	32	5	1
13	Ikh-Uul	435	448	51	1.5	413	454	51	1
14	Gurvan-Erdene	652	667	65	2	728	704	74	不明
15	Mogoi	29	39	5	2		69	5	2
16	Rashaant	362	371	41	2	342	352	44	不明
17	Renchinlkhumbe	357	417	50	2	403	408	48	2
18	Tarialan		1,130	59	2	592	585	60	2

19	Tosontsengel	396	424	40	1.5	415	382	43	2
20	Tumurbulag	310	346	36	1	329	332	34	2
21	Tunel	279	269	30	小2 中1		564	31	2
22	Ulaan-Uul	400	454	54	2	408	393	54	2
23	Khankh	278	265	39	2	287	279	37	不明
24	Tsagaannuur	239	239	30	1		494	33	2
25	Tsagaan-Uul	552	565	51	2、3	554	525	53	不明
26	Tsagaan-Uur	220	288	30	2	228	277	30	2
27	Chandmani-Undur	266	268	34	2	289	277	32	2
28	Shine-Ider	260	252	30	1	234	300	34	2
29	Erdmiin Dalai	930	976	89	2	1,031	906	89	2
30	Erdenebulgan	254	254	33	2	275	237	35	2
	合計		22,129	1,260			22,924	1,303	

## 1-2 在籍する障害のある児童・生徒数

調査対象校に在籍する障害のある児童生徒数（学校による登録）は下表のとおりである。

表 3-5 在籍する障害のある児童生徒数（パイロット特別学校・通常学校）

学校名	ベースライン調査				エンドライン調査				
	障害児数		福祉 手当受 給人数*	IEP 作成 人数	障害児数		福祉 手当受 給人数*	IEP 作 成人数 **	
	男子	女子			男子	女子			
特別 学校	第 25 特別学校	131	92	24	24	136	84	0	24
	第 55 特別学校	188	268	0	2	306	203	0	212
	第 63 特別学校	115	99	0	23	132	118	118	35
	第 70 特別学校	130	113	0	27	186	118	44	50
ウ ラ ン バ ー ト ル	第 16 学校	13	5	0	0	7	6	0	2
	第 26 学校	4	2	0	1	15	13	10	1
	第 28 学校	10	4	0	0	7	8	0	5
	第 34 学校		14	0	0	9	6	0	12
	第 35 学校	0	0	0	0	2	0	0	1
	第 79 学校	3	0	0	0	2	0	0	3
	第 111 学校		6	0	0	12	4	0	3
フ ブ ス グ ル	第 113 学校	6	9	6	0	4	5	1	0
	Titem 第 2 学校	11	12	9	1	14	18	0	7
	Ireedui21 世紀 統合学校	15	15	14	0	16	14	16	24
	合計		1,265	53	78	848	597	189	379

\*福祉手当を受給していることを学校側が把握している人数。

\*\*エンドライン調査後、各学校に再度、問い合わせを行い、精査した数（2018年12月1日現在）。

パイロット特別学校・通常学校に在籍する障害のある児童生徒数は下図のとおり増加している。パイロット通常学校については、ウランバートル市で76人から100人（約1.32倍）、フブスグル県で53人から62人（約1.17倍）となっている。



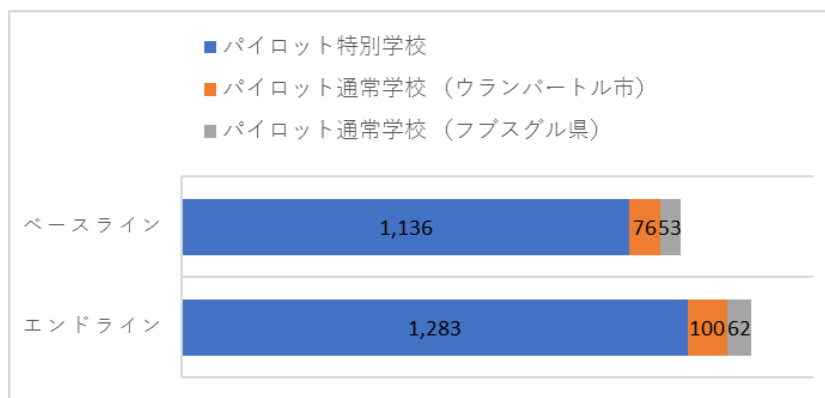


図 3-1 在籍する障害のある児童生徒数（パイロット特別学校・通常学校）

バヤンゴル区の非パイロット校に在籍する障害のある児童生徒数は、ベースライン調査時と比較すると、エンドライン調査時には 89 人から 109 人（約 1.22 倍）となっている。

表 3-6 在籍する障害のある児童生徒数（バヤンゴル区の非パイロット校）

	学校名	ベースライン調査				エンドライン調査			
		障害児数		福祉 手当受 給人数 *	IEP 作成 人数	障害児数		福祉 手当 受給 人数*	IEP 作成 人数
		男子	女子			男子	女子		
1	第 13 学校	5	3	0	0	10	9	0	0
2	第 20 学校		8	4	0	1	2	0	0
3	第 38 学校	2	1	1	1	1	0	0	0
4	第 40 学校	1	3	3	0	3	1	0	0
5	第 47 学校		8	0	0	2	3	0	0
6	第 51 学校	1	3	3	0	2	0	0	0
7	第 73 学校		1	0	1	2	2	2	0
8	第 93 学校	1	0	0	0	0	1	0	0
9	Erdmiin Undraa 統合学校	4	8	0	0	8	7	0	0
10	Erdemiin Urguu 統合学校	5	9	5	0	11	13	0	0
11	Oyunii Undraa 統合学校	0	2	2	0	5	6	0	0
12	Mongeni 統合学校	3	7	0	0	3	1	0	0
13	Setgemj 統合学校	7	7	8	0	10	6	8	0
	合計		89	26	2	58	51	10	0

\*福祉手当を受給していることを学校側が把握している人数。

フブスグル県の非パイロット校に在籍する障害のある児童生徒数は、ベースライン調査時と比較すると、エンドライン調査時には 494 人から 368 人（約 0.74 倍）となっており、減少がみられる。

表 3-7 在籍する障害のある児童生徒数（フブスグル県の非パイロット校）

	学校名	ベースライン調査				エンドライン調査			
		障害児数		福祉 手当*	IEP 作成	障害児数		福祉 手当*	IEP 作 成人数 **
		男子	女子			男子	女子		
1	Avarguud	9	4	1	3	3	1	1	0
2	AviyasYIII	3	2	4	0	3	2	3	0
3	Alag-Erdene	2	1	3	0	3	1	4	0
4	Arbulag	3	3	0	0	4	2	6	0
5	Bayanzurkh	5	9	6	1	4	3	4	5
6	Burentogtokh	11	8	4	0	11	7	0	0
7	Burenkhaan	2	0	2	0	2	0	0	0
8	Galt	9	17	N/A	N/A	21	31	1	1
9	Sod-Erdem	2	4	0	0	2	2	0	1
10	Delger Murun	10	4	0	0	6	1	7	0
11	Jargalant	8	10	9	0	7	18	0	9
12	Zurkh	2	1	0	0	7	1	0	0
13	Ikh-Uul	9	5	10	0	10	13	1	19
14	Gurvan-Erdene	21	14	7	1	1	0	0	0
15	Mogoi	1	2	0	0	1	0	1	0
16	Rashaant	14	22	2	0	2	2	0	0
17	Renchinkhumbe	5	9	0	0	8	9	8	1
18	Tarialan	27	26	11	0	10	3	13	0
19	Tosontsengel	4	5	1	1	0	2	2	0
20	Tumurbulag	7	9	0	0	5	1	0	6
21	Tunel	5	2	6	0	6	3	6	0
22	Ulaan-Uul	7	6	6	13	7	11	8	1
23	Khankh	7	4	11	0	8	14	7	0
24	Tsagaannuur	6	9	4	0	4	5	0	0
25	Tsagaan-Uul	19	18	8	0	13	16	0	0
26	Tsagaan-Uur	0	2	2	0	2	5	0	9
27	Chandmani-Undur	25	21	0	0	22	11	2	0
28	Shine-Ider	10	8	3	18	2	2	4	0
29	Erdmiin Dalai	17	12	N/A	N/A	13	4	0	0
30	Erdenebulgan	4	3	7	0	5	6	0	2
	合計	254	240	107	37	192	176	78	54

\*福祉手当を受給していることを学校側が把握している人数。

\*\*エンドライン調査後、各学校に再度、問い合わせを行い、精査した数（2019年3月1日現在）。

### 1-3 他校へ転出・退学した障害のある児童生徒数

他校へ転出したり退学したりした障害のある児童生徒数について、2015/2016年度及び2017/2018年度で比較を行った。

バヤンゴル区とフブスグル県では、非パイロット校で2017/2018年度の他の通常学校への転出が多くなっている。また、フブスグル県の非パイロット校では、2015/2016年度ならびに2017/2018年度ともに、退学している児童生徒が10人以上存在しており、パイロット校と比較して多い。

表 3-8 他校へ転出・退学した障害のある児童生徒数（パイロット特別学校）

	2015/2016 年度	2017/2018 年度
通常学校へ転出	3	5
特別学校へ転出	4	19
退学	0	0
不明	3	9

表 3-9 他校へ転出・退学した障害のある児童生徒数（パイロット通常学校）

	バヤンゴル区		フブスグル県	
	2015/2016 年度	2017/2018 年度	2015/2016 年度	2017/2018 年度
通常学校へ転出	0	0	0	0
特別学校へ転出	4	1	0	1
退学	0	0	0	1
不明	0	1	0	0

表 3-10 他校へ転出・退学した障害のある児童生徒数  
 （バヤンゴル区・フブスグル県の非パイロット校）

	バヤンゴル区		フブスグル県	
	2015/2016 年度	2017/2018 年度	2015/2016 年度	2017/2018 年度
通常学校へ転出	1	47	8	32
特別学校へ転出	1	4	5	3
退学	1	0	10	12
不明	0	0	0	1

## 2. 合理的配慮

### 2-1 個別教育計画作成

パイロット特別学校・通常学校、バヤンゴル区及びフブスグル県の非パイロット校において個別教育計画の作成されている児童生徒数は、表 3-5～3-7 のとおりである。

パイロット特別学校では、図 3-2 に示すとおりベースライン調査時と比較して顕著な増加がみられる。パイロット特別学校については、プロジェクト・チームと共に個別教育計画フォーマット及び作成マニュアルの開発に携わったこと、各学校において重度の障害のある児童生徒について個別教育計画を作成することが決定されたことから増加したと考えられる。

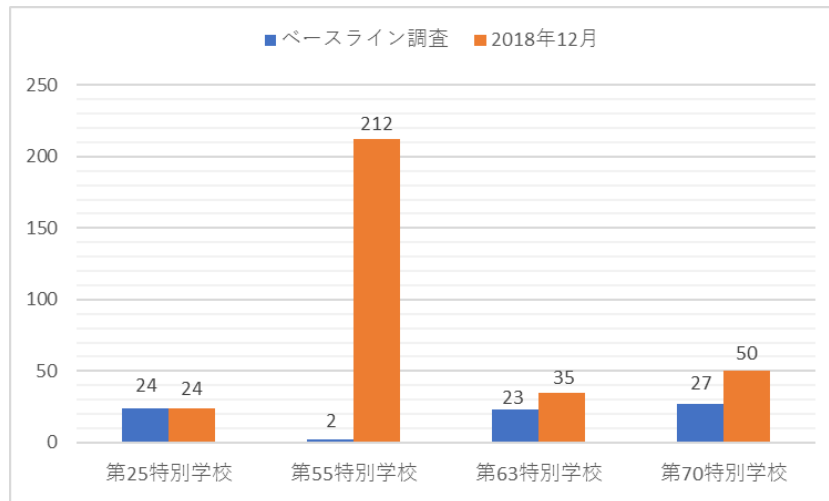


図 3-2 個別教育計画作成状況（パイロット特別学校）

図 3-3 に示すとおり、ベースライン調査時に個別の教育計画を作成していたパイロット通常学校は 2 校のみであったが、2018 年 12 月時点では 12 校のうち 11 校で作成されていた。残り 1 校（第 113 学校）についても、2017/2018 年度には個別教育計画を作成したことが確認されている。

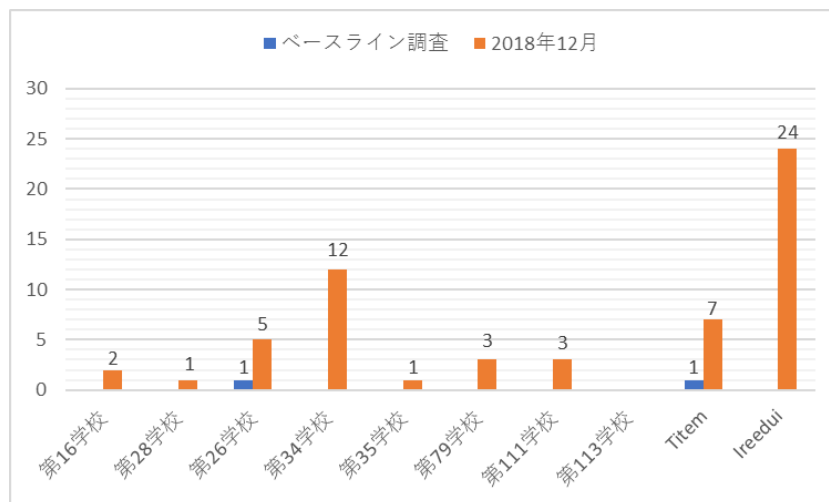


図 3-3 個別教育計画作成状況（パイロット通常学校）

バヤンゴル区の非パイロット校では、依然として、個別教育計画は作成されていないことが明らかになった。

一方、フブスグル県ではプロジェクトによる研修時に、ムルン地域に立地する非パイロット校 6 校（Avarguud、Aviyas、Sod-Erdem、Delger Murun、Gurvan-Erdene、Erdmiin Dalai）及び UNICEF の子ども発展センターが設置されている Bayanzurkh ソム、Ulaan-Uul ソム、Renchinlkhumbe ソムの教員にも参加を促していた。このうち、Sod-Erdem、Bayanzurkh ソム（ベースライン調査時に個別教育計画を作成していることを確認）、Renchinlkhumbe ソム、Ulaan-Uul ソムの学校では、2019 年 3 月現在、個別教育計画が作成されている。

## 2-2 評価方法

通常学校において、障害のある児童生徒の評価方法に、他の子どもと異なるスタンダードを用いているかどうかをベースライン調査時とエンドライン調査時で比較した。

パイロット通常学校及びフブスグル県の非パイロット校において、ベースライン調査時よりエンドライン調査時の方が「他の児童生徒と異なる」と回答した学校が多かった。具体的な方法として、「個別教育計画に応じた評価」「当該児童生徒の能力に応じた課題を課して評価」「当該児童生徒の成長による評価」「試験時に合理的配慮を提供」という回答が得られた。また、「子どもの成績により、教員の業務評価が左右されるため、障害のある児童生徒を含む一部の児童生徒の成績を期末試験の成績リストに掲載しない場合もある」との回答もあった。

表 3-11 障害のある児童生徒の評価方法（パイロット通常学校）

	バヤンゴル区		フブスグル県	
	ベースライン	エンドライン	ベースライン	エンドライン
他の児童生徒と同じ	6/8	3/8	1/2	0/2
他の児童生徒と異なる	2/8	5/8	1/2	2/2

表 3-12 障害のある児童生徒の評価方法（バヤンゴル区・フブスグル県の非パイロット校）

	バヤンゴル区		フブスグル県	
	ベースライン	エンドライン	ベースライン	エンドライン
他の児童生徒と同じ	10/13	11/13	17/30	14/30
他の児童生徒と異なる	3/13	2/13	10/30	15/30
不明	0/13	0/13	3/30	1/30

## 2-3 教員への追加手当

通常学校において、障害のある児童生徒を担当する教員に追加手当が支給されているかどうかをベースライン調査時とエンドライン調査時で比較した。

「追加手当はない」と回答した学校がほとんどであり、ベースライン調査時とエンドライン調査時でほとんど変化はみられなかった。

表 3-13 障害のある児童生徒を担当する教員への追加手当（パイロット通常学校）

	バヤンゴル区		フブスグル県	
	ベースライン	エンドライン	ベースライン	エンドライン
追加手当はない	8/8	7/8	1/2	2/2
一部教員に支給	0/8	1/8	1/2	0/2
すべての教員に支給	0/8	0/8	0/2	0/2

表 3-14 障害のある児童生徒を担当する教員への追加手当  
 (バヤンゴル区・フブスグル県の非パイロット校)

	バヤンゴル区		フブスグル県	
	ベースライン	エンドライン	ベースライン	エンドライン
追加手当はない	13/13	13/13	28/30	29/30
一部教員に支給	0/13	0/13	2/30	0/30
すべての教員に支給	0/13	0/13	0/30	0/30
無回答	-	-	-	1/30

## 2-4 学校環境

通常学校において、障害のある児童生徒が学習しやすい学校環境が整えられているかどうかをベースライン調査時とエンドライン調査時で比較した。

パイロット通常学校及びフブスグル県の非パイロット校において、ベースライン調査時よりエンドライン調査時の方が、学校環境が整備されていることが明らかになった。「その他」の回答として「子ども発展センター」(バヤンゴル区のパイロット通常学校)、「視覚障害のある児童生徒のための木道」「教室」(フブスグル県の非パイロット校)が挙げられた。

表 3-15 学校環境 (パイロット通常学校) (n=10)

	バヤンゴル区		フブスグル県	
	ベースライン	エンドライン	ベースライン	エンドライン
スロープ	4	6	2	2
利用しやすいドア	0	0	0	2
利用しやすいトイレ	0	4	0	1
2階へのアクセス	1	0	0	0
その他	0	3	0	0

\*複数回答可。

表 3-16 学校環境 (バヤンゴル区・フブスグル県の非パイロット校) (n=57)

	バヤンゴル区		フブスグル県	
	ベースライン	エンドライン	ベースライン	エンドライン
スロープ	3	6	17	22
利用しやすいドア	0	2	1	3
利用しやすいトイレ	1	5	12	11
2階へのアクセス	0	2	5	3
その他	0	0	4	4

\*複数回答可。

## 2-5 受け入れ姿勢

エンドライン調査時に、教員が障害のある児童生徒を進んで受け入れるかどうかについて、2014/2015年度当時と比較して回答してもらった。また受け入れが困難な理由についても質問した。

パイロット特別学校では、教員の受け入れ姿勢について大きな変化はみられない。一方で、2014/2015年度当時、受け入れが困難な理由として、「教材がない」「指導技術がない」が挙げられ

ていたが、エンドライン調査時は困難な点が記載されておらず、教材や指導技術の面で改善されたことがうかがえる。

表 3-17 教員の受け入れ姿勢（パイロット特別学校）（n=4）

	2014/2015 年度	エンドライン調査時
皆、積極的に受け入れたがらない	0/4	0/4
多くの教員は積極的に受け入れたがらない	0/4	1/4
いくつかの教員は積極的に受け入れたがる	1/4	0/4
皆、積極的に受け入れたがる	3/4	3/4

表 3-18 受け入れが困難な理由（パイロット特別学校）（n=4）

	2014/2015 年度	エンドライン調査時
教材がない	1	0
指導技術がない	1	0
負荷が大きい	0	0
保護者が協力的ではない	0	0
その他	0	0

\*複数回答可。

パイロット通常学校のエンドライン調査時に関する回答からは、「皆、積極的に受け入れたがらない」がなくなり、障害のある児童生徒を積極的に受け入れる姿勢に変化したことがうかがえる。依然として「障害のある児童生徒は特別学校で学んだ方がよい」という回答がある一方で、教材、指導技術、他の児童生徒の保護者の協力の面では、改善がみられている。

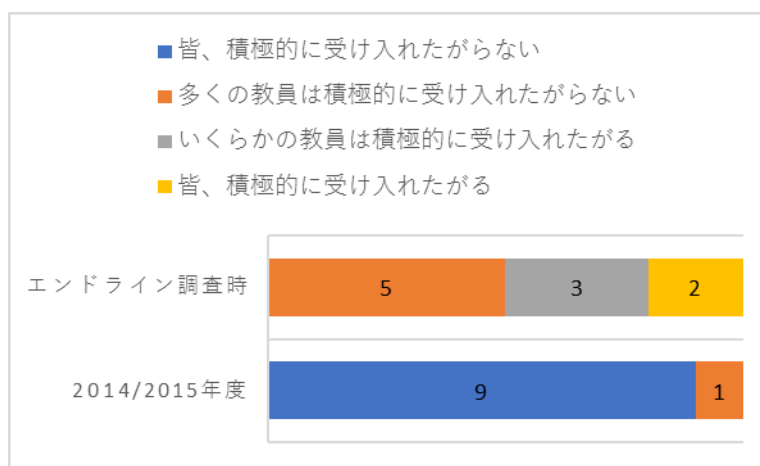


図 3-4 教員の受け入れ姿勢（パイロット通常学校）（n=10）

表 3-19 受け入れが困難な理由（パイロット通常学校）（n=10）

	バヤンゴル区		フブスグル県	
	2014/2015 年	エンドライン調査時	2014/2015 年	エンドライン調査時
特別学校で学んだ方がよい	2	1	1	1
教材がない	8	4	2	1



指導技術がない	6	4	1	0
負荷が大きい	5	4	1	1
他の児童生徒の保護者が協力的ではない	5	2	1	0
その他	2 環境が未整備・追加手当なし	2 重度障害児の指導は困難・追加手当なし	0	0

\*複数回答可。

バヤンゴル区及びフブスグル県の非パイロット校も、2014/2015年当時よりエンドライン調査時の方が障害のある児童生徒を積極的に受け入れるという回答が増加している。一方、依然として「皆、積極的に受け入れたがらない」という回答もあり、また、教材、指導技術、負荷の面では改善がみられていない。

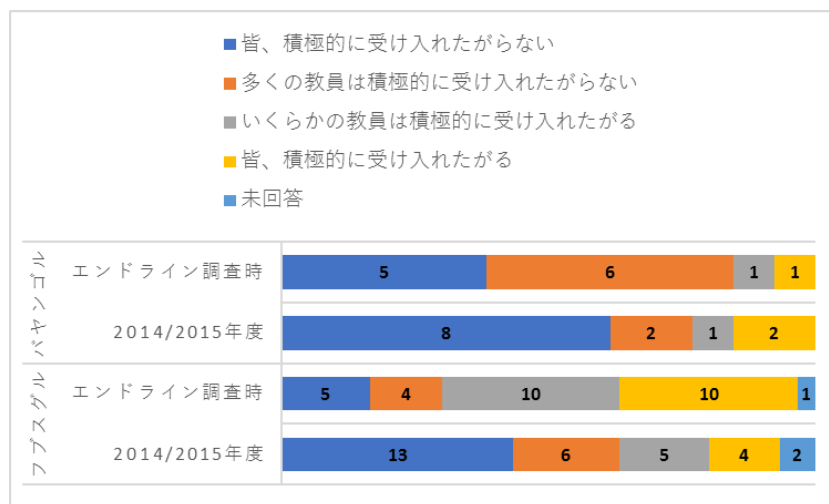


図 3-5 教員の受け入れ姿勢 (バヤンゴル区及びフブスグル県の非パイロット校) (n=43)

表 3-20 受け入れが困難な理由 (バヤンゴル区及びフブスグル県の非パイロット校) (n=43)

	バヤンゴル区		フブスグル県	
	2014/2015年	エンドライン調査時	2014/2015年	エンドライン調査時
特別学校で学んだ方がよい	1	3	3	0
教材がない	10	10	14	14
指導技術がない	9	9	19	18
負荷が大きい	6	7	14	12
他の児童生徒の保護者が協力的ではない	4	3	7	3
その他	1	0	3 環境が未整備・専門教員の不足	3 環境が未整備・他の児童生徒に迷惑

\*複数回答可。

## 2-6 関係機関との連携

パイロット特別学校・通常学校、バヤンゴル区及びフブスグル県の非パイロット校がそれぞれ連携した機関・内容についての回答結果は、下表に示すとおりである。

表 3-21 連携した機関・内容（パイロット特別学校）

連携した組織	ベースライン調査		エンドライン調査	
	主な連携内容	回答数	主な連携内容	回答数
区社会開発課	<ul style="list-style-type: none"> <li>調査実施</li> <li>支援</li> </ul>	3/4	<ul style="list-style-type: none"> <li>芸術大会開催</li> </ul>	2/4
区社会福祉サービス課	<ul style="list-style-type: none"> <li>研修実施</li> </ul>	1/4	<ul style="list-style-type: none"> <li>保護者を対象とした情報共有</li> </ul>	1/4
区教育課	<ul style="list-style-type: none"> <li>研修・セミナー実施</li> <li>教員大会の開催</li> <li>助言</li> </ul>	4/4	<ul style="list-style-type: none"> <li>研修実施・証明書の発行</li> <li>教育活動</li> </ul>	3/4
幼稚園	<ul style="list-style-type: none"> <li>第10特別幼稚園からの園児受け入れ</li> </ul>	2/4	<ul style="list-style-type: none"> <li>第12幼稚園及び Anduud 幼稚園に対し学校紹介・情報交換</li> </ul>	1/4
通常学校	<ul style="list-style-type: none"> <li>研修実施</li> <li>調査実施</li> <li>スポーツ大会開催</li> </ul>	4/4	<ul style="list-style-type: none"> <li>研修の実施</li> <li>交流及び共同学習実施</li> <li>保護者への助言</li> </ul>	1/4
区労働課	—	0/4	<ul style="list-style-type: none"> <li>放課後活動の実施</li> </ul>	4/4
区保健センター	—	0/4	<ul style="list-style-type: none"> <li>アセスメントの実施</li> </ul>	1/4
ホローのソーシャルワーカー	—	0/4	<ul style="list-style-type: none"> <li>就学支援</li> </ul>	2/4
家庭保健センター	—	0/4	<ul style="list-style-type: none"> <li>未就学の障害児に関する調査の実施</li> <li>研修</li> <li>広報</li> </ul>	3/4
その他	—	0/4	—	1/4

表 3-22 連携した機関・内容（パイロット通常学校）

連携した組織	ベースライン調査		エンドライン調査	
	主な連携内容	回答数	主な連携内容	回答数
区/県社会開発課	<ul style="list-style-type: none"> <li>方針に支援プログラムを反映</li> </ul>	3/10	—	1/10
区/県社会福祉サービス課/局	<ul style="list-style-type: none"> <li>社会福祉手当の給付</li> </ul>	1/10	<ul style="list-style-type: none"> <li>車椅子の寄付</li> <li>社会福祉手当の給付</li> </ul>	3/10
区/県教育課/局	<ul style="list-style-type: none"> <li>調査の実施</li> <li>セミナーを開催</li> <li>情報共有</li> </ul>	3/10	<ul style="list-style-type: none"> <li>研修・情報共有</li> <li>特別学校分教室設置</li> </ul>	4/10
幼稚園	—	0/10	<ul style="list-style-type: none"> <li>入学予定の園児を対象とした調査の実施</li> </ul>	1/10
特別学校	<ul style="list-style-type: none"> <li>指導法、学習環境の紹介</li> <li>研修</li> </ul>	8/10	<ul style="list-style-type: none"> <li>アセスメントの実施</li> <li>言語指導</li> <li>研修・助言</li> </ul>	8/10
区/県労働課/局	—	0/10	—	1/10

区保健センター/県総合病院	• 診断・診察	1/10	• 診断 • 健康診断	3/10
ホロー/ソムのソーシャルワーカー	—	0/10	• 就学支援	3/10
家庭保健センター	—	0/10	• 予防健診 • ワクチン接種	1/10
その他	—	0/10	—	1/10

表 3-23 連携した機関・内容（バヤンゴル区及びフブスグル県の非パイロット校）

連携した組織	ベースライン調査		エンドライン調査	
	主な連携内容	回答数	主な連携内容	回答数
区/県社会開発課	• 方向性を示した • 調査	7/43	• 障害のある児童生徒に関する調査実施	2/43
区/県社会福祉サービス課/局	• 社会福祉サービス提供 • 調査	12/43	• 障害の認定書発行 • 社会福祉手当給付 • メガネ、補聴器、文房具などの支給 • 調査実施	11/43
区/県教育課/局	• 調査実施 • セミナー開催 • 情報共有 • 玩具などの提供 • 記念日を祝う	15/43	• 調査実施・情報共有 • 研修実施 • 教科書の割引	14/43
幼稚園	• セミナー開催	2/43	• 調査実施 • 就園支援 • 情報共有	5/43
特別学校	• 児童生徒の編入支援 • 特別学校を視察	4/43	• アセスメント実施 • 指導法への助言 • 特別学校への編入 • スポーツ大会開催	7/43
区/県労働課/局	—	1/43	—	1/43
区保健センター/ 県総合病院	• 検査・診断 • 保健サービス提供	13/43	• 診察・診断 • 健康診断 • 医薬品の割引 • 広報	10/43
ホロー/ソムのソーシャルワーカー	• 調査・家庭訪問を通じた生活環境確認 • 社会福祉サービス提供 • セミナー開催 • 助言 • 活動の管理 • 車椅子の提供	12/43	• 調査実施 • 研修実施 • 社会福祉手当給付	20/43
家庭保健センター	• 診察・診断 • 保健サービス提供 • 家庭訪問を通じた生活状況確認	11/43	• 診察 • 健診診断 • てんかんへの対応に関する助言 • 2次医療機関へのリファー	21/43
その他	• 家族児童青年発達局との協力 • ソム役場との協力	4/43	• 教育省・市教育局が研修実施 • NGO と研修や調査実施	5/43

	<ul style="list-style-type: none"> <li>World Vision による調査・セミナーに参加</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>赤十字と連携</li> <li>ロシアの乗馬大会に参加</li> </ul>	
--	--	--	---	--

## 2-7 委員会・支部委員会に対する認知度・連携度

委員会・支部委員会に対する認知度・連携度について確認するために、パイロット特別学校・通常学校、バヤンゴル区及びフブスグル県の非パイロット校に対して、「委員会について知っているか」及び「支部委員会について知っているか」という質問を行った。回答結果は、図 3-6～3-10 のとおりである。いずれも、エンドライン調査の方が「聞いたことがある」「役割、委員を知っている」という回答が増加している。

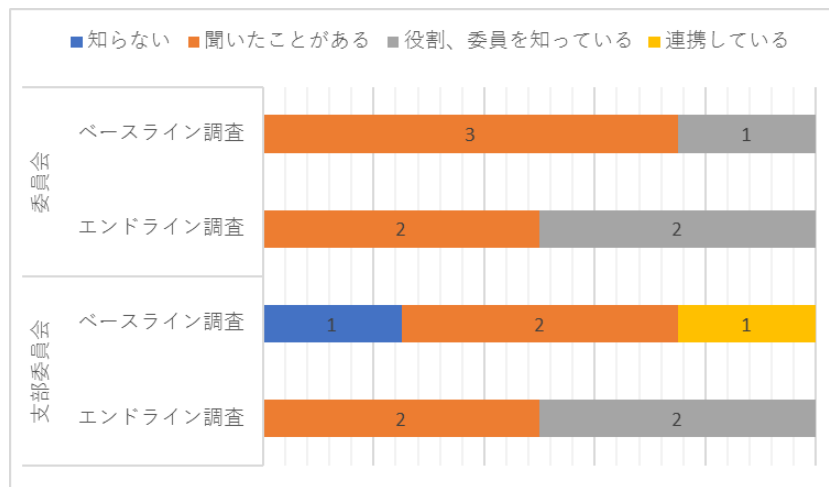


図 3-6 「委員会/支部委員会について知っているか」への回答（パイロット特別学校）(n=4)

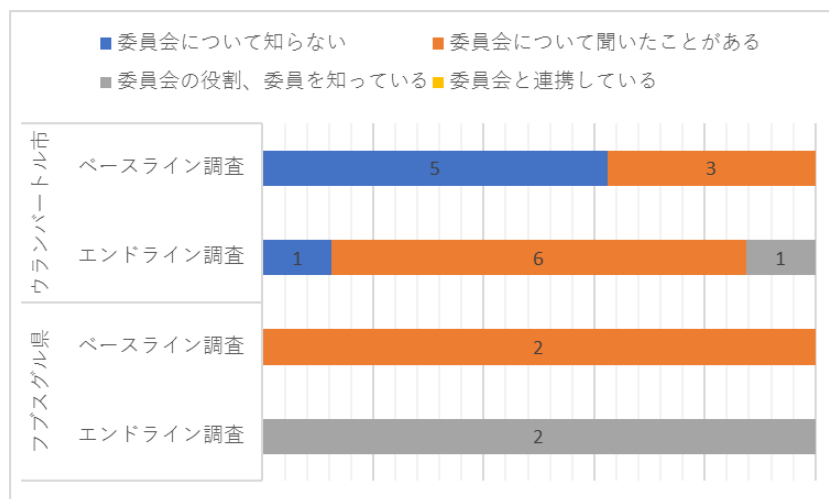


図 3-7 「委員会について知っているか」への回答（パイロット通常学校）(n=10)

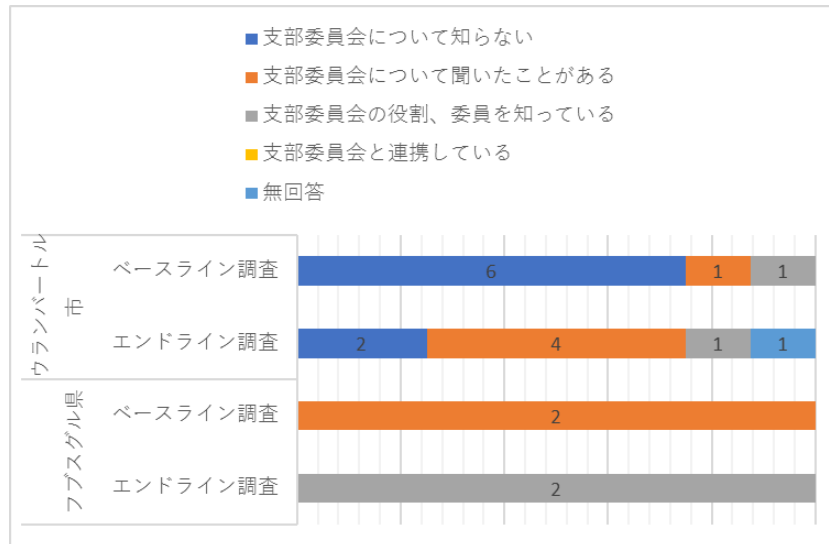


図 3-8 「支部委員会について知っているか」への回答（パイロット通常学校）（n=10）

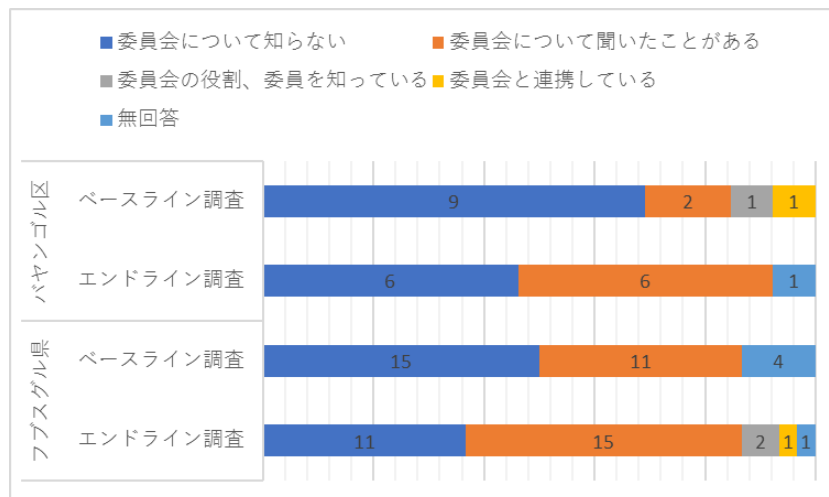


図 3-9 「委員会について知っているか」への回答  
 （バヤンゴル区及びフブスグル県の非パイロット校）（n=43）

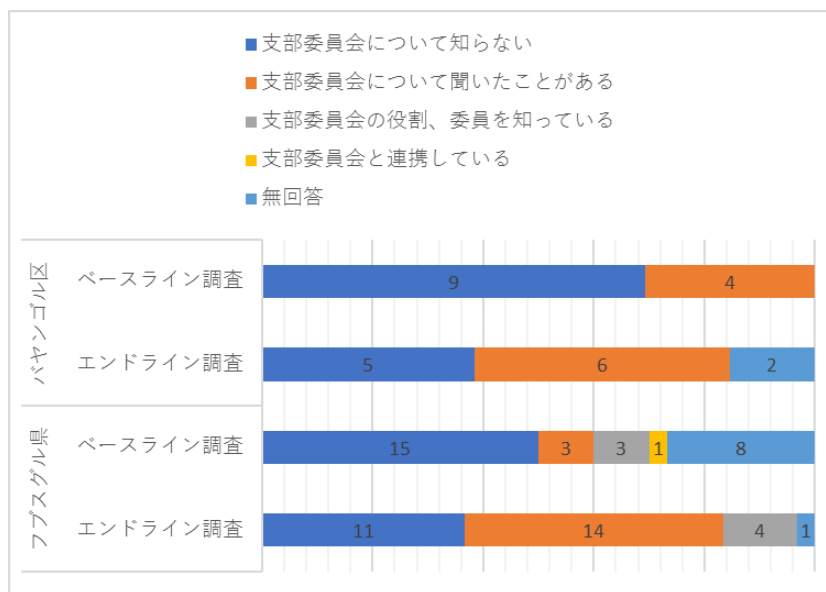


図 3-10 「支部委員会について知っているか」への回答  
 (バヤンゴル区及びフブスグル県の非パイロット校) (n=43)

「委員会の活動や役割に関して、あなたが期待することは何か」「支部委員会の活動や役割に関して、あなたが期待することは何か」という問いに対する答えは、表 3-24、3-25 のとおりである。ベースライン調査時には、委員会に対し「カリキュラムの改善をして欲しい」「障害のある子どものための教科書、ハンドブック、教具や助言を提供して欲しい」など委員会の役割に合致しない期待や、「区内の学校全校のソーシャルワーカーや校医と連携して欲しい」「県中心部で診断を受ける際、待ち時間がないようにして欲しい」など、支部委員会の活動に関連する期待が多く寄せられている。これに対し、エンドライン調査時には委員会、支部委員会それぞれの役割に沿った期待が挙げられている。

表 3-24 「委員会の活動や役割に関して、あなたが期待することは何か」への回答 (n=54)

ベースライン調査	エンドライン調査
委員会の活動方針に対する期待	
<ul style="list-style-type: none"> <li>• 障害のある子どもを正しく診断して欲しい。</li> <li>• 障害のある子どもの社会生活への順応を支援し、協力して欲しい。</li> <li>• 誠実に公正に社会福祉サービスを必要とする人に提供して欲しい。</li> <li>• 障害のある子どもの健康問題を監督し、社会福祉サービスを受けさせ、教育の質とアクセスを向上させる必要がある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 具体的な施策や業務方針を明らかにして欲しい。</li> <li>• 一貫した施策を効率的に実施して欲しい。</li> <li>• 障害のある子どもを発見し、就学支援につなげて欲しい。</li> <li>• 軽度の障害の子どもたちは通常学校に通わせるようにして欲しい。</li> <li>• 障害のある子どもの生きる力を伸ばし、社会参加を促進して欲しい。</li> </ul>
委員会の現在の活動に対する期待	

<ul style="list-style-type: none"> <li>• 支部委員会の業務を監督して欲しい。</li> <li>• 区内の学校全校のソーシャルワーカーや校医と連携して欲しい。</li> <li>• 県中心部で診断を受ける際、待ち時間がないようにして欲しい。</li> <li>• 障害のある子どもに対する指導法などについての研修を実施して欲しい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 業務方針通りに活動して欲しい。</li> <li>• 障害の早期発見、支援やサービス提供に関して情報発信をして欲しい。</li> <li>• 障害のある子どもに対する理解を高める啓発活動を行って欲しい。</li> <li>• 就学前教育機関との連携を強化して欲しい。</li> <li>• 学校現場を訪問し、障害のある児童生徒の実態調査を実施して欲しい。</li> <li>• 障害のある児童生徒の診断を行って欲しい。</li> <li>• 障害のある児童生徒との関わり方、指導法、学習環境について助言して欲しい。</li> </ul>
新たな活動への要望	
<ul style="list-style-type: none"> <li>• カリキュラムの改善をして欲しい。</li> <li>• 障害のある子どものための教科書、ハンドブック、教具や助言を提供して欲しい。</li> <li>• 特別クラスを設置したり、教具を提供したり、教員をセミナーに参加させて育成して欲しい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 知能検査を無料で受けられるようにして欲しい。</li> <li>• 全児童生徒の診断・アセスメントを実施して欲しい。</li> <li>• 診断に応じたサービスの提供、年齢や能力に応じた進学支援体制の構築を行って欲しい。</li> <li>• ソムを巡回し研修を実施して欲しい。</li> <li>• 教員対象の研修を実施して欲しい。</li> <li>• 学校で特定の子どもへの事例検討会を開催して欲しい。</li> <li>• 障害のある児童生徒を指導する教員に追加手当を給付して欲しい。</li> </ul>

表 3-25 「支部委員会の活動や役割に関して、あなたが期待することは何か」への回答  
 (n=54)

ベースライン調査	エンドライン調査
支部委員会の活動方針に対する期待	
<ul style="list-style-type: none"> <li>• 障害のある子どもの社会生活への順応、学習、成長に関する問題を支援して欲しい。</li> <li>• 障害のある子どもの健康問題を監督し、社会福祉サービスを受けさせ、教育の質とアクセスを向上させる必要がある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 障害のある子どもの保健・教育・就労・社会参加を支援して欲しい。</li> <li>• 具体的な施策や業務方針を明らかにして欲しい。</li> </ul>
支部委員会の現在の活動に対する期待	
<ul style="list-style-type: none"> <li>• 学校や NGO と積極的に連携して欲しい。</li> <li>• 活動を活発化させ、テレビやラジオで広報を行って欲しい。</li> <li>• 専門医の診察を受けさせて診断を確定し、障害の種類を明確にして欲しい。</li> <li>• 障害のある子どもを通常学校で受け入れられるよう支援して欲しい。</li> <li>• 社会福祉サービスの提供において主導権を握り、学校とも協力して欲しい。</li> <li>• ICTを活用して欲しい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 積極的に活動して欲しい。</li> <li>• 情報を提供して欲しい。</li> <li>• 保護者への助言や一般市民への啓発活動を行って欲しい。</li> <li>• 障害のある子どもが通常学校に通えるよう助言をして欲しい。</li> <li>• 区や関係機関との連携を強化して欲しい。</li> <li>• 支部委員会同士、協力し合って欲しい。</li> </ul>
新たな活動への要望	



<ul style="list-style-type: none"> <li>• 障害のある子どもの学習環境改善に予算を出して欲しい。</li> <li>• 障害のある子どものための体育館をソムに設置して欲しい。</li> <li>• 年に1回、ソムでセミナーを開催し、助言して欲しい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• ホローの家庭保健センターで、リハビリテーションを提供して欲しい。</li> <li>• 全児童生徒の診断・アセスメントを実施して欲しい。</li> <li>• 通常学校教員を対象とした障害の理解促進のための研修を実施して欲しい。</li> <li>• 障害のある子どものための学習環境の整備や指導方法について研修を実施して欲しい。</li> <li>• 区の1つの学校をパイロット校として協力活動を実施して欲しい。</li> </ul>
--	---

## 2-8 視察者数

プロジェクトによる介入前と介入後の各学校の視察者数を比較した。いずれも介入前より視察者数が増加していることが分かる。

表 3-26 視察者数

		2014/2015 年度	2017/2018 年度	増加の割合
パイロット特別学校		300 人	956 人	3.19 倍
パイロット 通常学校	バヤンゴル区	34 人	223 人	6.56 倍
	フブスグル県	20 人	35 人	1.75 倍
非パイロット 校	バヤンゴル区	0 人	1 人	-
	フブスグル県	21 人	61 人	3.10 倍

3. 質問票

**Questionnaires for Endline Survey**

**QUESTIONNAIRE: SCHOOL ADMINISTRATORS**

JICA Project for Strengthening Teachers' Ability and Reasonable Treatments for Children with Disabilities (START) has been implemented since August 2015. This survey is conducted prior to the termination of the Project (July 2019) to understand the effect of the project in Bayangol district and Khuvsgul *Aimag*. Please write your name. The information submitted shall not be used for any purpose other than this project. This survey result shall not be released in any way that allows the identification of individuals.  
 \*Person with Disabilities is defined by the Law of Rights of Persons with Disabilities.

Date: .....  
 Name of respondents: .....  
 School name: .....  
 Data collector: .....

**1 General information**

No	Questions	Answer
1.1	School name	
1.2	Your position?	
1.3	Number of students	Male: ..... student Female : ..... student
1.4	Number of total teachers	.....teachers
1.5	Number of class	..... classes
1.6	Number of shifts	1 / 2/ 3
1.7	School districts (targeted khoroo)	

**2. Children with Disabilities (CWDs)**

No	Questions	Answer				
2.1	Total number of CWDs studying in the 2017-2018 school year.	Male : Female :				
2.2	Detailed information of CWDs					
	Category of disabilities	Gender			Number of children receiving social welfare allowances	Number of IEP prepared
		M	F	T		
	Visual Impairment					
	Hearing Impairment					
	Speech and Language Impairment					
	Intellectual					
	Physical					
Multi						

	Other							
2.3	Are there any CWDs who moved to another school or dropped out of your school in the 2017-2018 school year?	Number of CWDs moved to regular school ____ Number of CWDs moved to special school ____ Number of CWDs dropped out from your school ____ You don't know where the CWDs moved to ____						
2.4	Why did the CWD(s) move to another school or drop out of your school?	<input type="checkbox"/> Because he/she fell behind in study. <input type="checkbox"/> Because he/she did not get used to the school environment. <input type="checkbox"/> Because my school does not have an infrastructural or special arrangement for CWDs. (Ex: elevator or pictogram etc.) <input type="checkbox"/> Other (.....)						
2.5	Does your school have a different standard or methodology to assess learning outcomes of CWDs?	<input type="checkbox"/> No, exactly the same as other students <input type="checkbox"/> Yes, we make some special adjustments - If Yes, tell us about special adjustments - ..... ..... - ..... <input type="checkbox"/> Other (.....)						
2.6	Do teachers at your school have additional salaries if teaching CWDs?	<input type="checkbox"/> No <input type="checkbox"/> Some, but not for all <input type="checkbox"/> Yes, all of them						
2.7	Does your school have an infrastructural or special arrangement for CWDs to use?	<input type="checkbox"/> Slope at entrance <input type="checkbox"/> Appropriate classroom doors <input type="checkbox"/> Accessible toilet <input type="checkbox"/> Appropriate access to upstairs <input type="checkbox"/> Others ( )						
2.8	Do you think that your teachers were willing to accept CWDs in 2014/2015 (prior to the project)?	<input type="checkbox"/> No. (→move to 2.9) <input type="checkbox"/> Yes, a few of them. (→move to 2.9) <input type="checkbox"/> Yes, some of them. (→move to 2.9) <input type="checkbox"/>						

2.9	Why do you think there were some / a few teachers not willing to accept CWDs?	<input type="checkbox"/> Because it was better for them to study at special school. <input type="checkbox"/> Because the teaching material and equipment were not ready to accept them. <input type="checkbox"/> Because teachers' skills were not ready to accept them. <input type="checkbox"/> Because teachers' workload would be increased. <input type="checkbox"/> Because the parents of other students were not happy. <input type="checkbox"/> Others ( )
2.10	Do you think that your teachers are willing to accept CWDs?	<input type="checkbox"/> No. (→move to 2.11) <input type="checkbox"/> Yes, a few of them. (→move to 2.11) <input type="checkbox"/> Yes, some of them. (→move to 2.11)
2.11	Why do you think there are some / a few teachers not willing to accept CWDs?	<input type="checkbox"/> Because it is better for them to study at special school. <input type="checkbox"/> Because the teaching material and equipment are not ready to accept them. <input type="checkbox"/> Because teachers' skills are not ready to accept them. <input type="checkbox"/> Because teachers' workload will be increased. <input type="checkbox"/> Because the parents of other students are not happy. <input type="checkbox"/> Others ( )

### 3. Relation with other organizations

No.	Questions	Answer	
		Organization	How did you work with
3.1	Concerning with CWDs, did you work with other organizations in 2017-2018 school year? (Multiple answers allowed.)	<input type="checkbox"/> Social Development Department of <i>Aimag</i>	
		<input type="checkbox"/> Social Welfare Service Department of <i>Aimag</i>	
		<input type="checkbox"/> Education and Culture Department of <i>Aimag</i>	

		<input type="checkbox"/> Kindergarten	
		<input type="checkbox"/> Special school	
		<input type="checkbox"/> Labor Department of <i>Aimag</i>	
		<input type="checkbox"/> Medical center of <i>Aimag</i>	
		<input type="checkbox"/> Social worker of <i>khoroos</i> or <i>bags</i>	
		<input type="checkbox"/> Family doctor	
		<input type="checkbox"/> Others	
3.2	Do you know <b>the Commission</b> on Health, Education, and Social Protection for CWDs?	<input type="checkbox"/> No, I do not know about the Commission <input type="checkbox"/> Yes, I have heard about the Commission <input type="checkbox"/> Yes, I know their role and members <input type="checkbox"/> Yes, I have contacted the Commission	
3.3	(If you answer “yes” to 3.2) What do you expect the <b>Central Commission</b> ?		
3.4	Do you know <b>Local Commission</b> on Health, Education and Social Protection for CWDs?	<input type="checkbox"/> No, I do not know about Local Commission <input type="checkbox"/> Yes, I have heard about Local Commission <input type="checkbox"/> Yes, I know their role and members <input type="checkbox"/> Yes, I have contacted Local Commission	
3.5	(If you answer “yes” to 3.4) What do you expect <b>Local Commission</b> ?		
3.6	The number of visitors (e.g., schools and education department) concerning your school teaching practices for CWDs as a reference	2014/2015	2017/2018

#### IV.パイロット校教員

パイロット特別学校及び通常学校の教員について、2016年3～4月（ウランバートル市）、2017年1月（フブスグル県）に実施したベースライン調査結果と2018年10～11月に実施したエンドライン調査結果を比較する。比較した項目は以下のとおりである。

表 4-1 比較項目

大項目	小項目	方法
基本情報	<ul style="list-style-type: none"> <li>業務に関連する事項の学習経験</li> </ul>	質問紙
業務経験	<ul style="list-style-type: none"> <li>指導経験</li> <li>受け入れ姿勢</li> <li>指導意欲・自信</li> </ul>	質問紙
能力	<ul style="list-style-type: none"> <li>「障害」の捉え方</li> <li>知識・理解（テスト）</li> </ul>	質問紙
	(パイロット特別学校ワーキングチーム*のみ) <ul style="list-style-type: none"> <li>児童生徒の実態を把握する能力</li> <li>個別教育計画の比較</li> <li>授業の比較</li> <li>通常学校への支援</li> </ul>	フォーカス・グループ・インタビュー
	(パイロット通常学校のワーキングチーム*のみ) <ul style="list-style-type: none"> <li>合理的配慮の提供</li> </ul>	フォーカス・グループ・インタビュー

\*パイロット特別学校、パイロット通常学校には、それぞれの学校において中核として障害のある児童生徒の支援にあたる教員10名程度でワーキングチームを結成した。

#### 1. 基本情報

##### 1-1 対象

対象としたパイロット特別学校及び通常学校教員の内訳は以下のとおりである。

表 4-2 回答したパイロット特別学校教員数

ベースライン調査				エンドライン調査			
学校名	男性	女性	無回答	学校名	男性	女性	無回答
第25特別学校	11	28	-	第25特別学校	16	34	-
第55特別学校	16	53	-	第55特別学校	20	61	3
第63特別学校	14	23	-	第63特別学校	13	19	-
第70特別学校	6	25	-	第70特別学校	6	23	2
合計	47	129	-	合計	55	137	5
総計	176			総計	197		

表 4-3 回答したバヤンゴル区のパイロット通常学校教員数

ベースライン調査				エンドライン調査			
学校名	男性	女性	無回答	学校名	男性	女性	無回答
第16学校	7	51	-	第16学校	6	48	-
第26学校	7	28	-	第26学校	5	27	-
第28学校	14	94	-	第28学校	16	94	4
第34学校	13	43	-	第34学校	7	42	1

第 35 学校	12	60	-	第 35 学校	8	59	1
第 79 学校	20	100	-	第 79 学校	9	88	2
第 111 学校	5	37	-	第 111 学校	5	43	-
第 113 学校	6	55	-	第 113 学校	9	57	1
合計	84	468	-	合計	65	458	9
総計	552			総計	532		

表 4-4 回答したフブスグル県のパイロット通常学校教員数

ベースライン調査				エンドライン調査			
学校名	男性	女性	無回答	学校名	男性	女性	無回答
Titem 第 2 学校	11	17	-	Titem 第 2 学校	17	44	1
Ireedui21 世紀 統合学校	4	19	-	Ireedui21 世紀 統合学校	11	32	1
合計	15	36	-	合計	28	76	2
総計	51			総計	106		

### 1-2 業務に関連する事項の学習経験

障害のある児童生徒の指導に関する研修受講経験について尋ねた回答は下記のとおりである。第 70 特別学校を除き、プロジェクトの介入前（2014/2015 年度以前）よりも介入後（2015/2016 年度以降）に受講したという回答が増えている。

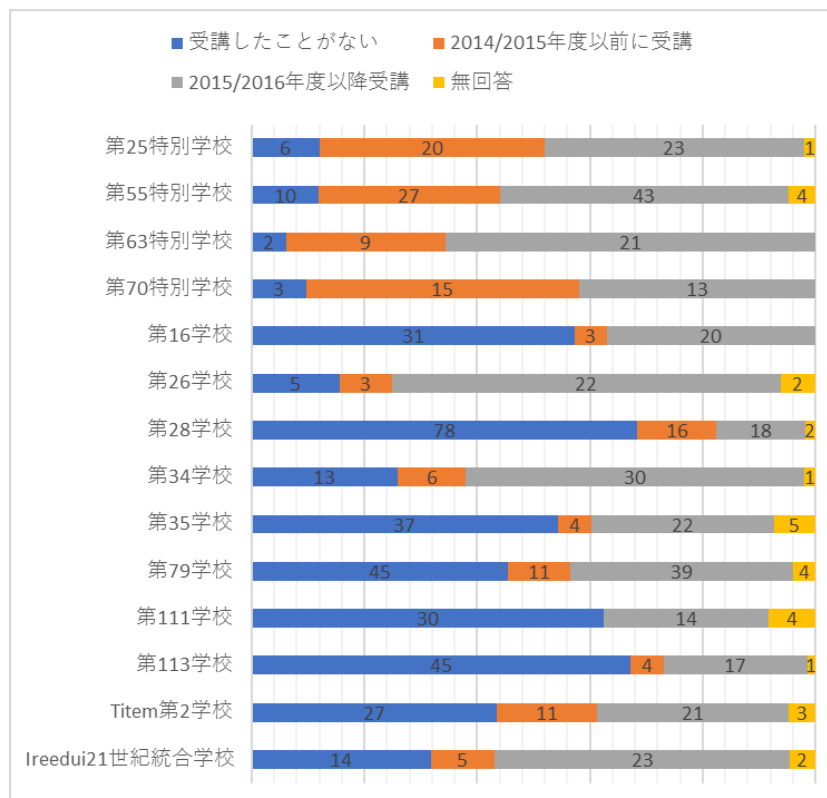


図 4-1 障害のある児童生徒の指導に関する研修受講経験 (n=835)



## 2. 業務経験

### 2-1 指導経験

障害のある児童生徒を指導した経験の有無を尋ねた。特別学校の場合、回答者の74.19%（第70特別学校）から83.33%（第55特別学校）が障害のある児童生徒を指導した経験があると回答している。一方、通常学校では、7.89%（第28学校）から59.09%（Ireedui21世紀統合学校）が障害のある児童生徒を指導した経験があると回答しており、学校によってばらつきのある回答となっている。

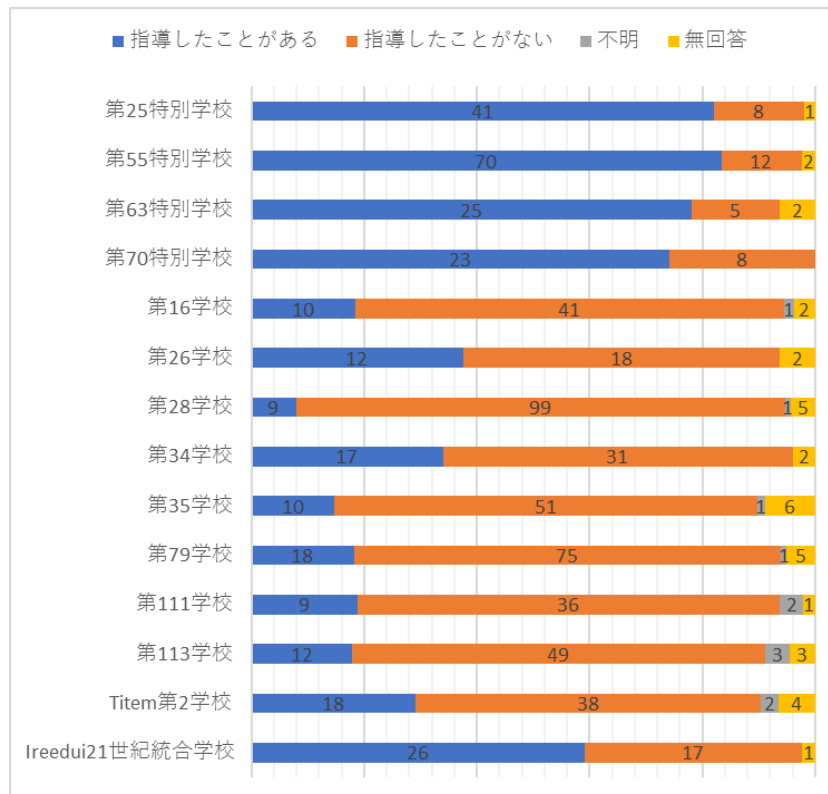


図 4-2 障害のある児童生徒の指導経験 (n=835)

次に、個別教育計画を作成した経験の有無を尋ねた。第25特別学校では、「プロジェクト介入前（2014/2015年度以前）から個別教育計画を作成していた」と回答した教員（24人）が、「プロジェクト介入後（2015/2016年度以降）作成するようになった」と回答した教員数（12人）を上回った。また第113学校については、プロジェクト介入前から個別教育計画を作成していた教員と、介入後に作成するようになったと回答した教員数が同数（3人）であった。これら2校以外では、プロジェクト介入後に作成するようになったと回答した教員が介入前から作成していたと回答した教員数を上回っている。

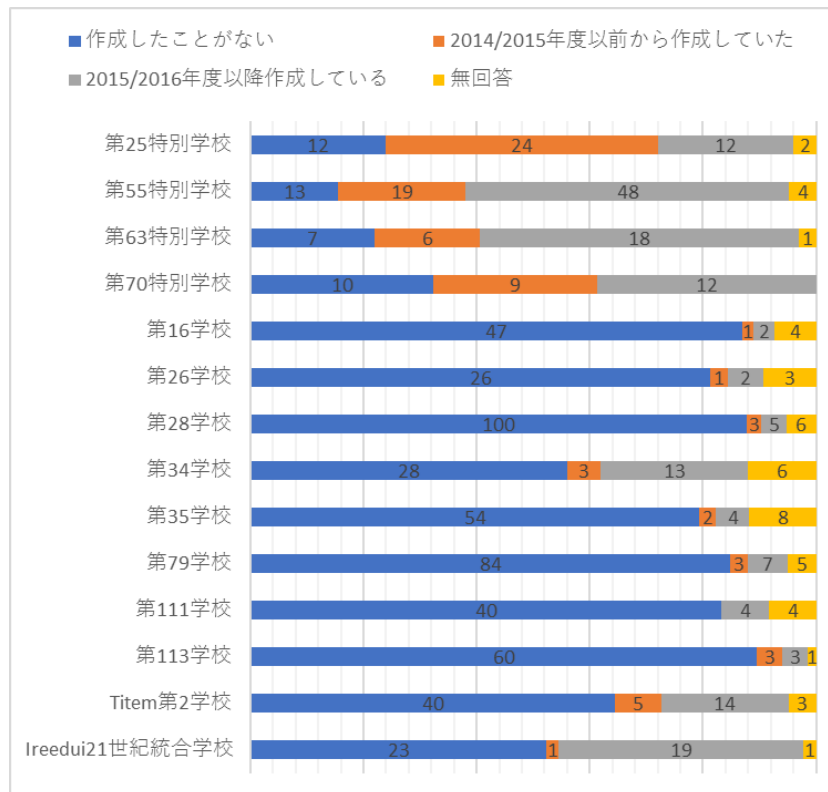


図 4-3 個別教育計画の作成経験 (n=835)

## 2-2 受け入れ姿勢

学校として障害のある子どもを受け入れる準備が整っているかどうかを尋ねた。パイロット特別学校については、「大変整っている」と回答した教員が多く、プロジェクト介入前（2014/2015年度以前）、プロジェクト介入後（エンドライン調査時）で大きな違いはなかった。

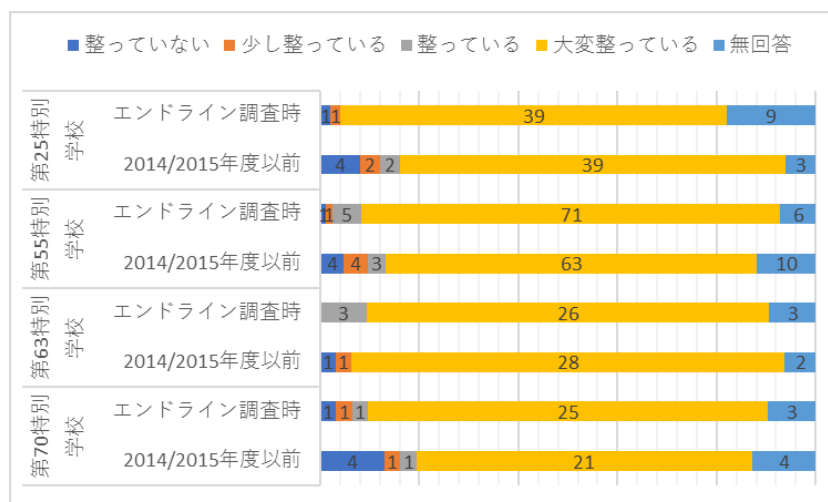


図 4-4 学校の障害のある子どもの受け入れ準備（パイロット特別学校）(n=197)

パイロット通常学校では、プロジェクト介入前（2014/2015年度以前）よりプロジェクト介入後（エンドライン調査時）の方が「準備が整っていない」という回答は減少し、「少し整っている」「整っている」「大変整っている」という回答が増加している。

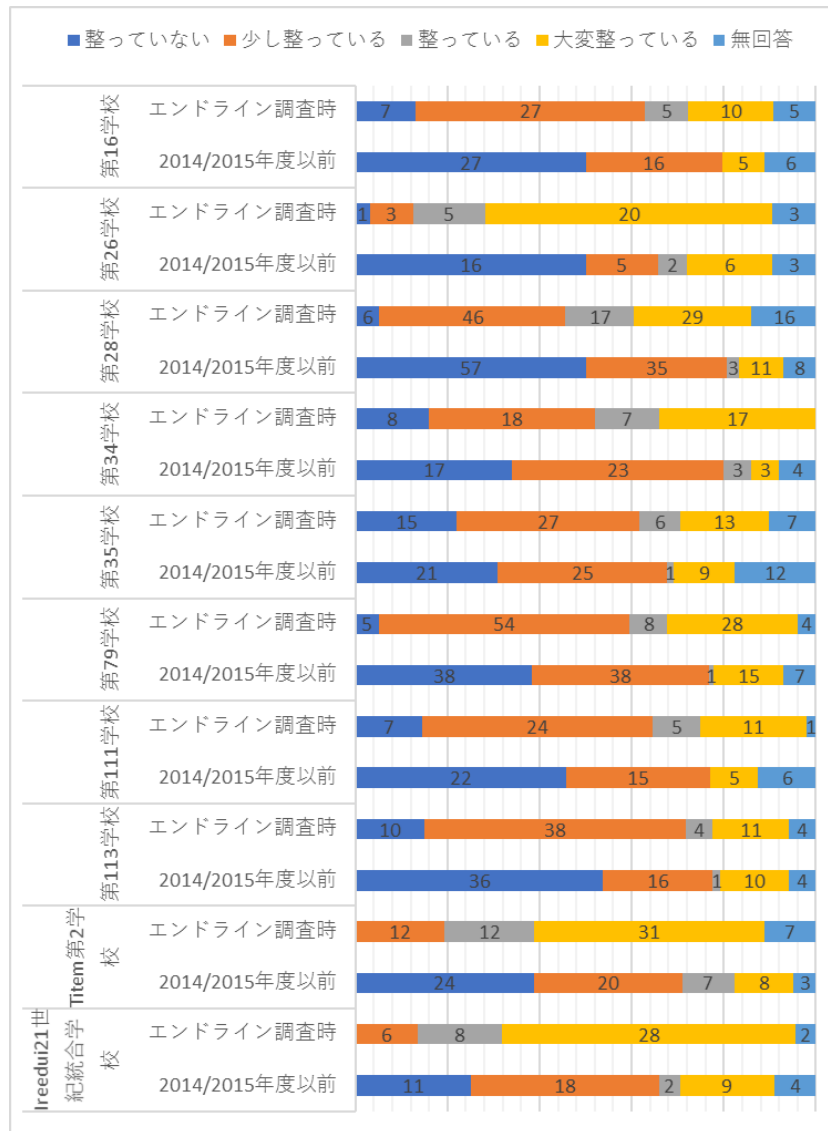


図 4-5 学校の障害のある子どもの受け入れ準備（パイロット通常学校）(n=638)

### 2-3 指導意欲・自信

「障害のある子どもをあなたのクラスで指導したいか」という質問に対する回答は以下のとおりである。パイロット特別学校においては、プロジェクト介入前（2014/2015年度）とプロジェクト介入後（エンドライン調査時）で比較し、それ程大きな差は現れていないが、概ね「指導したくない」「少し指導してみたい」という回答が減少し、「指導したい」「大変指導したい」という回答が増加している。

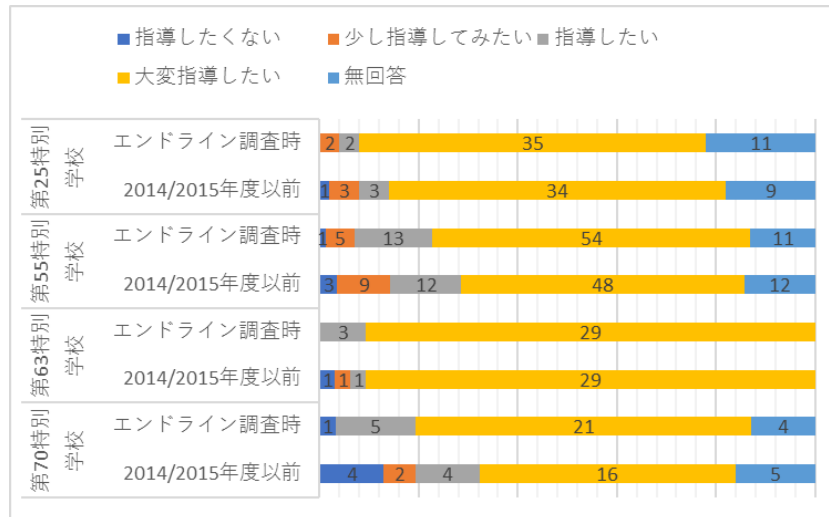


図 4-6 障害のある子どもをあなたのクラスで指導したいか（パイロット特別学校）(n=197)

パイロット通常学校の場合は、プロジェクト介入前（2014/2015年度）とプロジェクト介入後（エンドライン調査時）の回答ではっきりとした違いがみられる。第16学校、第28学校、第35学校、第111学校、第113学校では、「指導したくない」という回答が減り、「少し指導してみたい」という回答が増え、教員の意識に一定の改善がみられる。一方、第26学校、第34学校、第79学校、Titem第2学校、Ireedui21世紀統合学校では、「指導したい」「大変指導したい」という回答が増加しており、指導への積極性が増していることが分かる。

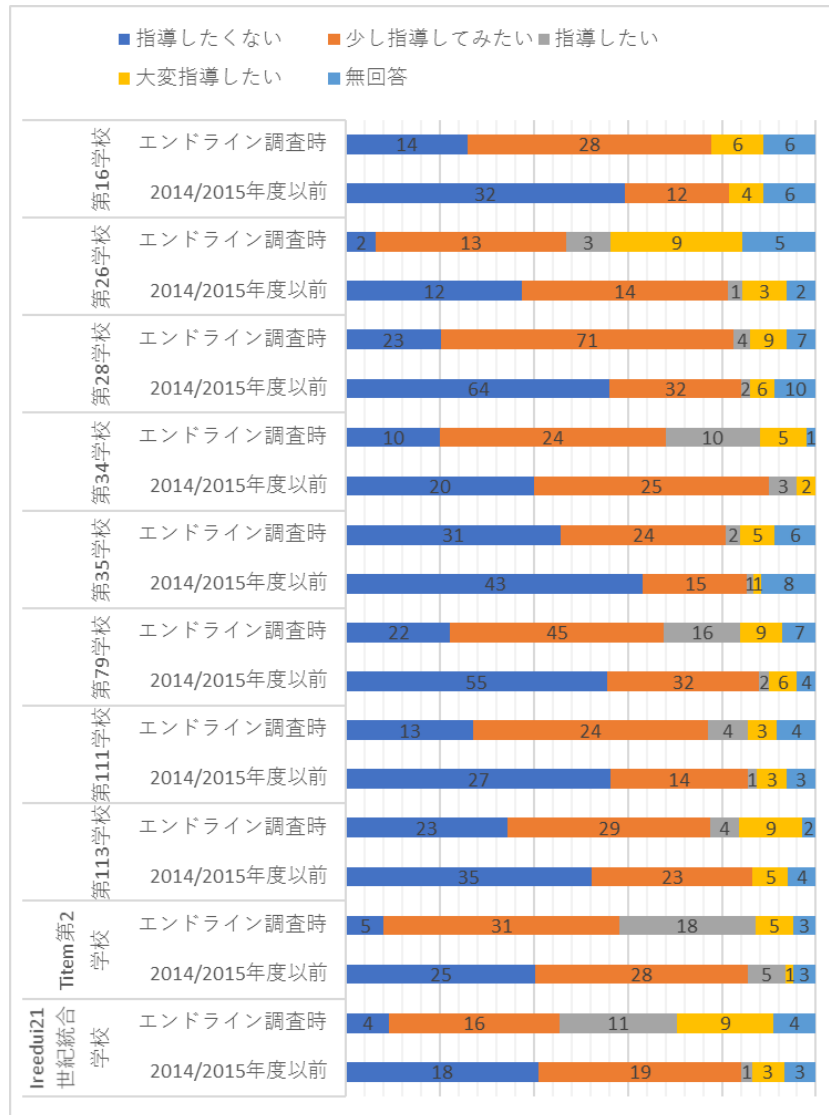


図 4-7 障害のある子どもを自分のクラスで指導したいか（パイロット通常学校）(n=638)

障害のある子どもを自分のクラスで指導したくないと考える理由について質問した。回答は図 4-8 のとおりである。プロジェクト介入前に「特別学校で学んだ方がよい」と考えていた教員は 135 人であったのに対し、プロジェクト介入後には 125 人に減少している。同様に、プロジェクト介入前に受け入れの準備が整っていなかった理由として「教材がない」「指導技術がない」を挙げた教員よりも、プロジェクト介入後にこれらの理由を挙げた教員の方が少ない。このことから、プロジェクト介入後、教材や指導技術についてはある程度改善されたと認識している教員が多いことが分かる。一方、「負担」や「他の児童生徒の保護者」に対する認識はプロジェクト介入前、介入後でほとんど変化はない。

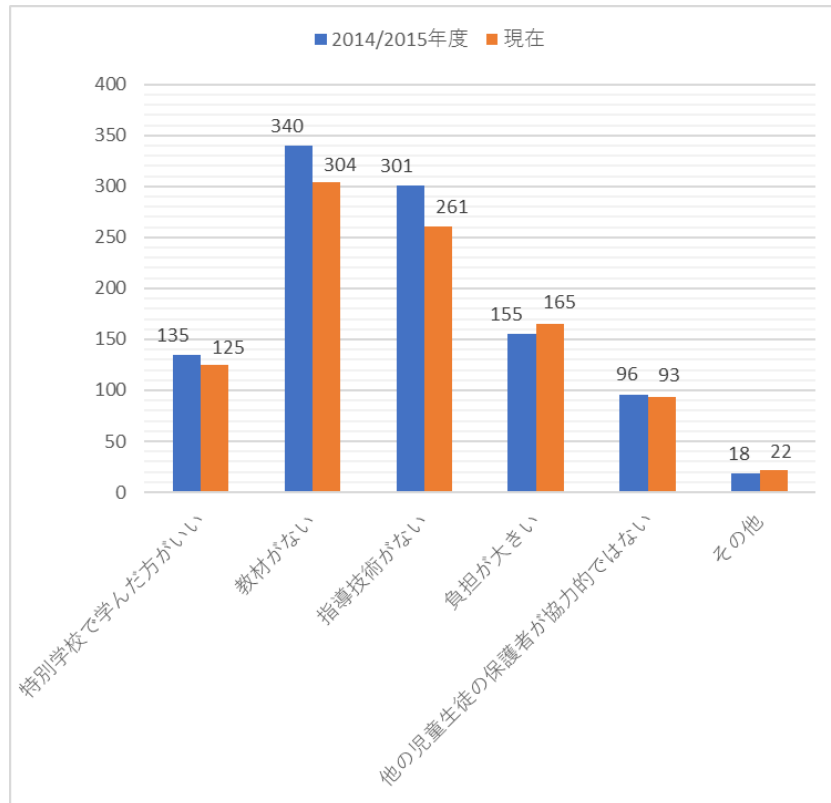


図 4-8 自分のクラスで指導したくない理由（パイロット通常学校）※(n=638)

障害のある児童生徒を指導することに自信があるかを尋ねた。パイロット特別学校においては、プロジェクト介入前（2014/2015 年度以前）と比較し、エンドライン調査時の方が「自信がある」「大変自信がある」と回答した教員数が増加している。自信を持てる理由として「特別学校に勤務し、日常的に障害のある児童生徒と関わっていること」を理由に挙げる教員が最も多かった。また、「障害や指導法についての研修を受け、知識を習得したこと」という回答も多かった。

※ 「その他」の内訳

2014/2015 年度：環境が整備されていない、1 クラス当たりの児童生徒数が多い。  
 エンドライン調査時：環境が整備されていない、他の児童生徒が集中できない、他の児童生徒に対する説明会を開催する必要がある、校内委員会の協力が必要、追加手当がない、専門の教員が配置されていない、教室が足りない、移動が大変、新任の教員のため自信がない。

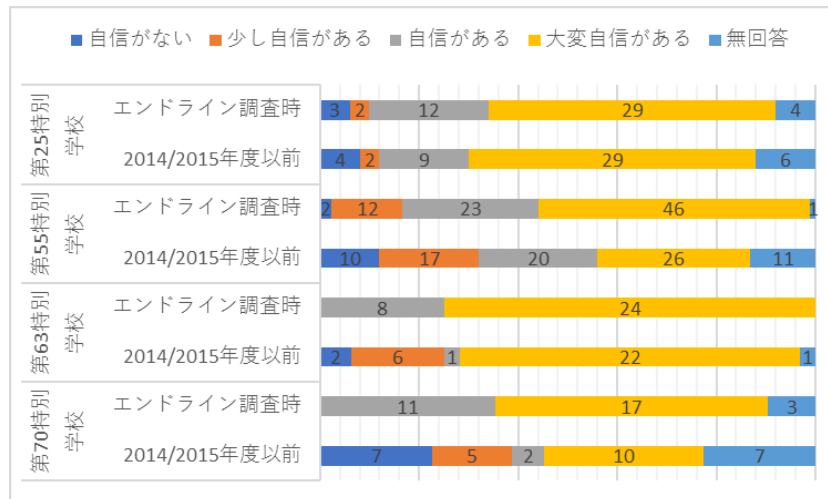


図 4-9 障害のある児童生徒を指導する自信（パイロット特別学校）(n=197)

パイロット通常学校の場合も、プロジェクト介入前(2014/2015年度)とプロジェクト介入後(エンドライン調査時)の回答ではっきりとした違いがみられた。第16学校、第28学校、第35学校、第111学校、第113学校では、「自信がない」という回答が減り、「少し自信がある」という回答が増えている。一方、第26学校、第34学校、第79学校、Titem第2学校、Ireedui21世紀統合学校では、「自信がある」という回答が増加している。自信が持てる理由として、「障害や指導法についての研修を受け、知識を習得したこと」を挙げた教員が多かった。一方、自信が持てていない理由として、「研修を受けられておらず、指導法や関わり方が分からない」「実際に指導した経験がないこと」が挙げられており、校内で教員の知識や経験に個人差があることがうかがわれる。



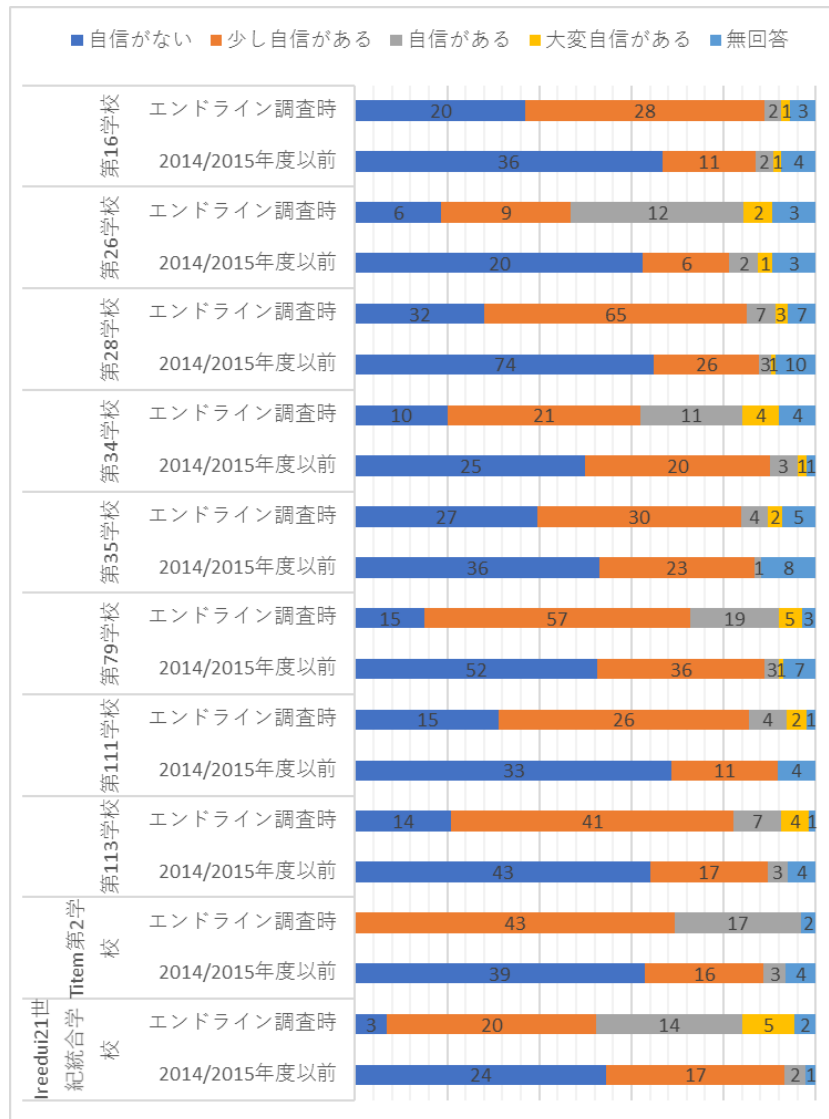


図 4-10 障害のある児童生徒を指導する自信（パイロット通常学校）(n=638)

### 3. 能力

#### 3-1 「障害」の捉え方

「障害」の捉え方を確認するために、障害について説明してもらった。回答は「心身機能に言及」「支援の必要性に言及」「活動や行動の制限に言及」「環境上の障壁に言及」「その他」に分類した。心身機能に言及したのは、パイロット特別学校の回答者の32.99%、パイロット通常学校では54.55%に及んでいた。環境上の障壁に言及したのはわずか3人であり、障害の社会モデルの考え方が浸透していないことが明らかとなった。

表 4-5 教員の「障害」の捉え方（パイロット特別学校 n=197、パイロット通常学校 n=638）

パイロット特別学校		パイロット通常学校	
心身機能に言及	65	心身機能に言及	348
支援の必要性に言及	29	支援の必要性に言及	65
活動や参加の制限に言及	29	活動や参加の制限に言及	38
環境上の障壁に言及	0	環境上の障壁に言及	3
その他*	30	その他*	71
無回答	44	無回答	113

\*「その他」の回答として、「他の子どもと異なる特徴」などがあつた。

### 3-2 知識・理解

パイロット特別学校、通常学校教員の当該分野に関する知識・理解を確認するため、6項目合計22問のテスト（それぞれ4つの選択肢から回答を選択する形式）を実施した。

各設問の正答数（無効回答は不正解として扱った）は、表 4-6、4-7 のとおりである。

表 4-6 「障害」に対する知識・理解を問う問題（パイロット特別学校）

No.	質問	学校名	ベースライン	エンドライン	
				全回答者	ワーキングチーム
<b>1</b>	<b>障害理解</b>		<b>32.49%</b>	<b>37.83%</b>	<b>53.57%</b>
1.1	モンゴルにおいて「国連障害者の権利に関する条約」はいつ批准されたか。	第 25 特別学校	1/39	11/49	2/12
		第 55 特別学校	21/69	17/83	4/14
		第 63 特別学校	6/37	14/32	2/4
		第 70 特別学校	6/31	14/31	4/6
1.2	国際生活機能分類（ICF）において、障害は、「機能障害」「活動の制限」と何を含む包括的な用語として用いられているか。	第 25 特別学校	29/39	16/49	6/12
		第 55 特別学校	35/69	33/83	7/14
		第 63 特別学校	9/37	16/32	4/4
		第 70 特別学校	13/31	15/31	4/6
<b>2</b>	<b>早期発見・介入</b>		<b>43.61%</b>	<b>45.97%</b>	<b>50.74%</b>
2.1	乳幼児健診の目的は何か。	第 25 特別学校	37/39	32/49	5/12
		第 55 特別学校	48/69	60/83	11/14
		第 63 特別学校	21/37	28/32	4/4
		第 70 特別学校	23/31	25/31	6/6
2.2	障害の早期発見の時期はいつか。	第 25 特別学校	11/39	16/49	1/12
		第 55 特別学校	19/69	24/83	5/14
		第 63 特別学校	12/37	10/32	3/4
		第 70 特別学校	20/31	12/31	2/6
2.3	障害児の早期発見・早期支援において最も重要なのは何か。	第 25 特別学校	12/39	13/49	2/12
		第 55 特別学校	8/69	18/83	3/14
		第 63 特別学校	7/37	13/32	3/4
		第 70 特別学校	5/31	8/31	2/6
2.4	二次障害とは何か。	第 25 特別学校	25/39	17/49	2/12
		第 55 特別学校	30/69	42/83	6/14
		第 63 特別学校	12/37	17/32	2/4
		第 70 特別学校	10/31	14/31	5/6
<b>3</b>	<b>子どもの発達に関する知識</b>		<b>44.66 %</b>	<b>54.64%</b>	<b>52.60%</b>
3.1	新生児の発達評価の指標となり、中枢神経系の成熟と共に数か月で消失していくものは何か。	第 25 特別学校	16/39	27/49	5/12
		第 55 特別学校	41/69	47/83	4/14
		第 63 特別学校	9/37	17/32	1/4
		第 70 特別学校	18/31	16/31	4/6
3.2	生後9カ月頃の社会性の発達指標	第 25 特別学校	10/39	21/49	5/12

	となるのは何か。	第 55 特別学校	27/69	33/83	10/14
		第 63 特別学校	11/37	20/32	3/4
		第 70 特別学校	8/31	12/31	2/6
3.3	乳幼児の運動発達を正しく説明するのはどれか。	第 25 特別学校	29/39	22/49	3/12
		第 55 特別学校	30/69	41/83	4/14
		第 63 特別学校	7/37	19/32	3/4
		第 70 特別学校	20/31	15/31	4/6
3.4	乳幼児期の感覚の発達を正しく説明するのはどれか。	第 25 特別学校	25/39	30/49	4/12
		第 55 特別学校	36/69	59/83	10/14
		第 63 特別学校	18/37	24/32	3/4
		第 70 特別学校	14/31	20/31	5/6
<b>4</b>	<b>障害分類の理解</b>		<b>52.57%</b>	<b>47.23%</b>	<b>54.69%</b>
4.1	知的障害を正しく説明するものはどれか。	第 25 特別学校	26/39	21/49	3/12
		第 55 特別学校	44/69	43/83	9/14
		第 63 特別学校	15/37	11/32	1/4
		第 70 特別学校	25/31	17/31	4/6
4.2	自閉症スペクトラム障害の診断基準には何が含まれるべきか。	第 25 特別学校	31/39	29/49	5/12
		第 55 特別学校	43/69	57/83	8/14
		第 63 特別学校	26/37	25/32	4/4
		第 70 特別学校	24/31	25/31	5/6
4.3	小児脳性まひについて正しく説明するものはどれか。	第 25 特別学校	16/39	13/49	4/12
		第 55 特別学校	6/69	26/83	4/14
		第 63 特別学校	8/37	11/32	3/4
		第 70 特別学校	12/31	6/31	1/6
4.4	学習障害について正しく説明するものはどれか。	第 25 特別学校	17/39	18/49	4/12
		第 55 特別学校	33/69	40/83	7/14
		第 63 特別学校	15/37	17/32	3/3
		第 70 特別学校	18/31	11/31	3/4
<b>5</b>	<b>個別教育計画 (IEP) についての理解</b>		<b>42.02%</b>	<b>39.52%</b>	<b>40.71%</b>
5.1	個別教育計画 (IEP) 策定にあたり、障害のある子どもをアセスメントする際、最も重要なのは何か。	第 25 特別学校	20/39	24/49	4/12
		第 55 特別学校	39/69	41/83	7/15
		第 63 特別学校	21/37	19/32	3/4
		第 70 特別学校	17/31	18/31	3/6
5.2	個別教育計画 (IEP) の目的を正しく説明するものはどれか。	第 25 特別学校	14/39	2/49	2/12
		第 55 特別学校	1/69	10/83	1/14
		第 63 特別学校	6/37	1/32	0/4
		第 70 特別学校	5/31	5/31	2/6
5.3	個別教育計画 (IEP) を立案するにあたり、適切なものはどれか。	第 25 特別学校	33/39	31/49	6/12
		第 55 特別学校	37/69	47/83	11/14
		第 63 特別学校	21/37	16/32	2/4
		第 70 特別学校	18/31	20/31	4/6
5.4	個別教育計画 (IEP) を立案するにあたり、Vygotsky (Выготский) の「発達の最近接領域 (Zone of Proximal Development) に最も関連のあるものは何か。	第 25 特別学校	17/39	16/49	2/12
		第 55 特別学校	27/69	37/83	5/14
		第 63 特別学校	8/37	15/32	3/4
		第 70 特別学校	8/31	7/31	1/6
<b>6</b>	<b>指導法についての理解</b>		<b>27.97%</b>	<b>26.80%</b>	<b>34.38%</b>
6.1	声を出して表現することが難しい、重度の知的障害のある子どもに対する指導において、最も適切なものはどれか。	第 25 特別学校	8/39	6/49	1/12
		第 55 特別学校	9/69	12/83	2/14
		第 63 特別学校	4/37	7/32	2/4
		第 70 特別学校	6/31	0/31	0/6
6.2	自閉症の子どもへの環境の「構造化」に当てはまるものは何か。	第 25 特別学校	18/39	24/49	5/12
		第 55 特別学校	35/69	34/83	7/14
		第 63 特別学校	11/37	18/32	4/4
		第 70 特別学校	7/31	7/31	3/6

6.3	文字の読み書きの学習に影響を与える「視覚認知」に最も関連のあるものは何か。	第 25 特別学校	3/39	13/49	1/12
		第 55 特別学校	11/69	12/83	2/14
		第 63 特別学校	12/37	4/32	0/4
		第 70 特別学校	16/31	11/31	3/6
6.4	数が分からない子どもへの指導で最も注意すべき点は何か。	第 25 特別学校	4/39	11/49	3/12
		第 55 特別学校	27/69	28/83	3/14
		第 63 特別学校	12/37	14/32	2/4
		第 70 特別学校	14/31	7/31	4/6

ベースライン調査時のテスト結果と、エンドライン調査時の全回答者の結果、ワーキングチームのみの結果で比較すると、ワーキングチームの結果は、ほぼベースライン調査時を上回っている。ワーキングチームについては、ベースライン調査時よりも知識や理解が深まっていることが分かる。

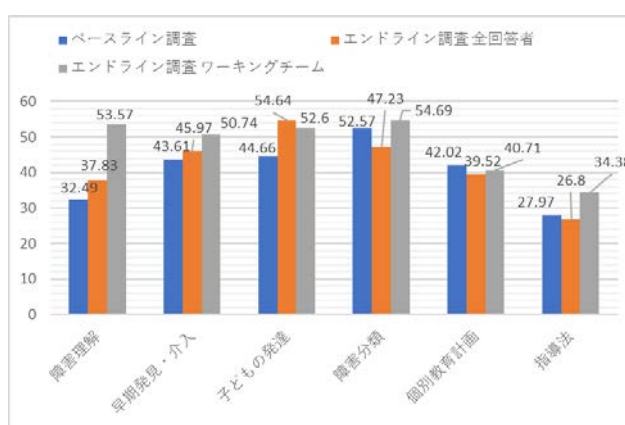


図 4-11 障害に対する知識・理解テスト結果各領域の平均（パイロット特別学校）（ベースライン調査：n=176、エンドライン調査：全回答者 n=195、ワーキングチーム n=36）

表 4-7 「障害」に対する知識・理解を問う問題（パイロット通常学校）

No.	質問	学校名	ベースライン	エンドライン	
				全回答者	ワーキングチーム
<b>1</b>	<b>障害理解</b>		<b>17.84%</b>	<b>24.58%</b>	<b>23.90%</b>
1.1	モンゴルにおいて「国連障害者の権利に関する条約」はいつ批准されたか。	第 16 学校	8/58	5/52	0/3
		第 26 学校	7/35	11/31	2/6
		第 28 学校	14/108	19/113	1/6
		第 34 学校	2/56	7/50	1/7
		第 35 学校	6/72	11/66	0/3
		第 79 学校	12/120	20/99	5/18
		第 111 学校	2/42	4/48	0/6
		第 113 学校	9/61	6/67	4/14
		Titem	14/28	24/62	7/13
Ireedui	5/23	8/44	3/14		
1.2	国際生活機能分類（ICF）において、障害は、「機能障害」「活動の制限」と何を含む包括的な用語として用いられているか。	第 16 学校	9/58	21/52	1/3
		第 26 学校	7/35	10/31	1/6
		第 28 学校	27/108	28/113	1/6
		第 34 学校	7/56	13/50	3/7

		第 35 学校	23/72	16/66	0/3
		第 79 学校	25/120	34/99	8/18
		第 111 学校	3/42	10/48	1/6
		第 113 学校	10/61	14/67	3/14
		Titem	6/28	29/62	8/13
		Ireedui	6/23	15/44	4/14
2	早期発見・介入		<b>35.07%</b>	<b>36.86%</b>	<b>35.21%</b>
2.1	乳幼児健診の目的は何か。	第 16 学校	37/58	29/52	1/3
		第 26 学校	22/35	25/31	4/6
		第 28 学校	67/108	65/113	2/6
		第 34 学校	26/56	29/50	6/7
		第 35 学校	42/72	29/66	2/3
		第 79 学校	77/120	60/99	8/18
		第 111 学校	15/42	23/48	4/6
		第 113 学校	32/61	30/67	8/14
		Titem	24/28	44/62	10/13
		Ireedui	15/23	32/44	10/14
2.2	障害の早期発見の時期はいつか。	第 16 学校	16/58	14/52	1/3
		第 26 学校	12/35	10/31	1/6
		第 28 学校	39/108	39/113	1/6
		第 34 学校	16/56	19/50	2/7
		第 35 学校	16/72	18/66	0/3
		第 79 学校	27/120	35/99	6/18
		第 111 学校	10/42	9/48	1/6
		第 113 学校	19/61	21/67	7/14
		Titem	5/28	22/62	4/13
		Ireedui	11/23	19/44	7/14
2.3	障害児の早期発見・早期支援において最も重要なのは何か。	第 16 学校	8/58	10/52	0/3
		第 26 学校	13/35	6/31	1/6
		第 28 学校	23/108	31/113	1/6
		第 34 学校	7/56	16/50	2/7
		第 35 学校	9/72	12/66	1/3
		第 79 学校	25/120	22/99	3/18
		第 111 学校	5/42	7/48	1/6
		第 113 学校	12/61	10/67	2/14
		Titem	10/28	13/62	3/13
		Ireedui	3/23	9/44	5/14
2.4	二次障害とは何か。	第 16 学校	20/58	12/52	0/3
		第 26 学校	12/35	16/31	3/6
		第 28 学校	28/108	47/113	2/6
		第 34 学校	14/56	14/50	3/7
		第 35 学校	27/72	13/66	2/3
		第 79 学校	36/120	40/99	6/18
		第 111 学校	11/42	14/48	3/6
		第 113 学校	22/61	15/67	2/14
		Titem	10/28	31/62	4/13

		Ireedui	7/23	19/44	1/14
<b>3</b>	<b>子どもの発達に関する知識</b>		<b>28.12%</b>	<b>36.55%</b>	<b>37.85%</b>
3.1	新生児の発達評価の指標となり、中枢神経系の成熟と共に数か月で消失していくものは何か。	第 16 学校	17/58	18/52	0/3
		第 26 学校	12/35	19/31	3/6
		第 28 学校	37/108	43/113	1/6
		第 34 学校	14/56	21/50	3/7
		第 35 学校	24/72	16/66	0/3
		第 79 学校	40/120	31/99	6/18
		第 111 学校	10/42	14/48	3/6
		第 113 学校	17/61	11/67	4/14
		Titem	13/28	35/62	5/13
		Ireedui	10/23	24/44	9/14
3.2	生後 9 カ月頃の社会性の発達指標となるのは何か。	第 16 学校	13/58	17/52	0/3
		第 26 学校	11/35	13/31	3/6
		第 28 学校	29/108	20/113	0/6
		第 34 学校	3/56	7/50	1/7
		第 35 学校	14/72	13/66	2/3
		第 79 学校	24/120	20/99	4/18
		第 111 学校	6/42	8/48	2/6
		第 113 学校	6/61	15/67	6/14
		Titem	7/28	26/62	4/13
		Ireedui	3/23	18/44	7/14
3.3	乳幼児の運動発達を正しく説明するのはどれか。	第 16 学校	15/58	5/52	0/3
		第 26 学校	6/35	9/31	2/6
		第 28 学校	18/108	36/113	1/6
		第 34 学校	6/56	19/50	4/7
		第 35 学校	9/72	13/66	0/3
		第 79 学校	18/120	26/99	6/18
		第 111 学校	5/42	13/48	3/6
		第 113 学校	12/61	19/67	5/14
		Titem	16/28	21/62	4/13
		Ireedui	5/23	14/44	6/14
3.4	乳幼児期の感覚の発達を正しく説明するのはどれか。	第 16 学校	23/58	21/52	2/3
		第 26 学校	20/35	23/31	5/6
		第 28 学校	43/108	68/113	3/6
		第 34 学校	17/56	27/50	5/7
		第 35 学校	20/72	24/66	1/3
		第 79 学校	31/120	54/99	11/18
		第 111 学校	7/42	14/48	1/6
		第 113 学校	21/61	29/67	9/14
		Titem	17/28	42/62	8/13
		Ireedui	15/23	31/44	10/14
<b>4</b>	<b>障害分類の理解</b>		<b>20.43%</b>	<b>24.00%</b>	<b>25.89%</b>
4.1	知的障害を正しく説明するものはどれか。	第 16 学校	23/58	18/52	2/3
		第 26 学校	11/35	15/31	1/6
		第 28 学校	51/108	53/113	2/6

		第 34 学校	17/56	9/50	1/7
		第 35 学校	22/72	20/66	3/3
		第 79 学校	33/120	39/99	10/18
		第 111 学校	17/42	19/48	3/6
		第 113 学校	25/61	19/67	7/14
		Titem	15/28	29/62	6/13
		Ireedui	12/23	18/44	8/14
4.2	自閉症スペクトラム障害の診断基準には何が含まれるべきか。	第 16 学校	8/58	15/52	1/3
		第 26 学校	7/35	11/31	2/6
		第 28 学校	11/108	25/113	1/6
		第 34 学校	14/56	19/50	1/7
		第 35 学校	9/72	12/66	0/3
		第 79 学校	22/120	38/99	4/18
		第 111 学校	5/42	8/48	0/6
		第 113 学校	9/61	15/67	3/14
		Titem	6/28	14/62	2/13
		Ireedui	2/23	20/44	7/14
4.3	小児脳性まひについて正しく説明するものはどれか。	第 16 学校	7/58	6/52	0/3
		第 26 学校	3/35	4/31	1/6
		第 28 学校	16/108	9/113	1/6
		第 34 学校	2/56	4/50	1/7
		第 35 学校	8/72	5/66	0/3
		第 79 学校	7/120	11/99	1/18
		第 111 学校	5/42	5/48	0/6
		第 113 学校	4/61	4/67	0/14
		Titem	5/28	10/62	2/13
		Ireedui	1/23	6/44	6/14
4.4	学習障害について正しく説明するものはどれか。	第 16 学校	10/58	5/52	0/3
		第 26 学校	10/35	11/31	4/6
		第 28 学校	21/108	21/113	0/6
		第 34 学校	8/56	13/50	2/7
		第 35 学校	15/72	9/66	1/3
		第 79 学校	16/120	25/99	3/18
		第 111 学校	6/42	6/48	1/6
		第 113 学校	5/61	7/67	2/14
		Titem	7/28	16/62	3/13
		Ireedui	2/23	7/44	4/14
5	個別教育計画 (IEP) についての理解		21.40%	22.90%	22.23%
5.1	個別教育計画 (IEP) 策定にあたり、障害のある子どもをアセスメントする際、最も重要なものは何か。	第 16 学校	14/58	6/52	1/3
		第 26 学校	12/35	10/31	0/6
		第 28 学校	20/108	18/113	0/6
		第 34 学校	13/56	13/50	2/7
		第 35 学校	16/72	7/66	0/3
		第 79 学校	20/120	19/99	2/18
		第 111 学校	6/42	12/48	1/6
		第 113 学校	11/61	8/67	3/14
		Titem	19/28	20/62	4/13
		Ireedui	7/23	12/44	7/14
5.2	個別教育計画 (IEP) の目的を正しく説明するものはどれか。	第 16 学校	11/58	3/52	0/3
		第 26 学校	6/35	0/31	0/6



		第 28 学校	13/108	18/113	1/6
		第 34 学校	7/56	10/50	0/7
		第 35 学校	13/72	9/66	0/3
		第 79 学校	21/120	21/99	2/18
		第 111 学校	5/42	10/48	1/6
		第 113 学校	7/61	10/67	3/14
		Titem	4/28	6/62	2/13
		Ireedui	2/23	4/44	2/14
5.3	個別教育計画 (IEP) を立案するにあたり、適切なものはどれか。	第 16 学校	16/58	12/52	1/3
		第 26 学校	10/35	14/31	2/6
		第 28 学校	39/108	42/113	1/6
		第 34 学校	15/56	21/50	5/7
		第 35 学校	28/72	26/66	1/3
		第 79 学校	37/120	36/99	3/18
		第 111 学校	10/42	17/48	5/6
		第 113 学校	14/61	19/67	6/14
		Titem	13/28	32/62	8/13
		Ireedui	9/23	33/44	11/14
5.4	個別教育計画 (IEP) を立案するにあたり、Vygotsky (Выготский) の「発達の最近接領域 (Zone of Proximal Development) に最も関連のあるものは何か。	第 16 学校	10/58	4/52	0/3
		第 26 学校	3/35	5/31	0/6
		第 28 学校	18/108	21/113	1/6
		第 34 学校	1/56	5/50	1/7
		第 35 学校	18/72	13/66	0/3
		第 79 学校	15/120	12/99	2/18
		第 111 学校	3/42	3/48	0/6
		第 113 学校	6/61	4/67	2/14
		Titem	3/28	18/62	5/13
		Ireedui	3/23	15/44	5/14
6	<b>指導法についての理解</b>		<b>21.86%</b>	<b>19.84%</b>	<b>20.20%</b>
6.1	声を出して表現することが難しい、重度の知的障害のある子どもに対する指導において、最も適切なものはどれか。	第 16 学校	13/58	10/52	0/3
		第 26 学校	7/35	5/31	1/6
		第 28 学校	24/108	23/113	0/6
		第 34 学校	13/56	7/50	1/7
		第 35 学校	16/72	9/66	0/3
		第 79 学校	23/120	21/99	1/18
		第 111 学校	6/42	8/48	1/6
		第 113 学校	20/61	8/67	1/14
		Titem	6/28	17/62	2/13
		Ireedui	9/23	5/44	1/14
6.2	自閉症の子どもへの環境の「構造化」に当てはまるものは何か。	第 16 学校	4/58	5/52	1/3
		第 26 学校	2/35	5/31	2/6
		第 28 学校	7/108	7/113	2/6
		第 34 学校	3/56	10/50	3/7
		第 35 学校	6/72	6/66	1/3
		第 79 学校	8/120	11/99	1/18
		第 111 学校	2/42	7/48	2/6
		第 113 学校	4/61	6/67	3/14
		Titem	0/28	11/62	3/13
		Ireedui	4/23	9/44	3/14
6.3	文字の読み書きの学習に影響を与える「視覚認知」に最も関連の	第 16 学校	9/58	6/52	1/3
		第 26 学校	13/35	8/31	1/6

	あるものは何か。	第 28 学校	33/108	34/113	0/6
		第 34 学校	14/56	14/50	2/7
		第 35 学校	22/72	10/66	1/3
		第 79 学校	27/120	36/99	4/18
		第 111 学校	6/42	9/48	1/6
		第 113 学校	17/61	12/67	2/14
		Titem	11/28	12/62	2/13
		Ireedui	6/23	11/44	2/14
6.4	数が分からない子どもへの指導 で最も注意すべき点は何か。	第 16 学校	12/58	17/52	1/3
		第 26 学校	18/35	9/31	3/6
		第 28 学校	35/108	23/113	0/6
		第 34 学校	14/56	12/50	1/7
		第 35 学校	22/72	9/66	1/3
		第 79 学校	30/120	30/99	4/18
		第 111 学校	10/42	14/48	1/6
		第 113 学校	23/61	16/67	5/14
		Titem	9/28	21/62	2/13
		Ireedui	5/23	10/44	4/14

パイロット通常学校についても、ベースライン調査時のテスト結果と、エンドライン調査時の全回答者の結果、ワーキングチームのみの結果で比較した。「指導法」以外の項目については、ベースライン調査時よりエンドライン調査時の結果が上回っている。

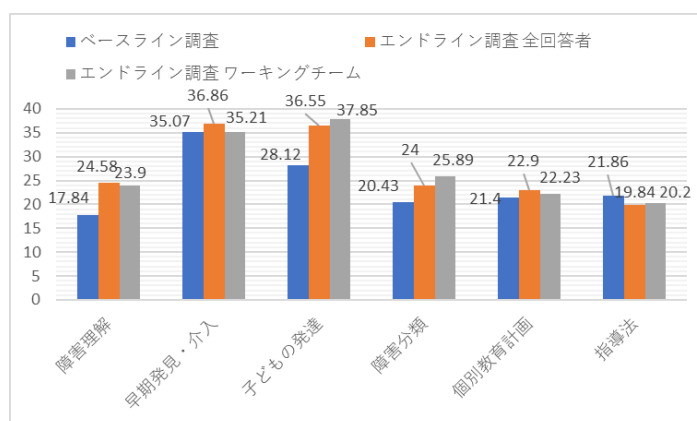


図 4-12 障害に対する知識・理解テスト結果各領域の平均（パイロット通常学校）（ベースライン調査：n=603、エンドライン調査：全回答者 n=632、ワーキングチーム n=93）

### 3-3（パイロット特別学校ワーキングチームのみ）個別教育計画の比較

2018年8月31日及び9月3日に、パイロット特別学校のワーキングチームを対象にフォーカス・グループ・インタビューを実施した。

表 4-8 インタビューの概要

パイロット特別学校	インタビュー日	参加者数
第 25 特別学校	8 月 31 日	11 名
第 55 特別学校	8 月 31 日	9 名

第 63 特別学校	9 月 3 日	5 名
第 70 特別学校	9 月 3 日	9 名

特別学校ワーキングチームにプロジェクト介入前に作成されていた個別教育計画と、プロジェクトの介入を受けて改善された個別教育計画を比較しながら、児童生徒の実態を把握する能力、個別教育計画を策定する能力がどのように変化したのかを振り返ってもらった。プロジェクトが特別学校とともに個別教育計画のフォーマットを開発し、各校でそれを活用するようになったことで、ワーキングチームは児童生徒の実態を把握する能力及び個別教育計画を策定する能力について、以下の肯定的な変化が生じていると認識している。

- 児童生徒の実態把握を行えるようになった。
- 具体的な長期目標、短期目標、指導の内容が計画できるようになった。
- 教員間の情報共有が促進された。
- 家庭との話し合いが行えるようになった。

中には、「クラスの全児童生徒が平等に教育を受けられる機会を得られるようになってきた。以前は重度の障害のある児童生徒は他の児童生徒から離れて他の活動をしていたが、個別教育計画と指導案を作るようになってからは、授業の中で一緒に活動ができるようになった」との意見もあった。

## 第 25 特別学校

- プロジェクト開始前の個別教育計画は、科目別の目標・指導方法を学校と家庭に分けて大まかに書くものだった。プロジェクトとともに開発した新しいフォーマットは、児童生徒の実態を詳しく書き、長期目標と短期目標を別々に書くことができ、児童生徒に関するいろいろな情報が一目で分かるようになった。最初は長期目標・短期目標を適切に立てることが難しかった。慣れるまで、何度か教員たちで相談する必要があった。
- プロジェクト開始前の個別教育計画は、教科別に、クラスの中で遅れている児童生徒について作成していた。最近では障害が重度の児童生徒が多くなったので、重度の児童生徒に活用しやすいようフォーマットを修正していった経緯がある。2016年の時点では、本校のフォーマットは他の特別学校と異なっていたと思う。担任教員が一人で作成し、その教員だけが活用していた。現在の個別教育計画は、児童生徒の実態に始まり、その他、様々な情報が記載されている。他の教科の教員たちも互いに何を教えてどのような目標を設定しているか、共有できる形になったので、良くなったと思う。個別教育計画を作成するために、複数の教員がチームで取り組むことで、児童生徒の成果につながることをわかった。
- プロジェクトを通じて、教員はいろいろなことを学んだ。プロジェクト開始以前に使用していたフォーマットには一般的なことを書いていたので、細かいところまでは分からなかった。プロジェクトとともに開発した新しいフォーマットには、家族構成や子どもの発達段階などが書けるようになった。いろいろな情報が記載されるようになったのが良かった。長期目標をまず設定して、それを短期目標に分けていくところが一番のポイントだと思う。以前は目標として、「読めるようになる」「切れるようになる」などと大まかに書いていただけで、ど

うやって読めるように支援していくのか、ということを書いていなかった。活動を細かく計画できるようになったことが大きい。

### **第 55 特別学校**

- プロジェクト開始前のフォーマットには、児童生徒の情報を書いていなかったのも、担任しか当該児童生徒について理解していなかった。プロジェクトとともに開発した新しいフォーマットには子どもの情報が記入してあるので、他の教員にも分かりやすい。また、以前は保護者や本人の希望は聞かずに、担任が一人で書いていた。大まかなことしか書いていなかった。個別教育計画の対象期間が適切かどうかについても検討してこなかった。新しいフォーマットには、児童生徒について詳しく書くようになった。当該児童生徒に関わっている教員たちで相談して作成するようになり、教員の連携が強まった。いつどこで何を指導するかという欄があるので、指導の際に分かりやすくなった。具体的に個別教育計画を書いてみると、児童生徒の変化も分かりやすい。

### **第 63 特別学校**

- プロジェクト開始前は個別教育計画の共通フォーマットはなかった。20 分間の個別指導の時間のみ、個別教育計画を作成していた。言語療法の教員が、当該児童生徒の計画をたてて、他の教員はその内容を知らなかった。プロジェクト開始後は、児童生徒に関わる複数の教員が情報共有できるようになった。1 年目は混乱もあったが、2 年目からは皆で対応できるようになった。つまり 3 年前の個別教育計画は非常に一般的な内容だった。児童生徒の現状はどうなっているか、まったく記載がなかった。指導案についても、教科ごとに大まかに書いてあって、一人ひとりのための計画というより、クラス全体のための計画のようなものだった。児童生徒がどのような場面で教員から支援を受けるのか、そういったことも書かれていなかった。
- 新しい個別教育計画フォーマットは、目標や支援内容が教科ごとに記入できるようになっている。指導案の内容も具体的になって、クラスの全児童生徒が平等に教育を受けられる機会を得られるようになってきた。以前は重度の障害のある児童生徒は他の児童生徒から離れて他の活動をしていたが、個別教育計画と指導案を作るようになってからは、授業の中で一緒に活動ができるようになった。
- 個別教育計画を作ることで、障害のある児童生徒の実態を把握して、発達段階のどのあたりなのか、次のステップに進むにはどのような指導をしたらよいかということを考えるようになってきた。長期目標に基づいて子どもに簡単なことからステップ・バイ・ステップで難しいことをやらせるようになってきた。教員が協力して取り組むことも以前よりできるようになってきた。チームで取り組むことで、学校と家庭との話し合いも増えた。個別教育計画を活用することで教員たちの指導法も変わった。

### **第 70 特別学校**

- プロジェクト開始前は、教員たちが別々に個別教育計画を作っていた。新しく大臣令で規定された個別教育計画フォーマットができたことで、記載内容が細かくなったし、一人ひとり

の児童生徒について、その児童生徒に関わる複数の教員が相談しながら個別教育計画を書けるようになった。小学部・中学部の教員の連携が強まった。重度の障害のある児童生徒が小学部から中学部に進級する時も、個別教育計画があるので中学部の教員への引継ぎが容易になった。4種類の発達領域に分けられているので細かく書けるようになった。

- プロジェクトは非常に有意義だったと思う。教員も多くのことを学んで活用することができた。指導方法も新しいことを学ぶことができた。個別教育計画は、実態把握やアセスメントをしたうえで各領域に分けて目標を設定する。そのため、子どもの発達を促せるツールになったと思う。家庭と学校の話し合いのツールとしても活用できるようになった。保護者から児童生徒の実態を聞き取ることができて、以前は知らなかった家庭での様子も知ることができた。プロジェクトのおかげで指導法を改善することができたし、児童生徒への対応もよくなったと思う。知識は以前からあったが、それをどう実践するかわからなかった。今はそれができるようになっている。
- プロジェクトとともに開発した個別教育計画のフォーマットには、本時の目的、対象児の目的を書くようになっているので、授業の狙いが分かりやすくなった。以前のフォーマットではまとめて書いていて、授業の細かな部分は教員の頭の中にしか入っていなかった。授業に必要なことを文字にして表すということを学んだ。以前は各校で異なるフォーマットを使っていたし、同じ学校でも教員によって異なっていた。今は統一されたフォーマットで準備して同じ内容を書くようになったので、教員の側も児童生徒の側も同じメリットを得られるようになった。

### 3-4 (パイロット特別学校ワーキングチームのみ) 授業の比較

特別学校ワーキングチームにプロジェクトによる介入前の授業（2016年）と介入後の授業（2018年）のビデオを20分程度視聴し、比較しながら、個々のニーズに応じた指導を行う能力がどのように変化したのかを振り返ってもらった。

4校中3校のワーキングチームが指導案について言及しており、指導案を作成して研究授業を行う経験を通じて、個々のニーズに応じた指導を行うことができるようになったと感じていることが明らかになった。具体的には、ニーズに応じた教材が作成されるようになり、補助教員が子どもの活動を支援できるようになっている。また、児童をほめるようになっている。

## 第25 特別学校

視聴した授業の映像：

2016年3月23日 算数3年生「追いかけて算」（授業者：N.Munkhzul）

2018年3月6日 算数3年生「△□○の形の弁別と同形を探そう」（授業者：D.Iderkhuu）

- 補助教員の動きが以前と変わっている。2018年の授業では補助教員が必要に応じて子どもの活動を支援している。
- 2018年の授業では、児童の注意を妨げるような余分なものを教室に置かないようにしている。ニーズに応じた個別の課題を対象児に与え、教員の近くに座るよう指示している。授業

の準備がうまくできればできるほど、よい授業になることが分かった。

### 第 55 特別学校

視聴した授業の映像：

2016年3月24日 生活オリエンテーション1年生

「交通手段について」（授業者：M.Sainbuyan）

2018年5月8日 生活オリエンテーション5年生

「交通安全対策について」（授業者：Ts.Enkhsuren）

- 2016年の授業者はベテラン教員であったが、個別に課題を出してはいなかった。児童に対してレベル別の課題は与えていたが、プリントにして渡すようなことはしていなかった。
- 2018年の指導案は細かく計画されており、詳細な指導案を作成することの重要性が校内で理解されるようになった。また授業で使用する教材の種類も増えている。スモールステップで指導し、できたらほめるということが実践されるようになってきているようだ。

### 第 63 特別学校

視聴した授業の映像：

2016年3月23日 算数3年生「1000までのかけ割り算」（授業者名不明）

2018年4月12日 図工3年生「イチゴ作り」（授業者名：S.Erdenechimeg）

- 2016年の授業では教員は教えることだけに集中しており、教えられている児童の反応については気にしなかったようだ。褒めることも少なく多面的な指導がみられなかった。
- 2018年の授業では全児童が授業に参加できるように心がけており、補助教員の役割や子どもへのかかわり方も変わっている。以前は座席配置にも配慮していなかったが、2018年の授業のビデオでは教員が児童の反応や回答を引き出すために待つようになっていた。だんだんと、ニーズに応じた支援ができるようになってきている。
- 2018年の授業では、児童生徒の状態に応じて指導案が3つのレベルに分かれていており、教材もレベル別に作られている。

### 第 70 特別学校

視聴した授業の映像：

2016年3月25日 国語3年生「読み書き方の練習」（授業者：M.Batkishig）

2018年3月15日 国語3年生「“嵐”をテーマに動作を示す単語の弁別」（M.Unurmaa）

- 2016年には授業を始める時には挨拶をしていたが、児童をほめることは少なかった。本時の目標を児童のレベル別に設定し、頭の中で考えておくだけでなく、2018年には指導案を書くことにより、具体的で分かりやすい展開となっている。

- 2018年には、手作り教材をよく作って使うようになった。児童にも微細運動の発達を促す作品を作ってもらえるようになってきた。また、個別教育計画で児童の実態を把握できるようになったので、それぞれのニーズに応じた適切な指導もできている。

### 3-5 (パイロット特別学校ワーキングチームのみ) 通常学校への支援

特別学校と通常学校の連携を深めることで、障害のある児童生徒の学びの場を通常学校に広げていくため、プロジェクトではパイロット特別学校1校当たり2校のパイロット通常学校をパートナーとして、助言活動を実施した。エンドライン調査では、パイロット特別学校のワーキングチームに助言活動について振り返ってもらった。

助言活動を通じて、ワーキングチームは通常学校教員と知識・技能・意欲の差を感じており、さらなる支援の必要性を感じていることが分かった。また、パートナー通常学校の教員の変化を促したり、正しい理解を促進したりできたと感じている。

表 4-9 パイロット特別学校とパートナー通常学校

パイロット特別学校	パートナー通常学校
第 25 特別学校	第 16 学校・第 35 学校
第 55 特別学校	第 70 学校・第 111 学校
第 63 特別学校	第 26 学校・第 34 学校
第 70 特別学校	第 28 学校・第 113 学校

#### 第 25 特別学校

通常学校への助言活動を行うには、理論・実践の両面から高い知識を持つ必要があると分かった。ウランバートル市のパイロット通常学校、フブスグル県のパイロット通常学校でも、学習に遅れのある児童生徒は「障害児」として捉えられがちである。どのような特徴があるか、どんなことができるかを調査せずに、1分間に標準単語数を読めないから知的障害ではないかとすぐに疑う。学校側からアセスメントの依頼を受ける児童は、そういう子どもが多かった。

学習面で遅れている子どもに対し「バカの第 25 特別学校へ行きなさい」と言うということが昔からあった。特別学校と通常学校の教員同士の連携もなかった。互いに理解し合おうとしてこなかった。

本プロジェクトの活動を通して、通常学校で ADHD や学習障害について講義をしたが、理解する教員、理解しない教員の両方がいるようだった。話さない子どもも増えているようで、通常学校では言語療法について知りたいというニーズが高まっている。これからはもっと通常学校の教員にも指導法や障害種などについて教えていく必要があると感じている。

#### 第 55 特別学校

パイロット通常学校において保護者向けの研修を実施した際には、保護者が教材に興味を示してくれた。自分の専門の話をできたので良かった。第 111 学校の教員たちも変わってきた。助言活動に行くと、自分の経験を振り返ることにもなり、それは自分の勉強にもなった。



### 第 63 特別学校

通常学校の教員たちは「障害のある子どもに対して指導したい」という気持ちはあるが、どうやって実施したらよいのか方法がわからない。助言活動で細かく指導すればできるが、そこまでの時間をとることが難しかった。

助言活動で重度の障害のある子どもの例を挙げて話をしたら、通常学校の教員たちは驚いていた。特別学校に通う子どもと通常学校に通う子どもの実態の違いが大きすぎて、あまり参考にならない様子だった。

教員間での意識の違いも大きかった。やる気のある教員もいれば、興味のない教員もいた。学習の遅れを LD と思い込んで、LD かどうかアセスメントして欲しいと言ってくる教員もいた。アセスメントをするかどうか重要ではなく、その子どもをどのように指導するかが重要であるということ伝えるのがとても難しかった。

助言活動を実施する時は、私たちもすべてを知っているわけではないので、プロジェクトが実施した研修資料を参考にした。それが通常学校の教員たちの正しい理解につながったと思う。

### 第 70 特別学校

2名の教員が、第 28 学校へ助言に行った。第 28 学校が設置した子ども発達センターにどんな教材を入れたらよいかについて助言をすることができた。センターで学ぶ 4 人の児童の指導方法について助言し、言語指導も行った。1 年次は教員に助言し、2 年次は子ども発達センターで学ぶ子どもへの指導も行った。より実践的な指導ができるようになった。4 人のうち 1 人の保護者が第 70 特別学校に来て、麻痺のある子どもに対して何か指導をして欲しいと言ったこともある。

今後も継続して通常学校に対する助言活動を実施していく。5 月にはバヤンゴル区の通常学校のアセスメントを実施した。このときに、他の通常学校からも助言の要請があった。バヤンゴル区には通常学校が 19 校あり、そのうち 1 校で小学部の教員向けに講義をして欲しいと依頼された。区の全学校の小学部の教員を集めて講義をすることを、区の教育課とも相談して計画しているところである。

### 3-6 (パイロット通常学校ワーキングチームのみ) 合理的配慮の提供

パイロット通常学校教員の合理的配慮を提供する能力について、プロジェクトの介入によりどのように変化したかを確認する目的で、パイロット通常学校 10 校のワーキングチームにインタビューを実施した。

表 4-10 インタビューの概要

パイロット校	インタビュー日	参加者数
第 16 学校	12 月 11 日	6 人
第 26 学校	12 月 11 日	8 人
第 28 学校	10 月 26 日	9 人
第 34 学校	10 月 25 日	6 人
第 35 学校	10 月 24 日	3 人

第 79 学校	12 月 14 日	4 人
第 111 学校	10 月 23 日	4 人
第 113 学校	12 月 10 日	9 人
Titem 第 2 学校	10 月 31 日	6 人
Ireedui21 世紀統合学校	11 月 1 日	10 人

どの学校においても、プロジェクトの介入を通じて、合理的配慮という概念を知った教員がほとんどであり、多くのワーキングチームメンバーが、絵カードなど教材の活用、分かりやすい指示、学習内容の変更を行っていることが分かった。児童生徒のニーズに応じて指導する今後も続ける予定であり、その効果として「児童生徒だけではなく、教員も楽になった」と語るワーキングチームメンバーもあった。

## 第 16 学校

### 【認識の変化】

- プロジェクトによる介入前までは、「合理的配慮」という言葉も知らなかった。5～6年前から障害のある児童生徒が学んでいたが、当時は何の配慮もしていなかった。

### 【実施している配慮】

- 絵カードは使用しているが、数が足りないので、保護者に支援をお願いしている。
- 1年生用の時間割には、教科名を文字で記載するのではなく、教科書の表紙をコピーして掲示している。
- 交通安全、手洗いの指導などを行っている。
- 一斉指導なので、理解度に応じた学習内容の変更などはしていない。
- 短く、分かりやすい指示などはしていない。

## 第 26 学校

### 【認識の変化】

- プロジェクトによる介入前までは、「合理的配慮」という言葉も知らなかった。ただ、障害のあると思われる児童生徒をアセスメントしていただけだった。
- 2016年と比べると教員の理解が進んだ。

### 【実施している配慮】

- 現在、個別教育計画を作成している児童生徒に対しては、学習内容を変えている。例えば、なぞり書きができるような教材を用意している。
- 1年生には絵を使って時間割を示すようにしている。
- ステッカーなどを使って指示をしている。
- クラスの児童生徒には、障害のある子をいじめたりしては駄目、と指導している。
- 車椅子の児童生徒が通りやすくするため、(プロジェクトの支援で)スロープを設置したのがよかった。
- 遠くから通う子が多かったので、送迎バスの効果は大きい。障害のある児童生徒とない児童生徒の交流が進んできた。

- 障害のある児童生徒の保護者の理解が乏しかったが、今では理解が進んできた。毎日だけでなく、可能な時だけ来て欲しいと伝えたとこ、学校の送迎バスに乗れなくとも、正午になって自分でバスに乗ってくる子も出てきた。

## 第 28 学校

### 【認識の変化】

- プロジェクトによる介入前、ソーシャルワーカーは合理的配慮について知っていたが、教員は知らなかった。算数などでは習熟度別の指導を行っていた。
- 児童生徒だけではなく、教員にとっても効果があるので、合理的配慮を続ける。

### 【実施している配慮】

- すべての教員が、児童生徒の理解度に応じた学習内容の変更を行っている。絵カードや実物の活用もされている。1日の時間割を分かりやすく掲示するため、特別な教育的ニーズのある児童生徒に対しては図などを活用している。「指示は分かりやすく」というのはすべての教員が意識していることである。

## 第 34 学校

### 【認識の変化】

- プロジェクトによる介入前にも、障害のある女児が2名、在籍していたが合理的配慮という言葉は知らなかった。
- 児童生徒のニーズに応じて指導することは効果があると分かったので合理的配慮の提供は継続する。

### 【実施している配慮】

- 児童生徒の理解度に応じた学習内容の変更はしている。補習などもしている。全教員が絵カードや実物を活用した指導を行っている。時間割の表示の仕方については特に工夫していない。
- 指示の仕方については特段の工夫はしていない。

## 第 35 学校

### 【認識の変化】

- プロジェクトによる介入前は、合理的配慮という言葉は知らなかった。
- 今後も継続する。

### 【実施している配慮】

- 学習内容の変更、絵カードの使用、時間割も工夫している。声掛けはあまり意識していない。

## 第 79 学校

### 【認識の変化】

- プロジェクトによる介入前は、合理的配慮という言葉は知らなかった。校長が本邦研修から帰国して報告会を行った。それを通じて知った。
- 効果を感じているし、続ける。
- 各クラスに1~2名程度、個別指導が必要な児童生徒がいると認識している。「個別指導が必

要な児童生徒は手がかかるので、特別学級を作ればいい」という教員もいるが、それはしない。共に学ぶのがいいと思う。

- 障害のある児童生徒を指導する教員に対して手当が支給されるといい。

**【実施している配慮】**

- 全クラスで、絵カードや実物を使って指導するよう努めている。
- 個別教育計画を作成している児童生徒に対しては学習内容の調整をしている。
- 個別教育計画を作成していない児童生徒にも、特に低学年の児童には時間割の表示に写真を使うなどの工夫をしている。担任教員に対し写真を配布している。
- 指示の具体化について学校としては何もしていない。教員に委ねている。
- 毎月開催される保護者との会議で、担任が障害のある子どもについて説明している。児童に対する説明も担任教員の責任である。

### **第 111 学校**

**【認識の変化】**

- 合理的配慮を提供することの効果を感じているので続けている。児童生徒だけではなく、教員も楽になった。
- プロジェクトのおかげで、障害のある児童に対する同級生の態度が変わった。保護者の理解も深まった。
- 学区内の子どもはどんな子どもでも受入れる。学区外からも、当校が有名になってきたので就学希望があるが、受入れは教室のキャパシティを考慮して決める。来年は新しい校舎が完成するので余裕ができるかもしれない。

**【実施している配慮】**

- 個別教育計画を作成している3年生と4年生の児童に対しては、指導内容を1～2年生程度にしている。柔軟な対応をしている。ゆっくり、分かりやすく指導している。

### **第 113 学校**

**【認識の変化】**

- 合理的配慮を提供することは効果があるので今後も続ける。トイレの設置など環境の整備も行う。

**【実施している配慮】**

- 障害児を持つ保護者に、他の児童生徒に対し、障害について話をしてもらったことがある。
- 障害児と診断された子については、学習内容を簡易にしている。昨年、教育省の専門官から、特別学校向けの算数の教科書もらった。その教科書は有効だったと思う。
- 絵カードや実物を使っての指導はすべての子どもに対して行うよう努めている。
- 時間割の表示の仕方は特に工夫していない。
- ニーズのある子どもは1クラスに1名程度なので特別な声掛けなどは行っていない。

### **Titem 第 2 学校**

**【認識の変化】**

- プロジェクトによる介入前は、合理的配慮については知らなかった。プロジェクトの研修を通じて理解するようになった。

【実施している配慮】

- 児童生徒の理解度に応じて、補習などを行っている。絵カード・実物を使う工夫をしている。子ども発達センターを利用している児童生徒に対しては1日の時間割を分かりやすく示している。
- 小学部教員が分かりやすい指示をするのは当然。中学部でも心掛けている。

**Ireedui21 世紀統合学校**

【認識の変化】

- プロジェクトによる介入前は、合理的配慮については知らなかった。ドナー（NGO）から学校整備のために1,000万TG受領したり、韓国との交流があったりしたが、結局、よく理解できていなかった。
- 合理的配慮についてよく分かった。今後も続ける。

【実施している配慮】

- ニーズのある子どもに対しては小学部だけではなく、中学部の教室でも行っている。高等部ではあまり意識されていない。

4. 質問票

Questionnaires for Endline Survey

QUESTIONNAIRE: SCHOOL TEACHERS

JICA Project for Strengthening Teachers' Ability and Reasonable Treatments for Children with Disabilities (START) has been implemented since August 2015. This survey is conducted prior to the termination of the Project (July 2019) to understand the effect of the project in Bayangol district and Khuvsgul Aimag. Please write your name. The information submitted shall not be used for any purpose other than this project. This survey result shall not be released in any way that allows the identification of individuals.  
 \*Person with Disabilities is defined by the Law of Rights of Persons with Disabilities.

Date: .....

Name of respondents: .....

Are you a working team member of the school?  Yes  No

School name: .....

Data collector: .....

1. General Information

No.	Questions	Answer
1.1	Gender	<input type="checkbox"/> Male <input type="checkbox"/> Female
1.2	Age	.....(please write )
1.3	How many years of teaching experience do you have in total?	..Q..... year (please write)
1.4	What is your designation at your school?	<input type="checkbox"/> School principal <input type="checkbox"/> Education manager <input type="checkbox"/> Social worker <input type="checkbox"/> School doctor <input type="checkbox"/> Disability specialist <input type="checkbox"/> Speech therapist <input type="checkbox"/> Physical therapist <input type="checkbox"/> Primary teacher <input type="checkbox"/> Secondary teacher (Subject.....) <input type="checkbox"/> Other (.....)
1.5	Do you have any experience teaching CWDs?	<input type="checkbox"/> Yes (move to →1.6) <input type="checkbox"/> No <input type="checkbox"/> I don't know (If possible, please let us know the reason)..... .....
1.6	(If you answer "yes" to 1.5)	.....number of students (please write)

	How many CWDs have you taught in total?	
1.7	Did you prepare an IEP?	<input type="checkbox"/> No <input type="checkbox"/> Yes (Prior to 2014/2015) <input type="checkbox"/> Yes (After 2015/2016)
1.8	Did you attend the training on teaching CWDs?	<input type="checkbox"/> No <input type="checkbox"/> Yes (Prior to 2014/2015) <input type="checkbox"/> Yes (After 2015/2016)
1.9	Was your school ready to accept CWDs in 2014/2015 (prior to the project)?	<input type="checkbox"/> No ( <b>move to → 1.10</b> ) <input type="checkbox"/> A little bit ( <b>move to → 1.10</b> ) <input type="checkbox"/> Quite a lot ( <b>move to → 1.10</b> ) <input type="checkbox"/> Very much
1.10	Why do you think that your school was not ready to accept CWDs in 2014/2015 (prior to the project)? (Multiple answers allowed)	<input type="checkbox"/> Because it was better for them to study at special school <input type="checkbox"/> Because the teaching material and equipment were not ready to accept them. <input type="checkbox"/> Because teachers' skills were not ready to accept them. <input type="checkbox"/> Because teachers' workload would be increased. <input type="checkbox"/> Because the parents of other students were not happy. <input type="checkbox"/> Others ( )
1.11	Is your school ready to accept CWDs?	<input type="checkbox"/> No ( <b>move to → 1.12</b> ) <input type="checkbox"/> A little bit ( <b>move to → 1.12</b> ) <input type="checkbox"/> Quite a lot ( <b>move to → 1.12</b> ) <input type="checkbox"/> Very much
1.12	Why do you think that your school is not ready to accept CWDs? (Multiple answers allowed)	<input type="checkbox"/> Because it is better for them to study at special school <input type="checkbox"/> Because the teaching material and equipment are not ready to accept them. <input type="checkbox"/> Because teachers' skills are not ready to accept them. <input type="checkbox"/> Because teachers' workload will be increased. <input type="checkbox"/> Because the parents of other students are not happy. <input type="checkbox"/> Others ( )
1.13	Were you willing to accept CWDs to your class in 2014/2015 prior to the project?	<input type="checkbox"/> No ( <b>move to → 1.14</b> ) <input type="checkbox"/> A little bit ( <b>move to → 1.14</b> ) <input type="checkbox"/> Quite a lot ( <b>move to → 1.14</b> ) <input type="checkbox"/> Very much
1.14	Why were you not willing to accept CWDs? (Multiple answers allowed)	<input type="checkbox"/> Because it was better for them to study at special school <input type="checkbox"/> Because the teaching material and equipment were not ready to accept them. <input type="checkbox"/> Because teachers' skills were not ready to accept them. <input type="checkbox"/> Because teachers' workload would be increased. <input type="checkbox"/> Because the parents of other students were not happy. <input type="checkbox"/> Others ( )
1.15	Are you willing to	<input type="checkbox"/> No ( <b>move to → 1.16</b> )



	accept CWDs to your class?	<input type="checkbox"/> A little bit ( <b>move to → 1.16</b> ) <input type="checkbox"/> Quite a lot ( <b>move to → 1.16</b> ) <input type="checkbox"/> Very much
1.16	Why are you not willing to accept CWDs? (Multiple answers allowed)	<input type="checkbox"/> Because it is better for them to study at special school <input type="checkbox"/> Because the teaching material and equipment are not ready to accept them. <input type="checkbox"/> Because teachers' skills are not ready to accept them. <input type="checkbox"/> Because teachers' workload will be increased. <input type="checkbox"/> Because the parents of other students are not happy. <input type="checkbox"/> Others ( )
1.17	Were you confident in teaching CWDs in 2014/2015 (prior to the project)?	<input type="checkbox"/> No <input type="checkbox"/> A little bit <input type="checkbox"/> Quite a lot <input type="checkbox"/> Very much
1.18	Why? (please describe the reason of 1.17)	<p>.....</p> <p>.....</p>
1.19	Are you confident in teaching CWDs?	<input type="checkbox"/> No <input type="checkbox"/> A little bit <input type="checkbox"/> Quite a lot <input type="checkbox"/> Very much
1.20	Why? (please describe the reason of 1.20)	<p>.....</p> <p>.....</p>

## 2. Knowledge and skill

No.	Questions	Answer
2.1	Please explain what " <b>Disability</b> " is by one or two sentences.	

## 3. Relation with other organizations

No.	Questions	Answer	
		Organization	How did you work with
3.1	Concerning with CWDs, did you work with other organizations in 2017-2018? (Multiple answers allowed.)	<input type="checkbox"/> Social Development Department of <i>Aimag</i>	
		<input type="checkbox"/> Social Welfare Service Department of <i>Aimag</i>	
		<input type="checkbox"/> Education and Culture Department of <i>Aimag</i>	
		<input type="checkbox"/> Kindergarten	
		<input type="checkbox"/> Special school	
		<input type="checkbox"/> Regular school	
		<input type="checkbox"/> Labor Department of <i>Aimag</i>	
		<input type="checkbox"/> Medical center of <i>Aimag</i>	
		<input type="checkbox"/> Social worker of khoroo or bag	
		<input type="checkbox"/> Family doctor	
<input type="checkbox"/> Others			
3.2	Do you know the <b>Commission</b> on Health, Education, and Social Protection for CWDs?	<input type="checkbox"/> No, I don't know about Commission <input type="checkbox"/> Yes, I have heard about Commission <input type="checkbox"/> Yes, I know their role and members <input type="checkbox"/> Yes, I have contacted the Commission	
3.3	<b>(If you answer "yes" to 3.2)</b> What do you expect <b>the Commission</b> ?		
3.4	Do you know <b>Local Commission</b> on Health, Education, and Social Protection for CWDs?	<input type="checkbox"/> No, I don't know about Local Commission <input type="checkbox"/> Yes, I have heard about Local Commission <input type="checkbox"/> Yes, I know their role and members <input type="checkbox"/> Yes, I have contacted Local Commission	

3.5	(If you answer "yes" to 3.4.)  What do you expect <b>Local commission</b> ?	
3.6	<i>If you are a member of working team of special school,</i>  Did you conduct any advisory activities for regular schools?	<input type="checkbox"/> Yes  If, yes <input type="checkbox"/> How many times? _____ times

### QUIZ

I	Understanding of Disability
1	When did Mongolia ratify ‘UN convention of the rights of people with disabilities’? <input type="checkbox"/> In 1985. <input type="checkbox"/> In 2009. <input type="checkbox"/> Did not approve <input type="checkbox"/> Do not know
2	What other terminology used in comprehensively in the International Classification of Functioning Disability and Health (ICF), except ‘impairment’ and ‘activity limitation’? <input type="checkbox"/> Activity limitation <input type="checkbox"/> Economic limitation <input type="checkbox"/> Physical limitation <input type="checkbox"/> Do not know

II	Early identification and intervention
1	Which one relates to the goal of the infant’s identification and intervention? <input type="checkbox"/> To make clear what type of disability <input type="checkbox"/> To recognize whether an infant with a disability and without disability <input type="checkbox"/> To make early identification then to connect other assistance <input type="checkbox"/> Do not know
2	When does early identification and intervention suitable for an infant with a disability? <input type="checkbox"/> 1.5 years old <input type="checkbox"/> Five years old <input type="checkbox"/> It is different depends on the classification of disability <input type="checkbox"/> Do not know
3	Which one is the most important to early identification and intervention suitable for an infant with a disability? <input type="checkbox"/> Diagnosis in occupational clinic <input type="checkbox"/> Collaboration among health, welfare, education, and public institution <input type="checkbox"/> Activity for providing welfare allowances immediately. Do not know
4	What is deuteropathy? <input type="checkbox"/> Inadequate characters of performance and emotion caused by inconvenient nearby communication

	<input type="checkbox"/> Parents' are being exerted violence to their CWD child, because of their child is not the same the other regular child. <input type="checkbox"/> Parents' are put more attention to CWD child, because of they thought that their CWD child could not do anything. <input type="checkbox"/> Do not know
--	--

III	Knowledge of child development
1	Which one included in to the new born baby's development index and disappeared naturally at the same time while the central nervous system has developed? <input type="checkbox"/> New born baby's reflex <input type="checkbox"/> Gaggling and whimpering <input type="checkbox"/> Smiling <input type="checkbox"/> Do not know
2	Which statement to be included in to the socialization indexes of a baby who is 9 months? <input type="checkbox"/> Understanding the person's talk and feels together who communicate with him/her <input type="checkbox"/> Imitating the movement of the person who communicates with him/her <input type="checkbox"/> Focusing on the same objects through to eye contact and gestures by the person who communicates with him/her <input type="checkbox"/> Do not know
3	Which statement is the right explanation on infant's mobility development? <input type="checkbox"/> Development of the small muscle movement related to cognitive development and tight the objects by hand <input type="checkbox"/> Development of the big muscle movement is not different for each infant, where as small muscles movement is different for each infant. <input type="checkbox"/> If there is an intellectual disability, development of the big muscles will be left behind nor small muscles. <input type="checkbox"/> Do not know
4	Which skill is the right explanation of the infant's sensory development? <input type="checkbox"/> Could watch everything the same as an adult after one month of the birth. <input type="checkbox"/> An infant will study to follow to see somethin after infant can withstand his head <input type="checkbox"/> Since the fetus has received sounds while he/she inthe womb, thus hearing had developed before birth. Do not know

IV	Understanding aboutthe classification of Disabilities
1	Which statement is the right explanation of intellectual disability? <input type="checkbox"/> It means that intellectual activity which has been developing in an ordinary way declines due to the lack of social interaction. <input type="checkbox"/> Intellectual ability is much lower compared to peers, and every day, physical movement becomes limited. <input type="checkbox"/> Intellectual disability can happen during the child development stage and even during adolescence. <input type="checkbox"/> Do not know
2	Which standard includes diagnosing autism spectrum disorder? <input type="checkbox"/> Difficulty in communicating with others <input type="checkbox"/> Speech limitation

	<input type="checkbox"/> Intellectual limitation <input type="checkbox"/> Do not know
3	<p>Which one is the right explanation on a child with Cerebral palsy?</p> <input type="checkbox"/> A child with cerebral palsy has no problem with the eye sight, but one can have a problem with sight cognition <input type="checkbox"/> Among children with a cerebral palsy, some children with phonetic difficulty are intellectual disabled <input type="checkbox"/> If children with cerebral palsy goes under rehabilitation therapy, it is possible that one can have no disorder in the development of the movement. <input type="checkbox"/> Do not know
4	<p>Which statement is the right explanation of learning disability?</p> <input type="checkbox"/> It can be subordinated with an intellectual disability <input type="checkbox"/> It can be a hearing problem <input type="checkbox"/> It happens due to the loss of cognitive balance <input type="checkbox"/> Do not know

V	Understanding about Individual Education Plan “IEP”
1	<p>Which one is the most important thing that assessing CWDs in order to develop IEP</p> <input type="checkbox"/> Take development and intellectual tests using professional facilities <input type="checkbox"/> Have a disability assessment and diagnosis in a professional hospital <input type="checkbox"/> Study children from many ways such as making an observation using father/mother’s information and children’s mood <input type="checkbox"/> Do not know
2	<p>Which one contains the goal of IEP?</p> <input type="checkbox"/> Improve the quality of IEP adapted to every child’s necessity <input type="checkbox"/> Improve the quality of group training adapted to every child’s necessity <input type="checkbox"/> Improve the quality of home training adapted to every child’s necessity <input type="checkbox"/> Do not know
3	<p>Which task is more suitable for developing IEP?</p> <input type="checkbox"/> Set a long term goal as an ability to catch up with class content <input type="checkbox"/> Plan to achieve a long term goal ensuring short term goal <input type="checkbox"/> Make the item that a father/mother most wanted long term goal <input type="checkbox"/> Do not know
4	<p>Which concept is related to ‘Zone of Proximal Development’ by L.C.Vigotsky, which should be considered when we develop IEP?</p> <input type="checkbox"/> Define a long term goal <input type="checkbox"/> Define a short term goal <input type="checkbox"/> Decide a teaching method <input type="checkbox"/> Do not know

VI	Understanding about teaching methodology
1	<p>Which concept is more suitable for teaching to children with severe intellectual disability who are hardly expressing him or herself by voice?</p> <input type="checkbox"/> Teach phonology <input type="checkbox"/> Teach names using flashcards <input type="checkbox"/> Use expressive methods other than speech

	<input type="checkbox"/> Do not know
2	<p>Which concept relates to providing a suitable environment for children with autism?</p> <input type="checkbox"/> Demonstrate with photos which the program and activity order can be understood easily <input type="checkbox"/> Teach self-service habit, action, and gesture among the peers <input type="checkbox"/> To create a free environment where making children do their favorite things <input type="checkbox"/> Do not know
3	<p>Which one relates to reading and writing skill for visual sensation?</p> <input type="checkbox"/> Recognize upper and lower case letters <input type="checkbox"/> Recognize colors <input type="checkbox"/> Recognize shapes <input type="checkbox"/> Do not know
4	<p>When you teach children who do not know numbers, what do you need to consider mostly?</p> <input type="checkbox"/> Let children count loudly after showing authentic items <input type="checkbox"/> Let children copy after writing the numbers on the notebook <input type="checkbox"/> Observe whether children have a general knowledge about the numbers <input type="checkbox"/> Do not know

添付資料 8.

田中ビネー知能検査 V モンゴル版開発のための  
調査・研修参加者





## 田中ビネー知能検査Vモンゴル版開発にかかる調査協力者名簿一覧

Ulaanbaatar市（検査者）					
No.	氏名	所属機関	参加協力調査		
			予備予備調査	予備調査	本調査
1	Kh.Munkhzul	労働・社会保障省「障害児の保健・教育・社会保障委員会」（元社会保障担当委員）	○	-	-
2	E.Uyanga	労働・社会保障障害者発達庁（研究担当専門家）	-	○	-
3	G.Enkhbayar	労働・社会保障省障害者発達庁（心理士）	-	○	○
4	R.Galbadrakh	国立リハビリテーション病院（副院長）	-	-	○
5	G.Unurjargal	国立リハビリテーション病院（小児科医）	-	-	○
6	E. Dejid	国立母子保健センター（心理士）	○	○	○
7	B.Munkhzaya	国立精神保健センター（臨床心理士）	-	○	○
8	L.Tserendolgor	国立精神保健センター（医師）	-	○	○
9	Ba.Enkhtuya	Bayangol区「障害児の保健・教育・社会保障支部委員会」（教育担当委員）	-	○	○
10	B.Oyunbayar	Bayangol区保健センター（思春期外来担当医）	-	○	○
11	B.Natsagnyam	Bayangol区保健センター（小児科医）	○	-	○
12	B.Tsetsuudei	Bayangol区役所社会開発課（心理士）	-	○	○
13	D.Anardari	Bayangol区家庭児童青少年課（専門家）	-	○	○
14	B.Batchimeg	Sukhbaatar区家庭児童青少年課（心理士）	-	○	○
15	S.Dolgorsuren	Sukhbaatar「障害児の保健・教育・社会保障支部委員会」（心理士）	-	-	○
16	J.Davaa	モンゴル国立大学人文科学部教育心理学学科（教授）	-	-	○
17	B.Zolzaya	モンゴル国立大学人文科学部教育心理学学科（教授）	-	-	○
18	E.Oyundelger	モンゴル国立大学人文科学部教育心理学学科（教授）	-	-	○
19	Ts.Otgonbayar	第25特別学校(教員)	-	○	○
20	J.Otgontsetseg	第55特別学校(教員)	-	○	○
21	B.Mungunzagas	第70特別学校(教員)	-	○	○
22	Ch.Narantsetseg	第10特別幼稚園(学習マネージャー)	-	-	○
23	D.Enkhmunkh	第186特別幼稚園(園長)	-	○	-
24	Z.Chuluuntsetseg	第186特別幼稚園(学習マネージャー)	-	○	-
25	Kh.Ganbaatar	JICAモンゴル国障害児のための教育改善プロジェクト（コーディネーター）	○	○	○
26	D.Odgerel	JICAモンゴル国障害児のための教育改善プロジェクト（コーディネーター）	-	-	○
合計			4人	16人	22人

## 田中ビネー知能検査Vモンゴル版開発にかかる調査協力者名簿一覧

### Ulaanbaatar市（記録者）

No.	氏名	所属機関	参加協力調査		
			予備予備調査	予備調査	本調査
1	Ba.Enkhtuya	Bayangol区「障害児の保健・教育・社会保障支部委員会」（教育担当委員）	○	-	-
2	S.Enkhtuya	Bayangol区「障害児の保健・教育・社会保障支部委員会」（元委員）	○	-	-
3	B.Oyunbayar	Bayangol区保健センター（思春期外来担当医）	○	-	-
4	D.Byambadalai	Bayangol区保健センター（児童青少年担当コーディネーター）	-	-	○
5	N.Delgermaa	Bayangol区「Ariunchanar」家庭病院（家庭医）	-	○	-
6	B.Odmaa	Bayangol区「Ugtakhui」家庭病院（家庭医）	-	-	○
7	G.Urkhbileg	Bayangol区家庭児童青少年課（心理士）	-	○	○
8	T.Dulamsuren	応用心理学研究所（心理士）	-	-	○
9	A.Khaliunaa	応用心理学研究所（心理士）	-	-	○
10	B.Dulguun	応用心理学研究所（心理士）	-	-	○
11	A.Taivanjargal	応用心理学研究所（心理士）	-	-	○
12	T.Oidovchimed	応用心理学研究所（心理士）	-	-	○
13	B.Enkhtuya	Bayanzurkh区「障害児の保健・教育・社会保障支部委員会」（委員）	-	○	○
14	B.Rentsenkhand	Chingeltei区「障害児の保健・教育・社会保障支部委員会」（委員）	-	○	-
15	B.Oyumaa	Chingeltei区「障害児の保健・教育・社会保障支部委員会」（委員）	-	○	-
16	S.Dolgorsuren	Sukhbaatar区「障害児の保健・教育・社会保障支部委員会」（心理士）	-	○	-
17	S.Ichinnorov	Songino Khairkhan区「障害児の保健・教育・社会保障支部委員会」（委員）	-	○	-
18	T.Munkhgerel	Songino Khairkhan区児童青少年課（心理士）	-	○	-
19	E.Khulan	モンゴル国立医学大学（研修医）	-	○	-
20	A.Khulan	モンゴル国立医学大学(研修医)	-	○	-
21	R.Batchimeg	モンゴル国立教育大学教育学部(大学院生)	-	-	○
22	U.Bayartsetseg	第25特別学校（言語療法士）	-	-	○
23	T.Gerelee	第25特別学校（教員）	-	○	-
24	Z.Bolormaa	第25特別学校（アシスタント教員）	-	-	○
25	B.Byambasuren	第55特別学校（教員）	-	○	○
26	D.Ireedui	第55特別学校（教員）	-	-	○
27	B.Gereltuya	第70特別学校（教員）	-	○	-
28	Ch.Narantsetseg	第10特別幼稚園（学習マネージャー）	-	○	-
29	M.Oyuntuya	第10特別幼稚園(教諭)	-	○	○
30	A.Ariunzul	第10特別幼稚園(教諭)	-	-	○
31	Z.Tseveensuren	第186特別幼稚園（学習マネージャー）	-	-	○
32	B.Khulan	第186特別幼稚園(教諭)	-	-	○
33	D.Odgerel	第186特別幼稚園(教諭)	-	○	○
34	D.Enkhmunkh	第186特別幼稚園（園長）	-	-	-
35	B.Narangerav	JICAモンゴル国障害児のための教育改善プロジェクト（コーディネーター）	-	-	○
36	Ts.Munkhtuya	JICAモンゴル国障害児のための教育改善プロジェクト（コーディネーター）	-	-	○
37	B.Tuvshinjargal	JICAモンゴル国障害児のための教育改善プロジェクト（コンサルタント）	-	-	○
38	D.Odgerel	JICAモンゴル国障害児のための教育改善プロジェクト（コーディネーター）	○	-	-
合計			4人	16人	22人

## 田中ビネー知能検査Vモンゴル版開発にかかる調査協力者名簿一覧

### Khuvsgul県（検査者）

No.	氏名	所属機関	参加協力調査		
			予備予備調査	予備調査	本調査
1	D. Oyunchuluun	フブスグル県「障害児の保健・教育・社会保障支部委員会」（医療担当委員）	-	○	○
2	D. Baasansuren	フブスグル県「障害児の保健・教育・社会保障支部委員会」（教育担当委員）	-	-	○
3	Ch. Ayushjav	フブスグル県「障害児の保健・教育・社会保障支部委員会」（教育担当委員）	-	-	○
4	P. Galsandorj	フブスグル県社会政策課（教育担当専門家）	-	-	○
5	J. Myagmarnaran	県立総合病院（精神科医）	-	○	○
6	A. Zoljargal	県立総合病院（小児科医）	-	-	○
7	S. Sodnombyambaa	県立総合病院（精神科シニア看護師）	-	-	○
8	G. Bayarmaa	保健局（応急処置、サービス専門家）	-	-	○
9	Ch. Tugsjargal	労働福祉局（ソーシャルワーカー）	-	-	○
10	B. Otgongerel	労働福祉局（ソーシャルワーカー）	-	-	○
11	P. Bolor-Erdene	「Titem」第2学校子ども発達センター（教員）	-	-	○
12	B. Enkhjargal	「Ireedui」21世紀統合学校発達センター（教員）	-	-	○
13	B. Gundsambuu	第1幼稚園（教諭）	-	-	○
14	D. Tsolmon	第1幼稚園（教諭）	-	-	○
15	D. Ochirkhand	障害児の親の会「Gerelt Ireedui」児童発達センター（元ボランティア教員）	-	-	○
16	Kh. Ganbaatar	JICAモンゴル国障害児のための教育改善プロジェクト（コーディネーター）			○
17	D. Odgerel	JICAモンゴル国障害児のための教育改善プロジェクト（コーディネーター）			○
合計			0人	2人	17人

田中ビネー知能検査Vモンゴル版開発にかかる調査協力者名簿一覧

Khuvsgul県（記録者）

No.	氏名	所属機関	参加協力調査		
			予備予備調査	予備調査	本調査
1	M.Davaadulam	フブスグル県「障害児の保健・教育・社会保障支部委員会」（委員）	-	○	-
2	A.Byambasuren	労働福祉局（文庫担当専門家）	-	○	-
3	A. Buyankhishig	労働福祉局（栄養問題担当専門家）	-	-	○
4	P. Enkhbayar	県立総合病院（小児科看護師）	-	-	○
5	B. Norovsuren	県立総合病院（シニア看護師）	-	-	○
6	B.Sodnombuyan	「Delgermurun」家庭病院（看護師）	-	-	○
7	G. Munkhsaihan	「Titem」第2学校（教員）	-	-	○
8	B. Chimedsuren	「Titem」第2学校（教員）	-	-	○
9	S. Munkhzaya	「Titem」第2学校（教員）	-	-	○
10	B. Khishigjargal	「Ireedui」21世紀統合学校（教員）	-	-	○
11	G. Uugantuya	「Ireedui」21世紀統合学校（教員）	-	-	○
12	G. Gerelmaa	「Ireedui」21世紀統合学校（教員）	-	-	○
13	D. Batsukh	「Sod Erdem」学校（教員）	-	-	○
14	R. Byambadulam	「Sod Erdem」学校（教員）	-	-	○
15	G.Bayarmaa	第1幼稚園（教諭）	-	-	○
16	D. Narangerel	第4幼稚園（教諭）	-	-	○
17	S. Byambasuren	第4幼稚園（教諭）	-	-	○
18	D. Khaltar	「Uvgud」学習センター（リハビリテーション科専門医）	-	-	○
19	Tserenchimed	「Uvgud」学習センター（教員）	-	-	○
20	B.Narangerav	JICAモンゴル国障害児のための教育改善プロジェクト（コーディネーター）	-	-	○
21	Ts.Munkhtuya	JICAモンゴル国障害児のための教育改善プロジェクト（コーディネーター）	-	-	○
合計			0人	2人	19人

添付資料 9.

ポーテージ早期教育プログラム相談員養成研修修了者



## 「ポータルプログラム相談員養成研修修了者一覧」

Ulaanbaatar市					
No.	所属機関	役職	氏名	修了研修	
				第1回	第2回
1	労働・社会保障省「障害児の保健・教育・社会保障委員会」	元社会保障担当専門家	Kh.Munkhzul	○	-
2		元教育担当専門家	M.Uyanga	○	-
3		保健担当専門家	R.Nensenden	-	○
4	労働・社会保障省障害者発達庁	研究担当専門家	E.Uyanga	○	-
5		専門家	B.Nyamtssetseg	○	-
6		特別支援教育研究担当専門家	G.Surentsetseg	-	○
7		リハビリテーション専門医	N.Enkhtuya	-	○
8	教育・文化・科学・スポーツ省就学前教育政策局	児童発達教養保護政策実行担当シニア専門家	S.Bolormaa	-	○
9		就学前教育担当専門家	Munkhzaya	-	○
10	国立リハビリテーション病院	副院長	R.Galbadrakh	○	-
11		小児科医	G.Unurjargal	○	-
12	Bayangol区「障害児の保健・教育・社会保障支部委員会」	元委員	S.Enkhtuya	○	-
13		教育担当専門家	Ba.Enkhtuya	○	-
14		委員	E.Ariuntungalag	-	○
15	Bayangol区保健センター	理学療法士	A.Odontungalag	○	-
16		小児科医	N.Narantuya	○	-
17		家庭医担当マネージャー	B.Delgermaa	○	-
18		児童青少年担当コーディネーター	D.Byambadalai	-	○
19	モンゴル国立教育大学就学前教育学科	学科長	J.Batdelger	○	-
20		教授	G.Batjargal	○	-
21		教授	Ts.Oyunbileg	○	-
22		大学院生	Chimedtsogzol	-	○
23	モンゴル国立教育大学付属第249幼稚園	教諭	M.Byambasukh	○	-
24		教諭	B.Munkhtsetseg	○	-
25		アシスタント教諭	B.Lkhagvadelger	○	-
26		教諭	Uuganbayar	-	○
27	第85幼稚園	学習マネージャー	Dolgorsuren	-	○
28	第10特別幼稚園	ソーシャルワーカー	S.Enkhat	○	-
29		学習マネージャー	Ch.Narantsetseg	○	-
30		教諭	M.Oyuntuya	-	○
31	第186特別幼稚園	園長	D.Enkhmunkh	○	-
32		学習マネージャー	Z.Tseveensuren	○	-
33		教諭	B.Khulan	○	-
34		教諭	G.Mandakhbayar	○	-
35		教諭	Ch.Byambatseren	-	○
36	モンゴル視覚障害者協会附属「Narnii Khaan Khuukhduud」幼稚園	元園長	S.Oyuntuya	○	-
37		教諭	Kh.Delgermurun	-	○
38	「モンゴル自閉症協会」NGO	事務局長	L.Altangerel	○	-
39		渉外担当	A.Amarbuyan	○	-
40		アシスタント	Ch.Ariuntuya	○	-
41		会員	D.Odonchimeg	-	○
42		「Temujin and」附属幼稚園教諭	Ya.Ariunjargal	-	○
43	「モンゴルダウン症協会」NGO	会長	Sh.Munkhtseren	○	-
44		教員	E.Agiun	○	-
45		第63学校特別学級教員	G.Khongorzul	-	○
46		会員	P.Tuul	-	○
47	「障害児の親の会」NGO	教員	J.Uranchimeg	○	-
48		教育コンサルタント	R.Budkhand	-	○
49		プログラムコーディネーター	L.Budmaa	-	○
50		「Gegeelenセンター」センター長	Ts.Uyanga	-	○
51		「Gegeelenセンター」ボランティア	B.Azzaya	-	○
52		「Sain naizセンター」マネージャー	J.Altantulkhuur	-	○
53	「モンゴル特別幼稚園協会」NGO	「Khusliin Ordon」私立幼稚園教諭	B.Bolorsaikhan	-	○
54		教諭	B.Bazarsuren	-	○
55		教諭	D.Bayartsetseg	-	○
56	「Uchral」NGO	会長	G.Undrakh	-	○
57		取締役	M.Undram	-	○
合計				30人	27人

「ポータープログラム相談員養成研修修了者一覧」

Khuvsgul 県					
No.	所属機関	役職	氏名	修了研修	
				第1回	第2回
1	障害児の保健・教育・社会保障支部委員会	委員長	J.Ganbold	-	○
2		委員	M.Davaadulam	○	-
3		事務局長	Ts.Oyun-Erdene	○	-
4	「Ireedui21世紀」統合学校子ども発達センター	教員	B.Enkhjargal	○	-
5	「Titem」第2学校	ソーシャルワーカー	T.Burmaa	○	-
6	障害児の親の会NGO「Uvgud学習センター」	元教員	Jargalmaa	○	-
7	「Gerelt Ireedui」NGO	教員	D.Ochirkhand	○	-
8	労働福祉サービス局	障害者介護担当専門家	B.Otgongerel	-	○
9	県立総合病院	小児神経科医	J.Myagmarnaran	-	○
10	保健局	障害者看護担当専門家	O.Dagiimaa	-	○
11	「Zuv Ekhlel」子ども預かりサービスセンター	教員	P.Amarjargal	-	○
12	「Enkhjin」子ども預かりサービスセンター	教員	L.Natsagnyam	-	○
合計				6人	6人



「ポータルプログラム相談員養成研修修了者一覧」

その他Ulaanbaatar市郊外区及び地方県

No.	地域	所属機関	役職	氏名	修了研修	
					第1回	第2回
1	Baganuur区	「Gun Galuutai」総合学校	教員	P.Battsogt	-	○
2		第138幼稚園	教員	O.Bolormaa	-	○
3	Khovd県	家庭児童青少年局	障害者担当専門家	N.Narantuul	-	○
4		第12幼稚園	教員	M.Byambasuren	-	○
5	Orkhon県	障害児の保健・教育・社会保障支部委員会	社会保障担当委員	A.Unurjargal	-	○
6			保健担当委員	G.Bold	-	○
7	Umnugobi県	第5学校	特別学級教員	Baigalmaa	-	○
8	Dornod県	第11学校	特別学級教員	G.Tugsjargal	-	○
9	Darkhan-Uul県	第7幼稚園	教員	M.Oyunbat	-	○
合計					0人	9人



## 添付資料 10.

パイロット特別学校での研修実績



## パイロット特別学校での研修実績

### 1. 2015/2016 学校年度

	特別学校	日付	人数	テーマ
第1回	第25 特別学校	2015年11月30日	23	<ul style="list-style-type: none"> <li>●日本における(1)個別の教育支援計画、(2)個別の指導計画、(3)年間指導計画、(4)本時の指導計画について紹介</li> <li>実習1：モンゴルの個別教育計画と日本の計画（上記(1)～(4)）を比較し長所・短所について協議</li> <li>●実習2：(第25：脳性まひ、第55、70：自閉症、第63：言語障害)を伴う児童生徒について「個別教育計画(仮)フォーマット」へ記入</li> </ul>
		2015年12月16日	16	
	第55 特別学校	2015年12月04日	73	
	第63 特別学校	2015年12月01日	34	
	第70 特別学校	2015年12月03日	28	
第2回	第25 特別学校	2015年12月21日	37	<ul style="list-style-type: none"> <li>●実習：記載した「個別教育計画(仮)」へのフィードバック</li> <li>●講義1：本邦研修参加者による研修成果の共有</li> </ul>
	第55 特別学校	2015年12月17日	61	
	第63 特別学校	2015年12月17日	29	
	第70 特別学校	2015年12月22日	26	
第3回	第25 特別学校	2016年1月21日	28	<ul style="list-style-type: none"> <li>●モンゴル「特別ニーズ教育」について政策(教育省 Ganbold 氏)</li> <li>●合同授業・共同学習(教育研究所 Tsevegmid 氏)</li> <li>●バヤンゴル区の障害者支援政策・活動(Odontungalagtuul 氏)</li> </ul>
	第55 特別学校	未実施	-	
	第63 特別学校	2016年1月20日	17	
	第70 特別学校	2016年1月20日	28	
第4回	第25 特別学校	2016年2月3日	36	<ul style="list-style-type: none"> <li>●講義(第25：脳性まひ、第55、70：自閉症、第63：言語障害)を伴う児童生徒について「個別教育計画」の手立ての考え方</li> <li>●約束カードや絵カードの紹介</li> </ul>
	第55 特別学校	2016年2月4日	26	
	第63 特別学校	2016年2月1日	25	
	第70 特別学校	2016年2月2日	26	
第5回(1)	第25 特別学校	2016年2月22日	9 (WT)	<ul style="list-style-type: none"> <li>*ワーキング・チーム (WT) 対象</li> <li>●実習1：第7回勉強会で研究授業をするクラスと対象児を選び、個別教育計画作成のための実態把握とワークシートの記入。各学校が対象とした障害種は、第25：脳性まひ、第55、70：自閉症、第63：言語障害。</li> <li>●実習2：実習1の結果を個別教育計画フォーマットに記載し、長期目標と短期目標、指導の手立てを設定。研究授業で扱う科目を選定。</li> </ul>
		2016年3月1日	10 (WT)	
	第55 特別学校	2016年2月24日	10人	
		2016年2月26日	12人	
	第63 特別学校	2016年2月19日	7 (WT)	
		2016年2月29日	7 (WT)	
第70 特別学校	2016年2月23日	7 (WT)		
		2016年2月25日	9 (WT)	
第5回(2)	第25 特別学校	2016年3月7日	42	<ul style="list-style-type: none"> <li>講義：実習で扱った個別教育計画の作成方法に関する説明と、実際にワーキング・チームが作成した個別教育計画の紹介。</li> </ul>
	第55 特別学校	2016年3月10日	62	
	第63 特別学校	2016年3月2日	30	
	第70 特別学校	2016年3月3日	17	
第6回	第25 特別学校	2016年3月18日	9 (WT)	<ul style="list-style-type: none"> <li>●実習1、2：指導案の作成</li> </ul>
		2016年3月24日	11 (WT)	
	第55 特別学校	2016年3月22日	8 (WT)	
		2016年3月24日	8 (WT)	
		2016年3月25日	6 (WT)	
	第63 特別学校	2016年3月21日	6 (WT)	
2016年3月25日		7 (WT)		
第70 特別学校	2016年3月18日	7人 (WT)		
	2016年3月23日	11人 (WT)		
第7回(1)	第25 特別学校	2016年3月28日	#25、28人、 #35、2人 #16、2人 コアグループ、2人	<ul style="list-style-type: none"> <li>●実習：第1回研究授業と協議会</li> </ul>
		第55 特別学校	2016年3月29日	

			#63、7人 コアグループ、3人	
	第63特別学校	2016年3月29日	#63、21人、 #34、3人 #26、3人 コアグループ、1人	
	第70特別学校	2016年3月28日	#70、25人、 #28、4人 #113、3人 コアグループ、1人	
第7回 (2)	第25特別学校	2016年3月30日	#25、24人 コアグループ、1人	•学習障害(LD)についての講義
	第55特別学校	2016年3月30日	57	
	第63特別学校	2016年3月31日	27	
	第70特別学校	2016年3月31日	26	
第8回	第25特別学校	2016年4月12日	8(WT)	今年度勉強会の反省協議会
	第55特別学校	2016年4月07日	7(WT)	
	第63特別学校	2016年4月11日	7(WT)	
	第70特別学校	2016年4月7日	8(WT)	

## 2. 2016/2017 学校年度

	特別学校	日付	人数	テーマ
第1回	第25特別学校	2016年8月29日	47	実習「略案と身近なものを使った教材作り」
	第55特別学校	2016年8月30日	67	
	第63特別学校	2016年8月30日	32	
	第70特別学校	2016年8月31日	25	
第2回	第25特別学校	2016年9月5日	29	講義「子どもの初期の発達過程と障害の重い子どもの発達課題」
	第55特別学校	2016年9月8日	67	
	第63特別学校	2016年9月6日	37	
	第70特別学校	2016年9月7日	26	
第3回	第25特別学校	2016年10月10日	42	講義「子どもの認知発達と指導」
	第55特別学校	2016年10月13日	17	
	第63特別学校	2016年10月11日	29	
	第70特別学校	2016年10月13日	26	
第4回	第25特別学校	2016年11月7日	33	実習「個別教育計画作成1」
	第55特別学校	2016年11月9日	28	
	第63特別学校	2016年11月8日	35	
	第70特別学校	2016年11月10日	27	
第5回	第25特別学校	2016年12月12日	46	実習「個別教育計画作成2」
	第55特別学校	2016年12月14日	8(WT)	
	第63特別学校	2016年12月13日	28	
	第70特別学校	2016年12月15日	34	
第6回	第25特別学校	2017年2月6日	50	本邦研修の学び共有
	第55特別学校	2017年2月8日	76	
	第63特別学校	2017年2月7日	33	
	第70特別学校	2017年2月9日	30	
第7回	第25特別学校	2017年2月13日	8(WT)	実習「指導案作成1」
	第55特別学校	2017年2月14日	7(WT)	
	第63特別学校	2017年2月14日	7(WT)	

	第70 特別学校	2017年2月15日	7 (WT)	
第8回	第25 特別学校	2017年3月6日	10 (WT)	実習「指導案作成1」
	第55 特別学校	2017年3月10日	9 (WT)	
	第63 特別学校	2017年3月7日	9 (WT)	
	第70 特別学校	2017年3月9日	8 (WT)	
第9回	第25 特別学校	2017年3月21日	50	研究授業 (生活科エンターション)
	第55 特別学校	2017年3月22日	35	研究授業 (算数)
	第63 特別学校	2017年3月20日	54	研究授業 (図工)
	第70 特別学校	2017年3月22日	43	研究授業 (生活科エンターション)
第10回	第25 特別学校	2017年4月10日	51	今年度の勉強会振り返り、修了証配布
	第55 特別学校	2017年4月12日	71	
	第63 特別学校	2017年4月11日	25	
	第70 特別学校	2017年4月13日	33	

### 3. 2017/2018 学校年度

特別学校	日付	人数	テーマ
第29 特別学校	2017年8月24日	81	日本の聴覚障害教育における指導の変遷、指導上の工夫点
第25 特別学校	2017年9月4日	52	「よい授業と指導法」について
第63 特別学校	2017年9月5日	41	
第55 特別学校	2017年9月6日	-	
第70 特別学校	2017年9月7日	36	
第63 特別学校	2017年10月10日	14	重複障害のある子どもの指導法
第25 特別学校	2017年9月13日	27	「個別教育計画」の講義
第25 特別学校	2017年11月10日	6	個別教育計画作成実習
第63 特別学校	2017年10月10日	7	略案作成実習
第25 特別学校	2017年11月28日	6	
第55 特別学校	2017年10月6日	89	ダウン症の子どもへの指導法
第70 特別学校	2017年10月7日	27	行動と感覚について
第116 特別学校	2017年11月7日	24	障害の重い子どもの指導法について
第70 特別学校	2017年12月7日	13	略案作成実習
第55 特別学校	2017年12月13日	6	略案作成実習
第116 特別学校	2018年1月30日	38人	日本の視覚障害のある子どもの教育について
第70 特別学校	2018年1月31日	29人	学習や行動に課題のある子どもの指導法
第25 特別学校	2018年3月27日	37人	発達課題配列表の活用方法について
第63 特別学校		23人	
第55 特別学校		39人	
第70 特別学校		24人	
第55 特別学校	2018年4月10日	40人	ダウン症の特徴と教育について

#### 4. 2018/2019 学校年度

学校名	日にち	参加人数	テーマ
第 63 特別学校	2018 年 10 月 9 日	27	第 1 回事例検討会
第 70 特別学校	2018 年 10 月 10 日	47	
第 55 特別学校	2018 年 10 月 12 日	27	
第 25 特別学校		21	
第 63 特別学校	2019 年 1 月 14 日	32	第 2 回事例検討会
第 25 特別学校	2019 年 1 月 18 日	10	
第 55 特別学校	2019 年 1 月 25 日	48	
第 70 特別学校	2019 年 1 月 28 日	33	
第 63 特別学校	2019 年 3 月 25 日	31	第 3 回事例検討会
第 55 特別学校	2019 年 3 月 26 日	36	
第 70 特別学校		30	
第 25 特別学校	2019 年 3 月 27 日	12	